

奇譚クラス

新時代の風俗雑誌



1954.3

3

定價 百円



奇譚クラブ

昭和二十九年十月五日 第三編 奇譚クラブ 第一八八号
昭和二十九年十一月五日 第三編 奇譚クラブ 第一八九号
昭和二十九年十二月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九〇号
昭和三十年一月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九一号
昭和三十年二月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九二号
昭和三十年三月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九三号
昭和三十年四月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九四号
昭和三十年五月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九五号
昭和三十年六月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九六号
昭和三十年七月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九七号
昭和三十年八月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九八号
昭和三十年九月五日 第三編 奇譚クラブ 第一九九号
昭和三十年十月五日 第三編 奇譚クラブ 第二〇〇号

9人のモデルを駆使して得た未発表の秘作

豪華アルバム

縛られた女ばかりの三十二態

美しき縛しめ 第二集

辻村隆構成・塚本鉄三撮映

頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

(モデル嬢)

雲井久子嬢・村田那美子嬢・高瀬忍嬢・杉美嬢・坂口利子嬢・中富綾子嬢

◆責め写真は欲しいが印刷紙に焼付けたのは高くて困るとおっしゃる方は是非この傑作集をお求め下さい。印刷紙と変らぬ極鮮明なる高級印刷により絶対他の追随を許さぬ低廉な値段で堂々三十二態のあらゆる姿態の責め写真がお手元に届くのです。市販はいたしませんから直接代理部へお申込み下さい、嚴重荷造の上急送申し上げます。

責めのアルバム 第二集 完成

この一冊を買えば皆さまは他を必要としない位満足されることでしょう

本誌が一機に他の諸々の責め写真を圧倒すべく半年前より企画周到なる準備の結果ここに驚嘆に値する超絶級版の完成を見ました。

【豪華な責めの色刷画帖が極めて安価に皆様のお手許へ届きます】

極彩色美術オフセット
多色印刷特アート使用
絵の大きさ B 6 版
画帖の大きさ B 5 版

図装釘、縦6寸横8横5分
横トジ豪華美本

三条春彦・画

画帖 時代物責絵巻

内	容
一、	山法師と
二、	静御前
三、	岡引き
四、	姫
五、	侍女
六、	犬公方と
七、	八百屋お
八、	芸妓
九、	新撰組と
十、	門と腰元
十一、	旗本連
十二、	小紫と悪

特価 三百円

(送料五十円)

〇〇各葉説明文句入り〇〇
絶対市販致しません〇〇

奇譚クラブ臨時増刊号ノ

【原名 THE GLOOMY EXPERIENCE】

吾妻氏の麗筆により心にくき遠軌物に描写された
サディズム文学の決定版
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く
サディ・ブラッケーズ◎吾妻 新訳

アリスの人生学校

(定価 100円)

堂々五百枚に垂んとする長篇サディズム小説
口絵(色刷・単色)カット・挿絵多数挿入
第一部 純潔教育 第二部 貞操教育
書店にてお買渡れの方は直接発行所へお申込み下さい。
送料共

縛られた女ばかりの16態

豪華アルバム 美しき縛しめ 第一集

(各葉解説文句入・美術コロタイプ印刷)

美濃村晃構成・塚本鉄三撮映

工足高麗芋 燭さ車 滑床の置 紅荒目 裸と 狼 縛られた女の集大成、優美さと
内容 ビ 質物手打由 寶り品物急白縛絞台目わ

【全部未発表】

四人のモデルを使つて完成した
縛られた女の集大成、優美さと
緊縛感の秀れた代表的な責め写
真集、痺れるような妖しい雰囲気
は素晴らしい反響を呼んで瞬く
間に限定部数を突破、これは同
好者のために若干増刷した分です。
何卒大切にしながら中にコレクシ
ョンの一端へお加え下さい。

曙書房代理部

(頒価一部 500円 送料60円)

月 刊 KK通信 定価 20円
半年100円

(既に第十六号迄毎月)
(休みなしに発行)

奇譚クラブの誇る特別会員の機関誌

本誌愛読者を中心に楽しいグループ
B6判十六頁に新聞用扁平活字にて記事満載
挿絵、写真等毎号多数掲載、本誌愛読者の欠
かすことの出来ない伴侶です。一般市販せず
予約者にのみ送付、目下三千の会員を擁し毎
日増加の一途を辿っています。本誌を知らん
下さった方は是非KK通信も併せて御愛読下
さい。絶対他の真似の出来ぬ内容を誇つてお
ります。旧号は第六号より第十五号迄在庫し
ております。「六回分送共百円にて急送」
僅か百円の会費で半年分(送料当方負担)
毎月B6判十六頁の機関誌をお送り
いたします。〇見本は切手三十円にて急送します

【曙書房内KK通信係】

本誌6,7,8月号の3回に
亘り連載大好評を博し
たクリスチーナの受難
の全譯遂に成る!

再版出来!

クリスチーナの受難全訳
キドロシユトツク 被虐の家
新・訳 吾妻

可憐なる美女クリスチーナに対する緊縛と狼
ぐつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵サディ
ズムの粋をつくしたクリスチーナの全訳、画
壇の一方の雄、某氏のアブノーマル挿絵相俟
つてここに完全なるサディズム文学の金字塔
が打ち樹てられた。

定価 三二〇円(送料四〇円)

申込所 曙書房代理部

緊縛寫眞 の分譲

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

◆女体悦虐寫眞集◆

光沢面焼付 手札型
五枚一組（一集分）二百円
第六篇（五十一―六十）十集
第七篇（六十一―七十）十集
第八篇（八十一―九十）十集
第九篇（八十一―九十）十集
本誌九月号口絵参照の上御
好みの姿態をお選び下さい
【一集単位】
第十篇（九十一―百）十集
本誌十一月号口絵参照下さ
い。御指定の集をお送りい
たします。

★ 写真は同好者本位の迅速・確實で信用のある曙書房代理部へ！ すべて送料共

◇野外全裸の縛り

キヤビネ版 三枚一組 三百円

灼熱の夏の陽の下にびち
くとはねる白魚の如き
肢態にからみつく縄、野
外の傑作中より選り出し
た快心の作品揃い

◇制服の女学生

キヤビネ版 三枚一組 三百円

磔 2 態

キヤビネ版 二枚一組 三百円

一女正面のハリツケ、と三女の中二女
が横面一女が正面のハリツケ、何れも
一糸もまとわぬ全裸の縛りである

高手小手 三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

新人モデル木田雅子嬢による豊麗なる
女性に掛けた物凄い緊縛感、縄に悶え
る処女体の美しさ！

◎川端多奈子嬢◎

悦虐姿態集

手札型 七枚一組 三百円

典型的マゾ女性多奈子
嬢の好みに従つて、敢
行した強烈な縛り、そ
してこゝに美しい悦虐
の姿態を得た

◇ナイロンに包

まれた女体◇

キヤビネ版 三枚一組 三百円

〔急襲〕連続十五枚続き

手札型 十五枚 一組 五百円

女が縛られる迄の過程を十五枚の連続写
真にしたもので、猿ぐつわをされ完全に
自由を奪われるに至る経路が如実に活写
された興味溢れる作品、どこにも負けな
い安い値段で鮮明にして恰かも自ら手を
下す如き写真を提供

女が女を責める

第一集 オール・ヌード

一女対一女

第二集 オール・ヌード

一女対二女

何れもキビネ版

三枚一組 三百円

責めの雰囲気を出させ
るために、全裸の責手
の女の出演を求めた。
女が女を責めるところ
に妖しい倒錯的な耽美
の世界が描き出されて
いる。

吊り 5態特集

第1組 第2組 第3組 第4組
キヤビネ版 各組3枚1組 500円
トリックで本責めは様々
ないし吊姿や了しよう

灸責めの 3態

キヤビネ版 3枚1組300円
熱さにのたう
つ女体のエロ
チシズム

鞭打ちの 3態

キヤビネ版 3枚1組300円
鞭打たれて肌
についた斑

碁盤責め

キヤビネ版 三枚一組 三百円

溪流の飛魚

キヤビネ版 三枚一組 三百円

谷間の飛魚の表情縛

◇女性切腹姿態◇ 第一集

手札型 9枚1組 300円

熱烈な要望により、川合伊都子さんから送られた写真を参考に新に撮映したものを加えてこゝに第一集を発表した。切腹マニアの一見を希望する。

申込所 大阪府堺区菅原通4ノ30
曙書房代理部
振替大阪34956番

奇譚クラブ ☆三月号 ☆目次

國解 變形海老責五態	滝 麗子・画
明治の元勳	伊藤 晴雨・画
巧みな調教師 (彼女達は狂気のように走った)	滝 麗子・画
敗戦の悲劇	滝 麗子・画
折檻 (終戦時満州に於ける日本婦人の凄惨図)	南川 和子・画
海老縛り、逆さ吊り、両手吊り	辻村 隆・構成
凄艶、股間縛り三態、腰巻	辻村 隆・構成
責絵 電気コンロ、導火線	杉原 虹児・画
残虐なる女性達画集 (解説)	森 本 愛造
股間の感覚を刺激する縛り方	数 久 操・画
不思議な覗き芝居	都築 峰子・画
写真 半吊り二態	辻村 隆 指導

私を愛して下さった皆様へ

古川裕子 (36)

悪の部屋

あるマゾヒストの手帖から

切腹研究夜話 (二)

☆蜘蛛と蝶々☆

凌霄花 (紅花草紙)

私の求めた男 (三)

女に体たえな哀い歓かん

變態讚美論

謎の女と私

岡田咲子 (106)

解剖物語 (女体解剖)

好評連載 感情教育

非小説 性液

伊藤晴雨 (131)

魔性の姉妹

直木不二夫 (138)

女看守と囚人

櫻井英一 (154)

慘虐秘録 高遠落城

川野京輔 (159)

アブニス 痴迷 (ちめい)

鬼山絢策 (164)

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正 (216)

女腹切 星は濡れている

亀岡絃七郎 (176)

殘虐なる女性達

森本愛造 (191)

口絵の解説 敗戦の悲劇・扉 駿河問にける女 (刑事博物館より)

倒錯の告白と手記

無慙繪マニア
我が少年時代の犯罪
高馬靴への執著
乗馬露出症の告白
少年時代の未決
捕虜の洗禮
或る同性愛者の告白
女性性の鼻マニア

河内茂雄 (183)
岸本幸雄 (184)
森野茂 (188)
池田繼男 (196)
河真田子 (204)
三根耕三 (208)
出久根信男 (211)
小田雅春 (215)
真鍋四十六 (216)

变形海老貴

五態

背面

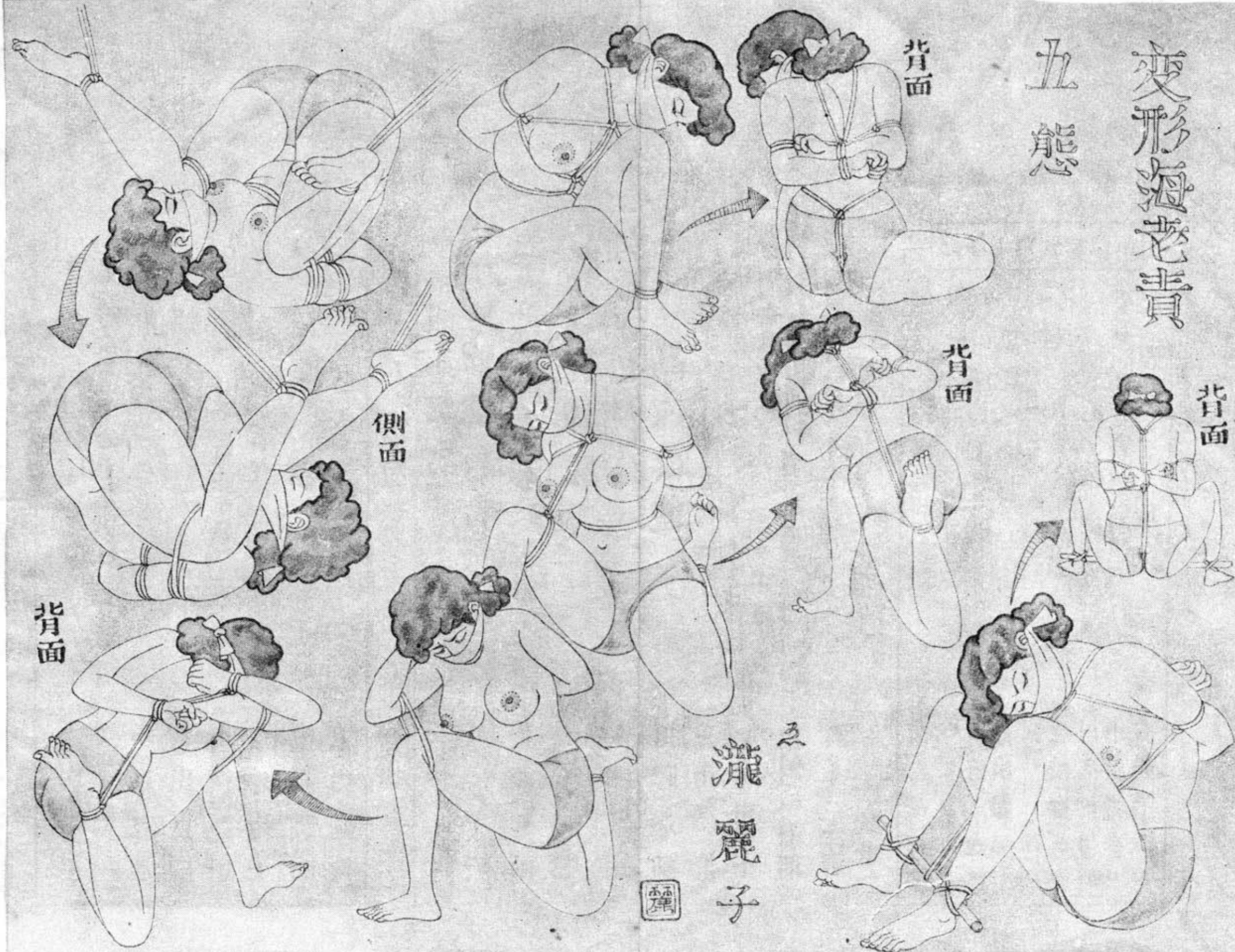
背面

背面

側面

背面

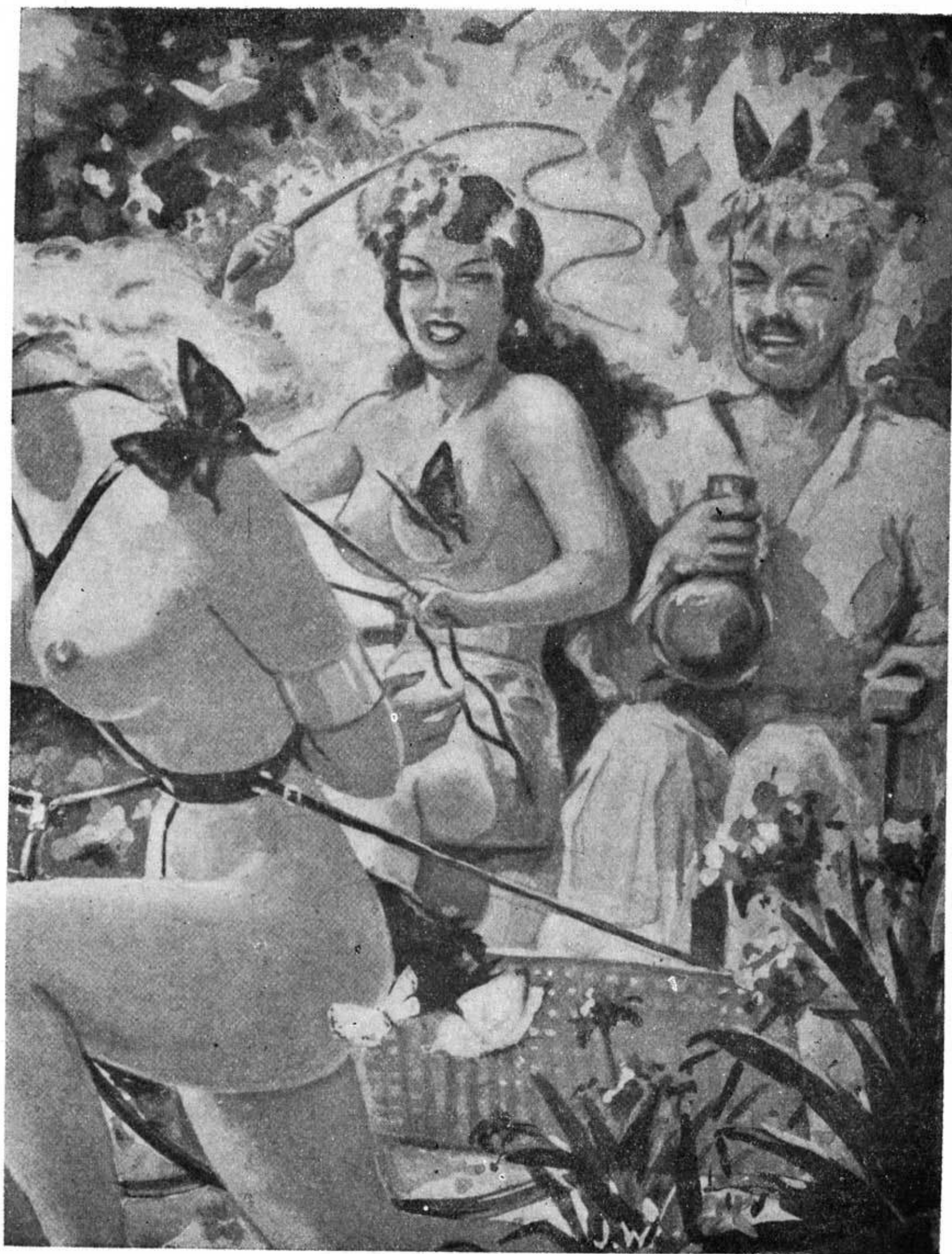
瀧麗子



明治の元勳

「一将功成り万骨枯る」と、明治の元勳と云われた雷音寺公爵は女を縛つて責めるのが道楽で、或る時の如きは別荘に使つていた美しい腰元を責め殺して其の遺族に莫大な内済金をやつた。取調べの当局に対して「已れは明治の元勳だ、小女の一人や二人殺したつて差し支えはない。」と豪語したとやら巷説は伝えている。但し真偽は保証の限りに非ず。茲に某芸妓屋の主人があつて人形の女を縛つて喜ぶ奇癖があつたが此の二つを合せて描いて三月の見立画にした。川柳子句あり……当局に聞けば只今調査中……





彼女達は狂気のように走った

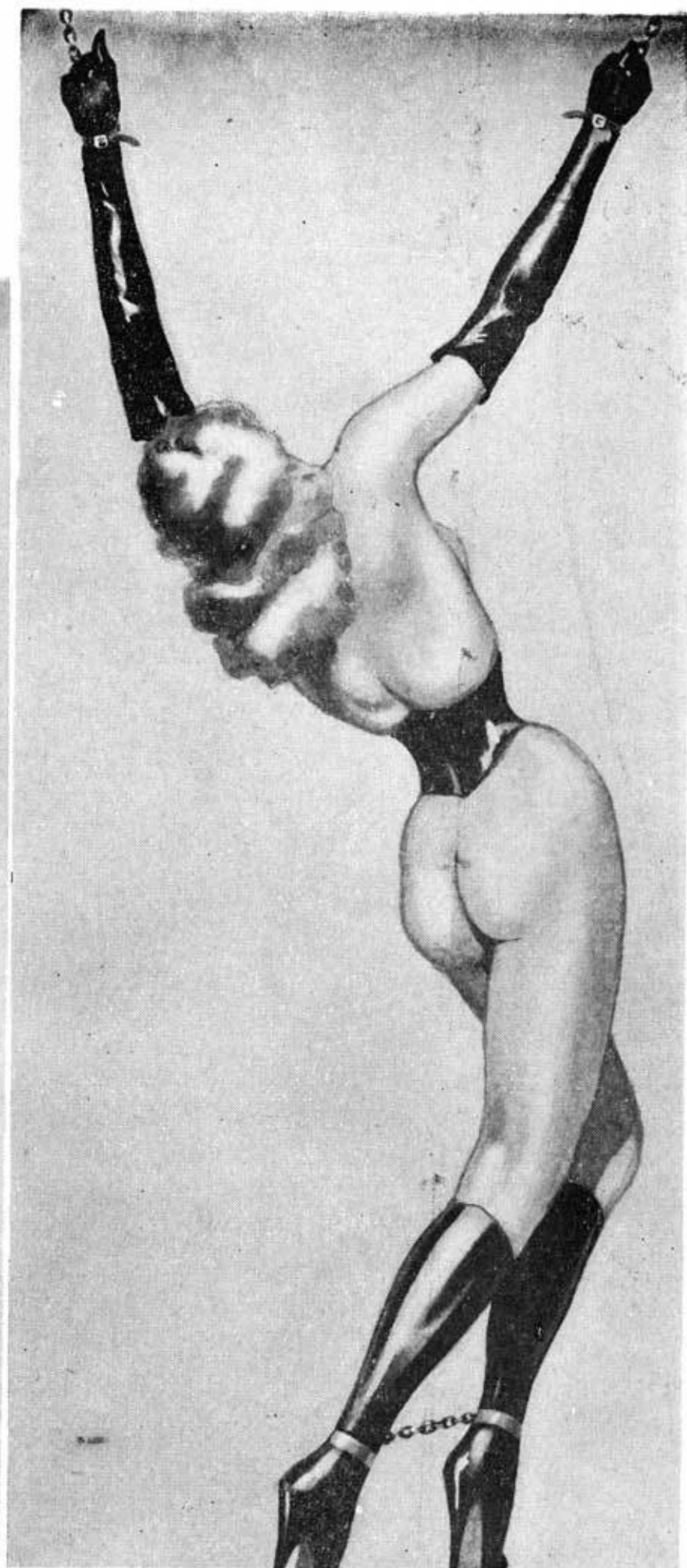
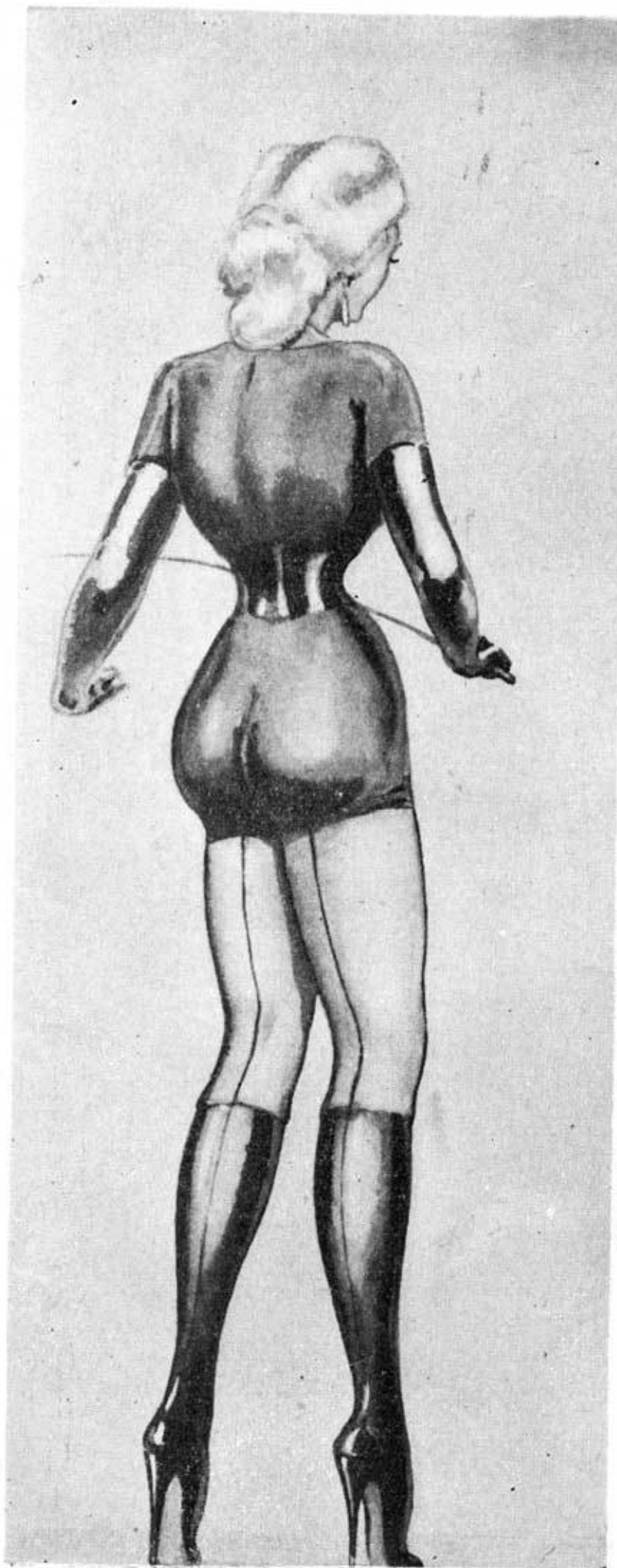


巧みな調教師

むち
鞭

うち
撻

(Flagellatlon)



ギ ヤ ッ グ 六 種

(一)は日本でも普通に行われている口だけを掩う猿ぐつわである。(二)と(三)は絨口具とも称せられるべきもので、頭部及び頸部とも金属製のベルト或は革製のベルトによつて脈絡して完全で発声を防いだもの、(四)は布片を歯の間に噛ましたもの、(五)は唇の間に含ませたもので、共に枚を銜むという方法口は一定の大きさに開いたままでない、勿論物を言うことは出来ない。

(一)



(二)



(三)



(四)



(五)

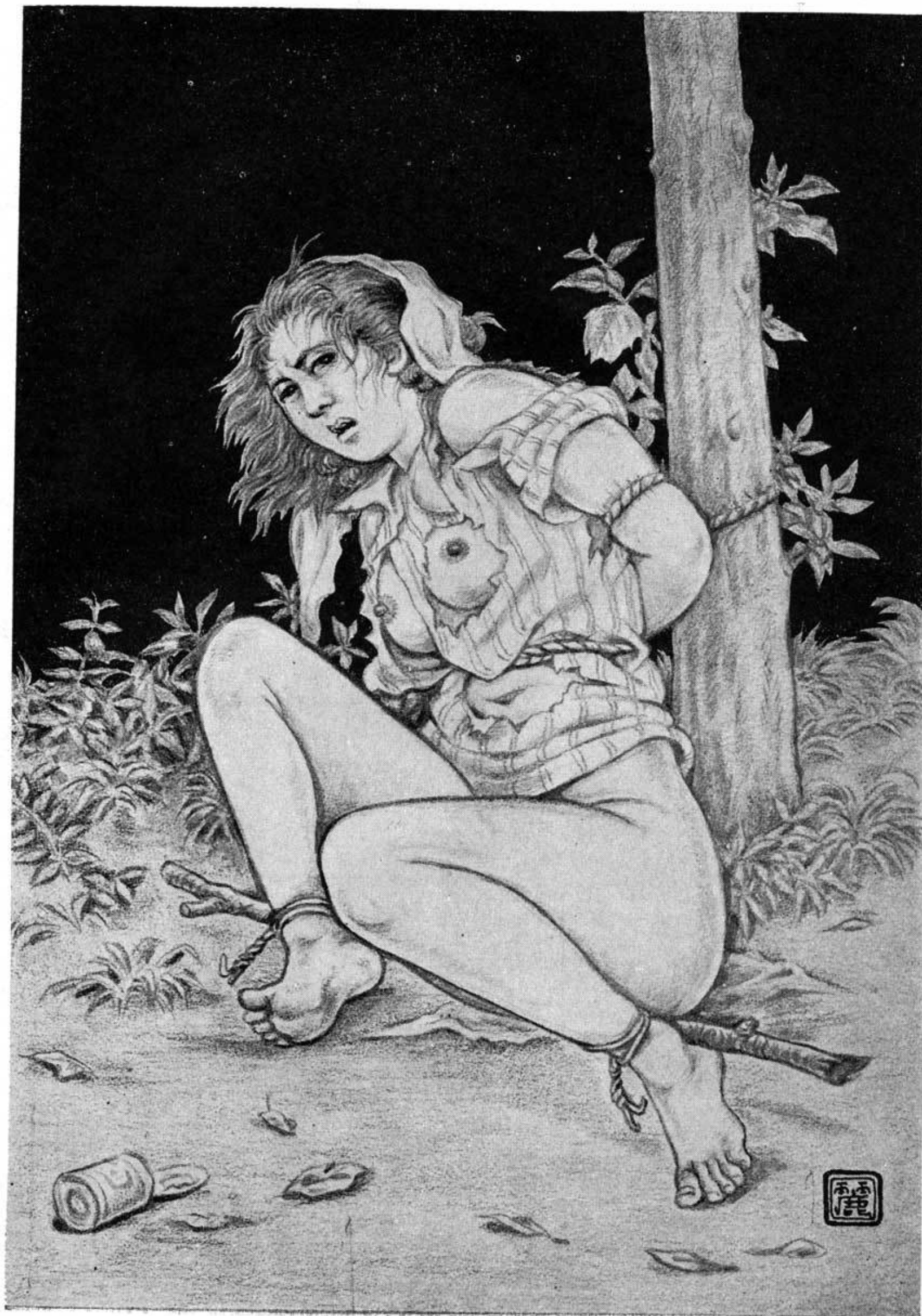


(六)



敗戦の悲劇

満州の曠野で凌辱される日本婦人





瀧 麗子 画

(資料提供の仲田澄子さんの手記は本文中にあります)

折 せつ

檻 かん



鞭打ち

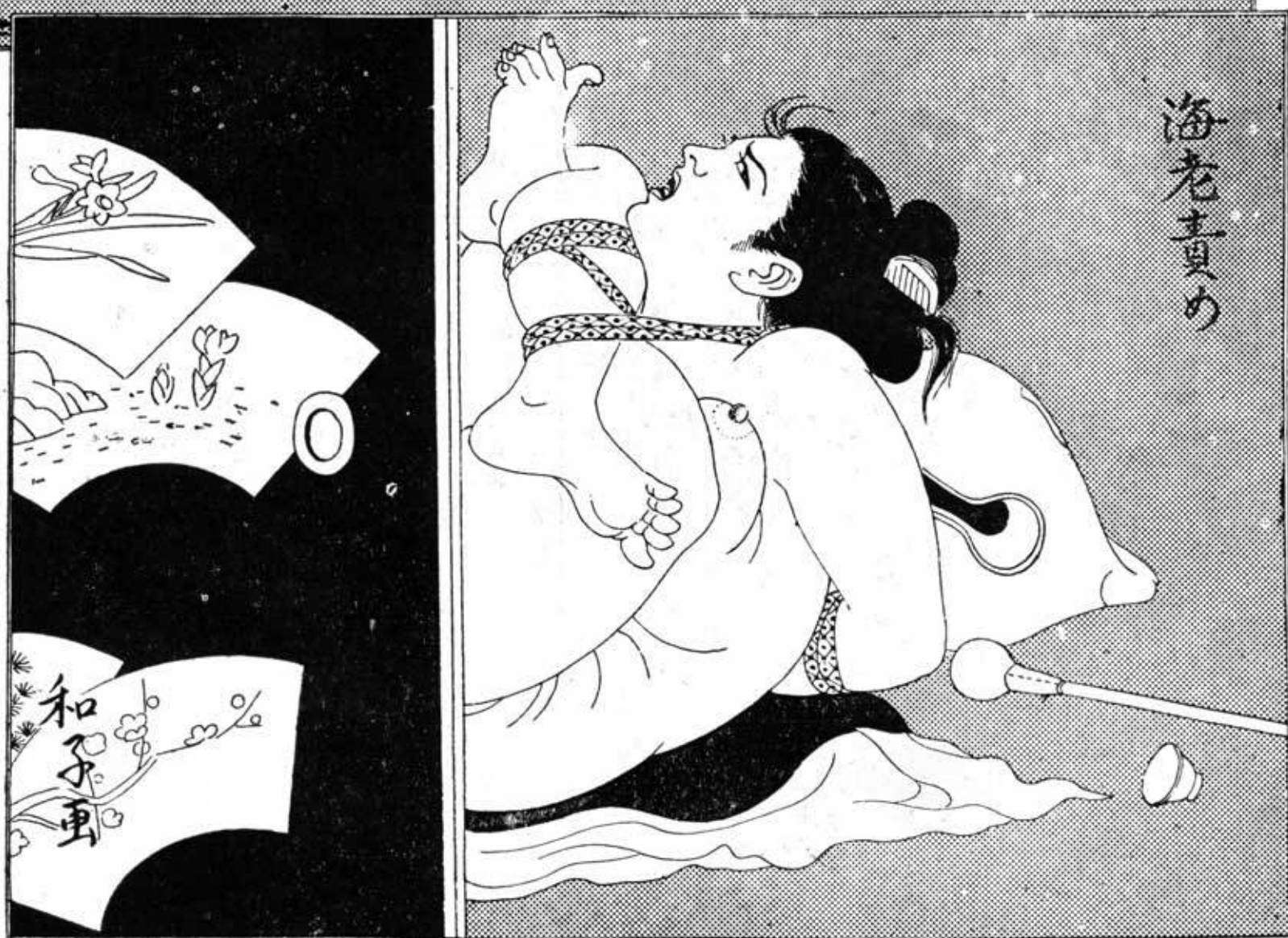
和子画



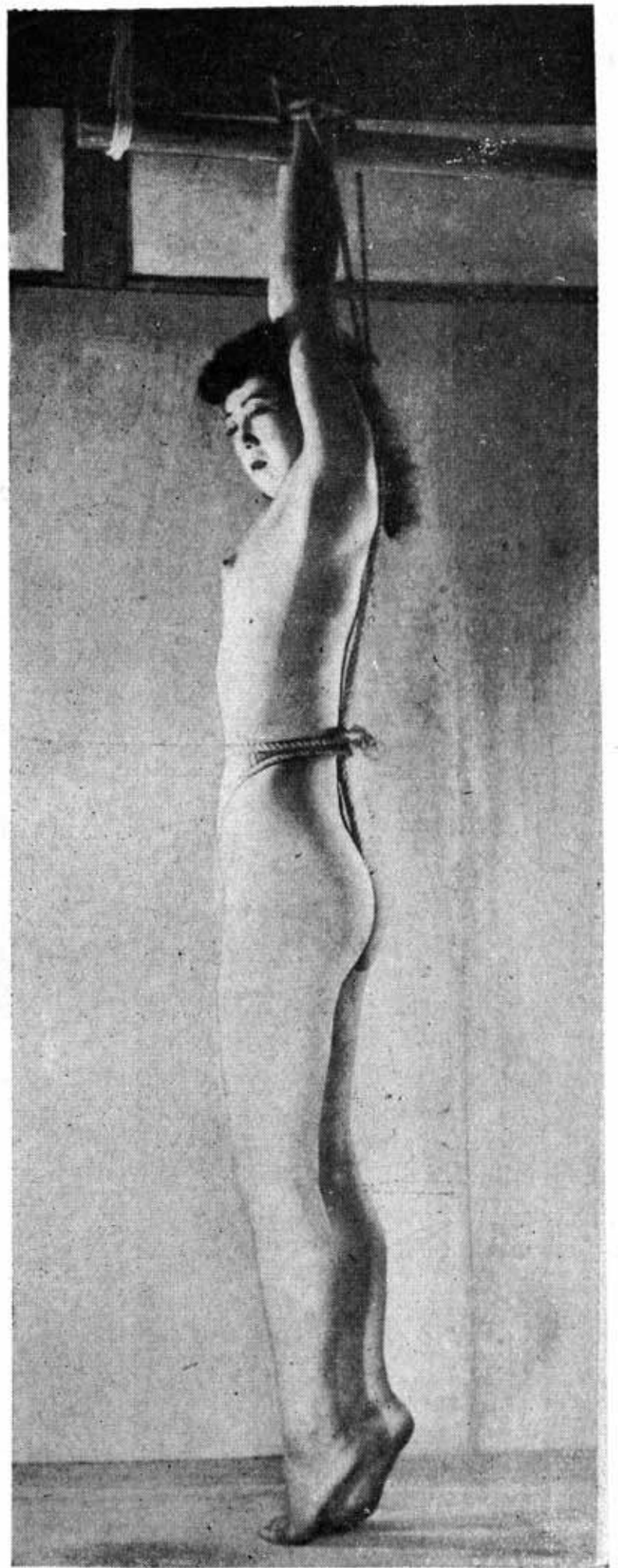
煙管責め

和子画

南川和子画



和子



両手吊り

(杉 美 美 嬢)

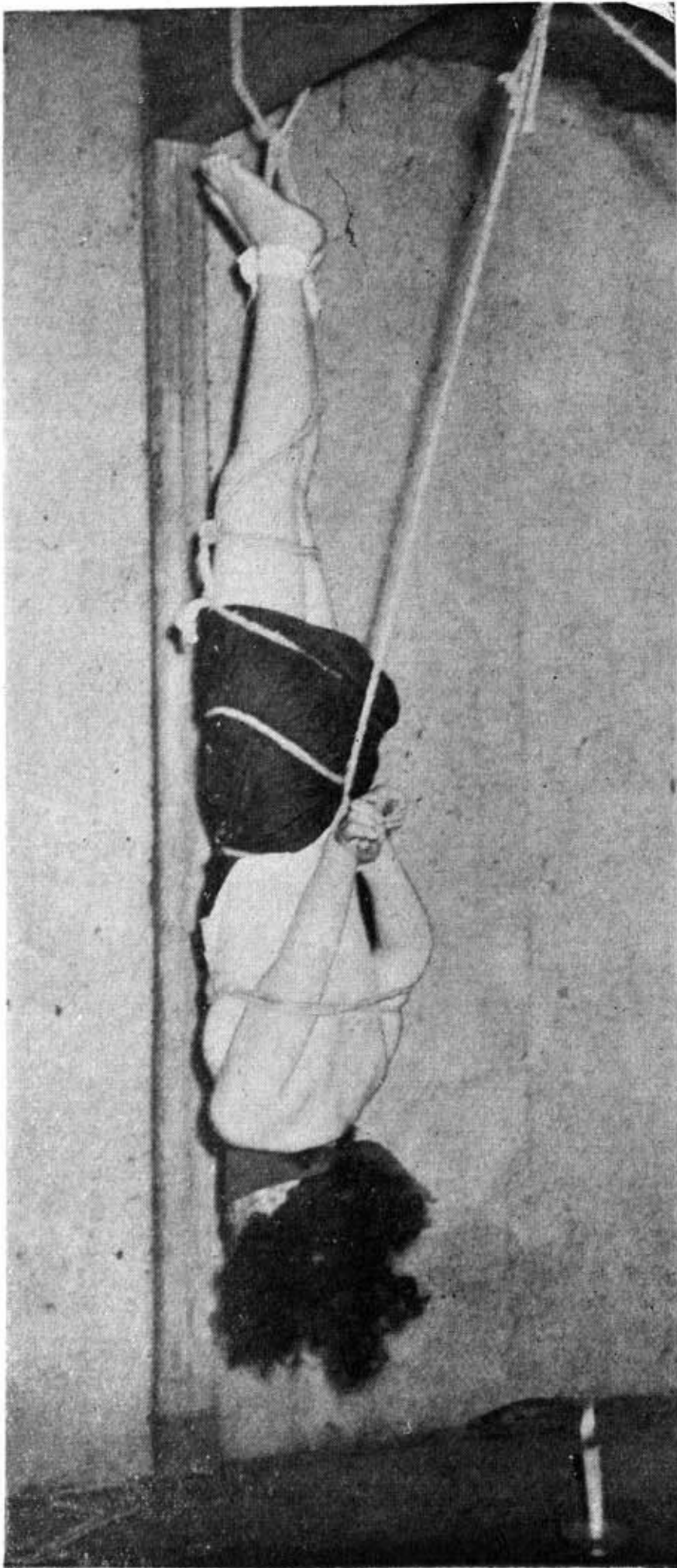
胴を縛った縄をお尻へ廻してその縄尻で両手を揃えて縛り、丸太に通して吊つたもので、爪先だけで立つている。

辻村隆構成

逆さ吊り

(川端多奈子嬢)

トリックでないことは火のついていないローソクでもわかつて貰えると思う。
廻転するのを防ぐため後手に縄を一本かけて引いたりしたので、写し終る迄約十分間は必要とした。

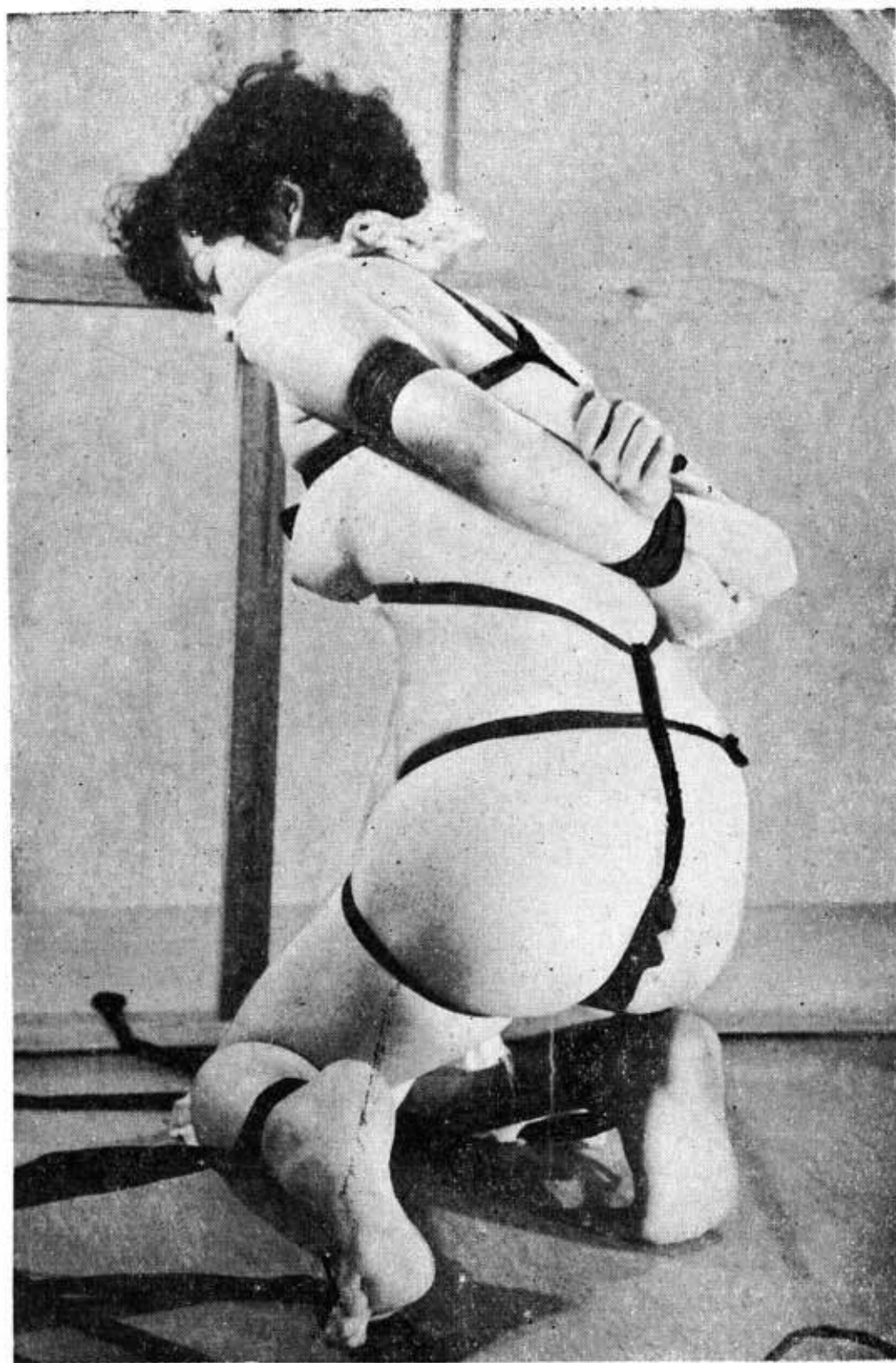


海え 老び 縛^{しば}り



モデル 坂口 利子 嬢

股間縛り



杉原虹児構成

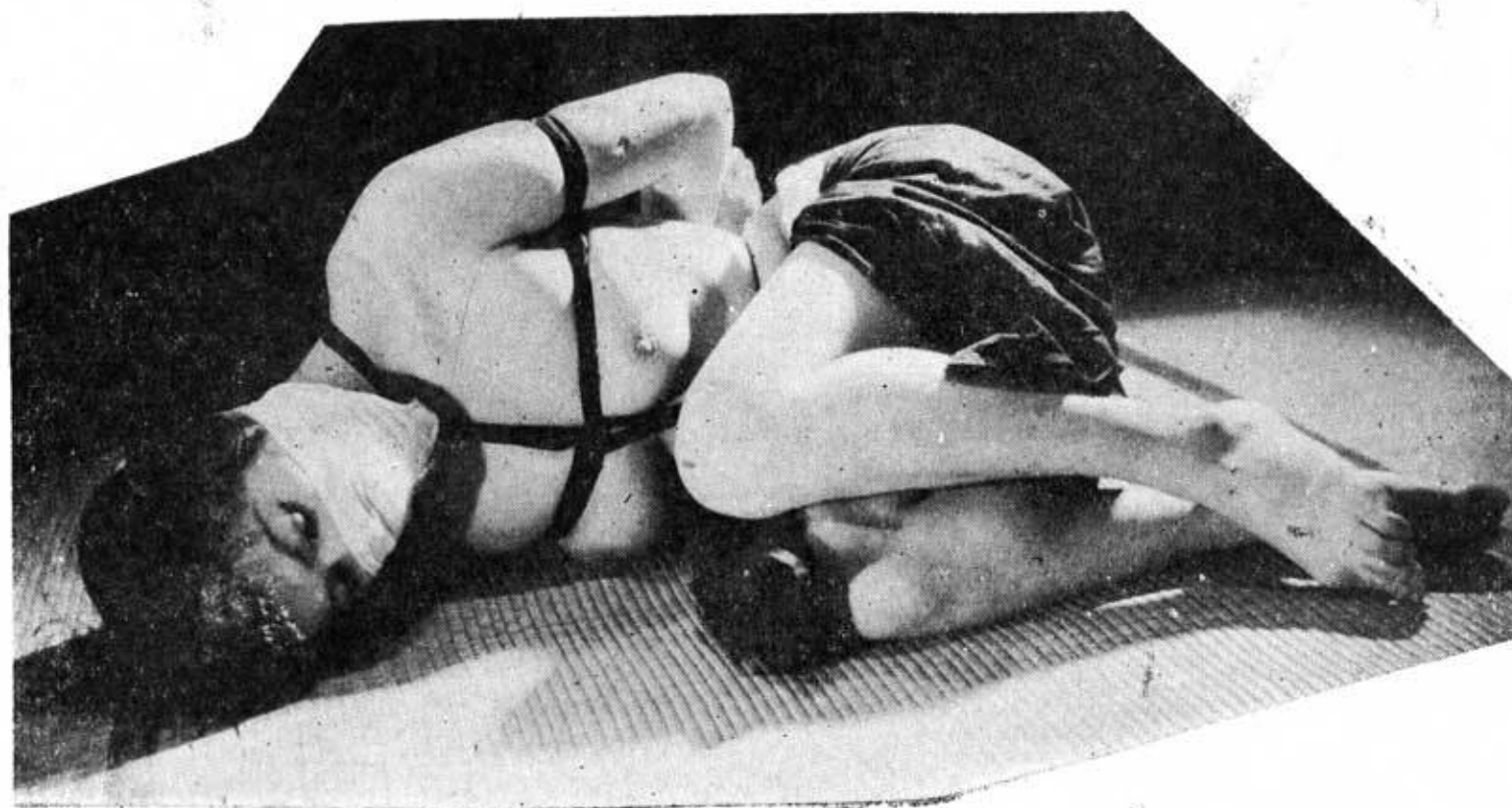
腰巻



凄

艶

モデル 坂口利子嬢





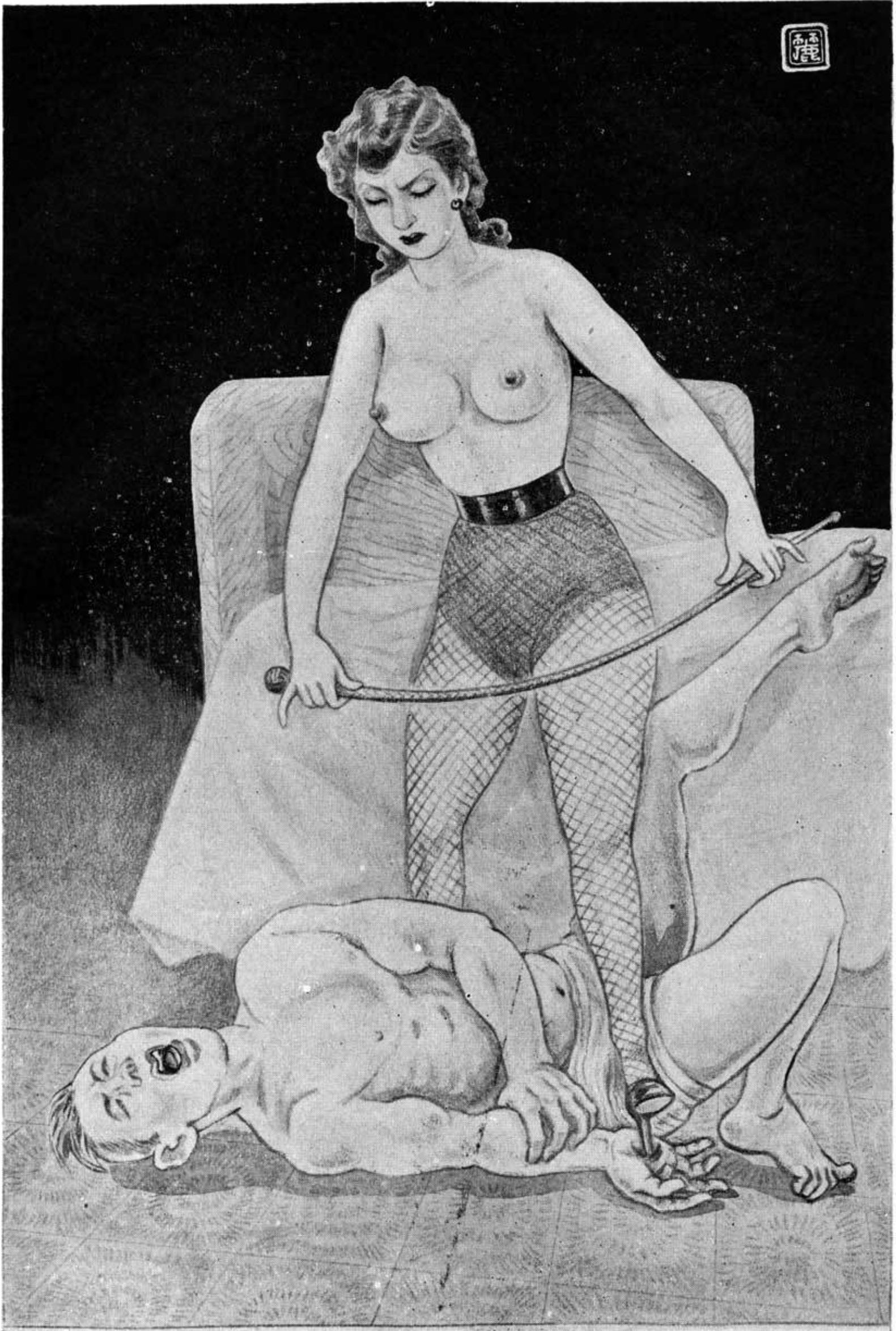
虹児



女王様

女王様、私は貴女の忠実なる従僕です。
私は女王様の命令なら、どんな苛酷な事でも喜んでお受けいたします。

滝
麗
子
画



残虐なる女性達

解説

森本愛造

ビルデル・レキシヨン (Bilder Lexicon) — 絵入性百科辞典 — に挿入されているもの、この種のものとしては、双方共に雰囲気、表情のよく表れている秀作である。下方にはフランス語で「いやあ」「とても」等と書き込みがある。



女教師の尻打刑

子供の世界、この緊迫した出来事である。
教師の表情より子供達の表情が面白い。
一八九〇年の挿絵



(左) 女教師と二人の生徒、
英国の口絵、加虐者と被
虐者の表情、構図の妙、上品にして秀作である。
作者不詳



(上) 十九世紀の挿
絵より「砂糖は肥
料によつて栽培さ
れるのではない。
それは鞭によつて
栽培されるのであ
る」と註記してい
る。黒人の形相と
鞭うつ人の凄まじ
い気合は美しく画
面に横溢している

タンタラスは女神の厄を蒙
つて永久に渴する刑に処せ
られたとギリシャ神話は伝
えられている、幼稚な画風
の中に漲るマゾヒストの極
端な喜びがこゝに在ろう。
タンタラスの顔付は犬か猿
に似て、その哀れさは正に
サデイスチンの心を満足さ
せよう。この一枚の絵は足
なめ、精神的サデイズム、
コブラグニイ、畜生化、
緊縛の要素を持つている。
グランヴィエの作。

(右) タンタラス



(左) 調教という題の
フラン・ウオン・バイ
ロスの作。
写実的な味は乏しいが
美しく昇華したグロテ
スクである。この作品
は稀少なバイロスの
中でも、特に少いらし
い。





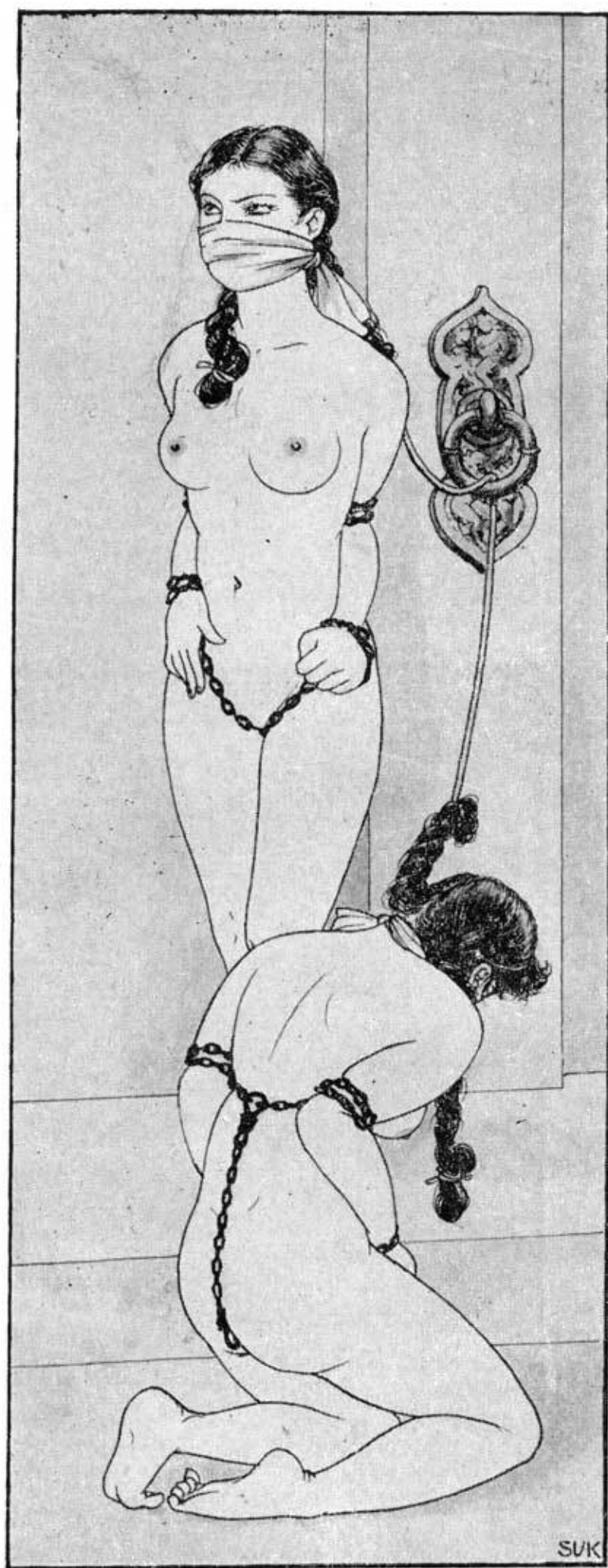
(下) 肥大した残酷な継母の尻打ち、手前の床上には鞭がある。作者不明の小説の挿絵、十九世紀、原版白黒。

(左) マグヌス・ヒルシュフェルト博士の性心理分析より、メタトロピストの一例左側に犬鞭を持つ婦人が乳房を半分現している。中央は被虐者の男性、首には犬の首輪をつけ、婦人用コルセットを付ける(事を強制されている)右側の半裸の婦人は左の乳房を出し下着だけをつけ、半長編上靴を穿いている。つまり西欧のメタトロピストの欲望の中、主要なものアンシフロペディークな資料写真である。尚これは職業的サディエインの実写である事を附言する。



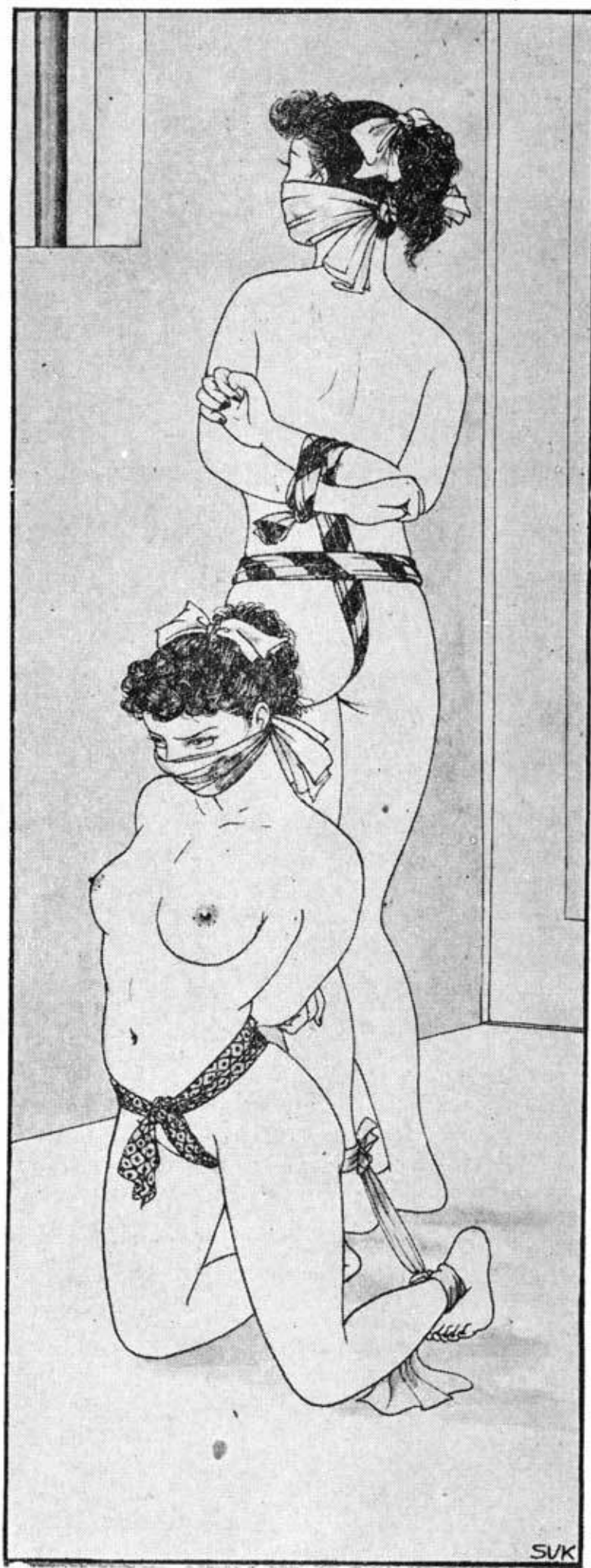
(左) 女家庭教師の笞刑の始まるころ GSMITの作
仏国の小説の挿絵





鎖くさり

しごき
扱 帯



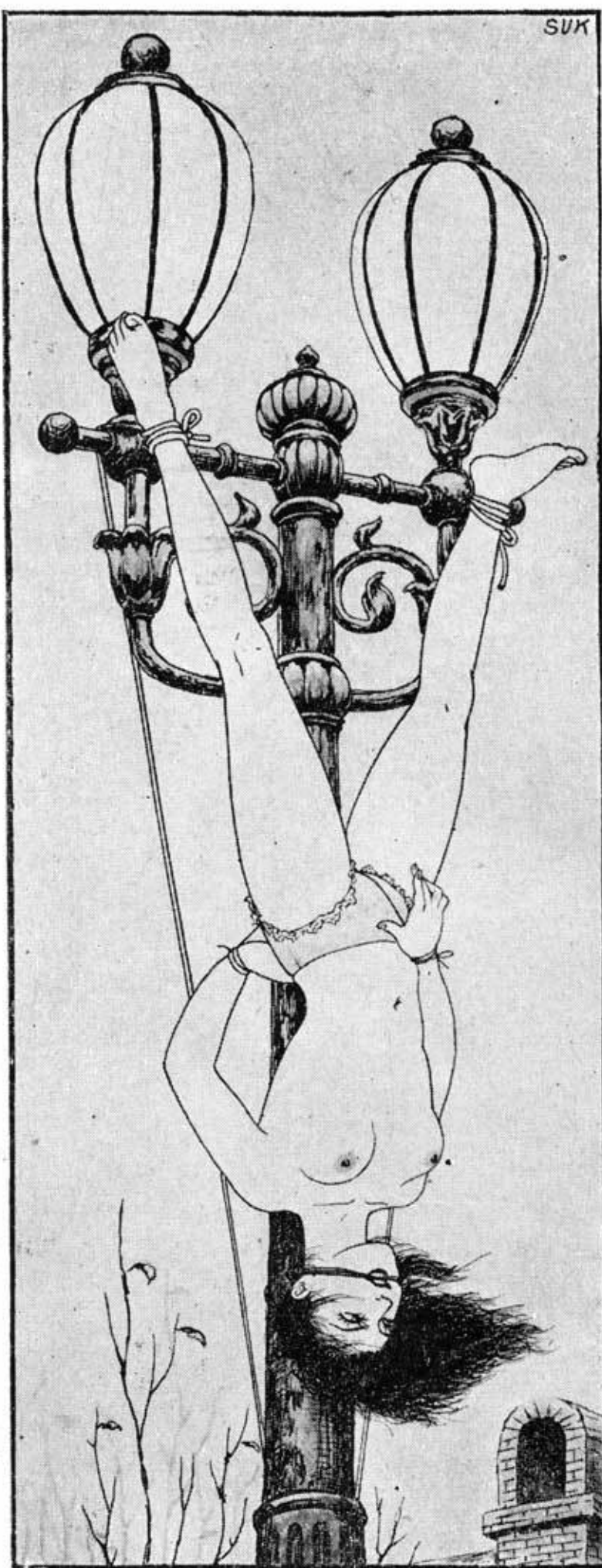
刺激する縛り方

数 久 操 画

たが 撫 と ひ ふき だけ 竹



琴 糸



股間の感覚を

不思議な飼育室

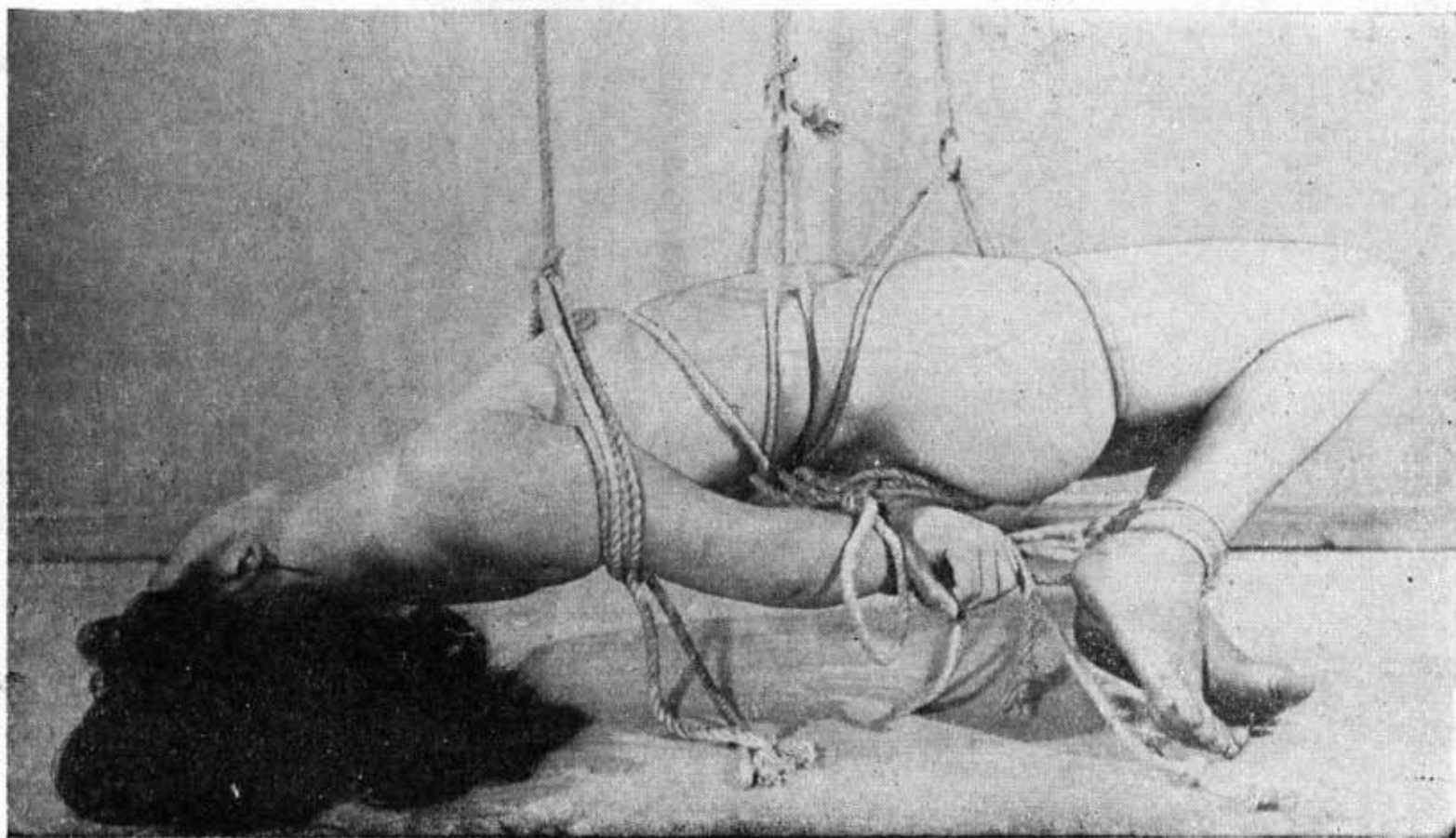
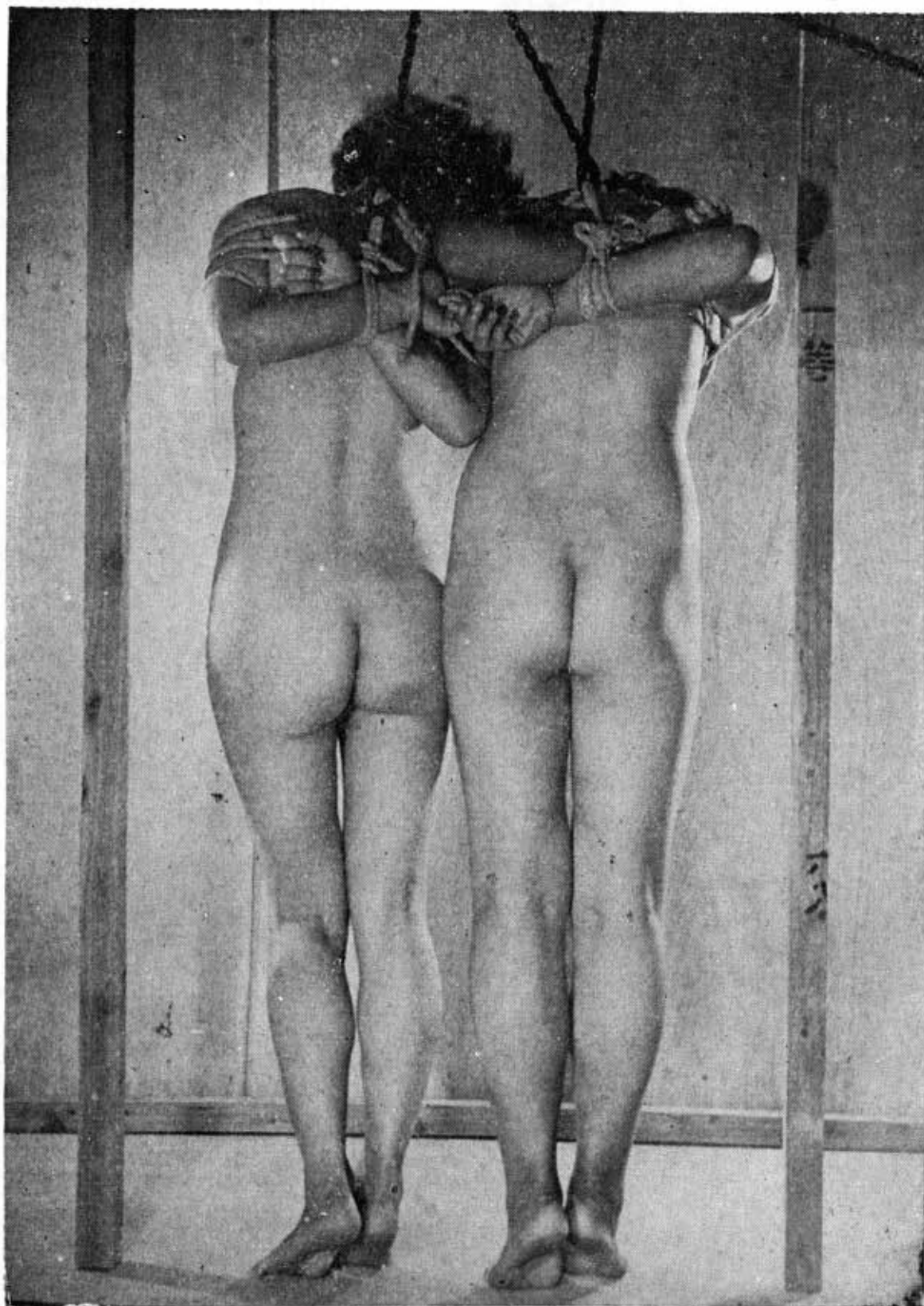
都筑山峯子案





★半吊り二態★

辻村 隆指導



駿河問にかけの女

— 刑事博物図鑑より —

江戸時代地方に依つては、吊し置き打ち、又は吊して廻転せしめる一種の駿河問が行われたが、これは水戸藩武石某の手控による女を駿河問にかけの図である。



新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

1954年 3月号

(第八卷 第三号 通刊第六十六号)



わたし
あい
くだ
みな
さま
私を愛して下さった皆様へ

裕子の告別の言葉

古川 裕子

私は今、何とも云いようもない惑乱の中におります。奇譚クラブ十二月号に、私の「告白」——凌辱の幻想と期待を書きましてから、数日ならずして、私の手もとには山のような御手紙の束が押しよせて参つたのです。いや、御手紙許りではありません。私のペンネーム以外には、私自身いいえ私と私の義兄のほかは誰も古川裕子の本名を知らない筈でしたのに、「もしかしたら貴方ではないか、いやあなたに間違いない」と直接私のもとに來られたかたさえあるのです。私は、そのかたがたの「感」の良さに驚嘆しながらも兎に角「お推察の通り古川裕子です」とどうしてその場で云えましょう。何としても一度は否定しないわけにはゆかないのです。理窟に合わない話です。自分で誌上で呼びかけてお

き乍ら、いざと云うと逃げて廻る。何とくだらないこと、と皆様はおつしやることでしよう。しかし、お手紙の上で古川裕子と呼びかけられるならば、私にも、まだ心の余裕を持つことが出来ます。しかし私自身が古川裕子であることを一度も人様にお話ししたことがない状態で、いきなり名差しで会いに来られるのです故、途まどうのも無理ではございますまい。

勿論、遠くから全然未知のかたは、ありません、多かれ、すくなかれ、私自身を前から知つていらつしやるかたたちが、そうおつしやるのです。恐しいことです。私は古川裕子の名に隠れて、私自身の何とも仕様のない性癖を恥しげもなく人様の前にさらしました。それどころではありません。ある夜、情熱のほとばしるまゝに、長い「告白」を書きました。その心持には一分の嘘もないのです。誓つて申しあげますが、私と云う人間の心の底からの泣き声があ的一篇でございました。お嗤い下さい。口にハンケチをかみしめて、目に涙を一杯溜めて、あの告白を書き——そしてその中で皆様に呼びかけました。「あゝ、どなたか私をこのままで拾つて下さるかたはないか」と。

御免下さい。私は夢中だったのです。そしてそこに書きましたことは、今でもそつくりそのまゝ私の叫びなのでございます。

でも、でも、実際の世の中に対する反響が、こんなにも大きいもののだとは、愚にも私は気付かなかつたのです。

御覧になつて下さい。私の小机の上のこのお手紙の山！。奇譚クラブと云う雑誌が、こんなにも世の中に広く熱心に読まれ、その中の、つまらぬ女のくり言に対して、かくも大きな反響をもたらさうとは。

私は、私自身に、そつと云いきかせるつもりで、そして或いは時には、いくらかの反響のあることを、自分自身の心のすみで、おどおど期待しながら、あれを書いたのですのに。

今更、あの告白を書いた当時の心境を述べたてたとして仕方がないことですが、不屈きな私の心の中には、ずつと以前、私がどうにもこうにもならなくなつているときに、奇譚クラブの読者通信欄に私の義兄が、彼の名で私のことを発表してくれた時のことが、こびりついていたので。あの時も、すぐに御返事が参りました。しかしそれは、ただの二通だったのです。皆様も、御存じでございました。う。札幌のS氏と大阪のH氏と。そしてこのお三方とも私に忘れられぬ心の傷をお残しになりました。いゝえ、いえ、お二方のことをかれこれ申しているのではございません。すべて私自身の責任でやつたことなのでも、自ら播いた種を自ら刈りとつたにすぎないのです。この痛烈な思い出が消え去るところはまだ生まましい時に、私は更に厚顔にも、あの告白を発表したのです。また一通か二通、ものずきなかたが御手紙を下さるかも知れないと期待して。それは一方では恐怖の気持でした。そして一方では、歯を剥き身を悶える哀れな浅間しい心情でした。恐らくは又機会がくる！と。

マゾヒズムと云うこと。これは多かれすくなかれ、どなたのお心の中にもあることでしよう。その裏返しであるサディズムについては、同じことです。ですから、私のマゾヒズムそのものについては、たしかにある程度奇譚クラブの読者の皆様の共感と興味を呼びおこすことは考えておりました。又実際それでなければ編集部の一から十までよくものごとを心得ておられるかたがたが、少し気の狂つた女が、一夜の情熱に身悶えて、下書も何もなしで書きなぐる、文章

も文法も仮名遣いもなっていない、あの雑文に貴重な誌面を提供して下さる筈がありません。

しかし私の場合は余り特殊です。縛られたり鞭打たれたりするとは、普辺性があつても、マスクやゴムのレインコートなど、そんなものには、どなたも別に特別な興味などはお持ちにはなりませんでしょう。実際札幌でのS氏の場合でも、S氏は私のレインコート姿やマスク姿には、別に何の興味もお持ちにならず、S氏の第一夜に於ても、私のイメーヂに従つて下さりはしたものの、レインコートには、いささか苦笑気味であり、又それ以上に却つて邪魔になさつておられた様子を、私は見逃しはしませんでした。おそらくはこの文章もS氏のお目にとまることでしようが、いかがでございましたでしょう。私の思いがちでございましょうかしら。

いいえ、S氏許りではございません。私の亡夫——私とは最も密接な関係があり、そして誰よりも私と趣味が一致していたと今でも信じております私の亡夫でさえも、最初はこれについては、とまどつておつたようです。結局お仕置の時の仕置衣——刑罰の重さを端的に表現する囚衣としての価値をそれに見出すまではたゞ「妻が妙に好むから」と云うだけのことで私たちの生活に入れていたのです。私のように、ゴムの感触——ぬめぬめとして冷たくしなやかな、冷血動物の皮膚のようなあの感触に特別に性欲をそゝられると云つたことは、はつきりとなかつたようだったのです。

マスクについては、夫はこれに私と殆ど同様な感覚を持つていました。これは前号にも書きましたように、どういう機転なのか、知るよしもあります、首をしめられたり、呼吸を苦しくされたりすると下半身の一部が充血してくるのは、敢て私たちだけでなく、

ある程度誰にも共通のことらしいのでございますけれど、だからといつて、私のようにマスクにひどく敏感な興味を持つていらつしやるかたが、そう沢山あるとは思えません。ともあれこの二つは、私のその方面の生活には重要な感覚的な役割を果しているのですが、これが余りにも特別なので、私の書きますものへの読者の皆様の共感も、それ程広く且つ深いものだとは私自身には信じられなかつたのです。又いつかの私の「囚衣」について御意見をおのべ下さつた吾妻新様も、はつきりと「レインコートをきせることは、あなたがただの特別なコンプレックスだ」と御指摘になつています。(余談でございしますが吾妻様のお書きになります「感情教育」は何と見事な記録だろうと感心致しております。作中の夫のかたのゆきとどいた心遣いはどうでございましょう。あのお作にくらべれば、私の何もかも洗いざらい投げだすような告白の中の生活など、何と粗雑で泥まみれのものでしょうか！)

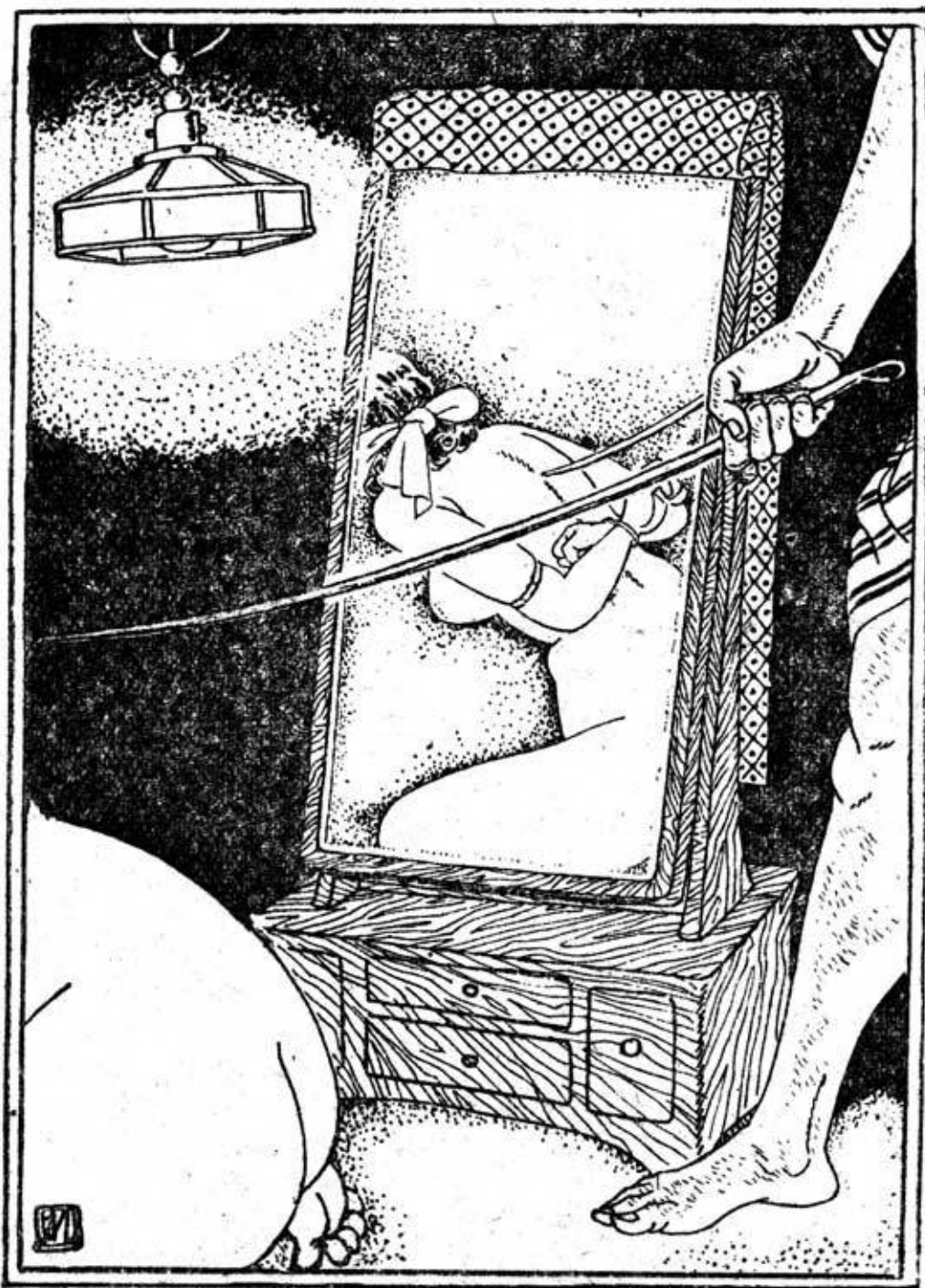
とにかく、このようなことから私は私の書いたものにそれ程の影響も期待してはいたなかつたのです。

ところが一度誌上にあれがのりますと、その次の日から始まつたいろいろなことに私はむしろアツケにとられてしまつたのです。

それと同時に、これは失敗つたと思わないわけにはゆきませんでした。一夜の情熱の余り、めんめんとおべたてたあの告白が、これ程多くのかたのお心を乱し、更にもつと悪いことには、私自身にも何の価値もなかつたばかりか、泥沼のような惑乱と、どうにもならない陥穽の中に落ちこまざるを得ない状態となつてしまつたからです。

第一にお手紙のことからお話申しあげましょう。発表後数日たつ

てから奇譚クラブの編集部から大きな袋に一束になつて、ぞくぞくお手紙が来始めました。又それとは全く別に「あの告白はあなたではないか。間違いないと思うがもしそうだったら」と云う書き出しのお手紙も十通を下らず、私のさゝやかな机の上に押し寄せてまいつたのです。それは文字通り「押し寄せてくる」と云う感じでした。私は始めて編集部から厚い大きい袋がとどいた時には、一体これは何だろうと、むしろ不思議に思つたのです。封をあけて見ますと、何と膨大なお手紙でした。あゝ、正直に申しあげます。その時私の手は何とふるえたことでしょう。誰も居ない、誰にも見られない場所に早くいこう。そうして、この御手紙の内容を読もう。口の中には唾液がわき胸がしめつけられるようでした。踏む足もそぞろに歯の根も合わぬような気持でした。私は自分の離れにひきこもり一つ一つその沢山のお手紙を読んだのです。何と有難いお言葉が、そこに満ちあふれていたことでしょう。どなたも私のいくつかの「告白」を読んで下され、浅間しい私を、さげすむどころか、あたたかい御同情と共感をお述べになつて居るのです。まるで慈父のように、こんこんと私をおさとし下さるもの、かつての夫のように、もの静かに私の心理を分析し御自分と、かくかくこう云う点で、一致するから、とお述べになつておられるもの、御病床のベッドの中から将来の希望を約して私に期待して下さるものも二、三にとどまりませんでした。



真面目な、もつたいない程礼儀正しい紳士的なお手紙、若々しい情熱的な御書面或は又荒々しい熱情でマゾヒストとしての私をお求めになるもの、わびしい見せもの小屋の旅の空から私に呼びかけて下さつたもの、その内容は、さまざまでございましたが、誰方も皆一致しておることは、最後には是非とも返事が欲しい、必ず合つて欲しいと云うことでした。

これは当然のことでございます。私のあの呼びかけに対しての御手紙ならば、それ以外何をお求めになることがありません。

私は早速御返事を書き始めました。いいえ、すぐにではありません。その夜、皆が寝しづまつてから一つ一つ丁寧に御書面の趣きを読み直し、それに対して御返事を書き出したのです。自分の呼びかけに対して御手紙を下さったのに対し、どうして御返事申しあげないわけにいきましようか。私は心を静めて——それでもしなければ私の手がふるえて仕方がなかつたのです。うずくようなわななきを、どのお手紙にも感じました。見ろ、たつた一人のお前を、皆様がこんなに求めになつてゐる！——筆をとりました。しかし筆がすすまないのです。理窟から云えば簡単です。お手紙の内容に則して自分がおききたい点を質問し、お会いする日や目印をお約束し、その上で万事をきめれば良いことなのです。そのつもりでお前はあれを書いたのじゃあないか、と私の中の女は叫びます。でも、どなたに對して？この山のようなお手紙の全部に對して？それではまるで娼婦のようです。ではその中からお前が適当と思うかただけを選定して、その上で約束をしたら？あゝそんな失礼なことが出来ましようか。お手紙を下さつたかたがたは、私自身がびつくりする程熱心に且つ真面目に私を求めて下さるのが解りすぎる位わかるのですから。

私はそれでも勇氣を出して「先着順に」五人程のかたがたに御返事を書きました。お手紙に対する私の心から感謝の氣持とすこしばかりの私の意見と、そして最後にもう少し私に考える時間をいただきたいと云うことと。この返事を受けとられたかたは、さぞ物足りなくお思ひになつたことでしょう。あんなに夢中で呼びかけておきながら返事はかくも冷淡なものであるか——お怒りになるお顔が目に見えるようでございます。しかしそれでも私は、やつと五通の

御返事を書く間に、くたくたに疲れて勇氣を失つてまいりました。「五通」とはこのお手紙全部の一割にも足りません！私はただ深い嘆息のうちに筆を擱いてしまいました。

そして心は激しい惑乱の中に落ちこんだのです。自分勝手な甚だ無責任な——いや自分では充分な責任を持つて、あの告白を書いた積りだつたのですが、今となつては、結果として無責任と云われても仕方のないような状態になつてしまつたのです。——呼びかけをして、おいて、沢山のかたを深い深いお心の乱れのうちに陥れ（あゝそれが何と生ま生ましくお手紙から察せられることでしょう）自分自身も今どうしていいかわからなくなつてゐる！私は正直に申します。第一に夢にも私はこんなに沢山のかたからお手紙を、こんな熱烈さを以て戴くとは夢にも思ひなかつたのです。皆様のお心をこんなに乱すとは、本当に思ひも及ばなかつたのです。第二に私はいつたいどうしたらよいのか、六十通に近いお手紙のかたたちを一人づつ御訪問してお話を伺い、それからゆつくりその中の一人を選択するのか？そんなことが出来ることではございません。時間もなお金もなく、又第一に私自身が自分に対してやりきれない氣持になつてきます。お手紙の文面でお人柄やら条件やらを選ぶ？何と無礼なことでしょう、結局私は何もしないで黙つてゐるよりほかはなくなつてしまふのです。しかし黙つていれば折角波のような情熱と期待をもつて私を求めて下さる（あゝ私のうぬぼれをお許し下さい御書面の上ではそう感じられるのですから。）かたがたが何とお思ひになるでしょう。私は八方美人であることは望みません。けれども自分に対しても、そしてそれ以上に人様に対して誠実でありたい。私は嘘つきでありたくない。

しかし今はもう何を云つても、せんないことです。私はこゝまで何とか自分をおさえて書いて参りました。私は弱い女です。自分さえ自分の思うようにひきまわし得ぬ。決断力のない女です。私にお手紙を下さつたうちの数人のかたは古川裕子が男ではないかと疑つていらつしやいました。そうです。裕子は男でありたい。私が男ならこのような事態に処してテキパキと割り切つて処置をすることが出来るでしように。あいにく私は本当の「女」——それも意志の弱いつまらぬ女なのです。世間には知性の高い、男まさりの立派な同性が数多く居られる。私はそのかたがたが羨ましい。私にも強い心と高い智慧が欲しい。今日のような深く晴れ渡つた冬空から智慧は音もなく私の心の中におりてこないものだろうか。

おそらく、古川裕子がこんな罪深い告白文を書くのはこれが最後でしよう。私は二度とこんなことをくりかえしたくはありません。ですから御返事を差上げないかわりに御書面の中に云つてこられたいろいろの事柄に対し、せめてこゝで御答え申しあげます。御不満でございましょうが、裕子のわがままをお許し下さいませ。

まず、お前の告白の中には、前戯としてでなく、折檻そのものだけで満足するように書いてあるが、それは本当か。本当ならば、どう云う具合に満足するのか、と云う御質問が大分ありました。

たしかに私は必しも正常の交渉を必要と致しません。殊にお仕置が全然なかつたら、全く不感症なのです。ですから私の興味は正常の交渉にはないのだと云い切ることが出来ると思います。では前戯として折檻があつた場合はどうだ、とおつしやるのですか。その場合はやはり相当興味を感じ得ます。しかしそれがなくても不満足ではないのです。私の身体に全然触れることがなく、たゞ縛られたり

猿ぐつわを嵌められたり鞭打たれたり、要するに折檻をうけて、自分でもオナニーは出来ないし、誰からもその部を触れられなくても満足し得ます。もつとも触れられる場合の方がより容易にオルガズムに達するとは云い得ましよう。

もつと細かく申しますならば、まず麻縄で縛られるとき両腕を背にねじあげられて、手首に縄がかかり両手首が重なつて、更にその縄を首にかけてひきしぼられる、その瞬間の皮膚の感覚は刺戟的です。縛られる際に大人しく正座させられて括られる場合でも、又両膝の下に馬乗り押し伏せられて、まるで罪人のように括られてしまふ場合でも背中にも両手首を重ねられる瞬間と首縄を締められる瞬間に、私の肉体は最も敏感なのでございます。次には、胸に縄をかけられる時、殊に縄が乳房にふれる時です。しかしこれは前者程でもありません。結局両方の手首を後手にされると、強く強く「自由を奪われた」という感じが無意識のうちに私を刺戟するのであります。しやうし、又首縄をしめられる苦しさは端的に折檻と云うものを象徴するが故に興奮するのでございましょう。実際にお仕置を受けているときは夢中ですが、冷静に一つ一つ考えて見ますればその「刺戟」には被虐と云うものの精神的基礎があるようでございます。事実マゾヒストと云うものは、人並以上の想像力を持つていていのではないのでしようか。「想像力」を「空想性」と云い換えても宜しいでしよう、とに角、お仕置そのものに対して、又その一つ一つの細部の刺戟に対しても、本能的な生き生きとした被虐の（凌辱されている意識）の想像が仿らいているのです。これはむしろ「芝居気」と云つてもいいかも知れません。ですからこのような遊戯には正常に考えれば、全く馬鹿馬鹿しくも煩瑣な手続をとるのです。囚衣

を着せられたり、石畳の上にじかに座つて判決を受けたり、こんなことは、ことごとくマゾヒスト特有の空想力のさせるわざです。従つて想像力に富まないマゾヒストは居らないでしようし、又空想力に乏しい人は、マゾヒストにはなれません。このような遊戯は疑いもなく本能に根ざしていますけれども、その方法たるや実に「人工的」です。正常の交渉を自然の「太陽」にたとえれば、サデイ・マゾの遊戯やその楽しみかたは、人間が発明した「燈火」に似ています。自然の闇を明くする電燈に似ているのです。その意味では加虐被虐の遊戯は、おこがましい厚顔な云い方を致しますならば正常の交渉よりも、もつと「文明」であるしそれには「近代的なデカダン」があると申せましょう。それは明らかに「不健康」であることは私にはどうしても間違いないことのように思えるのです。「近代文明」がデカタンで不健康だと同じ意味で加虐被虐の遊戯は、反自然的でデリケートでそしてデカタンなのです。

お話がひどくむつかしくなつてしまいました。女らしくもない生意気をお赦し下さい。だけど、私はせめてこう考えることによつて自分のおちこんでいる泥沼を理窟づけ、幾分か美化して自ら慰さめておるのでございます。識細な神経と敏感な詩情を持たない人が、どうして真のマゾヒトスになれるものか、と。私は深



い嘆息とともに申します。これは明らかに「引かれ者の小唄」です。押をおそれぬ言葉です。そしてマゾヒスト古川裕子のせい一杯の反抗と、哀れなブライドをこめた言葉なのです。お嗤い下さいませ。でもせめて、こうでも云わなければ、私は生きてはいられないのです。私のマゾヒズムは夜霧の中で花のようにうるんで光る街燈のようなものなの、と。

お話をもとに帰しましょう。レインコートのゴム裏の感触に特別な感覚を持つていることは、すでに云いつくしました。それが、依つて来る由縁も「囚衣」をお読み下さったかたがたは、すでに御承知の事と存じます。

猿ぐつわにつきましても二月号に詳しくお話してあります。これは、一つには呼吸を圧迫されることにより、一つには女が猿ぐつわを嵌められている姿は、いかにも無惨なものです。それは手足を括られている以上に、完全に自由を奪われている姿なのです。遊びごとのような猿ぐつわではありません。殆ど呻き声もやつと、呼吸もわずかに出来るだけと云う猿ぐつわが、どんなに苦しいものは御経験になったかはよく御存じでしょう。その苦しい轡を女が嵌められているのです。吾妻様もおつしやいますように、猿ぐつわは、被虐加虐の遊戯の最高の境地だと私も信じたかったのでございます。

これに較べれば鞭打ちや吊したのなどは、もつと荒つぽく粗雑な感覚のように思われます。もつとも、これはマゾヒストの側からの云い分でありまして、サディズムの側から見れば、たしかに鞭打ちや吊し責めなど所謂「責め」の数々は、猿ぐつわ以上に端的な直接的な刺激が感じられるのではないかと私にも想像し得るのですが。卒直に申して私には、鞭打ちよりは、猿ぐつわに興奮させられます。もつとはつきり申せば、猿ぐつわなしではすくなくともマスクなしでは被虐の喜びが半減してしまうので、最高の陶醉とはならないのです。どうしてもこれなしでは満足に采ないと云つても嘘ではございません。しかしこれは特殊な私の性質、性癖のためかも知れません。とにかく亡夫との交渉に於て、もつとも注意を払い、また種々の材料を用い繊細な感覚を凝らして丁度し楽しんだのは、この猿ぐつわだったのでございます。後手に縛りあげられてから、ゆつくりと猿ぐつわをはめられる瞬間は、何にもまして私のよろこびだったのです。その瞬間興奮はいやが上に、高まり、私は性のよろこびに殆ど恍惚となつてしまうのです。

さて、次に鞭打ちについて申しあげましょう。お手紙の中にも、「お前はとう鞭打たれるのが一番好きか」と直にお尋ねになつてこられたかたがございました。このお答えはむつかしいと思います。



結局私にとつては、「鞭打たれる」という「意識」が私を刺戟するのであつて、鞭打たれること、そのものではないような気がするからです。全裸にされて後手に括られ猿ぐつわを嵌められ、膝も足首も縛られて、明るい電燈の下にうつ伏せに転がされている。そして鞭打たれる最初の鞭が今にも皮膚に当ろうとする瞬間がまずひどく欲情的です。次には、焼けつくように痛い鞭が皮膚の同じところに当らぬよう、不自由な身体で床の上を転りまわつてもがきまわる。その哀れな姿を鏡の中で、又は自分で想像することによつて、悶えるような下半身の熱感を感じるのです。ですから特に尻を打たれた時がよいとか、背中を打たれると興奮するとかは、申しにくいのです。女は一般に尻を打たれると興奮すると云われておりますが、私の場合はどう思いかえして見ても尻を打たれると特別に興奮するということはないような気が致します。むしろ後手に縛られた手首より上の背中中の筋肉のよりあがつているあたりを、ピシリと打たれた方がよいように感じられるのです。

又、鞭打ちを受ける場合は全裸ですと、ものの三十も打ちつけられますと、いくら痛くても、もう、もがき廻つて鞭を避ける元気がなくなつてきて、ぐつたりとのびてきます。打たれた背中や腕やお尻や股が燃えるように熱くなり、鞭の痛みは、一種のやわらかみ

をもつて肉体に喰いこんでくるようになります。そしてぐつたりと床の上に長くなつたきり、いくら打たれても全く無抵抗に——避ける氣力もなくなつてしまうのです。この時の被征服感も、たしかにマゾヒストのよろこびの一つだと思います。自然と涙が出て来て、厚い猿ぐつわを濡らし、身体をねじらせて、涙の一杯たまつた目で弱々しく鞭打ち者を見つめ、目にいつぱいの哀願をうかべて無言の赦しを乞う、それ以外に何も出来なくなつてしまうのです。

猶その赦しが容れられず続けて打たれますと、ある程度以上は鞭の痛みはそれ程感じなくなつてしまいます。意識が朦朧としてくるのです。しかし痛みが感じなくなつても、その頃になると不思議にわせば泣きの状態となります。泣くまいと思つて、口の中につめられた布をかみしめて我慢をしても、どうしても我慢出来ないのです。一切の自由を奪われて全裸で転がされている女が、猿ぐつわの下で呻くように泣いている。肉や背中中の筋肉がひくひくと動き、全身で泣いている姿は、たしかにサディストのかたにとつては魅力なのでございましょう。といつても、私自身その場合、特に辛いとか痛いとか、苦しいとか、又はなさないとか、そう云つたために泣いているのではないのです。この時の気持は私自身にも何とも説明が出来ません。よく考えて見れば、この啼泣は全く精神的な要素を含まぬものようです。云つて見ればマゾヒストの私の肉体が泣いているのです。それかと云つて、特にその場合に快感を感じ恍惚としているかと云えばそうでもありません。むしろ意識がぼんやりしていて、この世の出来事ではないような、一種云い難い心持の中に居るのです。私には、これを何と云つていいか解りません。心理学者や、又精神病科のお医者様ならば、その方面から学問的に説明して下さるかも知れませんが、私はただ私の感ずるままを、正直に申

し述べるよりほか何も出来ないのてございします。

鞭の材料によつて痛さも違いますし、感覚も異ります。縄を縫つて太くつくつた鞭が一番粗野な感覚です。私は余りこれを好みません。しかしお仕置のいろいろな感覚的な要素を、たくみに組合せた場合には、太縄の鞭でなければならぬ場合が出てきますし、単独にこれだけとり出した場合には余り好まなくても、そうしたときには、非常なよろこびを感じる事が出来るのです。そのような微妙な組合せのデリケートな感覚を持ち得るのが真のマゾヒストなのだと、私は又も、悲しくも胸をはつて申すのです。革鞭は痛烈です。情け容赦のない折檻には、これは鋭い厳しさを持つていて、もつとも適当しています。そして太縄や竹などに比すれば、もつと近代的な味があります。私は痛いけれども革鞭は好きです。同じ革鞭でも余り弾力性のない厚いごつごつしたものは、太縄と同じように粗雑です。細い軟かい、しなやかな皮膚のまる味に蛇のように這つて皮膚に喰いこむようなものが宜しいのです。その意味ではゴム鞭はよいと思います。これは割合に叩く音が大きく、いかにも痛そうに見えますが、案外に痛くありません。こう云つた遊戯を始めてなさるかたや、余り性癖の強くないかたには一番適当しているでしょう。私もこれが、もつとも好きです。この好みの一部分は、私のゴム好きによるのかも知れません。竹鞭は、乗馬用のものは貴族的で痛みも強くしかも短かく、これはこれで又特別な感覚を持つています。でも竹刀や弓の折れなどは、にぶく、しかも骨にしみるような愚鈍な痛さがあります。暴力的な味と申したら宜しいでしょうか。こう云う味が必要な時以外、私は竹刀や弓を好みません。のみならず、これは肉体的に相当の障碍を与えます。血を流すのを見ることに特別の興味をお持ちのかたや、紫色のあざや皮下出血を愛するかたに

はよいと思います。これはマゾヒストよりはサディストに愛されるのでしよう。しかし感覚的には、かなり古いものと申さねばなりませんまい。

私はいつも思うのですが、サディストとマゾヒストは一枚の盾の表裏のようでありながら、この両者の感覚的な好みには、それなりに、かなりの差異があるのではないのでしょうか。それは丁度男性の好みの差に似ています。ですからサディストでありマゾヒストであれば、いつでもびつたりと一致するとは限らないのではないのでしょうか。そしてこの両者が高度の強い性癖を持てば持つ程、その好みの差は著明に現われてくるのではないのでしょうか。

鞭打ちの場合に股縄を掛けられることは、たしかに効果的です。もがけば、もがく程度オナニーのエフエクトがあります。しかしこの股縄は、相当に掛けかたがむつかしく、最高の効果を得るにはかなりの熟練と注意とがいります。下腹や乳房を鞭打つことは余程この遊戯に熟達してからでないと危険です。

又全裸ではなくて、ある程度の着衣の上から鞭打たれることも悪くないものです。これは、全裸よりは非刺激的に思われますが、その代り皮膚を傷けたり、必要以上の身体的な障害を与える必配が少ないので、鞭打者は、思う存分力をいれて叩けます。私もすつぽりとフードをかぶせられたゴムレインコート姿で括られ転がされ、夫が息の切れる程力をこめて叩かれたことが何度もあります。うつぶせにされているので奇怪な悪魔のような姿でゴムレインコートに鞭の当る音は一種特別です。そして殆ど皮膚を傷けず適当以上の痛さはありません。夫の方は、全裸の時よりも安心して力一杯鞭打っているうちに不思議な興奮を感じてくるようでした。私はバサバサと

ころげまわっているのですが、たとえ鞭が急所に過つて当たっても失神するようなことはありません。女のフード姿と云うものは、決して美的なものではないように思います。むしろ妖怪じみていてその鞭打ちには特別な雰囲気を持つてくるのです。これが縄で括られた場合ではなくて、足枷手枷首枷の場合には、鎖の音が鞭の音とまざりあつて、もつと生々しい妖気を漂わすのでございます。

お仕置の体位についてお話を始めますと、この長々としたつまらぬくり言が果てしなくあります。私はだんだんと勇気を失つて参りました。心は重苦しくこれ以上書きつづける気がくじけてきたのです。

私はお手紙の内容につられて夢中になつておしやべりをしてしまいました。せめてこの夢中になつて居られた時間だけが、現在の、ささやかな幸福な時間なのです。

夢から醒めれば、私の心は又重苦しい圧迫感の中に沈みこんでしまいます。私はこの文章の前の方に、「こらえこらえてこれを書いていいる」と申しました。この唐突な言葉には読者の皆様は不可解に思い、不思議に感じられたこととございました。

はつきりと申しあげます。この私が今度戴いた六十通に及ぶお手紙の九十九％は私に対する御好意に溢れたものであり、私が感謝せずにはいられないものでございました。私はたゞその心からの御好意に対して御満足のゆくように、おこたえ出来ぬことを心苦しく、又涙が出る程のすまなさを感じているのでございます。でも数通はいやその中のたゞ一通は私をおびえさせました。

この数通は、奇譚クラブの編集部を通じて参つたものではないのです。それらは全部私が以前に住んでおりました東京西郊のT町



——私が生涯で最も幸福であつた亡夫との骨にしみるような楽しい生活の思い出の町——から送られて来たものなのでございます。これだけ申せば、賢明な皆様はもうお察し下さるでしょう。私は愚かにも私の告白文の中に余り正直に書きすぎたのです。世の中と云うものが、どんなにおそろしいものか愚にも私は知らなかつたのです。

東京西郊のT町の小さい運輸業をしていた二人きりの夫婦と云えば、その当時近所に住んでいた方々、又、直接取引のあつたかたがたが、私の本名を推定するのは容易なことです。何と馬鹿な私であつたのでしよう。今迄直接に御手紙が来なかつたのが不思議な位です。そこに今度の私の「呼びかけ」です。T町からは、せきをきつたように、又昔の夫の取引先のかたがたからは、沢山のお手紙が来ました。その大部分は真面目なものであり、又中には、私の不心得や世間知らずの愚かさを醇々とさとして下さったものでありました。でも中の数通は全く不真面目なものでありました。そして最後の一通は明かに脅迫的なものでした。

あの凌辱の期待と幻想が発表されてから数日を経ずして、T町と東京とから直接私のところに「お前こそ古川裕子だろう」と訪ねてこられた方が数人ありました。このかたたちのことは全く予期していなかつただけに、私は虚をつかれて、ロクに応待も出来ぬ有様だつたのです。そしてこのかたがたは、すくなくとも皆顔見知りのかたでした。余りまともに「古川裕子はお前だ」ときめつけられてしまったので私には何とも御返事が出来なくなつてしまつたのです。今更「その通りです。あそこに書いたことは一分も嘘もございません。お話をおききし御相談し、将来のことをきめましよう」と当落

申すべき場合なのに、ただオドオドと逃げかくれるような有様でした。でもその場合の女の心をお察し下さいませ。古川裕子という名に隠れているために——本名を誰も知らないと言う条件に於てのみ哀れなマソヒストは本心を洗いざらい投げ出してお話し、本能の呻めきや泣き声を恥しげもなく白日のもとに晒したのです。そしてその呼びかけに対して、古川裕子と云う名で見知らぬかたとお会いし別の運命をきりひらく——その期待であの「告白」を書いたのです。東京や大阪に出掛けていつて「古川裕子」がお会いし御相談し将来の設計をたてる。それが私のはかない望みだったのです。古川裕子の「本名の私」は亡夫のものです。亡夫以外の誰のものでもないのです！それは法律的には、私の「呼びかけ」によつて新しいかたと結婚したならば、私の本名は明らかになりました。でも出来れば私を裕子と呼んで戴きたい。「裕子」の私はあの「告白」通り人間としての誠実の全部をその新しい夫に捧げましょう。この気持はわかつて戴けると思います。ですから、いきなり本名で呼びかけられた場合には、ただウロたえないわけにはゆかなかつたのです。御免下さい。おたずね下さったかたがたは、さぞお怒りのこととございました。義兄が応待に出まして、最後に、私が顔を出して御あいさつ致しました。そして最後まで「古川裕子が私ではない」と云い張つたのです。たしかに前述のような意味では古川裕子は、本名の私ではありません。精神的には「本名の私」は亡夫とともに此の世を去り、今猶亡夫とともに住んでいるのです。でも現実には——今こそ、はつきり申しあげます。古川裕子は、おたずね下さった皆様のお察しの通り、この私なのでございます。私の無礼をお赦し下さいませ。でも、勇を鼓してもう一言申しあげます。お怒りに

ならず御聴き下さい。古川裕子は亡夫と関係のあつたかたや本名の私をはつきりと知つていらつしやるかたのもとには参りたくございません。愚かしい女の心をお哀れみになつて、私のこの赦し難いわがままをお見逃し下さいませ。お願いいたします。地に伏してお願ひ申します。どんなにお怒りになつても、仕方がございません。どんなにこの私を罵られても甘んじておうけいたします。おそろく今日から数ヶ月後、奇譚クラブの誌上で、これをお読み下さいましたなら、どうか御寛容をもつて「本名の私」を亡夫のそばから引き離すような無惨なことをなさらないで下さいませ。皆様は、みな感謝に価するような御立派な態度で、御引きとり下さいました。長途はるばる私を訪ねて下さつて、御帰途のお心は、どんなでございましたでしょう。それを想像致しますと私の心は痛みます。私は神様に祈つて皆様に感謝しております。

でも私の心はおびえます。ただ一通おそろしい手紙がございませ。これはT町の三人の人の連名で来たのです。そのうちの一人は私はよく知っております。亡夫とT町で仕事をしている時分、T町の所謂「与太者」として、亡夫の店に、よくゆすりに来て、三度に一度は、客商売の弱さから、夫が小遣銭を出していた男なのです。元来「ヨタ者」なるものが、どうして暮しているのか、私にはわかりません。このようなものが、どんな社会的な条件の中に生れて、どんな社会的な役割をしているのか私には、全く解らないのです。とに角その所謂「ヨタ者」が三人連名で私に手紙をよこしました。二度、三度追いかけるように手紙が参ります。内容は要するに「自分たちの自由にならなければ、お前の所にのりこんでいつて、この女が古川裕子なるマソヒストだとばらしてやる」と云うことです。

そして私のところに来る日まで指定して来ています。私はどうして
よいか解りません。義兄は「ともあれ、早くこの場所から暫く身を
隠せ。お前さえ居なかつたら、自分が何とかこの場を切り抜けるか
ら」と申し出てくれます。しかしあの執拗な蛇のような男のこと
です。金で解決をするにしても私も義兄も経済的能力には限りがあ
ります。いつかは——いや何程でもなく、いやでも、又こゝに、ま
いもどりその男たちと面と向い合ねばならぬ時がくるでしょう。
私はいまこの場所できゝやかな職を得ています。この場を長く離れ
ゝば当然それを失なわなければならないのです。まして、ほんのさ
ゝやかなものとは云い条、現在の私にとつては大切な経済的に影響
をもっているものなのです。私が身をかくしても、「あの女は、ひ
どいマソヒストだ」との評判は、それだけで私の職場復帰の道を断
つてしまうでしょう。その上、父のように世話になつた義兄にまで
どんなに迷惑をかけるか知れないのです。義兄は、「どんなになつ
ても、俺たち夫婦はお前の味方だ。心配するな」と云つてくれます
その心は感謝しても感謝しすぎることはない程有難いのですが、あ
のおとなしい人々にどれ程のことが出来るでしょう。いゝえ、いゝ
え、私は義兄には、これ以上迷惑をかけてはいられません。私は再
び申します。「自ら播いた種子は、自ら刈りとらねばならない」と
私は自分の責任でこれを解決せねばならないのです。それが私の良
心というもの。私のようなマソヒストは、この世の中に何の役
に立つたでしょうか。今の私の心を、せめてなくさめてくれるもの
は、六十通のあたたかい私を求めて下さる皆様の御手紙なのです。
私はそのどの一通のお名前も心に刻みつけております。そして決し
て忘れは致しません。懊悩の日がつづきます。愚かな私は、今自分

の愚かさの償いをしなければならぬのです。私のプライドも、私
の哀れな努力も、もういりません。私はどうしようかと云うのか。自
分でも解りません。わかっていることは、私はマソヒストではある
が、「ヨタ者」の不真面目な獣欲に蹂躪されたくはないと云うこと
です。私は明日、とにかく義兄の家を離れます。天涯孤独な私、行
く先ありません。義兄は、彼の知人のあちこちを私に示してくれ
ています。今の私には、そんなものは必要がないようです。日が暮
れかけて来ました。今日一日はまるで清潔な少年のような冬の日で
したのに、今は暗く曇つて、空には大きな黒い旗がかゝつてい
るようです。まるで私の弔旗のように。私は明日、マスクをして、皆
様のあたたかいお手紙を胸にだいて出てゆきます。皆様の前に古川裕
子が、恥じさらしな告白文をお目にかける事が再びあるかどうか、
それは運命だけが知っていることです。さようなら。私は皆様に、
いらざる心の動揺をお与えし、しかも何も皆様に差上げることが出
来ませんでした。もしもこの私をお怒りにならず哀れにおぼしめら
れて下さるならば、せめて、「古川裕子」なるマソヒストの女が、
この世に居て、つまらぬことを書きまくつていたとお心のすみにお
ぼえていて下さいませ。この一文、平静に平静にと自分に云いきか
せて書きつづけて来ました。たしかに半ばまでは何とか素知らぬ顔
でもちこたえました。でも弱い女の心は乱れて、今は支離滅裂な有
様になつてしまいました。貴重な誌面をこんな言葉でうめて良いも
のでしょうか。夜になつて冷えこみ、どうやら雪になりそうです。
雪のふる前の一刻は、ものみなが静まりかえつて、どこか遠い国の
匂いします。さようなら皆様。どうか御幸福にお暮し下さいま
せ。

さようなら。

僕は本年二十二才の男子大学生ですが、現在、馬術、レスリング、それに最近復活した剣道等のスポーツを通じて、一つ年上の大学生と、互いに責められる興味を持ちはじめましたので、その事についてお話したいと思います。

僕が「兄貴」と呼んでいる相手の学生は、僕の家から五丁ばかり離れた住宅地のはずれで彼の家の者は仕事の関係で旅行して家をあける事が多く、そのすきを狙って彼の家へ行き裏の納屋の板の間で、レスリングをやつたり剣道をやつたりします。僕は生れつき大柄な、がっちりした身つきをしていますが、彼の隆々たる筋骨にはかないません。

告白の錯倒

レスリングの時、捻じ倒され、馬乗りになられてぐいぐい体を締めつけられたり、又兄貴の股で首をぐつと締めつけられたりすると何んともいえない快感を覚えます。そんな時僕が「うーう」とうめくと兄貴は尚も「どうだ、どうだ」と締めつけるのです。僕はスポーツの中にも、勝負を度外視したこうしたスリルの世界があるのだという事を初めて覚りました。

最近経験した事を一つ告白しますと、今年

の夏、兄貴と二人で遠乗りをして、余り暑いので帰ってくるなり、乗馬ズボン、乗馬靴を穿いたまゝ勝手口で、上半身裸になり汗を拭いていますと、兄貴が上は学生服でしたが、下は乗馬ズボンに揃いで作つた黒革の乗馬靴といつたいでたちで、入ってきて、「よお、いゝ身体してるな」と言うのと、いきなり鳩尾を拳で突いてきたのです。不意をつかれて、僕が屈む所を長靴で力一ぱい顎を蹴とばされ

乗馬靴への執著

池田 継 男

ました。僕が仰向けに倒れる所を、どつかと馬乗りになり、のどをぐいぐい締めつけてきます。僕も暫く懸命になつて兄貴の腕を支えて防ぎましたが、次第に全身の力が抜けて失心してしまいました。

どれ程経つたか、ふと気がつくと、僕は後手に縛り上げられたまゝ、彼の居間に横たえられていました。夢の世界から現実に返つて兄貴を見ると、黒革の胴の剣道の防具をつけ乗馬ズボンに、革の長靴という姿で右手に竹

刀を持つて立つて居るのです。僕は兄貴のその服装から、嘗て陸軍幼年学校へ行つていた頃、教官の大尉に剣道の時、さんざんいためつけられた事をふと想起しました。教官は、道場では全く夜叉のようで、竹刀でめつた打ちにされて気絶すると、水をかけ、気がつくと防具をつけたまゝで、道場のはめ板に縛りつけられたりしました。或る時は防具の胴と垂れの間へ竹刀を挿し込んで捻じ上げ、僕の悲鳴を聞いて、「貴様ナマケトルゾ」とニタ／＼笑つていたものです。あの恐ろしかった大尉が憎いというより今から思えばなんだか懐しく思われます。今の兄貴がその大尉にそっくりなのです。僕が気がついてみると、いつの間にか自分も稽古着が着せられており、その上からぎり／＼柔道の黒帯で縛つてあります。兄貴は黙つて近づくと長靴で僕の顎を力一ぱい踏みつけましたので、僕は「うーう」と呻めきました。然し此の時、何んともいえない快感を覚えました。そうして、それこそ僕の望んでいた所なのですが、兄貴は後手になつた指へ、煙草の火のついたのを押しつけたのです。僕はもう、その時は声を立てる元気もなく、ぐつたりとなつて夢の中を彷徨していました。

悪の部屋

二俣志津子

しのぶは押入の戸を開け、
「おや？」

一

と、首をめぐるして部屋の中を眺めまわした。家中が森として、コトリと言う物音もない。私はそつと首をのぼして、天井裏から下を覗いてみた。そこには、しのぶの緊張した



顔が、獲物をねらう野獣のような精悍さをみ
なぎらせて何物かを見つめていた。凄愴な美
しさがある。と、私が思つた時、彼女は突然
振返つたので、私はあわてて首を引込めた。
その私へあびせるように、確信に満ちた勝者
のようなしのぶの聲がふりかゝつた。

「正木が来ているね、フフフフ、動いてごら
ん。油をぶちまけて火を点けてやるから。そ
れから二俣さんも御一緒ね。あなた達のこと
だから、私が上つて行つても、じつとかくれ
ていて私を取押えようとは、しないでしよ
うね。その代り私は電氣に引つかゝつて簡単に
引つくり返つてしまふつて言う寸法さ。そし
て又裸にされて、恐らく、行李にでもつめ込
まれてこゝから運び出されるのが落ちね。ど
う？、私の推理は？、的確でしょう。」

もう一つ、二俣さん。お妹さんの姿は素晴
しかつたでしょ？ Yの字型、足首を縛らな
いで、膝を折つて吊下げたらもつとよかつた
んだけど、どうせ今日中に、その美しい皮膚
をもらつちやうつもりだつたものだから、あ
まりいぢめなかつたのさ。うゝん。そんなに
沢山じやない。お尻のところを少しと、腕の
皮膚。気が向いたらもつとね。あなた達、来
るのが一日早かつたわ。いぢめていぢめて、

いぢめ抜いて差上げるつもりだつたのよ。あ
てこはローでふさいで、毛はきれいに剃つて
いただいたちやつて、お口の中へお小用を足し
て、ホッホ、それでも足りないワ。お妹さん
が憎いんじゃないの。わかる？。どこかでい
つかお会いしましょう。さよなら。」

このぶは、わざと高い足音をたてて出て行
つた。

正木も兄も黙つたまゝその場を動かない。
私はふと彼等の方を眺めた。すると、兄が、
軽々私を手まねきしているのに氣附いた。

私は這うようにして彼等に近付いて行き、
もうすぐ例の場所へたどり付くばかりになり
つゝの梁に手をかけた。と、突然、強い衝撃
が私の全身をうつた。

——感電！

その意識がひらめいた次の瞬間にはもう、
私は失神してしまつた。

この位いの時間がたつただろう。気が付く
と、私は六帖にふとんを敷いて寝かされてい
た。全身特に手足がしびれているようで気分
が悪い。兄や正木がまだ天井裏に居るよう
にも思える。と、私は急に彼等に対して憎悪が
湧き上つてくるのを止めようなくなつた。

身体には別に異状もなかつたが何と云うこと
なく節々が鋭く痛んだ。

「ふん、人を魚か何んかと思つて、感電させ
て擱えて料理するのか。よし、今度から私が
それを利用してやろう。」

私はむつくり起上つて、兄達が居ないのを
確めてから外出の仕度をした。

「悪の部屋。」

私は玄関を出て振返つた。如何なる善人も
悪の部屋に入ると、悪い芽を萌えたたせ、詐
術を弄し、人の苦しむのを見て喜ぶようにな
る。赤坂、新宿等に多くの土地を持つてい
る。大久保と云う長者が居る。彼が若い頃、家を
建てる時に今は亡き易学の大家赤田正秋氏に
金の溜る家相を觀てもらつた。赤田氏は一ツ
の家の設計図を書き、このような家なら金は
溜る。がしかし、こゝに住む家族は断絶す
る。と言つて、ものには限度がある、極端は
避けるがよろしい。と、忠告したが、大久保
は設計図通りの家を建てて住んでしまつた。
ところが家族は次々に死亡し、今は病弱な
養子と主人のみが残つてゐる。

この悪の部屋にも、家相家に觀せたら淫相
がある。と、でも言うかもしれない。

私は、何でもかまわない、自分の氣の向い

たまゝに生活したいものだ。と、思った。これ
れがそもそも悪にはまり込んで行く、無反省
な思想だと知りつつも。

二

大塚智子^{トモ}は、学校から帰つてくると、薄暗
くなり始めた勝手に炊事を始めていた。フラ
ンス語とドイツ語の単語引きに追われて此頃
は本もろくに読めない。一体アルバイトをや
つてゐる友達はどうやって勉強してゐるのだ
ろう。小説も読みたい。オースティンの「マ
ンス、フィールト・パーク」がいいと云う話
だが、あれは英語で、とても辞書なしで読む
力はない。いい映画も観たい。

智子にお金がないのではない。しかし彼女
はパーマもかけず口紅もつけていない。美人
ではないが肌の白いのが目立つた。それは不
健康な白さではなく、生々とした若さそのも
のの白さで、彼女はよく、省線電車の窓を開
け、豊かな髪を風に乱れさせていた。友達が
そんな彼女にたまらなく魅かれるらしいのを
彼女は意識していた。一緒に生活したい。と
いう友達も幾人か居た。が、彼女は孤独を好
んで、アパートでない、しかも独立している
貸間を捜し出して、住むようになったのであ

る。
離れのような貸間が最近しきりに建てられ
てゐる。勿論、部屋代も権利金も高いには高
い。

彼女の住んでゐる家は、四帖半が二間で、
部屋は廊下にへだてられていた。奥の方の部
屋には、若いような、若くもなさそうな跛の
彫刻師が住んでいた。彼は殆んど顔を見せな
い。

世間を避け、人間を避けてでも居るよう
であり、炊事も二日に一度位いししないので
ある。ただ、彼の妹だと云う若い娘が来た時
は朝昼晩と炊事をしているらしくつた。智子
は、この妹の方と幾度か挨拶程度の言葉を交
したことがあるが、彫刻師とは殆んどと云つ
ていい位いい口を利かなかつた。彼は彼女と顔
を合せないようにしてゐるらしく、彼女もそ
の方が気楽で助かつた。

その彼が今日はめずらしく彼女に言葉をか
けたのだ。何でもないことだ、とは思ひなが
らも智子はやはり妙な気がした、それは銅像
に話かけられたみたいな驚きもあつたが、男
から異様な、神経を麻痺させられるような気
を吐きかけられたように感じた。たつた今さ
つきのことであるが、もう彼が何と言う言葉

をかけたのかも思い出せない。

——何んでもないことだ。ただ、勉強疲れ
で神経が弱つてゐるだけなのだ。

智子は、今日は早く寝よう。と、思いなが
ら炊事をしていた。

と、彼、彫刻師二俣三郎の部屋のドアが開
いて、三郎がなに気ない風に出て来た。彼は
恰も水でも飲みに来たように智子に近付い
てきた。

「大塚さん。」

彼は突然智子に声をかけた。彼女にとつて
は全く思いがけないことで

「は？」

と、あわてて振り向いた。

「これを、差上げましょう。」

三郎は右手を握つたまま智子の方へ突出し
て言つた。

「つまらんものですが……。」

「何んでしようか？」

三郎は手を開いた。彼の掌の上に小さなコ
ケシ人形が乗つていた。

「ハンコです。」

「ハンコ？」

「え。」

彼はコケシ人形をつまんで智子に見せた。



間違いなくハンコである。篆書で「大塚」と彫つてある。

「どうぞ。」

「でも、いただく理由がありませんワ」

「氣まぐれです。仕事に疲れた時、いや、何となくぼんやりしている時、ふと、一文にもならぬことをするものです。それが偶然大塚と云うハンコになつたわけです。受取つて下さい。他に持つて行きようがありませんから……大体木のハンコ以外は、お客が書体を注文するので、もうこれは篆書で彫つてしまつてあるので、売物にはならないのです。で、若し宜しかつ

たら、お使いになつて下さい。」

智子はまじまじと三郎を見つめた。彼がこんなになく喋つたのを聞いたのは始めてでもあるし、大体彼女は他人から無償で物をもろうことに慣れていなかった。ギヴ・アンド・テイクである。級友や下級生や上級生からよく物を貰つたが、彼女はすぐに、貰つたものの相当の品を返していた。コケシも幾何か集まつてあつたので、三郎が差出した可愛らしいハンコのコケシも欲しいには欲しかつたが、何と云うことなく、それを貰うことが躊躇された。

「大したものじゃないですよ、彫るにも十分とはかゝらなかつたし、御遠慮なさるほどのことはないのです。そう、これからおつき合ひしたいのですが、その、何て言つたらいいかな、御あいさつ代りに、とつておいて下さい。」

「は？」

「この篆書と言うのは、中国の始皇帝、あの万里の長城を築いたり焚書したりした始皇帝が、今迄の文字をまつ殺してこう言う書体を学者達に作らせたんです。漢字としては一番優美でいいのですが、惜しいことには書くのに面倒だし覚えにくいので、やがてすたれて

しまつたのですが、一寸見ると、貴婦人のようでしょう?。」

智子は差出されたハンコを眺めたが、手にはとらなかつた。彼女は困つたような表情では?、と、言うばかりであつた。彼女が黙つて受取らないでいると、彼は益々喋りそう

で、それにも閉口するのである。
「……始皇帝が多くの学者を牢へぶち込んだのですが、或る牢の中で、名前は一寸度忘れしましたが、一人の学者が、簡潔な文字を発明したので。その文字が何時の間にか牢から外に伝わり篆書を圧倒していつたのは皮肉ですね。その牢の中で発明された文字が隷書、奴隷の隷です、隷書と云うのです。日本の石碑の字は殆んどこの隷書ですが、そのうちにお見せしましょう。」

「はア」

「どうぞ」

智子は仕方なく受取つて頭を下げた、すると、彼はやつと満足したように頭を下げて、部屋に引込んでしまつた。

——おかしい人だわ、この調子で



いくと、あらゆる書体のハンコを捧げられそうだが、何かお返したくても何がいいかわからないし、まあ、考えておこう。

智子は炊事が終つて部屋に入つてからコケシのハンコを見直した。高校を卒業の時、卒業記念としてもらったものとは雪泥の差で、

何とも言えぬ美事さであつた。彼女はそれ以外のコケシと一緒にせず、ハンド・バックの中に入れた。

——ギヴ・アンド・テイクの習慣が崩れそうだが。あの人になにを差上げたらいかしら? わからない。全くわからないワ。いや、私が明日にでもなつてあの人、

に何か差上げると、あの人は思いがけないような顔をして、又、何か下さる。そうすると益々いけな

いワ。
こう言うことからのお友達つて好かない。学校のお友達も殆んどこれだわ。誰も、人の心の奥でふれ合おうとしない。喧嘩をするほどに議論してお友達になつたのは木村さんだけで、私には、あの

人だけが友達と言えるけど、あとはみんな、泡みたいなのも、感情の泡沫を弄んでいるにすぎない。

ドアがノックされた。彼女は丁度食事を終えたところであつた。
「どなた」
「二俣です」

「どうぞ。」

三郎が帳面を抱えて入ってきた。

「失礼します。お食事中ですか。」

「いえ、今、すんだところですから、かまいませんワ。」

「僕の彫つたものをお見せしましょう。日展に入選した石もあるんです。それは今持つてきますが……」

「はア。」

「あまり興味はありませんか。」

「はア、はつきり申しますと。」

智子は彼に茶を注いだ。

「じや別の話をしましょう。美術は?。」

「美術は少し。」

「ちよつと失礼。」

三郎は急いで自分の部屋へ戻り、部厚な本等を抱えてきた。智子は燈を点けた。

三郎は智子の方へわからぬほどににじり寄つて、一冊の本を開いた。それを見て、智子は目のやり場に困つて頬を赤らめた。それは、男と女が性交している図であつた。が、三郎は平然としていた。

「写真版ですが、これはピカソのデッサンです。もうすつかり年令的には老人な筈なのですが、こんなデッサンを書くところを見る



と、なか／＼若さを感じるではありませんか——。

彼はやつぱり偉大ですね。」

「何故ですの?。」

三郎は完全につまつた表情になつた。ピカソが何故偉大であるか。を、この一つのデッサンで説明するには困難であつた。

「つまり……」

と言つて助けを乞うように、彼は智子を見た。が、彼女は目を大きく見開いて彼を見つめているだけで、その目はやはり、卒直に、(何故です?)と、問うていた。

——察してくれてもよさそうなものを……

三郎はその目を非情とも。又、非情であるが故にも美しいとも見。しかし、ピカソの偉

大なるユエンの説明はつかないまゝに脇下から冷汗を流した。沈黙は更に彼を苦しめた。

「つまり、僕がピカソを偉大だと言うのはこのデッサンを指して言うのではなく、彼のグルニカを始め多くの絵、僕等から見れば奇怪とも見えるそれ等の絵が実に見事な色彩で調和を保つていふと言うこと……」

「それは、ピカソに限りませんわ。色彩で絵面の調和を保つと言うことは、女性的であり最も安易な道ですワ。」

「いや、終りまで聞いて下さい、彼ピカソがあのよう絵ばかりしか書いていない、書けない、と、言うなら偉大でも何でもないのです。単なるシニールにすぎない。」

「そうでしょうか?」

三郎は弱つてしまつた。どうもこの女の、きらきらする目が邪魔になつて仕方がないし、そうでしょうか、と、つめ寄られると、確信がないのである。

——この女は僕より遙かに絵のことはくわしいにちがいないのだ。

彼はこの大塚智子と云う女が小憎くもあつ

だが、それ以上に魅きつけられてしまった。もう絵の説明はする気がなくなつてしまつたし、もと／＼出来もしないのだ。ところが、——そうでしょうか。だ。

二人は沈黙したまゝ顔を見合つた。三郎は耐えられなくなつて、彼女の前に身を投げ出したくなつた。

——敗けだ。僕は、この女に近付き、この女を征服してやろうと思つたのだが、敗けだ。

智子は男がひれ伏すのを待つていた。いずれはそうなるのだ。大した知識もないくせに知つたか振りをする。それは虚栄でもあり、女のカン心を買おうとする男の浅ましい術作でもある。

——伏してわが奴隷となることを誓え！

三

丁度その頃、私は、街でばつたり合つた正木と、新宿のとある喫茶店でお茶を飲んでゐた。

正木が低いあたりをはゞかる声で言つた。

「あなたの……は素晴らしいですね。」

「えッ？」

私は自分の耳を疑つた。正木はにやにや笑

つて、鞆の中から一枚の写真を私につきつけた。それは素裸の私の……

……てゐるもので、私はあわててその写真をかくしてあたりを見廻した。「だめですよ、ネガはこちらにあるのだし、まだ、いろ／＼面白いのが沢山あるのですから……。」

「それ、みんな頂戴！ みんな！」

「僕の情婦になりますか！」

「情婦？」

「えゝ、そうです。でなかつたら二万円下さい。一度に二万円といつても無理でしょうから、今月末までに一万円、来月末までに一万円、そして、来月末一万円受取る時、フオートもネガも全部お渡ししましょう。」

「そんなに沢山、そんなに早く私には、とても都合出来ませんワ。」

「でなかつたら、一生僕の情婦になるんです。公然とでなくていいですよ。僕はかくれてすることなら何んでも好きなのですから。」

「みんなお断りしたら？」

「これ等の写真をあなたの親類から知人全部に送り、更に、売つて歩きます。」

「よして！」

「お金を都合しますか？」

「出来ないわ」

「じゃ、今からホテルへ行きますか。」

「いや！」

「でも、僕はお兄さんの見ている前で、様々な……であなたと……ですよ。あなたは実に素晴らしい。残念乍ら意識を失つてしましたがね。」

「バカ！」

「……してゐるところも、……いる写真もあるんですがね。勿論二人の顔も撮れていきますよ。」

「帰ります！」私は立ち上つた。

「いゝですか、明後日またこの時間にこゝへ来て下さい。その時どちらかに返事をして下さい。でないと、この写真を売り始めますからね。」

彼の言葉が、低いながらも的確に私を追つかけてきて、私の心臓を突刺した。私はよるめき乍ら喫茶店を出た。街はすっかり暮れてしまつてゐた。私は頭が痛くて仕方がなかつた。何よりも、兄に腹が立つてならなかつた。私が汚されてゐるのを平然と写真を撮つていた兄を引裂いても足りない。と、一足毎に怒りが増してきた。そして、足が自然に兄の住む家の方向に向つてゐるのに、自分では気付かなかつた。

(つゞく)



あるマゾヒストの手帖から

沼

正

三

第四十四 マゾツホの伝記書

猫好きのマゾヒストとしてまだルソーがあげられるが、彼については、「懺悔録」を中心に、詳しい紹介をしたいから、猫のこともその時にゆずり、前項でふれたマゾツホのことをもう少し書くことにしよう。

マゾヒズムという名辞を知らぬ人は少いが、マゾツホ自身のことを詳しく知っている人は意外に少い。彼が少時貴婦人の侍童バウゲとなつて、上靴を穿かせる時その足先に接吻し、顔を蹴られて喜んだ、という逸話は有名なものであるが、これを馬鹿の一つ覚え見たいにある雑誌、この雑誌に繰返している諸先生方の気が知れない。

マルキ・ド・サードマルキ・ドについては、イワン・ブロッホが、オイゲン・デュレンの筆名で著した「サード侯爵とその時代についての新研究」を初めとして、非常に良い研究書が出ている。これに比べると

マゾツホは（サードほどの多様性を欠いて専門家の関心を惹き得なかつたという事情もあるが）不当に放置されていたようで、本格的な研究書が少い。

それでもマゾツホを知る手掛りになる本は何冊か出ている。一番良いのはカルル・フェリックス・フォン、シュリヒテグロルの「ザツヘル・マゾツホとマゾヒズム」という伝記である。シュリヒテグロルという人はマゾツホのエピゴーネンで自分もマゾヒズム小説を書き、私は読んでいないが「ヴィナスの鞭」という四部作がある人である。従つてマゾツホに傾倒しており、見方が少し甘いといイレンプルグは評している。これはマゾツホの別れた妻オーロラ・リューメリンとの関係をどう見るかに関するものであるが（マゾツホをめぐる女性群については、ここでは絮説しない。「手帖」をよむほどの人は今迄に邦文で出ているもので承知しておられると思うから。）彼の書いた「毛皮と覆面とを脱いだワンダ」という本は、離

婚に至つたのはワンダ、即ち、オーロラの責任であり、彼女の不貞が原因であつたときめつけているのに対し、彼女自身の書いた回想記「マゾヒスムスとマゾヒスト達」によると、彼女は良き妻であらうとして努力したが、彼の常道を逸した行動に堪えかね、不貞も彼の方にあつたのだと反駁強調している。このオーロラの回想記に対しては更に、マゾツホ自身の日記からの抜粋に基く弁駁が出版されているときくが私は見えない。

オーロラとの離婚の帰責は結局謎として残っているわけであるが、マゾツホが二度目の妻フルダ・マイステルとは誠実に結婚生活を続けたこと、オーロラがヤコブ・ローゼンタールというマゾツホの友人とパリーに墮落したこと、離婚の問題となつていつたらしいこと等から推すと、私もシュリヒテグロールのように、マゾツホの方に肩を持ちたいと思う。離婚の時、マゾツホが長男を取り、オトロラが次男を取った。

マゾツホについては書きたいことは沢山あり、彼がオーロラと取交した「奴隷契約」なども訳出したいと思つてゐるが、本項では右の三冊の紹介に止めておく。



なお独立の項目にするほどのことでもないもので、ここで書いておくが「マゾツホ」は略称で、正しくは「ザッヘル・マゾツホ」という複姓である。志ある人がマゾツホのことを図書館で調べる場合、このことを忘れてはいけぬ。目録カードで Masoch の所を見ると、失望する。Sの部で Sacher-Masoch として引かねばならぬ。これは

はザッヘル・マゾツホという仮名書き文見ている人にはあり勝ちな失敗である。私達に係の深い所で、複姓の例をもう二つ三つあげると、例のクラフト・エビング、Krafft-Ebing がそうだし、苦痛淫楽症という名辞を創設した性科学者シュレンク・ノチング Schrenck-Notzing も然りである。これは老婆心までに。

第四十五 手紙

(その二)

敬愛する丁よ！ 残酷な女主

人、厳格な命令者よ！

私は御命令通り九時ピッタリに行けるかどうか分りません。もし私が遅刻しました時には、言うことをきかぬ性悪な犬をどんな風に御仕置するがよいかを、あなたは一番よく御存じでございましょう。

いえ、遅刻しませんが、私が次のようなことを白状しますれば、あなたが怖ろしく御怒りになることだろうと私は思っています、――実は私は、^{クレーベル}枷を自分で取外してしまいましたし、罰として課せられた仕事もすつかり仕上げてないのです。私のペニスを締めつけていたあの枷はあなたのつけ方がまずいたためにひとりでに外れてしまいました。あなたをそれから感じたいばかりに、私はそれをもう一度自分で固定させたのですが、本当の快感は生じてこないのです。

私が御宅に入りますときに、あなたは私に命令を書いた書付をお渡し下さらねばなりません。これによつて私は、そこに書かれてある色々の難かしい仕事の命令に、私が盲目的に服従しないならば、どんな目に合わされるかをあらかじめ承知致すのです。

あなたの犬が今日あなたの許を辞去します時には、痛めつけられて手も足もよう動かせぬ位の半死半生のていでありましょう。あなたがあなたの犬に対して何か残酷な拷問を考え出されるとしても、それが又問題にもならぬ位のことになつてしまうほど怖ろしい御仕置と私は信じています。

例の本で私を怖れさせ、又喜ばせようと御望みでございますならば、ハンケチに包んでもつてゆきます。………（以下略）

あなたの犬

あまり異色のある手紙ではないが、徹頭徹尾「犬」になつて書いている所を見ておいて欲しい。これは既に何回かの会合を重ねて後、「何日の夜九時に来い」という職業的女主人からの呼出しに対し、マゾヒストがその日の朝出した返事であろうと考えられる。

「法医学四季報」にC・ザイデルが報告してゐるものである。尚この手紙を一読すると「犬」の方が懲罰に対して非常に積極的になつてゐるのが分る。女主人に対して「ねばならぬ」とさえいつてゐる。マゾヒズムの本質を^{パシヴィスム}受動性に置く見地からは、ここに可成り難かしい議論が存するのであるがそれは別項としよう。

もう一つ。この「犬」が渡される「書付」をその道では「命令書 Kommandozettel」という。これがマゾヒストにとつてその時々の上命となるのである。どんなことでも書かれてあれば遂行の義務がある――逆にいえば、自分のしたいことをあらかじめ示して、女主人から、それを命令書にして貰うのである。尤も女主人の方では心得てるから、彼の希望を上廻る。例えば、部屋の掃除をしたいと申出てる場合に、便所掃除を命令する。そして、彼の反抗を圧伏して彼女の命令を遂行させる。それがマゾヒストに却つて喜ばれるのである。命令書についてもいづれ別項でもつと詳しく書くことにしよう。

第四十六 縷^{コッ} 縷^{グッ} 城

大分西洋種が続いたから、こゝらで日本古典とほころ。

慈覚大師渡唐中、縷縷城に入つたということが宇治拾遺物語に見えてゐる。縷縷とはいふまでもなく布帛の絞り染めのことである。

怪しくて垣の隙より見給えば、人を縛りて上より釣り下げて、下に壺どもを据えて血を垂し入る。あさましく故を問えども答もせず、大きに怪しくて、又異所を聞けば同じく呻う言す。覗きて見れば、色あさまじう青びれたる者どもの、瘦せげんじたる数多臥せり。一人を招き寄せて、是れは如何なる事ぞ。斯様に堪え難

げには如何で有るぞ。と問えば、木の切を持ちて、細き脰を差し出でて、土に書くを見れば、是れは額城なり。是れへ来たる人には、先ず物云わぬ薬を食わせて、次に肥ゆる薬を食わす。さて其後高き所に釣り下げて、所々を刺し切りて血を落して、其血にて額城を染めて売り侍るなり。是れを知らずして斯かる目を見るなり。食物の中に、胡麻の様に黒ばみたる物あり、其れは物云わぬ薬なり。さる物参らせたらば、食うまねをして捨て給え。さて人の物申さば、呻きのみ呻き給え、さて後に如何にもして逃ぐべき支度して逃げ給え。……

大師はこの人に教えられた通り、啞になる薬も、肥る薬も、食べるまねをして捨ててしまい、仏の手引でやつと此の魔所を脱出するのである。

これとよく似た話が千一夜物語中にある。シンドバットの七航海譚といえ、ガランの訳本以来知らぬ人もないが、その第四航海で難破した船員達が喰人種に囚られる。喰人種が先ず与えた食物を食べたものは皆理性を失つて馬鹿のようになるレーンの説ではこれは麻の実か阿片であろうという。その次に肥る薬が与えられ、肥った奴から食糧にされてゆく。船員中シンドバットだけは薬の危険を見抜いたので助かる。という話。これは註によると、エル・カズウィニの紀行に出てるとかいすが、右の慈覚大師の冒険譚と説話学上の親縁関係あることは疑いあるまい。

然し読者に与える残酷な印象点では大分逕庭がある。前記の文章は、一寸よむと一人一人から血を絞殺してしまうようにも見え、よく読んでみると、恐らくそうでなく、肥ったのを絞り取ると休ませて肥る薬を与え、肥らせてから又絞る。という過程を繰返し

たものようである。牛乳を搾つたり羊毛を刈つたりするのと同じように、天然果実としての血液を絞るための「生産手段」として人間を家畜化して飼養しているのである。喰人種が食糧にするために殺してしまうのに比して、生命こそ奪わないけれども、営利生産の手段としてこのように利用することの方が、はるかに冷血であり、残酷であり、私達の立場からいえば、はるかにマゾヒスティックな味があるといわねばならない。

太平洋戦争中、米国の邦人収容所では邦人から採血して血液銀行用の乾燥血漿を作つたが、この時在留邦人中、規定より沢山の血を取られて、貧血のため脳神経に異常を来し癡人になつたものがあつたと聞くし、今日でも、学生輸血アルバイトを喰物にする悪徳業者があることは周知の事実である。然し人血を牛乳や羊毛と同じ様に扱つて人間を家畜化したという話は、この額城説話の他聞いたことがない。

序でながら、本誌の昭和二十七年八月号を見られよ。その目次裏に江戸時代の合巻小説の挿絵紹介がある。

その中「篠塚太郎英勇話」と題するものでは、人がかさかさに吊られて血を絞られており、説明文に「唐土では血を染物に使うという。」とある。私はこの原本を読んでいないが、恐らく右の額城の話の踏えて書かれたことであると思う。

第四十七 かさぶたを食う

東莞の劉豈はかさぶたを喰べるのが好きで、かさぶたは鰕に似た味があるといつていた。南康国の彼人だつたが、部下二百人を、罪があるがなかるうが、代る代る鞭打つて傷つけ、かさぶたをこし



らえさせ、それを食膳に上せたという。劉敬叔の「異苑」に出ている話。「異苑」は晋末の志怪書である。

かさぶたは汚い感じのするものだから、私などはかさぶたについてマゾヒスティックな想念を馳せるとすれば、女主人が私の奴隷的服従がどの位かためすために、彼女の、或は彼女の愛人の身体に出来たかさぶたが落ちたのを、私に与えてそれを食べるように命じ強制し、私が躊躇したといつて怒る………そういった場面が先ず念頭に浮ぶ。そこで右の劉邕の逸話にはそれほど心を動かされないのであるが、その嗜好の特殊性を別にすれば、彼の舌を喜ばせる丈

のために、罪もないのに傷つくまで背中を轢たれ、生乾きのかさぶたを剥がれた連中は気の毒なもので、ここに支配者の不合理な恣意への屈服という形でマゾヒズムが感ぜられないことはない。人間の肉体をばかさぶたという天然果実を産出する生産手段として扱った（ゴムの木の幹を傷つけてゴム液を採集するのに似ている）点では前項に通ずるものがあるので、ここに録した。

第四十八 「揮発した踊子」

レコードと銭形平次で知らぬ者なき野村胡堂は、戦後のある文学辞典にエロチシズムの作家と書かれて大いにお冠を曲げたことがある。自分をもつと健全だというわけである。

私は胡堂のものを全部読んだわけではなく、又全部読む気もせぬが、文字通り健全ならこの「手帖」で取上げる必要はない。ところが、私の読んだ範囲でも「美男狩」だの、「新奇談クラブ」だのは不健全なエロチシズムの文字を含んでいて、「手帖」から逸し得ない。いずれも別項で扱う予定で、殊に後者はいろいろの話を含むので、数項を占めることになる。

本項で触れて置きたいのは後者の中「揮発した踊子」という一篇で、人間の肉体が天然果実を生む生産手段として利用されるという前二項のテーマの一例として思い出したのである。

ここで扱われている女主人公は特殊体質の肉体を俱えており、身体から分泌するものは、汗でも尿でも、とても良い匂がするのである。主人公はある画家の妻だった彼女を手に入れて溺愛する。彼女を風呂桶に入れておいてそこへ各種の酒を注ぎ、彼女の香る汗と混和させて、独特のカクテルを作つて愛飲する痴行まで書かれてい

る。読者はかゝる微妙の女体について更に百千の想像をなすことも可能であろう。女体が生産手段視されている点では前二項と共通点がある。然しこの女体は男がその前に拝跪すべき存在としてのみ考えられているので、マゾヒスティックな心情の方向は前二項とは全く反対になつていといわねばならない。

なお良い匂のする肉体ということについてであるが、香に対する感覚には相当個人差があるので、一般には嫌がられるわきがなども或る特定の人には良い匂として受取られる。谷崎の「痴人の愛」で譲治がナオミのダンスの先生である白人婦人のわきがに良い氣持になるところなどその一例である。西洋婦人は一般に日本婦人よりも体臭の強いことが多いことは誰でも知つてゐる通りだ。

第四十九 「仇討三鞭風呂」

「女体の浸つた浴槽の酒を飲む」ということは、胡堂の空想に止まらぬ。身体こそ匂わなくとも、美人を浴槽に入れて酒を注ぎ、これから乾盃することは、上海とか紐育とか欧州の大都会とかのナイトクラブでは古くからあつた。人ずてに聞いた話では、昨年外人の賭博で検挙された銀座の「クラブ・マンダリン」でも、目の玉の飛び出るほどの高額な会費で（これを支払える種族は、凡そ見当がつく）金髪のアストリツパーやスター女優のからだを使用して、この種の猟奇的な酒を味う催しが何度か行われていたということである。東京の魔都としての資格も世界的になつて来たといふべきか。

ウロラグニスト——私のいわゆる神酒趣味の人——なら、「その浴槽の中で、彼女がおしつこしたら」と考えるのが当然である。奇妙なことに、生のまゝの神酒には顔をしかめる人も、他の酒に少

しばかり神酒を交えたものには、案外食欲をそそられると見て、このアイディアを扱つた作品にはよくお目にかかる。前項の「新奇談クラブ」でも、版によつては、このアイディアに触れた場面が書かれていたように記憶するが、私の読んだ所では、「新青年」に獅子文六が「仇討三鞭風呂」と題していたのが、一番早かつたと思う。細かい所は忘れたが、根本の想だけ思い出してみると、ジャンヌ(?)というフランスの少女が、第一次大戦中、フランスに監留した米国兵とねんごろになり、純情のまゝ彼を信じて懐胎するが、結局は弄ばれ、捨てられた自分を発見する。戦後の日本にも随分あつたことだが、日本娘のようにすぐ自暴自棄になつてパンパンになつたりなんかしない。幸い美しい肉体と容貌とをもつていたので、パリでモデル女になつて暮している。パリは画壇のメツカだから、外国の画家相手に堅気なモデル収入だけで暮していけるのである。ジャンヌは間もなく米国から留学して来た画学生達のヒロインになる。彼等は自分等の同国人が、かつて彼女にどんな思いをさせたか、彼女が米国人というものをどんな風に考へているかなどは全く知らない。

青春の元氣に溢れて彼等は屢々乱痴氣騒ぎの酒宴を催す。ある日一人の画学生のアパルトマンで催された時には、彼女は水精となつて、浴槽に満された三鞭の中に沈み、彼等は、ヒロインの健康を祝してその浴槽から乾盃するのだつた。皆は彼女を囲んで一杯機嫌で押し出してゆく。

そのあとで先に三鞭酒を届けたおかみが浴槽一杯の酒を捨てるのを勿体ながる。酒は何程も減つていないし、もう一度壺に填めてし

切腹通信

愛川晃子さま

お勤めがら鋭い御批評恐れ入りました。

勿論切腹の真髓は、介錯なしに自ら腹を断ち切り、絶大な苦痛に耐えて死に就くことにあるのです。是に就ては「切腹史談」にて触れておきました。逆コース的讚美を恐れて戦国時代の未だ介錯が行われなかつた時代を主に説述したのです。

小説や絵畫、写真に就ては異論の有る所と存じますが、是は正確な史実を伝えるだけの為のものではないわけですから、やはり美意識、美化要素が必要ではないでしょうか。要は女腹切の哀切極まりない悲愴美を、如何に盛上げて表現するか問題であつて、必ずしも陰惨凄烈を極めた屠腹の実情を、刻明に伝

まえば、ジャンヌの肌に触れたことなんか誰にも分りはしない。そう考えて埋め直してみる。すると、不思議なことには、皆の乾盃した分丈減つてゐるわけだから、最後の壘が満せる筈はないのに、それを一杯にした上、逆に浴槽の底には埋め切れない液体がまだ何程か残つていたという。フランス女の痛快な仇討のお話。

いかにもフランス的なエスプリに満ちたコントであつた。「新青年」の昭和十年頃のに載つてたと記憶するが、正しくは何年何月号か御存じの方、又それより古く、このアイディアを扱った作品を御存じの方、又この作品には色々変化があるようだが——例えば、ビール風呂——それらを集められた方、がもしあれば、御教示に預り

たい。

【前号の訂正補充】

(第四十一) 一五四頁下段四行目と五行目の間に「自分を犬と思ひ込んでしまつたのだ。妻の手で癪狂院に送られた彼は、以来」を挿入。

(番外) 地外は番外の誤り。一五九頁上段一五行目を「(略)書いたのは軽卒だつたと思う。尚同名の二作品が存することについて(略)」と訂正。同頁同段二三行目のドイツ語は Wolfin の誤り。

(以上)

えねばならぬというわけのものではないと思ふのです。(但し記録的意図の絵——田谷氏の齎されたものなどは別です)

殊に写真に於ては、哀しく切ない自虐の構図として鑑賞すればいいのではないでしょう。ノリベニを使うことさえ、却つて雰囲気

を歪めるような気がします。斯ういう見解は、歴史を、真実を誤るものとしてお叱りを受けることと存じます。然し史実中心の拙稿と他の小説類とは、狙いが異なるのも当然と存じます。筆者の研究に於て切腹の不合理性——自殺形態としての——を力説したのは、此の種の誤解を恐れたからでもあります。

幻想的な切腹観が読者のものとなる危惧を貴女は御指摘なさつていられますが、切腹と切腹願望とは或る程度異質のものであり、此

のことは切腹願望者がナルシスト系のマゾヒストであることを見ても、当の本人がよく理解していることと思われまゝ。

その他御指摘下さつたことに就てお返事申上げるのが礼儀と存じますが、紙面を借りてのこと故、お許し下さつて今後とも、何かと御注意賜ふことを願ひ上げます。

尙、お友達の方に就ては、一つは純烈なお死去を後世に伝えるため、一つは自殺に当り切腹を撰ばれた必然的な心境を知らんがために、御芳名御日常をも御最期の詳細に併せて存じ上げたく、お願いしたいもので他意はありません。此の方に限らず将来、敗戦前後に切腹を以て憂国の至情を顕現された方々の記録を、一本にまとめ孔版でも自費出版したい決心で居ります。

御健康を祈り上げます

中康弘通

切腹研究夜話

(二)

中 康 弘 通

女腹切雜話

女腹切を扱う文芸作品に就ては、月々生産される小説の莫大な数に比すれば、皆無に齊しいようである、殊に女性の切腹を描写する作品に至つては、明治以後全く無いのではなからうか。

前田曙山の「女腹切」納言恭平の「乙女桜」邦枝完二の「花もみぢ」は、何れも吉村礼津の切腹を取上げたものである。然し前田氏は、礼津が腹を刺したところで助命されているし、邦枝氏のは左乳下を刺して果てゝいる。納言氏だけが、おれつは初一念どおり切腹した、としている。是も情景の描写はない。実は、筆者が女腹切で注目した第一人者が此の礼津であつたから、前

田氏の「女腹切」という題名は、長町女腹切辺りから取つたとしても、可成り印象的なものであつたに違いない。「乙女桜」を読むに及んで礼津が切腹を敢行したことに深く感じ、納言氏にお尋ねして、江戸時代の隨筆書が出典であると知つた。その間、土師清二氏の「女丈夫抄」岩佐白鷗氏の「勇婦れつ女」を史伝として発見した。以来、「明良洪範」を始め、蜀山人の「一話一言」「平日閑話」松浦静山侯の「甲子夜話」果ては「燕石十種」「耳袋」等、可成り涉獵したが、遂に見当らなかつた。尤も「藻屑物語」を始め多数の貴重な切腹実話を得たから、強ち徒勞だつたとは申せぬで

あろう。

最近、切腹研究の草稿を系統立てるため参考に「広文庫」のせつぶく(切腹)の項を探していたところ、たま／＼、じよじようぶ(女丈夫)の項で、「責而者草」という本からの抜粹として、吉村礼津が、見事に腹一文字に搔切つて果てたことを明記している。

考えてみれば、初めて前田氏の「女腹切」を読んでから二十年の才月を経ていた。

迂遠な方法ばかり執つていたことゝ思うが、それにしても一つの史実を、引用した文章から逆に辿ることは、容易なことでは無いと思つた、因に礼津は人名辞典の類に

も見えないのである。

発見した日、筆者は早速畏友黒部氏に宛て、筆を走らせた。その書信に発見の感激が溢れていたものか。氏は、おめでとう！と書いてくれた。

溝口与之に就ても同様の経過がある。与之の切腹は、井上馬子女史の「烈婦大和撫子」に見える「血汐の花」に書かれている

然し記述は単に、腹剖き終んぬ、という短いものであつた甚だ飽足りなさを禁じ得なかつた。人名辞典にも詳しくは出ていない。そこで出典を探つて、「野史」を見た是にも詳しいことは書いてない。此の「野史」と云うのは和綴百巻本で、あれこれ引つくり返して見当らず、図書館嬢を怒らせたものだ。たま／＼古書即売会で小滝操子女史の「そんな物語」に、十文字に腹を切つたことが見えた、早速女史に照会したところ、出典は日本教育文庫なりとの回答、



また図書館へ行つたが、悲しい哉探す部分だけが欠巻である。己んぬる哉と嘆いていたところ、本誌の「切腹史談」で文通を開く縁となつた片岡氏から「古今烈女伝」所収の与之切腹の記述を知らせて貰つた。それによると、臍の下を一文字に深く切廻し又胸下より堅に切下げた、とある。立派な十文字切腹である。初見の日から確認に至

るまで、是亦五年の才月を要している。下村悦夫氏の「切腹に來た浪人」は、男裝の乙女が、父の仇を狙つて果さず、その邸に乗込み切腹せんと悲壯な覚悟をする。切腹せずに済む由だが、筆者は未見。

然し、力及ばず仇討てぬ苦悩に自責の果女の身で敵の邸に乗込み目指す仇敵の面前で、我と我が腹を掻切り、せめてもの名を

惜しまんとする心理は哀れ深い好テーマである。同じく下村氏の「落籍くづれ」では岩亀樓喜遊を取り上げ、米人に身を委ねるに忍びず、勤王の父より授かつた短刀で腹一文字に掻切つて果てた烈女としてゐる。但し冒頭に記述している丈で、ストーリーは切腹に至る以前、清水佐吉という賊との交渉であり、従つて切腹描写は無い。

額田六福氏の「娘道場」は女剣士佐々木るいが、敵を斬つて自らは切腹の決意を固めるが、是も切腹に至らず落着

する由、未見であるが紹介しておく。

竹田敏彦氏の「みたての花」は鷹林花代夫人切腹の真相を忠実に伝えたもの、然し描写は無く、記述も新聞記事の範囲を出ない。極く最近の事件ゆえ、当時広島在住の方は御記憶に有ろう。

佐山英太郎氏の「勤王貞操帯」は、佐川八重という勤王女性が、初恋故に罪を犯し発覚するや潔ぎよく腹一文字に掻切つて果てる、という話。然し是も描写は無い。

陶山密氏の「最初に切腹した女」は、愛宕山事件殉難の摺建静子夫人の切腹を記述しているが、是は真相でないこと、先に訂正謹告申上げた通り。

村上元三氏の「加賀騒動」は、サンデー毎日掲載当時、挿絵入りで出た故、御存知の方も多であろう。ただ節子夫人が、下衣の上から懐剣で腹一文字に掻切つた、という記述は、一寸難しい方法だと思ひ、注目している。八月号に田谷敬生氏が示された殉国女性の壮烈極まる最期にしても、一旦襦袢の上から突き立てようとし、容易に刀が腹皮を透らぬので、腹を露わし改めて切腹している。

石坂洋次郎氏の「念仏塚」では、珍しく十八娘の切腹を書いている。父母の横死を招いた人の世話で成人した十八の娘が、父母の墓前で養父を刺殺し、双肌を脱ぎ武士の作法のようにして腹を掻切つた。然し直ぐ死ねずに苦しみの末、凄惨な最期だったと結ぶ。描写は無い。ことの真偽はさておき、此の少女を異常神経と見て居られるのは如何なものか。やはり此の娘には腹を切らずに居れぬ因子が何かあつたものではなからうか。

現代の新聞記事でも、せいとく東京大阪の事件しか筆者の眼に触れないのが残念であるが、右のような地方の口碑に至つては、尚更、見聞し難い。近くは終戦時、内地地で数多の切腹者を出していても殆ど一般には知れず、たま／＼田谷氏などのおかげで知るようなもので、古いことは尚更判りにくい。

例えば、是は女では無からうが、三浦半島の地図を見ると、岩戸というところに腹切松と古蹟が記してある。是も武将の切腹に因む昔話があるのではないかと、合戦記の類を漁っているが、未だに見当らない。

古城趾に腹切石とか、腹切台などという名称の残っているのはよく聞くとゝころである。また横道に逸れたが、叙上の如く女腹切の小説作品は非常に少く、描写の特記すべきものを見ないに拘らず、切腹に劣らず哀艶の趣深い自刃の描写は、間々是を見ることがある。参考資料として、こゝこそ一二を紹介してみよう。

海音寺潮五郎氏の「お伽腹」は、切腹を命ぜられた中老の主人に殉死する、十五の少女の自刃を描く。簡潔ながら哀れ深い。

「殿様！一足先きにまいります！」
主水は立ち上つた。一足とびに、少女のそばに行つた。しかし、間にあわなかつた懐剣の光が白いのどのあたりに閃いたかと思ふと、少女はうつ伏せになつた。青いほど白い頸筋をあらわにして、前の畳に乱れしっている髪の下から、血がにじみ出、見るみるひろがつて行つた。

主水は抱きおこした。ひざに抱き上げてみだれる髪をかき上げると、右手に逆手にとつた懐剣が、右の頸動脈をかき切つていゝことがわかつた。血が、音を立て、ほと

ばしつていた。目を閉ぢていた。あの浅黒い肌の下に、いつも生き生きと血の色の動いていた顔は、すきとおる青さにかわつていた。耳に口をあてて、主水は、名を呼んだ。かすかに、目があき、口がうごいた。「わかるか、わしが、わかるか、わしが」「……一足お先きに、……うれしゅう」やつと聞きとれたゞけであつた。引きこまれるように、少女の目は閉じ、呼吸が細くなり、やがて絶えた。(原文のまゝ)

かくてユミという十五の少女は、覚悟の自刃を遂げる。

同じく切腹ではないが、細かく女性の自刃を描写して、哀切極まりなく雰囲気表現したもの、宮原龍雄氏の「ニツボン海鷹」がある。

九州北方の孤島に私権部落の長として勢力を張る九鬼家の、長女春海がヒロインである。二十四歳、黒いクレードシンの淡いドレスに包んだ五尺五寸十七貫、色白の体軀を持ち、彫りの深い容貌に自我の強さを見せる彼女は、封建的英雄意識と人間性のギャップに陥入り、早くから青春の悶え

を妹夏海との同性愛に注いでいた。

自己反省した彼女は、夏海を九州本土へ留学せしめるが、夏海は多淫なまゝに誰彼となく体を汚して行く。遂に堪え兼ねた春海は、夏海と最も深い学生志波五郎を、家の掟に照らして殺害しようとする。然し五郎の美貌を知り殺すに忍びず、今一人の情夫を殺す。

家の顧問、独逸人ランゲンベックは此の事を知り、春海に迫つて情交を遂げる。病身の兄も彼女の痴情を知り、家の掟を楯に長老と計つて一族から婿養子を指定する。こゝに至つて春海は、ヨセフ、ランゲンベックに謀り、兄と妹を刺殺、ヨセフにも擬装の刺傷を与え、自らは縊れ死ぬと見せて逃避を企てる。然し万事は虚しく曝露され逃げることも意に染まず、追いつがる警官隊に向い、断崖を隔てゝ告白を聞かせる。彼女は、ヨセフのために胎つていたのである。彼女を庇うヨセフに縋りつゝ、左手で静かに黒衣を脱ぎ始めるのだつた。

まず、眼にしみるような白い肌——、それから豊かに張つた厚味のある胸と、二つ

の大きな乳房。(中略)

彼女の端正な肢体が斯くて剥き出される。

春海は、なにか非情な——、こうした媚めいた動作にかゝはらず、ストリツパーが軀を剥くのは違つた厳肅さで上衣を脱ぎスカートだけのこした上半身の肌を、まだ寒いくらいの四月初めの陽光に惜しげもなくさらけ出すと、生毛さえも光つて見えさうな白い胸の隆起と、むつちり脂ののつた腹部の皺や窪みが、腰にまとつた黒衣とクツキリ一線をひいて、全裸よりも、かえつて切なく官能にせまつてくる。(中略)

「美少女のギリシャ彫刻のように逞しい体」に見入つていた片岡警部は、視線が彼女の右手に走つたとき、「あッ」と叫ぶ。

春海の右手に、いつのまにか短剣が——。いままでに、よく見なれている四神剣の一つ「朱雀」が握られ、逆手にもつたまゝ、徐々に上の方にのびて行く。

四神剣の二つまでは、既に兄と妹を刺殺

し、一つがヨセフを刺し、今や最後の一つが、春海自身の生命を絶つのである。

そして、あの豊かな胸の辺りで静かにとめると、右手の指先で自身のゴムマリみたいに弾んだ左の乳房をしばらくまさぐっていたが、やるせなく一揺りして、ここち持ち上げると、乳下の心臓部に両刃の尖った刃先をピタリと当てた。(中略)

美女自刃の構成は斯くして残りなく整えられた。あとは彼女自身の悲愴な処決を待

つばかりで、然しそれにしても、豊艶な乳房に自慰を施して、予想される痛苦を和らげ、自虐に陶醉せしめる設定は、心にくい許りの作者である。「やるせなく一揺り」させて、今や傷付けられ行く肉体の、美しさを誇らせるのも、此の場合、絶大な効果を挙げている。

春海は顔を紅潮させると、いままでの幻想的な眸をカツとみひらき、唇をキリリと噛む。端麗の彼女が、まったく別人のような凄まじい形相だが、こうした切

迫した表情にもやはり激情的な美しさがあつて。(中略)

こゝで心ならずも彼女の自決を目守つてゐる三原検事は、九鬼家の客間に掲げられた名画「ルクレチア」のヒロイン、タルキニウスに辱かしめられ自ら命を絶つ美女ルクレチアに、春海の宿命を予感したことを思出す。そして人々の感懷をよそに、春海は最期の一念を心澄ますのである。

彼女は左手で、乳房をギユツと掴むと、

その下に短剣をあて、はげしくなつて来た呼吸を整えるようであつたが、三原らに目札的な最期の一瞥をおくると、眼をとりやや反身になつて軽く右手を動かす。

盛上つて来た悲調は、いよゝこゝで最高の音階に入る。人々の眩きをよそに、刃は彼女の意志通



り、肌を傷付けて行くのである。

彼女の白い肌からふきだした鮮血が二すじ三すじ、糸のようにつたつて、腹部の窪みへ流れおちる。

春海は、気丈にも、しばらく、そのまゝ苦痛をこらえるふうであつたが、やがて肩で一つ大きく息をすると、顫える手先に力を入れ思いきつて、グサリと、剣を、ほとんど柄先まで胸元に突き立てた。

一瞬、きゅつと歪んだ唇、乳房を真紅にそめて胸から腹部いつぱいに進する鮮血、異様にみひらかれた眼、汗ばんだ額にかかる乱れた髪。そして体を、肉体を苦悶によじらせながら、はげしい痙攣のち「牡丹の散るような」派手な凄まじさで崩おれ……動かなくなつた。

高まり昂まつた悲調は急湍の如く奔流しその音階の最高の美しさを奏しつゝ突如として終る。美女が生命を堵けて演じた最大の悲劇は、こゝに幕を閉じるのである。

春海は、崇高な美容麗姿と、暗愁に充ちた性慾とを併せ持ったが故に、最も愛する

己が裸身を、秘密の快楽の記憶ともども白日の下に自ら曝露し、我と我が肉体を苦痛に耐えて深々と決り、自虐的な、然し耽美的な死を遂げねばならなかつたのである。

此の悲愴美に溢れる姿態は、刺突部位が腹部で無いだけで、精神に於て、正しく女腹切の悲愁に通う深さを保っている。

最後に、赤木春之氏の「不義」に言及しておきたい。

是は、小姓と通じた藩主の愛妾が、こと露れて共に自刃を命ぜられ、即夜、人知れず小姓と並んで、拝領の短刀で鳩尾を刺し九寸五分を左脇腹に突立てた美少年と共に藩主の介錯で散つて行く哀恋物語である。鳩尾を刺すのが切腹と云えるか何うか、考え方も有ろうが、喜びを表情に残して自刃する彼女の最期も亦、女腹切のこゝろに通じるものであらう。此の作品も原拠がある由で、御存知の読者もあらう。

(附記)

著作権法第三章第三十条に従い、引用文を文芸作品より頂いたことに就て、御瞭解下さつた諸先生に厚く御礼を申し上げます。

本稿に対し御感想をお寄せ下さる方があれば幸甚に存じます。御質問にも出来る限り研究して御回答致します。(未完)

〔切腹通信〕

○愛川様、北海道N様、刈屋様

誠に貴重な資料をいただき厚く御礼申し上げます。公表できないのは残念ですが、近日に全資料を再集し医学的に論じたものを投稿する心組です。其の折は又よろしく御批判下さい。田谷生

○いつも勝手な手紙ばかり差し上げまして申し訳ございません。切腹写真についてお願ひ致したいのです。一月号で刀を突立て、右へ引廻したところが出ていますが、突立てて強くへこんでいては切れた感じがちつとも出ません。傷ができれば傷口が外にはじけるものですから、むしろ刀を強く当てないで血紅を使つて下さらないと写真が生きません。是非一度田谷様に切腹写真の指導して頂くよう計画していただけませんでしょうか、私も一度モデルになつてみたいと思いますけれど、只今病気で入院中で残念でございます。何れ又お便りさせていただきます。さようなら。

愛川 晃子



不運なニューフェース

俳優部屋でくすぶっていた研究生出身のニューフェース御川里枝に訪れた主役抜擢の幸運の女神の微笑、そして運命の皮肉は一足早く襲いかゝつてきた毒蜘蛛の触手、執拗な網の中で奔弄される可憐な蝶々はどのようなようにしてその生血を吸われてゆくでしょうか。

「あゝ……待つて！」

そう叫んだ途端、邪慳な滝尾の力で、里枝は扉の外へ押し出されてしまった。あわてゝとりついた扉のノブに向う側から抵抗があつて無情にも鍵を掛けられてしまったのです。急いで顧つた里枝の自由な視野に、一見アトリエ風に造られた広い洋室の正面のソファに一人の女が沈んでいるのが映りました。螢光灯が天井からほのかな明りを投げかけ

三方の壁には扉がなく、大小の鏡と額ブチが殊更らしく飾られ、小さな机と椅子が雑然と並べられているだけで、他には誰もいる気配はありません。女は黒いイブニングの様なドレス姿で厚化粧した心持ち長目の顔が、意地悪そうにゆがむと、赤く濁つた瞳がまるで、投げ込まれた獲物を品定めするようにギョロリと光りました。

「私しやね、お前さんを買つたんだよ、高い料金を払つてさ、それまたつた三時間の約束で……」

里枝は全身に冷水を浴びせられる思いがしました。今日迄の経験がさせる直感的な恐怖でした。

遂に瀬田や滝尾に強要された十萬円の金を約束の時刻までに作るすべを失い、呆然とした里枝の前へ急停車したタクシーから降り立つた滝尾は、里枝の弁明も聞かばこそ、引ずり込む様にして車に乗せてしまったのです。

「フン、そんな事と思つていたよ！」

滝尾はそう吐き出すように言い捨てると、あの地獄の巣である郊外の瀬田の家とは反対の方向へ車を走らすのでした。

「金が都合出来なかつたら、どんな事になるか、分つているだろうね、え？ 御川さん」

里枝は返事が出来ませんでした。たゞ無念の涙を押えるだけで、せい一杯だったのです。

「俺達はどうしても、今日中に十萬が必要なんだよ、それに約束は何んとしても、守つて頂かなくてはね」

滝尾はからかい半分に里枝の反応を愉しむ様にねち／＼とからんできます。

「どうだい？ お嬢さん、あのフィルム、今すぐにも金になるんだ

蜘蛛知



ぜ、いゝのかい？、銀座の下真中へ売り飛ばしてもさ。」

「かまいませんワ、どうにでもして下さい」

ねつとりと絡みつく

滝尾の腕をはずすと、

里枝は前後のみさかきもなく、そう叫んでいました。

「ハハ、ハ、ハ、お嬢さん、心にもない事はいふなよ、あのフィルムは昨夜とつくりと御覧遊ばしたそうじやないか——」

(とてもダメだ！)

里枝の顔はとうとう涙になつていました。そんな絶望的な表情を樂しみながら切り出した滝尾の言葉は、あわれなニューフェイス御川里枝を一層新たな恐怖の淵へ追い込んでしまいました。しかし、自由を奪われた可憐な蝶々には、最早や彼等の計画通り、たゞ繰り人形の様に利用されるより仕方がありません。——雁字搦目に全身にまといついた蜘蛛の巣は、逃げ出すことの出来ない運命を背負わせてしまったのです。——

(十万円都合出来なかつた罰として、今夜中にその十万円を稼ぎ出

せ)と云うのです。

「何もむつかしい事じやないんだ、それも御川里枝て事は、お前さんがその気で我慢して相手の言うなりになりや、その相手にも分らず済むうまい工夫も考えてやつてあるんだ、しかも、ムクツゲキ狒々親爺てのじやないんだヨ、相手は女たつた一人、但しちよつと変つた女だがね、しかし何も取つて喰おうつて訳じやなし、お前さんの美しい体に疵がつく心配もないんだこれが本当に親心つて奴さ」

滝尾は腕を組んで、自分の言葉の効果をとしかめるように、じつと里枝の端麗な横顔をのぞき込みました。車は都心へ向つていゝらしく、次第に賑やさを増してきますが、里枝には一体どこを走つてゐるのやら、さつぱり解りませんでした。

(何処か、異つた処へ連れてゆかれる……)

それは、滝尾の説明を待つまでもなく、今までとは全く違う新しい(より大きな危険が)そんな恐怖がおののく里枝の心を荒々しい力で締めつけるのです。やがて、急に徐行して車が止まりました。

「さあ、着いたぜ、ちよつとアルバイトすりあ、それで今夜の処は放免だ、明日からか？ロケへ行きや、温泉にでも浸つて、のんびりするさ、ハハ……」

手を握られて里枝は騒々しい街の真中へ降されました。都内の何処にでもある毒々しいネオンと狂いじみた騒音に囲れた一劃、附近一帯にはパチンコ屋と飲み屋がぎつしりと並んでいる場末にありがちな繁華街でした。手を取られたまゝ連れ込まれた建物はパチンコ屋に左右を挟まれたスタンド風の家でした。

長い廊下を引きずられる様に歩かされて、突き当りの正面の扉の部屋へ連れ込まれました。

「暫く、此処で待つていて貰おう、変な騒ぎ方をする、御川里枝の顔にかゝるぜ」

そう凄味をきかすと、滝尾は外から鍵を下して立ち去つてゆきました。立ち去り際に消したのでしよう螢光燈が消えると、真暗な部屋の上りの入つた床下から冷々とした寒気が這い上つてきます。手さぐりで探した反対側の扉も鍵が下りているらしくノブを廻してもピクともしません。完全に一室に閉じこめられたまゝ無気味な時間が流れてゆきました。

奥深い筈のこの部屋にも、両側のパチンコ屋の音がかすかに伝つてきます。

(どんな目に合わされるのだろうか?)

全然、今迄来た事もない、こんな薄気味の悪い場所へ連れ込まれて、新しい不安が、居ても立つても居られない焦躁となつて里枝の身をさいなむのでした。

(明らかに今夜は観世物にされる……)

そんな思ひは里枝の胸に直感されました。滝尾の言つた御川里枝とは解らないですむ方法——という処も、又、十万円で買うという女の相手。瀬田達の企みが全然見当もつかないまゝ、待たされていく一刻一刻が、益々耐えられない責苦となりました。この絶望の中に於ても、滝尾の言うように若し御川里枝である事を知られないで済むならば……。

そんな悲しいあきらめが、どうにもならない囚われの身に残された、たつた一つの望みになつてしまつたのです。そして、又、その反面、もしも、その今夜の相手が瀬田や滝尾の一味でない人なら……その同性だという人に我が身を明かしても救いを乞えば……そ

んな最後の望みを、無理矢理にでも自分に有利なように作り上げてみる里枝だつたのです。

一方、滝尾は里枝を閉じ込めると直ぐ、電話で、この建物の二階で待つてゐる瀬田に連絡してゐました。

「さあ、そろ／＼準備が出来ましたヨ」

連絡を受けた瀬田はそれぞれ、酒を交しながら待ちわびた恰好の十人の客を導いて降りて来ました。予め打合せてあつた今夜の「スベシャル・ショー」の観客達でした。彼等は各自高額の観料を支払わされた暖衣飽食に脂ぎつた男達でした。

——稀に見る肢体と美貌

今、人気稼業の第一線にある女

トリックや馴合いでない本物の

素晴らしい異常な見世物を

心ゆく迄味あわせる三時間——。

というのが、瀬田達が彼等を勧誘したキャッチ・フレーズだつたのです。そして選ばれた此の建物はさして近頃珍しくもない、モデル付き時間貸しのアトリエの一つでした。//ヌードを画く//そんな美名を掲げて、堂々営業しながら、その実は怪しげな//ショー//を見せたりしている場所だつたのです。しかも、少々の騒ぎや悲鳴も隣接したパチンコ屋群が織りなす狂音に抹殺されて、何の心配もなく、瀬田や滝尾にとつては恰好の場所だつたのです。

案内された客達は、各々一人宛離れて、此のアトリエを囲んだ形の廊下に似た小室の椅子に着くと、テーブルには洋酒も準備されてあります。しかも目の前の小窓は二重硝子で音をさへさる一方、特殊の塗料によつてアトリエからは鏡になつて反射するが、見物席か

ら全然素通しになつてゐる例の代物でした。そして、マイクを通してアトリエ内の物音は細大洩らさず客席へ伝わるように工夫されてゐるのです。

待たされてゐる里枝は、無論そんな彼等の巧妙で悪辣な仕組みを知る由もなく、真暗な小部屋で這い寄る寒さも忘れて只募る恐怖におびえ続けていました。と突然、螢光灯がついて扉が開かれたかと思ふと、滝尾がその肥つた姿を現しました。

無駄と知りつくも、里枝はもう一度哀願してみました。

「お願いです、今夜は宥して下さい。明日中には必ずお金をおとさけしますから」

「思いきりが悪いぜ、明日では遅過ぎるだ！ハハハ」滝尾は下手な洒落に自分から感心して、ヘラ／＼と笑いかけると、又きめつける様に言うのでした。

「観念して三時間程、我慢すりやいゝんだ、特別に御川里枝つて事はわからずに済む様にしてやる。ほれ、このマスクを掛けて、こうすりや大丈夫だ」

滝尾は丁度仮装用のマスクに似た奇妙な小道具をとり出すと、身をすくませている里枝の顔に掛けさせました。うしろ半分はゴムで作られていて、ピツタリと里枝の眼の部分の部分を掩うと、ち



よつとやそつとでは落ちない様に喰いついてしまいました。

瞳の位置に小さな穴が開いていて、かろうじて狭い範囲を見る事が出来るのですが、この瞳の穴さえも、マスクの横を一寸装作するだけで掛けさせられた者の視野を完全に奪つてしまう事も可能だったのです。

反対側の扉に鍵を突込んで開いた滝尾は、慌てゝマスクをはずそうとした里枝を力一杯次の部屋のアトリエへ押し込むと素早く錠を下してしまいました。

「ふん！、チヨイといゝお面と身体をしているらしいわね」

里枝の不自由な視野に映つたその女の蛇の様に冷たい視線が里枝の全身を突きさしました。

「そんなに、ふるえてないで、こちらへおいでよ」

乾いたような声を掛けられると、里枝は硬直した様に四肢の自由がきゝませんでした。

「お前さん、何処かの事務員かい？、それとも遊んで生活出来る御身分かい？」

里枝はどう答えていゝのか、わからず、只黙っていました。

「結構な身なりをしている処を見ると、派手な収入がありそうだがそのマスクをかけていちゃ、この私にも素性がわからないネ、ダンサーかい？ パンパンかい？ 黙つてないで返事をしたらどうツ」

女の口調は次第にヒステリックな高い調子になつてきます。里枝は我知らず、頸を横に振っていました。

「啞かい、お前さんは？ それじゃ、どこかの踊子かい、いや、はて見た事がありそうな気がするよ、さてはお前さん、映画だね！」

女は今度、含み笑いをすると、そろりと立ち上りました。

「そうなるよ、いゝゝそのマスクをはずして見たくなるね……」

反射的に里枝はマスクに手をやつていました。この黒いドレスの女は、瀬田達の手先に使われていて、この道ではプロというのはおかしいが、こゝで繰りひろげられる怪しげなショーには時々、そのサデスチックな性格を買われて雇われているのでした。だから、彼女は隣室の好色な見物人の眼を十分計算に入れて、ドラマチックに行動するのに慣れていました。

「フフ、可愛いゝ女優さん！ そろびくゝする事はないよ、今夜

は此の私がたつぷり可愛がつてあげるよ。私しや、少々変つた女だね、高い料金を払つてもお前さんの様な娘がほしかつたんだよ」

これは瀬田に云いふくめられていたセリフの一つだったのです。

「だから観念して、この私を満足させる様、私の云いなりになつて貰うわよ、いゝかい、そのかわり、そのマスクだけは、はずさないで勘忍してやるよ」

女は恐怖の余り釘づけになつてゐる里枝に音もなく近づくと、まるで品定めでもする様に、立つたまゝでゐる里枝の周囲をぐるりと廻りながら言うのでした。

「私しやね、お前さんにどんな事をしてるかまわらない約束なんだよ此処には血を吸いたがつてる鞭もあれば、たつぷり悲鳴を上げさせる道具も揃つてゐるんだよ、どうだい、おとなしく云う事を聞くかい？ さもなきや容赦なくそのマスクだつて、はぎとつてやるよ、わかつたら、返事おしよ」

里枝は女の見幕に思わずコックリとうなずきました。閉じ込められた密室、しかも、その扉の外には、毒蜘蛛の瀬田や滝尾、いやもつと残忍な獣共が居るに違いないのです。例え争つてもかなう事ではありません。又こんな街の真中であつてみれば、どんな事で自分の正体が見破られるかもしれないのです。

それは女優という商売柄——穢れなき清純な処女という人気スタ—に祭り上げられた手前、里枝を押えつける巨大な圧力となつて、哀れないけにえをして、彼等のいう「三時間の地獄」の責苦と差しめを耐え忍ぼうという悲しい諦めを決定させたのでした。

「案外、聞きわけがいゝね、わかつたら啞じやないんだろ、ハイ！ と美しい声を聞かせてもらおうかね」

そんな言葉のからかいから、いよいよ猫が追い込んだ鼠をなぶる様な淫虐なプレイが始められようとしています。隣りの観客席の瀬田や滝尾、そして十人の好色な客たちは片唾をのんで、この興味ある見世物を見守るのでした。

「さあ、一つみつちりと仕込んでやるかね」

ソファアの何処にかくしてあつたのか、女は細いしなやかな長い鞭を取り上げました。それが空中を一閃すると、磨き上げられた床の上に、激しい音を立てゝいました。ピシツピシツという鞭音はまるで、里枝にとつては自分の肌に直接打ち下されているような精神的な衝動を与えました。鞭を浴びれば、忽ち明日からのロケーションに差支えるのです。有名な大スターH、と繰りひろげる今度の映画の最も大切なシーンには、里枝は寒風を押して水着姿で出演しなければならなかつたからです。

あくまで悪辣な瀬田は、わざ／＼そのロケの日も間近い今日を待つて、暫くこの可憐な犠牲を放し飼いにしておき、一層刺戟的な手段を選んだのです。彼等は隣室の小窓から、その光景をゆつくりと愉しみながら、合せてボロイ金儲けを企んだわけです。その上滝尾はその黒いマスクを今夜は最後まで、はずさない様、相手の女に云い含めてあると里枝に恩をきせていますが、それは又、反面、この十人の客達に対して、更にもう一度高い観料を支払わせる機会を残そうという狡猾な手段だつたのです。

「私しや、女の逆立ちてのを見たいのさ！ 一つやつて見せておくれ……」

里枝の顔はみる／＼困惑の色に包まれてしまいました。

「さあ、此処へ手をついて、ポイと立つてごらん、訳ないじやないの」

「私、出来ません、やつた事ないんです」

「お黙り！ 早速、鞭がほしいのかい？ やつた事がないなら、教えてやるよ、仕込んでやるさ。いゝかい、すぐやるんだよ——。時間が勿体ないじやないか、ぐず／＼してるとマスクを剥してしまうよ」

女にたて続けに、かん高い声を浴びせられると、いつの間にか里枝は両手を床につけていました。

「いゝかい、出来なけりや、罰として鞭で打つかわりに、お前さんがやりよい様にその着ている結構な服を脱がしてあげるよ」

ニューフェース時代の美容体操で鍛えた柔軟な四肢は、そんな平均をとる位は普通でしたら容易だつたでしょうが、羞しさにふるえる里枝には、初めて試みる逆立ちは中々うまく出来ませんでした。それでも、里枝は懸命に繰り返しましたが、失敗するたびに、先ず上衣をぬがされ、次は下着の番になりました。勢をつけて床を蹴る度に反動も伴つてフレアスカートが、パツト開いて、真白いパンティが隣室の男達の鼻先に、白い花ビラのように映るのでした。

やがて、そのスカートも、自分の手でぬがされ、シユミーズも取られてしまうと、やつとその形よくのびたナイロンの靴下が、パンプスを天井へ向けて揃えそうになり、好色な男共は早くも眼を輝かせて次への期待に大きく胸をふるわすのでした。胸からくびれたウエスト、そしてヒップまで続いた純白のフアンデিশヨンも、とう／＼はずさねばならなくなる頃、羞恥と充血で里枝の美しい顔立ちが真赤になつてしまいました。と、安定を失つた見事な脚線が弧を

描いて床へ落ちます。

「ブン、まるでなつちやいないじやないか、やつぱり此の鞭を当てゝ欲しいのかい！」

女はそう叫ぶなり、激しくあえがせている里枝の胸から最後の布片を邪慳にはぎとつてしまいました。ピンと形よく張つた二つのピンクに染つた丘、赤い木の実が羞恥にぶる／＼ふるえ、急いで掩おうとする里枝の両手を女は鞭の柄ではらい除けました。

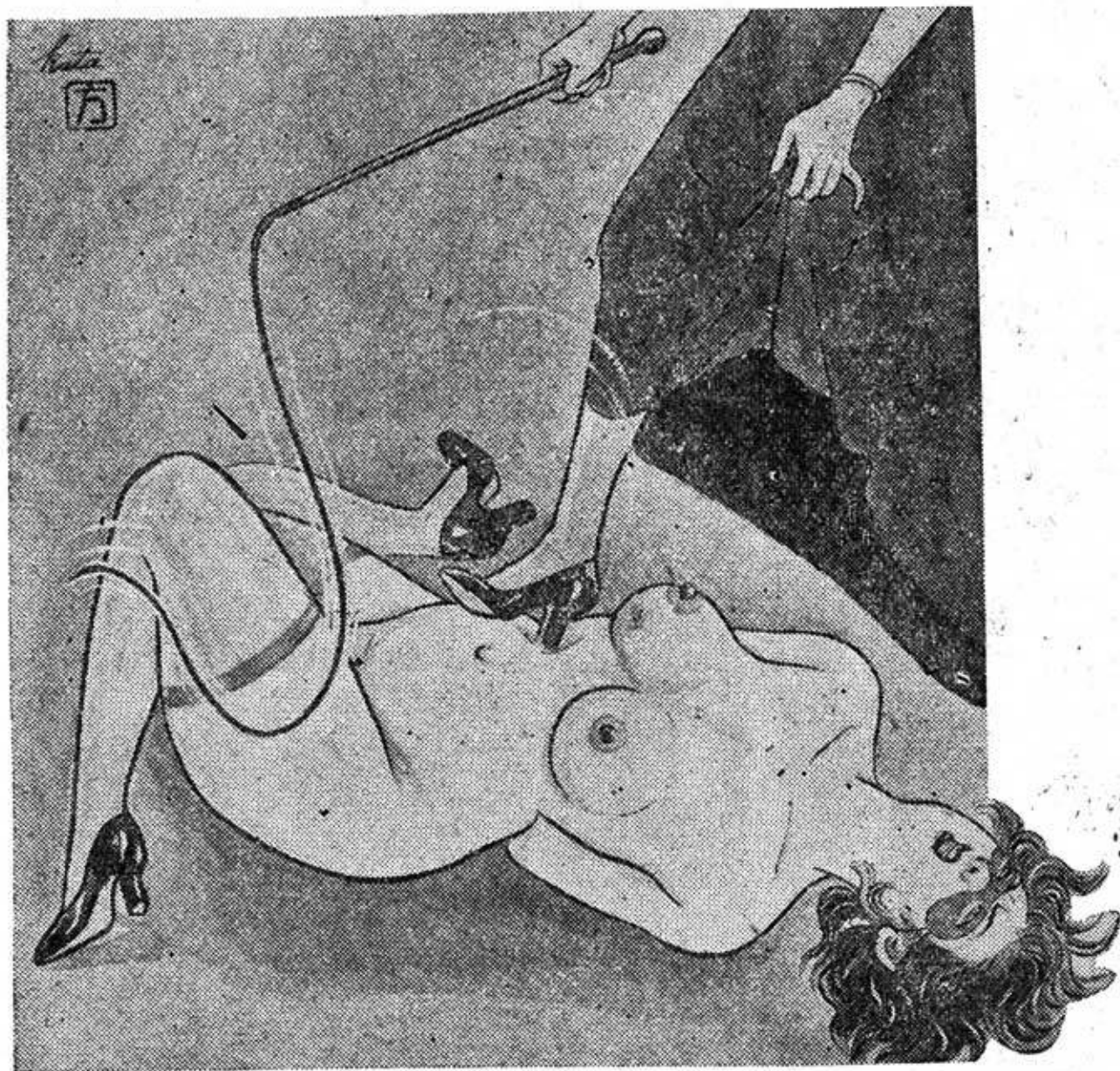
「もう、許して下さい」

里枝は涙ぐんで哀願していました。

「うるさいよ、余計な口をきくでないよ。さあ、出来るまで何度でもやるさ、それ……」

鞭が里枝の髪の毛をすれすれにかすめて、床の上で腹の底にしみ渡るような音を立てました。里枝は再び両手を床につくと、床を蹴る動作を続けねばなりませんでした。

ナイロンの靴下に包まれた脚線、太股にぴつちちり喰い



込んだガーター、そして逆さまの位置に黒いパンプスがつくり出す色彩的な効果を十分に計算した女は、やつと両手だけでよちよちと歩ける様になつた此の美しい犠牲者の奇妙な姿を、隣室の客達に堪能する程見せつけると、扉のある壁まで歩かせました。やつと辿り

ついた里枝に女は、暫くそのまゝで逆立ちしているように命じました。

天井へ向いた黒いパンプスが危く揺れ動き、マネキン人形のような形のよい脚が一つになる所にも同じ色を彩なしています。ひきしまつたヒツプからは、今度の映画「フアツシヨン・モデル」のヒロインにふさわしくびれたウエストへ、そして短いトツプはむつくりとした隆起を見せ、その真下に紅潮した美貌、そしてそこにも、黒いマスクが一つのアクセントとなつて見事なコントラストを示していました。

「さあ、今度はそのまゝで、もつと脚を……」

里枝の両手は痺れてきまし

た。(もうダメだッ!)床にくずれようとした瞬間、又もや女の手の鞭が激しい勢で扉を打っていました。

「なんだい、これ位の事で、この鞭で百も打ち据えてほしいのかいッ」

隣室の瀬田達や十人の客達の意志を代表するように女の指先が、無防備になつた里枝の肌へ容赦なく襲つて、打ちひしがれた里枝の荒い息づかいは、マイクが忠実に隣室へ運んでゆきます。

「さあ、今度はゆつくりさせてやるよ」

も早や耐えきれなくなつて、床へくずれ落ちた里枝に女は部屋の隅に投げ出されてあつた袋に縫つた赤地に白の斑らの絹の紐を拾つてきて見せるのです。もはや、さつきの重労働で疲れきつてなすがまゝになつている里枝は、巧みな手捌きの女によつて、邪慳に廻された後手に、その柔軟な絹紐がからまされているのでした。

「どうだい? いゝ氣持だろう……」

縄尻を持つて引き立てられた里枝は、部屋真中で、ごろりと床の上へ転ろがされました。

弾みで仰向けになつたので、後手になつた両手首が背中の下敷きになつて、里枝は痛さに思わず羞しさも忘れてお尻を持ち上げて、手首に加わる力を減そうと試みました。

「うん、全くだいゝ身体だ!」

隣の観客席では、客の一人が感に耐えぬものゝように嘆息を洩らしました。瀬田はニヤリとほくそ笑みしました。自分達の意のまゝになる掌中の珠が観客達の讚美を浴びている——。しかも莫大な観覧料を支払つて見ているのだ。なんという愉快な仕組みだろうか。こ

んな痛快な事は又とあるだろうか。左脇の席には滝尾が陣取っていました。

「本当に女優かい? あのマスク、早くはずさせてしまえよ」

滝尾の隣りに席をしめた男が、じれつたそうにそう低い声で彼に催促しました。

「さあ、そいつは可哀そうですよ。まだほんのウブな娘ですからねそれにマスクは最初から御約束頂いたでしょう。今夜のところはそれ、あの素晴らしい全ストの実演で我慢しておいて下さいよ、ハムム」

滝尾はずるそうに笑いにまぎらわすのでした。心の中では、自分の考案した黒いマスクの思いつきに満足しながら……。

「どう、少しは、温かくなつたかい……」

黒衣の女は尖つたヒールの先で、その跡が残るのを愉しむように動きのならない里枝の見事な膨隆を見せたお乳のあたりからお腹にかけて、何度とく踏みつけるのでした。

黒いマスクに覆われた顔は真赤に紅潮して、里枝は「ううう」と呻めきながら両足をバタ／＼させるばかりです。

「こんな辺が踏んでもらいたいかい」

ヒールの先がお臍の上あたりに当つて、女の体重がかゝると、ピョンと緊張したお腹の肌がぷくつと大きな窪みをつくりました。里枝は靴をよけて、身体を捻じようとする、女の手にした鞭は、里枝の身体すれ／＼に紙一重のところをかすめて、床の上に激しい音を立てゝいました。里枝が身もだえする度に、鞭は一しきり部屋中を響かせて鳴りました。

「さあ、これ以上縛っておくと、お風呂へ入った位では、紐のあとが取れなくなるから解いてやるが、もう云う事を聞くだろうね」
里枝は乱れ髪を振って頷いていました。

「よし、解いてやるから、今度はそのテーブルの上へ上つて四つ這いにおなり！」

紐を解かれた里枝は、女が部屋の真中へ持ち出したテーブルの上へ追いやられました。

「もつと、手も足も拡げて、テーブルの角へ届くように——」

四隅に垂れていた皮紐が里枝の両手両足をテーブルの足へ固定してしまいますと、女は鞭をふり上げて空中で素振りをくれながら

「姿勢をくずすと承知しないわよ」

と嚇すのです。その皮革はゆつたりと手首足首に括られていますので、両足をぴつたりと合せることも出来たのですが、里枝は女の鞭が恐ろしいので言われるまゝ、両手両足を思いきり拡げて四つ

這いになつていました。それは相手が女一人だという安心感もあつたからです。それに、秘密の鏡を隔てた隣室で二十四の好色にきら／＼輝いた獣達の眼がその一点に凝視されていようとは——。
これは高価な観料を支払わせたお客たちに対する最後のサービスでもあつたのです。

このような羞しいめに合わされながらも、里枝は只、黒いマスク一ツを取られないということだけを頼りに、歯を喰いしばつて屈辱に懸命に耐えていました。女は椅子をテーブルの脇へ置くと隣室で息をのんで見守っている男達に、どんな素晴らしい場面を次には見せてやろうかと考えながら、美しい儀の見事な身体をしげしげと眺めました。

冷々としたこのアトリエの空気の中では、独り里枝の裸身だけが限らない責苦におのゝいてテーブルの上でいつまでも四つ這いになつていたのでした。

(次号完結)

草紙

花

伊都子

純白のドレスに、伯父がフランスへ行つた時のお土産に貰いましたやゝ赤味の勝つたスペイン産だとやらしい琥珀の頸飾りをして、伊都子はソファに仰向けに寝そべつて見ました。グラスに二つ三つ呷つたウィスキーが体内の血を狂わせ、伊都子の妄想をそれからそれへと駈り立てます。窓を閉じてカーテンを引いてしまった室の中は蒸暑くなつたので、起き上つてドレスを脱ぎすてました。飾りレ

ースのついたブラジヤを取ろうとして背中へ両腕を廻すと、豊かな乳房がそり返つた胸にまるでそれだけが、一個の生きもののように息づくのです。やがてブラジヤの鈎ホックをはずして丸い乳房が揺れました。伊都子はやゝためらつていましたが、電燈のスイッチを切つて真つ暗にしてからペチコートもパンティもかなぐり捨てるように脱ぎました。

窓を開け放つて全裸の身をソファに横たえ

紅 花

ぜん
霄のう
凌

川 合

て流れ込んでくる青葉の香り高い空気を吸込みながら空を見ますと、星明りに建仁寺垣にからむのうぜんかづらが媚を送るように闇にも濃い色香を漂えています。日盛りに見る凌露花の少しこつてりしすぎた風情、咲き切ると惜しみなく散りしく姿は、今宵の伊都子の運命を暗示しているのです。

闇に目が馴れてくると室内の調度などがはつきり見えて、幻想が打消されますので静かに目を閉じました。

伊都子は三十幾つか過ぎた未亡人なのです（本当は前にも書きました通り二十八で勿論夫は健在です）。愛してくれた夫を亡つてから空闇に耐えず、つい年下の愛人を作つてしまったのでした。今夜はその人がとうに来る

筈なのに、どうしたのでしよう
十時も過ぎたのに姿を見せませ
ん。

伊都子はふと悪戯心を起しま

した（これは筋書以外だったの
です）。双刃の短剣を持ち出し
てその柄を細い紐で括り、テー
ブルの上へ椅子をのせてこれを
踏台にしてその紐を天井から一
尺程垂らした太い針金の環に通
して紐の先は柱の針へ結びます
大急ぎでこれだけの事を運び、
再びソファに仰向けに寝ころん
で見ますと、丁度伊都子の鳩尾
の真上に短剣が釣られています
これは雑誌「妖奇」の小説にあ
つた方法で、探偵小説にはよく用いられてい

て別に珍らしくもありませんが、実際にその
下へ裸身を横たえて見るとスリル満点です。

櫛の結び目の残りを垂れ下げてある紐へ火を
点けて焼き切れれば短剣は伊都子の鳩尾をめが
けてまっしぐらに突進してくるでしょう。短
剣とソファの上に横つた身体までの距離は二
メートルを超えていますから、身体の上へ落
ちてくる時に秒速一〇メートル以上の速度に



なり、皮膚を裂き
肉を刺すのに十分
な力を持つてしよ
う。目で見て確か
に短剣が吊つてい
るのですからこん
な想像もとても現
実性があるばかり
でなくむしろいつ



何時、何かのはずみで紐が切れたらと思うと恐怖心さえ起つて、思わず毛布を頭からすっぽり被つてしまいました。

其の時ドアをノックする者があります。彼氏が来たんだわ、と胸が躍ります。彼は伊都子の返事も待たずに室へ入つて来た気配です。そしてパチツというスイッチを入れる音がしたと思うと毛布を通して室の中がパツと明るくなつたのを知りました。彼はソファへ近づいて来ます。そして

「どうしたの遅くなつたんで怒つてるの？」
「いいながら毛布へ手をかけました。彼は命ぜられるまゝに窓際へ立ち去つたらしく、窓を閉める音がしました。続いてカーテンを引く音が聞えたので、伊都子は毛布を除けて顔を出しました。でもまだ肩まではすっぽり毛布にくるまつたままです。彼はその辺に取り散らした衣類から伊都子が真裸なことを察したようです。



「遅くなつちやつて、どうしても抜けられない用が出来ちやつたもんだから、怒つたの？」

彼は伊都子が不機嫌なのと、テーブルの上にウイスキーグラスが転がっていることからしきりに言葉を柔らげて機嫌を取ります。

「ねえ、そうだったら御免、何しろ忙がしかつたんか

ら……」

となお言葉を続けようとする彼の口を伊都子は矢庭に起き上つて押えつけました。

「もういゝの、何も聞きたくない——御覧なさい、天井を」

と例の吊り下げた短剣を指します。

彼は言われるまゝに天井を見上げ、短剣を見てぎよつとしたようです（本当にぎよつとしたのです）。伊都子は無闇と嬉しくなつて、「ほら、わかるでしょう、何のためか。あの紐は硝石を溶いて浸み込ませたものよ、導火線に火を点けてソファに横たわる。紐に火が点くと途端に短剣が落ちて私の心臓を貫く、紐は完全に燃えつくして、灰も残らないように工夫してあるのよ、誰が見てもあんたが私を殺した犯人」

伊都子は手早くマツチを擦つて、ソファの上に上つて短剣の柄の処から引いた導火線に火をつけ、急いでソファに横たわり仰向けになつて目を閉じました。彼の顔色はさつと変りました。そして物をも言わずに大急ぎで椅子を引寄せその上に立つて導火線の火を指で揉み消しました。

「馬鹿！私が死んじゃおうつてのを邪魔するの」

と伊都子はヒステリックに叫んでいきなり彼に武者振りつきます。彼は何か言いましたが、耳にも入れず彼を捻じ伏せしました。勿論男の力で本気に伊都子を取り鎮めようとするれば逆に押えつけられてしまうのですが、彼は伊都子のヒスリーをよく知っていて(本当はヒステリーどころか従順な良妻なんです)そのなすがまゝにされています。

伊都子は彼の上衣を剥ぎとり、ワイシャツの上から後手に細引で縛つてしまい、その縄尻をドアの把手に括り、声を立てられないように猿轡もかけます。それから吊るした短剣を解き下して逆手に取り

「あんたを犯人にはしないわ、その代りこれで自殺する私を見せて上げるわ、一と思いは死なないわよ、私の手で私を戮り殺しにして、苦しむだけ苦しんで見せて上げるわ」

伊都子は身を揉んで縛めを脱けようとする彼を冷然と見下しながらソファに腰かけて下腹を撫で廻しながら

「ほら、この傷、誰がつけたの、覚えがあるでしょう。よくもあの時逃げたのね、けどもうあんたには切つて貰わないわ、よくごらん、自分でこゝを断ち切るのよ。私の苦しみを悶えのたうつ姿をよく見てなさい。誰かが見

つけてその縄が解かれるとき、とうの昔に私は血みどろな死体になるのよ」

伊都子は愛する彼の目の前で、しかもそれを止めることも人を呼ぶことも出来ない彼の目の前で割腹しようとしています。両刃の短剣は突き刺すのに適し、引廻すには都合が悪そうです。

伊都子は刃の平をお臍の下へピタリと当てて見ました。冷つとした感触が全身を痺れるように伝わります。内股へ、乳房へ、咽喉へ脇腹へ、あゝとてもたまりません。お臍の下へ何十箇所突き立てられるでしょうか、蜂の巣のように突いてその傷がお互につながり合い深い大きな裂け目となつて大腸も小腸もどろ／＼に流れたすでしょう。脱ぎ捨てたシュミーズを左手に驚掴みにして(この時に糊紅を含ませた海綿をそつくりパラフィン紙で包んだものをその中へ隠し込みます)それを下腹へ当てがいます。

短剣をグサと突立てます。鮮血が一筋二筋たら／＼と下腹部へ流れます。左手で傷口を押えると血はどく／＼と裸身の下腹からデルタへ流れソファのカバーを真紅に染めながら床へポタリ／＼と垂れます。

彼の方を見ますと、目を血走らせ、猿轡の

中で声にならない呻きを上げて苦しんでいます。伊都子は一度刃を抜き取り、左手で傷を押えたまゝ這いつつて彼に近づきます。

「もうお別れ、だからやつぱり抱いて――」

と短剣で彼の縛めを切つてやります。彼は手が自由になるとドアの把手に結ばれた縄だけ解き、胸や肩にからまつた縄もそのまゝ伊都子を抱きます。血にまみれた裸身の伊都子それは我ながら妖しいまでに美しいものに見えました。

(終)

責めのアイデアを募る

本誌に発表する口絵の責め写真や縛り絵、或は代理部の分譲写真について、こういった構図やポーズ、或は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら何卒御遠慮なく編集部宛御申出下さい。万難を排して御希望のもので誌上を飾りたいと思います。採用の分並に優秀なる企画に対しましては画稿又は写真を差し上げます。説明以外になるべく略画又は説明図を添えて下さるようお願い致します。

(編集部)

私の求めた男

(三)

(松井籟子自伝的小説)

松井籟子
瀧麗子画

梅雨にはまだ少し間があるのに、じめじめと、毎日の様に雨が続いた。

長靴をはいて行くと、「魚屋さん」とわらわれるし、オーバーシューズは重いし、革靴では革が硬くなつて足が痛い。今のようにレインシューズというものがなかったその頃は、女学校へ行くのに雨がつつくと履物に一番困った。

学校から帰えつて、玄関で汚れた靴下をぬいでいる私に

「さつき清ちゃんが出来たよ」

と母が言つた。

「又来ると言つていたけれど、何ならそのまま行つて来たら……」



……？」

汚れた足を洗つてしまうと、又、雨の中を出て行くのが億劫になるだろうと母は氣をつかつてくれた。

しかし私は「清ちゃん」と聞いてドキンとした。まさか話しはしないだろうが、此の間の晩のことを母に話されたらどうしようと案じたのだ。それは母に叱られるという心配ではなく、やつぱり私の性癖を母に知られることがなにより恐かつたのだ。母の言葉の調子には、ふだんと違つたものはないが、それもあてにならない。重大なことをお腹にしまつていても、平静な聲音を保つことの出来る母なのだ。私は母の賢さゆえに、母を愛しもし、恐れもした。

「清ちゃんが何の用があつて来たの？」

私はわざと視線を靴の上に落して、その濡れ工合を見るような振をしながら、母の顔を見えない背中の中で見守つた。

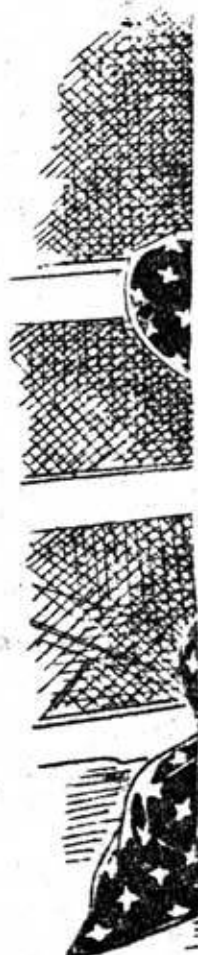
「学校の同窓会の相談があるんだつて。お前、幹事なんだろう？」

「ええ」

と答えながら、清の口実を母が真にうけていることがわかったと、

私はやつと安心した。

しかし、それは口実だと私には解るのだ。何故なら、春秋二回小学校の同窓会があり、私は幹事に間違ひなかつたが、春の同窓会は一カ月前に済んだばかりだし、秋の同窓会の相談というのも変だつた。それに、清は幹事でも何でもなく、清が私にその為の相談というのはどうにも合点がいかない。それは私の所へたづねてくる口実らしかつた。家が近くだから、母も子供の時の呼び名をそのままに「清ちゃん」と呼んだが、理由もなく私をたづねて来られる程、家同志親しくはしていなかつた。



とに角竹野清は私に用があるらしい。どんな用なのだろう。

私は戸惑つた。清の口実をそのまま理由にして、このまま清をたづねて行つた方がいいのか、卒直におやつを食べてからと、家へ上つてしまつても差支えないのか、私はそんな些細なことを重大らしく考えた。

「洋服着がえてからにするわ」

私は母に言つた。母は何にも言わなかつた。やれやれという思いで、私は私の部屋へ上つて行つた。

鼠地に錆朱で子持の格子縞にしたセルの単衣が氣に入つていて、私は五月というといち早くセルを着るのだが、雨の降る夕暮は、肌寒く、紫の絞りめいせんの羽織をはおつた。髪は三つあみにあんでおさげにしていたが、通学用のセーラー服を着ているよりはおとなびてみえたらう。それに私はいつも赤地に手毬模様かなにかの派手なメリンスの前かけをしていた。その前かけも、冬は赤やとき色の無地の裏をつけて袷に縫い、夏は裏なしにと、ちゃんと季節によつて分けられてあつた。

着物を着かえて茶の間に座ると、玄関の格子につけた鈴が鳴るのと一緒だつた。

私はすぐ竹野清だなと思つた。すると、おかしなことに、曾つて宇津木進吾に対して感じたと同じ様な背中のはてりを感じたのだ。それは、竹野清と共通の秘密を持つているというはじらいだつたの

だろうか。

私は気がついていのに気のつかない顔を作つて、
「清ちゃんかみえたらしいよ」

と、母に言われるまで、だまつてお茶をすすつた。

女中が竹野清が来たことを告げに来てから、ゆつくり腰をあげた
そして、又しても、あんまりゆつくりしすぎて、少し不自然だつた
かなと、母の目をおそれるのだつた。私は母に何でもかくさず話
したし、又、何でも理解してくれる母だつたが、私の被虐に対するあ
こがれだけは話したくなかつた。それを話したら、私より母が当惑
しそうな危懼を何故私は感じていたのだろう。母の手文庫に、錦絵
が一杯入つていて、それを私に見せてくれなかつたからだろうか。
母のためにいた芝居の絵葉書に、浅黄の囚衣に縄をかけられている
権八や、金閣寺の雪姫や、明烏の浦里などがあつたからだろうか。
何にしても、私は母に私の秘密をさとられなくなかつた。

玄関へ出てくると、竹野清は青い蛇の目をさして立つていた。傘
の青さが清の顔にうつるのか、青く澄んだような顔に、瞳だけが陰
火の様な妖しい光をたたえていた。

「夕飯すんだら、僕の家へ来てくれない？」

清は言つた。

「同窓会の相談つて本当？」

私が聞くのに、それには答えず

「待つているよ」

と言うなり、体をひるがえすようにして帰えりかけるので

「ねえ、本当に同窓会の相談なの？」

私はわざと意地悪くくいさがつた。嘘なのはわかつていた。

すると清は口元に皮肉な微笑を浮べたが、はき出すように

「とに角待つているよ。来なかつたらおばさんに頼むからいい」

「何て？」

私は「おばさん」といわれて少しあわてた。

「夏枝さんをおかりしますつていうよ。何ならもつと違つたい方
してもいいんだけど……」

齒に絹きせたような言い方に、私は又戸惑つた。竹野清にしては
いつもに似合わない押しつけがましい言い方だつた。もしかしたら
此の間のことを根にもつて、私に何かしようとするのだろうか。ど
んなことを……

私は身がしまつてくるような気がした。

行かないことはたやすいが、もし、母にこの間の晩のことを言い
つけられたら大変だ。

「じゃあ、とに角御はん済んだら行くわ。母さんには同窓会の相談
で二三人集るのだというわよ」

「ああ」

清は我が意を得たというように瞬間顔の筋肉をゆるませたが、又
すぐ冷たい顔を作つて雨の道へ走るように出て行つた。

×

清はいつたい私を家へ呼んで何をしようというのだろう。

この間舟の中で自分がされた通りに、私を苛めようというのでは
ないだろうか。いうことをきかなければ母に告げると私を脅迫して
私の手足の自由を奪い、口には猿ぐつわをはめ、自分がされたより

もつとひどい折檻をしようというのではないだろうか。

私はそれを望みながら、又一方には不安でもあり恐くもあつた。私は私の手に戻っていたナイフをたもとに入れた。竹野清にそれをやつてかんばんしてもらおうと思う気持と、もし自分の身に危険なことが起つたら、小さなナイフでも護身の役には立つだろうと、自分で自分を草双紙の主人公にえがきあげてたのしむような気持と入りまじつて、私は赤い革のサツクに入つたそのナイフを、落さないようにハンケチにくるんで袂へ入れたのだつた。

竹野清の家は細い路地の奥にあつて、玄関の格子をあけると、何となくかぐわしい匂いのする家だつた。それは掃除のゆきとどいた木の香なのか、しみついた酒の香なのか、商家にはない匂いだつた。といつて、竹野の家が水商売をしているわけではなかつた。母親と二人でひっそりと住んでいた。その竹野の母親の体についた脂粉の香が、家にまでしみ



ついたとでもいうように、格子をあけて漂う匂いを、私は何となく好ましく思つた。

その頃、映画はチャンバラ映画がはやつていたが、私はそれに美しさを感ぜなかつた。それに反して、芝居で見る数々の濡れ場は私の心にやきつく程美しく思つた。三つ四つの幼い頃から、月のうち明治座、新富座、市村座と、芝居小屋へ連れてゆかれた私は、芝居の筋が理解出来ない頭で、ただ、その舞台の美しさが印象深かつた。その芝居の狂言を通して、遊女や芸者を美しく偶像視する癖がついていた。

だから、竹野清の母親がそうした職業を持つていたということは、生意気な女学生の間では軽蔑する人もいるのに、私はむしろあこがれさえ感じていた。

私は竹野清の家の格子戸をあけてふつと漂う家の匂いに、自分が常日頃、あこがれている濡れ場の主人公になつたようなたのしさを感じた。その瞬間、私は私でなく、芝居気た

つぶりになつてしまうのも、今でも残っている私の悪い癖だった。
「上つてちょうだい」

竹野清はまるで今まで玄関に立つて私を待っていたように、私が
格子をあけるとたん、中から声をかけた。

「いいの？」

私は傘を片隅におくと、あずま下駄をぬいで式台へ上つた。下駄
の歯が三和土の上で音をたてて、私はふつと忠兵衛が封印切の前に
しのび逢う梅川との濡れ場を思い出した。

清が私の手をとつた。温くやわらかい手だった。

「お母さんは？」

「今日はおそくてなければ帰えないんだよ」

「じゃあ、あんたひとり？」

私は何となく体をかたくした。静かな水面に小石を落して波立つ
ような波紋が、私の血管の中でひろがつていった。それは快不快を
こえて、先ず恐怖のようなものを感じさせた。すると、すぐそれに
反撥する別の感情が、私を冷静にした。

私は竹野清に導かれるまま、二階へ通つた。六畳と四畳半と二間
きりの二階で、四畳半の方は箆箆や机や三味線箱などが、ひしめく
ように並べられていたが、六畳の方はきれいにかたづいて、梯子段
の上の手すりにつづいて書院内に梯子段にむいて窓が切れ、三尺の
床の間に墨絵の滝の細い軸が掛けられて、手桶型の花いけに矢車草
がさしてあつた。真中に紫檀の卓が置いてある。

私は卓の上の灰皿が面白い形なのを手にとつてながめながら、そ
んな部屋に清と二人きり座っている落付かなさをごまかしていた。
「夏枝さん、今日どうして僕が来てもらつたかわかる？」

清が聞いた。

私はだまつていた。

「夏枝さん」

いきなり清は私に近づくと、私を抱きすくめた。

「あつ！何するの？」

私はつきとばそうとしたが、以外に強い力だった。

清は私の唇を自分の唇で追つた。少年にしては、ませた所行だつ
た。私は本能的にそれをさけた。そして、やつと右手の自由を得て
清の頬を思いきり打つた。清がひるむすきに卓をたてに私は清から
はなれて座り直した。

ハアハアと荒い息をしていた。

「おかしいことしないでよ」

しかし、清は血走つた目で私をじつと見すえると、じりじり、じ
りじりと、距離をせばめてくる。私は袂からナイフをとり出すと、
刃を引き出してかまえた。小さなナイフだから、手の平の中へ埋れ
てしまふそうで、護身用にかまえるには不むきだった。しかし、獣
の指のするどい爪ぐらいの役には立ちそうだった。

清は私の手のナイフを見ると、はつとするように表情をかえた。
それは私の武器に驚いたというよりも、ナイフそれ自体の思い出の
ためのように私には思えた。ボートの中で、彼が苛められたのも、
そのナイフから事は始つていたのだ。

清は体当りするように私にぶつかつて来た。私に近よるなり。

「あつ！」

と、声をたてたのは、私のナイフが彼の体のどこかをついたらし
かつた。

「あつ！」

と、次に叫んだのは私だった。

ナイフをつかんでいる手を清がとつて、もみ合ううち、ナイフが小さすぎて反つて、私の体を自分で突いてしまったのだ。

私と清は精一杯の力でナイフをとりあつた。ナイフはいつか私の手にも清の手にもなく、畳の上に落ちてしまつていた。すると今度はそれをとろうとし、とらせまいとして、二人は袖を引き、裾を引っ張り、帯を引張つた。私の前かけはビリビリと紐からほころびてだらんとさがり、清の兵児帯はとけてしまつた。

やつと、私が清の手を後手にとつて、肩を膝の下へふんまえることが出来た時、二人とも冬というのにじつとりと汗ばんで、私は片手で清の手をつかみ、片手で額を横にこすつて、汗をぬぐつた程度だった。

清は私の膝の下から、ともすれば私が転びそうな力で起き上ろうとする。私が私の身の安全を保つ為には、清の手を後手に縛つてしまふより仕方がなかつた。

私はほどけた清の兵児帯で、彼の手を後手に縛りあげようとして一と巻き二た巻き彼の手にかけた。彼は縛らせまいとして、もがいた。自然、かるく結ぶつもりがよけいに力が入つて、高手小手に縛りあげることになつてしまつた。

「まだ歩けるよ、僕、このまんまおもてへかけ出して、夏枝さんにこんなことされたつて言うからいい」

清は言いながら、本当に起き上つて、梯子段をかけおりようとした。

私は梯子段のおり口で彼の帯をつかんで引き戻した。

「そんなこと出来ないように、ここへ縛つてしまふから……」

私は帯の残りを梯子段の手すりの柱へ結びつけた。

「さあ、どう？動けないでしょう。」

私は息を切らせながら言つた。清の体がいくら華奢でも、男は男の力がある。それをやつと動けないようにしたのだから、私の胸は痛い程、心臓が鳴つていた。清も同じような息づかいをしていた。しかし、

「まだ動けるさ」

と言つて、自由な足でドスン、ドスン、と畳を打つた。地団駄をふむのに似ていたが、腰をおとして、低い位置で後手に柱にくくられているから、足はあぐらをかくようにして、ただ踵で畳を打っているのだ。

「あんた、どうしてそう私を苛めたいの？」

私は泣き声で言つた。

清の母親が外出中でおそくでなければ帰えないとしても、野中の一軒家でもないその家で、あまり異様な物音をたてれば、隣の人が見に来ないものでもない。といつて、清をそのままにして私が帰えつてしまつたら、あとで本当に、母親に今日のことも、この前のことも、ひつくるめて告げ口されるだろう。私はどうしていいのかわからなくなつてしまつた。

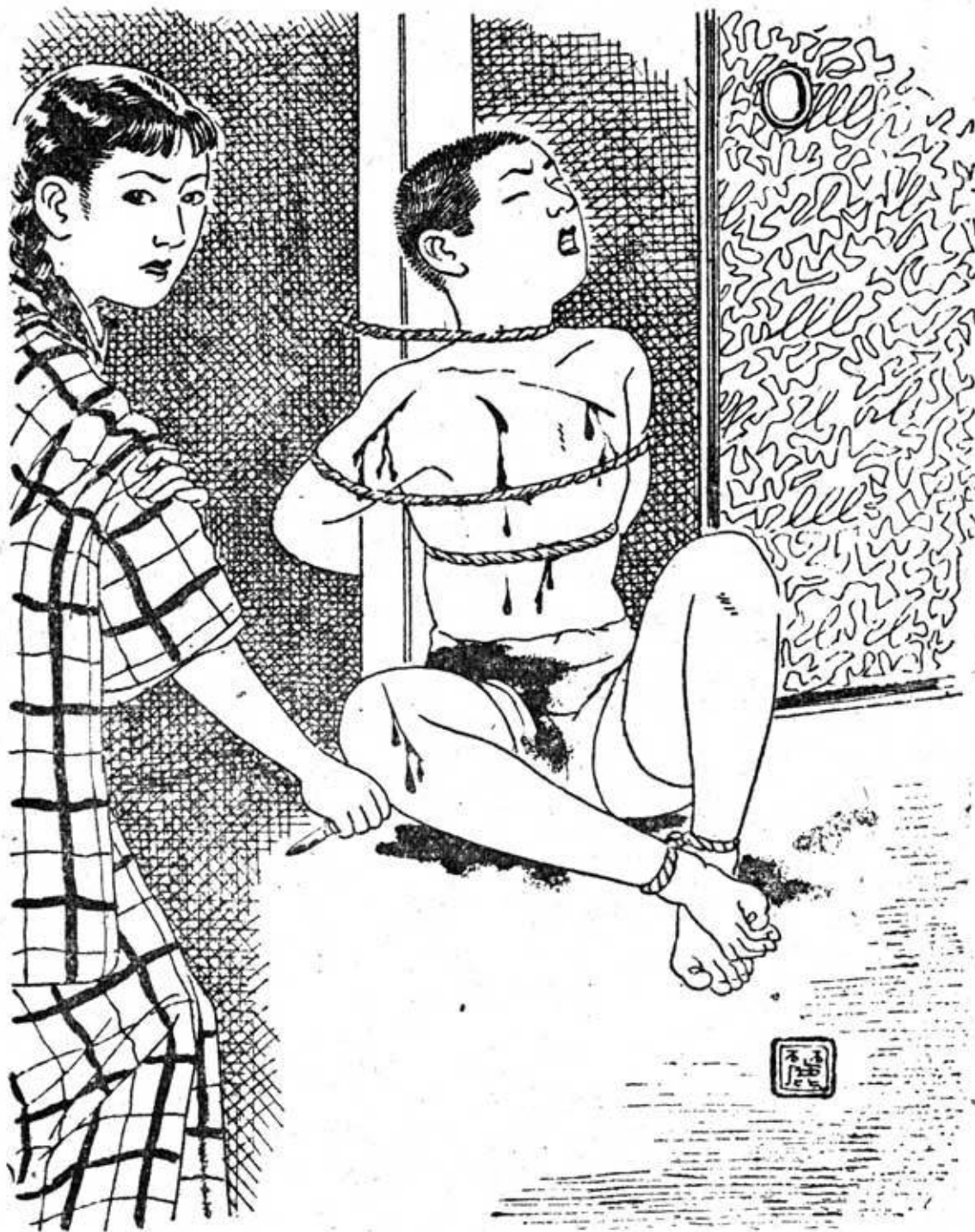
「静かにしないと、本当にひどいめに会わすわよ」

「したらいいじゃないか」

清はうそぶきながら、急に

「小母さん！」

と、大きな声を出した。



「そんな声出すとこれで突つくわよ」
私は又、ナイフを握った。
「いいよ、ついてごらん」
そう言われると、私はひるむ。
「ほら、突けないじゃないか」
清の悪態に

「いいわよ、本当に切つてあげるから」
そういうと、私は清の足をおさえて、足の甲をスーツと切つた。
血が出ないので切れなかつたと、半ば安心して、もう一箇所、スー
ツと切つた。切れなくてもおどかしにはなると思つた。刃がさわれ
ば冷んやりと冷たい感覚が切られたような錯覚を清におこさせるだ
ろうと思つたからだ。

私は切れないのをいいことにして、清の白い腿へも
刃をあてがつた。

しかし、その頃になつて、最初に切つた足の甲から
血がにじみ出した。そして、血は次々に、二本、三本
と赤い縞になつて清の足をいろどつた。

私ははつとしたが、今更ひるむわけにはいかなかつ
た。

「今日のことも、此の前のことも、あんたが悪いのよ
私のせいじゃないわ。いいつけたりすると、もつとひ
どいめにあわしてあげるから、おぼえていらつしやい」
「こんなことでは降参しないよ。もつとひどいことさ
れたらどうかかわらないけど……」

「いいわよ、お望みどおりにしてあげるわ。もつとも
つとひどいめにあわしてあげる……」

言いながら、私はふつと気がついた。

そうだ。そうだつたのだ。

清は私の手で苛められたがつているのだ。それゆえ
にこそ書いた今日の芝居なのだ。すべてが芝居だつた
のだ。

私の体から急に力が抜けていくような感じがした。

「清ちゃん、私はひとを苛めるの好きじゃないのよ」

私は急に冷たく言い放った。そして、彼のいましめをといいた。

「私、帰るわ」

清の顔も見ずに、トントントンと梯子段をかけおりと、私は雨の街へとび出してしまったのだった。

×

清が私の住む街から姿を消したのはそれから間もなくのことだった。

清の母親は息子の突然の家出を、自分の妾という境遇に対する感じやすい少年の反対のように思ったらしい。

しかし私は清から長い手紙をもらっていた。それにはこう書いてあった。

―恋心というものは子供の心にもあるものだと思います。僕があなたのナイフを宇津木に渡さなかつたのは、僕が忘れたのではなく宇津木にやりたくなかつたからです。僕自身が欲しかつたからですそれは、あのナイフが小さくて、いろいろの道具をくつつけているのが物珍らしかつたばかりではありません。あなたの持つていたものだから、僕は生きがたみのように、大切にしまつておきたかつたのです。こんな恋心はおかしいでしょうか。どうか笑つて下さい。そして、もう一つ笑つていただくことがあるのです。

僕はあのナイフを大切にしまいこんでおいたのではなく、毎日、手にとつて眺めていたのです。眺めながら僕はいろんな夢をたのしんでいたのです。

僕の夢は先ずあなたに縛られることなのです。子供の時のチャン

バラゴツコのように、あなたに縛られることなのです。

ナイフについている小さな爪切りがありますね、僕はあれであなたに爪を切つてもらいたいと思ひました。それも、浮世絵のお七吉三の絵のように、やさしく切つてもらうのではなく、私の体を海老のように折りまげて、息苦しい程ギューギューに縛つておいてから悠々と足の爪を切つてもらいたかつたのです。一本の指の爪を切つたら、その切つた爪を足の裏につき立ててもいいのです。又一本の指の爪を切つたら、しばらく足の裏をくすぐつて、僕が「ううっ！ううっ！」とうめくのを平気で、まるで爪を切る合の手のように僕の足の裏をくすぐつてくれたらいいのです。手の指十本の爪と、足の指十本の爪を切るのに長い時間をかけて、遊び遊び切つてもらひのです。そのうち、押しまげられた体は充血して、だんだん痛く、苦しくなつてくるでしょう。それでもあなたはほどこいてくれなくていいのです。

今度はナイフについた小さい鋸で僕の体中を突つくるのです。海老のように縄をかけられたら、僕の体は座つていられなくなつて、きつと尻を上にして転つてしまうと思ひます。その尻の穴へ、あのナイフについているコルクぬきを入れられたら、どんな気がするでしょう。とび上る程痛いかもしれません。しかし、縛られている体はきつと横にころがることさえ出来ないでしょう。ただ「ううっ！」と、人間の声ではないような声で呻めくだけだと思ひます。尻の穴からタラタラと血が流れ出すかもしれません。

栓ぬきで鼻の頭を持ちあげるようなものであそび方をなさつてもいいのです。僕が思わず大きな声を出して呻いたら、呻いた罰に、前よりもつと痛いことをしてかまいません。

そんな風にして、あの七つ道具のついた小さなナイフの、全部の道具を順ぐりに使つて、僕の体を責め苛んでもらえたら、どんなに嬉しいだろうと思つたのです。

僕はひとりで、あなたに苛められているつもりで、ナイフで自分の腕を切つてみたりしました。しかし、自分でしては、僕の夢みるような喜びは得られないのです。むしろ、ただナイフの刃を見て、夢みていた方がいい位です。それに、自分ではうまく自分を縛れません。縛られていないと、腕を傷つけても、僕の考えるような喜びにはならないのかもしれない。

僕に縛られるということの快さを教えてくれたのはあなたです。僕はもう一度あなたに縛られて、苛められてみたかったです。もしかしたら、あなたはそうすることを、喜んでして下さるのではないかと思つたのです。

けれど、やつとおぜん立てして、僕の夢みていたことがほんの少し、かなえられようとしたのに、あなたは「ひとを苛めるの好きじやない」と言いました。

あの時、僕の恥しさはどんなだったでしょう。恥しかつたのです。まるで愛されていないのに愛されていたとうぬぼれていたのが、頭からぶちこわされた恥しさと一緒にです。あなたが僕を苛めることを少しは興味持つて下さつて、それが僕への愛情になるような錯覚をしていた自分の愚かさが急になくなりました。

僕はもう、あなたに顔を合わせたくありません。

僕は僕の首を自分でしめてしまつたら、どんなにいい気持ちだろうと考えるようになりました。

これは遺書ではありません。遺書のつもりで書き出したのですが

書いているうちに、少なぐさめられてきました。けれど、それも束の間で、本当に自分の首をしめなくなつたら、これはやつぱり遺書になるでしょう。誰にも話さないで下さい。――

終りは普通の手紙のように、健康を祈るといふような言葉でむすんであつた。

×

鎌のような月が黒い雲を切つていた。

私は泣きたくても涙の出ないもどかしさに胸もとに石のかたまりでも入つていふような気持ちで歩いていった。

竹野清の通夜の帰えりだった。

家には近い清の家から、私は真直、家へ帰えることが出来なかつたのだ。

泣きたい。出来れば声を限りに泣きたい。それが出来ないのだ。

竹野清は死んだ。荒川放水路の堤の下で、自ら若い命を絶つていたのだ。手も足も、すっかり縛り、薬をのんで死んでいた。清は自分で自分を死の苦痛へ追いこんだ。

しかし、竹野清を殺したのは、彼自身だけだったろうか。私は手を下して清を殺したわけではない。

「死ね」とすすめたおぼえもない。けれど、それなのに、なぜこうまでも清の死は私を責めるのだろう。

私は泣きたい。しかし、涙というものは、悲しさに甘える気持ちがなければ出ないものなのか。いや。私は悲しくはないのだ。清の死は私にとつて、悲しみにはならないのだ。それなのに泣きたいのはどうしてだろう。この胸のしめつけられるような悲しさは、やはり悲しさではないのか。

被虐というもののあこがれは、終点は「死」なのだろうか。

私は少しづつ、少しづつ心が軽くなつていった。あくる日の竹野清の葬式に、私は思いきり涙を流すことが出来た。理窟も何もなく自然に湧き出してくる涙に、私は私の心のどこかで、ほつと安堵めいた気持を持つてゐるのを、ほろにがく見つめていた。(つづく)

女^{によ} 体^{たい} 哀^{あい} 歡^{かん}巴^ハ 鳥^{トリ} 訓^{クニ} 右^{スケ}

造化の神は、女の顔をうつくしく作れば作るほど、もう一つの顔を不逞なものになさる。そしてその二つの顔の対照がはげしければはげしいほど、男の目にはつよい魅力をもつてせまるのにちがいない。

——若杉 慧「美少年」——

秋空は碧々と澄み切っていたが、妙に、からつとしたものを感じさせず、私は、鉛のよ

うに沈み込む心を持ち扱っていた。純子があどけない唇許を軽く綻ばせて、いま観て来た映画の品定めなどするに付けても、受け答えこそしていたが、またしても私は深い疑問と憂愁に囚われるのであった。

彼女の匂うような美しさと、それに比例するかと思われるほど奔放な逸楽ぶりに、私は会えば会うほど深みに引き入れられて行く思っていたのである。

山科から京都へ向う列車の中で、背丈こそ際立つて高いという方では無いが、豊艶な姿態と、未だあどけなさを微かに漂わす美貌とで、数多いビジネスガールの中でも目に立っていた。

二十を越していなさそうな彼女の、もう成熟し切ったふくらみを保つ胸許の、切ポケツトに水色のハンケチがそよいでいた或る朝、彼女はハンカチの覗け具合を気にして何度も指先でハンカチを動かして見るのであった。その度に乳房の隆起が揺れ、私の眼には、薄赤い乳首のブリブリと震えるさまが、極く薄手のウール地を透えて来るようであつた。彼女が同僚らしい数人のグループと連れ立って行くのを尾行して、私は、彼女の勤め先がLデパートであることも、其の日たしかめた。

彼女は淡い水色の制服を着けて化粧品売場にいた。カールした前髪に広い額を隠し、黒く澄んだ瞳と隆い鼻すじに、凛々しい気品を見せる彼女を、今は切なく胸に描く私であつた。

自分の恋情を確めるために、私は三日続けて、昼休みの職場からレデパートへ通つた。

諦め切れるものなら、思い切るのは今の内だと胸の中で反芻しながら、彼女が瞬きもせず客を待っているシヨウケースの前を、私は眼を逸らして歩み過ぎるのであつた。

緊張し続ける神経の亢奮に、全く疲れ切つた私は毎夜彼女を夢に見た。夢の中で彼女は私が近付こうとする時、唇の端に憐れむような嗤いを浮かべて、遠ざかつて行くのであつた。耐え切れなくなつた私は、レデパートの掃除婦を通じて彼女と知り合つた。

それから純子の体を知る迄、大した手数はかゝらなかつた。丁度エリザベス女王の戴冠式が、ニュース映画で伝えられた頃のことである。金曜が休みの彼女に会うために、その日私は休暇を取つた。それ迄、木曜の夜のひとときしか、彼女は私のために割いてくれなかつたのである。

映画館を出たとき、彼女は放心したような瞳を私に見せていた。お茶を啜みに入つても私は、珍しく無口な彼女に戸惑つた。黒い瞳が疲れたような潤みを帯び、遠いところを瞞つめていた。陽射しが、赤と緑のステインドグラス越しに明るく映え、時間は有り余つていた。得難い機会を私は別れともなかつた。

「も一度、何か観ない？」

氷菓の最後の一匙を含みつつ、私が問いかけた時、ふつと瞳を私に向け軽く首を振る。

「もういや、何も観たくないわ。」

遊び疲れた子供に似た仕草のかげに、暗く燃える女の灯影が射していた。眉根に微かな皺を刻み、頬に血が上つて来ていた。

「じゃ、歩く？未だ時間いゝでしょう？」

別れともないのを露き出しては、彼女の軽蔑を誘うだろうと感じつゝ私は念を押した。

然し彼女は素直に頷いた。

梅雨期に入りながら降らない故で、かつと照り付ける太陽に市電のレールも鈍く重く光つていた。繁華な河原町の通りを歩く無数のアベツクの中に、純子ほどの女のいないことが、愚かしい誇らしさを私に与えた。ジュラルミンのアーケードの下を、寄り添う彼女の露わな腕が、薄い服に包んだ私の肱に軽く触

れ、疼くような快さを感じさせた。

黙り込んで街角まで歩いた時

「あゝ、堪えないわ」

ほつと溜息を吐き、身悶えるように呟いて彼女は立止つた。濡れ／＼と赤かつた唇が妙に白けて見え、頬も蒼ざめている。

「歩くのも嫌、何もかも嫌になつた」

捨鉢な言い方が私の胸に突き刺さり、私は驚いて肩を抱いた。日盛りの街でなかつたら私、は力の限り彼女を抱き締めたかも知れない。彼女の頭の向うに、時計塔は午後五時に少し間があつた。

シーツだけは真白な、然し淡緑のカーテンを垂れこめ、枕許のスタンドがピンクの光を投げるベツトに、彼女は横になつていた。

「クニスケさんなんて改まれないわ。」

腕を頭の下で組んだ姿態なので、フレンチのブラウスから、腕の附根が露き出されていた。陽に曝されることのない、みづ／＼しく柔かい腕の髪が、私の眼を捉えた。私は跪つき何の踏いも無く唇を、そこへ接けた。

甘くヘリオトロープの漂いに混つて、彼女の匂いが香つた。彼女は天井を瞞めていた。

「クンベエでもいゝよ。」

唇を離し、私はスカートの釦を外した。

「あゝ女王様か、同じ女に生れて、こんなにも違うのね、どうせ死んでからも違う」

彼女はまた激しく身を悶えるのであった。

それは勿論、身分を忘れた羨望や憧憬ではない。たゞ、より美しく高貴になれない運命への本能的な、女の嘆きであるかも知れない。

「君はぼくの女王だ、それでは不足かい。」

シユミーズの上から乳房を愛撫しながら、私は彼女を宥めるのであった。

「本当に、そう思ってるの？、よし」

いきなり跳び起きた純子は、シユミーズを

脱ぎ棄て、ぐいと胡座をかいた。真白なブロースが、股の中心で引けそうに張つてゐる。

私の眼はその中心の縫い目に吸い付けられるのだつた。その間も、彼女の瞳が熱っぽく輝

き、頬が燃えている。

「お下り！」

不意を小突かれて、私はベッドからずり落

ちた。私の眼の前へ、彼女の出足が伸びた。

「お坐り！」

彼女の爪先が私の顎を掬つた。その甲へ、私は唇を接けた。理性は萎え、そうせずには

いらぬ気がしたのである。

びんと張り切つた乳房は、私の手の届かぬ

高さで、泰然と美しかった。

こみ上げる慾情を抑え抑えて、私の唇は彼

女の右脚を静かに進んで行つた。真白な太股

に深く喰入つたブロースが私の仕事を妨げた

とき、私の手が、純子を生れながらの姿にするのであった。

然し彼女は、身を反らせて私の唇を彼女の

唇に合せる努力を拒んだ。

「も一つの………」

彼女は身を振り離れた。固く突立つた乳首

が弾みながら切なく私の胸を擦る。お預けを

命じられた犬のように、私は彼女の持つ女の

香りを、味わねばならなかつた。

彼女は私に仰臥を強い、私は彼女の深い瞳

に全長を曝し、思いがけなくも羞恥した。然

し羞恥は却つて此の際慾情を増し、世の一切

の醜いものは写しそうな程に澄み切つた

純子の瞳は、今は静かに私の変化を見守つて

いた。その瞳は、澄むほどに、残酷な冷静さ

を保っている。

彼女自身奔放な姿態を惜しみなく見せて、

純子は、あくまで昂然と、まことの女王のよ

うに高貴であつた。

全身の感覚が一点に集中し、しいんと磨ぎ

すまされて行つた。むつちりした彼女の下腹

の感触を、私は確かに受け止めていた。……

歓楽の一刻は長いようで短かつた。彼女に

肌着から一つ／＼着せ終えてカーテンを排し

た時、陽は漸く沈みつつあり、空は燃えてい

た。純子と許し合つた、という重大なポイン

トに於て、私は既にこのホテルのポーチを入

る迄の私とは全く異質であつた。

「もう妾をお嫌いでしようね。」

振り返ると、ベッドに腰をかけて、純子は

淋しい微笑を漂わせていた。夕映えに、額ま

でバラ色に輝かせながら、何故か淋しそうで

ある。そしてその故にか、私は彼女の清純な

美しさに打たれた。女というよりも童女と呼

びたい。私は首を左右に振つた。

彼女が私の接吻を拒み、もう一つの唇への

接吻を命じた時、私は反撥的に、私の象徴の

周りに口紅の輪を跡づけさせたら、と瞬間希

つた。然し今は、そう思つたことさえ、彼女

への冒瀆ではないかと思えるほど、彼女は臨

たけている。此の微笑のために、私は男のプ

ライドなんぞ棄て、悔いらない思いだつた。

「いけない女ね。」

暗い翳が彼女の頬に射していた。

蒼ずんで行く舗道を私たちは歩いた。

「妾、可愛がつて貰つたお姉様——判るわね

——お姉様を死なせたの。酷い女、でも妾は自由が欲しかったの。」

彼女の声は泌み透るような響きがあった。

純子が高校を了えてレデパートへ入ったとき、年上の女店員に愛された。その女は彼女を愛する余り純子の全身に口紅の跡を残し、彼女の肉体の奥深く味わずにはおかなかった。

二十五にもなつて男に興味を持たぬ、勝気で美貌な女の愛慾は、純子を歪んだ悦楽の淵に誘い込んだ。

「本当に純な子、名前の通りよ。」

その女は、ホテルのバスルームで、純子の体を洗い浄め、果ては自分の腹に向つて放尿を強いるのだつた。

「お姉さま、かんにんして」

と拒んだ末、止むなく、流石に羞恥に身悶



えつ、純子が従つたとき、その女は切なげに身を震わせて純子を抱き締めるのだつた。

「でも妾は女ね、男の人が好きになつたわ。」

妾は、もう二人切りでは会いたくない、と云つたわ、その女、だん／＼裏れて、死んだわ。……薬のんで……」

——純ちゃん、あなたと一緒にいきたい、でも純ちゃんを殺すのは惜しい、嫌われて

生きる甲斐も無い妾は、独りで行くよりしかたがないの、純ちゃんあつちゃんアツちゃん、さようなら——

抑揚のない声で、純子は今も覚えていた遺書を、暗誦した。暫く話が途切れた。

「貴方にだつて、いやだ、と思つたら、もう会わないわ、腹が立つなら殺してもいいのよ、妾も負けてはいないから」

不意に叩き付けるような口調で、立ち止つて私を睨める純子の表情には昂奮の色は無く、瞳が、深淵のよう暗いものを堪えていた。明滅するネオンの赤と青が、白く豊かな頬を交互に彩り、傷ましい迄に思いつめた彼女の、ぎり／＼の美しさを一層引立てた。

我がまゝな、それだけに好悪の感情の激しい女だ、私は単純に考えた。それにしても、何時会えなくなるかは知れずとも、純子は素晴らしい女だ、と私は心の中で呟いた。慾情に先立つ戯れは、ただれた同性愛の結果ではあるが、一面、美しい女ほど性を不逞且つ貪

婪に追究するのだとも思えた。

彼女に性の愉悅を教えたのは女だった。然し其の女が何んなに技巧を凝らしても、所詮は実の無い営みに過ぎないことを、純子が無意識に考え始めたとき、その女の悲劇は、純子を受することが深かつただけ、絶望を濃くして行つたのである。

然し、女らしく男の愛撫に身を委ね切ることの出来ない純子であつた。愛情を感じたからでは無く、感じないからこそ男の誘いに応じたのかも知れなかつた。三月と保たず、彼女は其の男と構うのを拒んだ。

「腹が立つなら殺してもいいわ。」

彼女は真実そう思い詰めていた。然し、燃えることを拒否する彼女に、彼は飽き足りなかつたに違いない。男は彼女から去つた。

私が純子に近付いたのは、丁度そういう時期だつた。自尊心の強いくせに性格は弱い、愛したとなれば其の女の言いなりになりそうな私を見付けた時、彼女の衝動は絶好の掛け口を見出したようだつた。

会えばまず、あどけない迄に他愛もない饒舌から始まり、一旦ホテルに入つてヴィナス其のまゝの姿態となれば、まるで乳房あるアマゾンのような奔放さ、やがて一刻の歓楽の

後、極つて襲い来る憂愁が彼女を黄昏の色に

彩る時、私は又しても不可解の一語を胸に、今は暗い面持の彼女と別れるのだつた。

「アルバートの学生で、とても素敵なのがいてよ、鶴田みたいなのよ、ゆつくり構いたいなあ。」

そんなことを、流し目に私を見ながら言う彼女だつた。わざと返事をせずに柔かい脇腹へ唇を押当てると、

「バカ、擦りたいじゃないか、ふん、妬けもしないのね、意気地なし！ 何故こんな男に許したのかなあ、妾、バカだつたわ。」

額に垂らした前髪を白く繊い指に巻き付けて、痛みに耐え兼ねた私が謝まる迄、彼女は放さなかつた。

然し私は純子を愛した。ただ美しい容姿だからでなく、他人が争つて買つても、輸入ものの化粧品は自分に合わないから、資生堂しか使わない彼女の、日常生活では極めて健全なセンスに私は信頼していた。

彼女が望めば、足の裏でさえも私は嘗めてやる。而も彼女を愛するが故に、私を弄んで満足する彼女の歪みを、私は悲しんだ。

矛盾する感情の渦に巻き込まれ、私は溺れそうだつた。街を歩く彼女は優雅で艶麗であ

る。閨房にある彼女はタイランティックに淫楽を貪る。何方が真の彼女か、此の矛盾がそのまゝ彼女なのか、真剣に結婚することを考え、その故に、私は、悩んだ。

勿論彼女は昂然と言つた。

「結婚しようなんてバカを言つたら、構つてやらないからいいわ。」

然し私は、結婚しか考えることは、無かつた。或いは、結婚によつて私が男の地位を、回復しようと無意識に望んでいるのかも知れなかつた。

今日こそ、別れるか結婚するか、二つの途の一つを択ぶ勇気を自分に強いようと、私は決心していた。

いつものように、私は乳白色の緻密な肌を瞞めながら、彼女のズロースに手をかけた。

「駄目よ今日は、眠くてしょうが無いし、第一、あれなのよ。」

信じられないまゝに私は首を振つた。瞬間彼女の白い手が伸びて私の頬を撲つた。よく攪うだけに、音を立てて疼みを残した。

「惚れた女のさわり位、覚えておきよ。」

「覚えてるよ、覚えてるから信じられないんじゃないか。」

「ふん、勝手に信じなきやいいわ、昨夜誰か

と寝たかも知れないわね。」

彼女は頬を歪めて嗤った。その露悪的な艶美さが一層切なく、私の胸を締めつける。えげつない罵言が美しい唇から吐かれるとき、私は尚のこと、彼女に魅かれるのだった。

「ぐずぐず言わずに馬におなり」

私の背は彼女の豊かな重みを受け止め、私は掌と膝とで、のろ／＼と動き始めた。私の背骨の揺れ動くのを、一番感覚の鋭い部分で彼女が味つている間に、彼女の内腿の弾む感触が、鈍い動きにつれて私を昂奮させた。思わず呻いて、私が立止つたとき、右足を私の脇腹に喰い込ませて、彼女は私の下腹を探つた。彼女の足指を感じて、ぎくつとした私は片腕支いて身を倒した。ずり落ちかけて

「バカ、さつさと歩かなきゃ酷いよ。」

純子は怒りに駆られて両脚をグツと絞る。左右の脇腹を絞め付けられ、私は気が遠くなつて行つた。……

長いようで、案外短い時間だつたに違いない。薄明から次第に明るさを増す意識の流れの内に、女の泣き声が聞えて来た。思考をまとめようと私は努力した。何処で何をしていたのだつたか——思い切つて眼を開けた。

私の傍らに純子は丸まつて泣いている。

彼女の体の白さ、優美さと相俟つて、白鬼のように愛らしく無心な姿だつた。

「何故泣くの？ 何を泣くの？」

私の低い呟きに、彼女は、はつと顔を向けた。濡れた瞳がきら／＼光り、臉が赤く染まつている。頬に淋しい翳が射していた。

「妾を責めて、ね、怒つて、叱つて」

彼女は私の胸に打つ突けるような勢で顔を伏せた。生温い涙が私の胸に滴り、本犀の香りが嗚咽につれて彼女の耳もとから漂う。遠い記憶に、こんな一駒が藏い込まれていたような甘美な感傷が私を浸して行つた。今日ここへ入る迄の押し詰めた決心は、消えていた。

いつまでも無言でいたかつた。

「何か言つて、ね、妾、苦しいわ、あゝ……」

死にたい。何故あなたを苦しめたくなるのかしら、妾自身、苦しくてたまらない、ね」

純子の身悶えが、私の体だけでなく心をも揺さぶる。私は今までよりも深く彼女に愛情を感じた。

「生活さ、生活を持てばいゝ」

多く語りたくなかつた。語らずとも心は通じそうだつた。彼女を抱き起すと、

「さ、お脱ぎ」

泣きじやくりながら純子は

「脱がせて」

「いや、自分で脱ぐんだ」

甘えを拒否されて、彼女は泣き濡れた眼を驚いたように睜つた。次の瞬間、手が自然な動きでズロースを押下げて行く。

臍の下で充分張り切つて、滑らかに流れ落ちる下腹の円みが、二つの円柱で支えられて彫像の見事さを保っている。デルタに溢れる繁みが、一層新鮮なみづ／＼しさだつた。

見慣れた、然し彼女自身で開かれたことによつて高められた、見飽きぬ美しさに、私は打たれた。私の凝視に彼女は赧くなつた。

「恥づかしいわ、いやつたら」

顔ばかりか、真白だつた肌が、余すところ無く赧く燃えて行つた。

何か明るい灯が体の中で点つて行くような眺めである。此の赧羞に、私は、彼女の愛情の告白を読み取つた。無言で踵を返し窓際へ行つて、私はカーテンを排した。空は未だ碧いままだつた。眼の下では、小豆色の五十二年型が鈴懸の向うを滑つて行つた。

私は彼女を差し招いた。純子は、ゆつくり私に近付いて来た、深い秋の陽射を受けて白く輝く女体を私はぴつたりと抱き止めた。



☆ 変態讃美論 ☆

アブニスト諸公よ！
羞恥の衣を捨てよ！

鬼^き 山^{やま} 絢^{けん} 策^{さく}

序 論

私はこれまで本誌にマゾヒズムを主題をした手記のみを発表して来た。

事実、私はマゾヒストであるが、本論においてはひとりマゾヒズムに限らず、その正反対であるサディズムも、その他、所謂「アブノーマル」と言われる他種の性態に就いても、一切を包含して論ずることとした。

最近この種の同向誌が漸増して来たが、この現象は、世に同向者

が殖えたか、或はこの傾向に興味と関心を持つ人が殖えたかのいずれかであろう。

その同種類の雑誌の中には、徒らにアブニストの神経を刺戟することのみを目的とし、雑誌が売れさえすればよいと言う態度のものが見受けられるが、これはその編集者が、アブの世界を渦中の外にあつて野次馬的気分をもつて眺め、「何でもいゝからトコトン迄やつて見ろ」と言つた気持で編集して居るように見受ける。

それは恰も常人が狂人の生態を何等の同情もなしに面白がつて眺めて居るのと同じであり、対岸の火事を「もつともえろ〜」と言う

心理に他ならない。

だからと言つて筆者は、編集者自身がアブニストになれと強要するのではないが、その渦中にあつて渦の外に居るような氣持で編集することは大きな間違いであり、罪惡である。

雑誌の使命は例えそれが娯楽雑誌であるにせよ、その編集者は読者を常にリードし、その思想を善導する良心がなければ、一時はその雑誌が売れても、眞の發展は望み得ない。

又「アブニスト」を「異人種」扱いすることは、アブニスト達にとつて、その羞恥や、煩悶や劣等感を徒らに助長せしめるのみである。

同向誌の殖えることは結構であるが、眞摯なるアブの世界の探究に、健全なる良心を以つて臨んで貰いたいと切望するものである。

又世のアブニスト達の中に、「社会的通念に依る誤つた批判」から自己を反省し、羞恥、煩悶、或は自己嫌惡、又は良心の苛責に苦しむ人の多いのは遺憾である。

私は本論によつて、多くの悩めるアブニストがその暗鬱と羞恥を拭い去ることの出来る人が一人でも多かれと念じ、又アブノーマルを否定し排斥する人々に対して、多くのアブニストに代つて抗議しその蒙を啓き、且つ現代の「アブに対する誤つた社会的通念」の是正を要求するものである。

第一部 「アブ排斥」否定論

第一章 何故恥じるのか、何故隠すか

私は世のアブニスト達の中に自己の性慾型を羞恥し且つ隠べい的

である人の多いことを悲しむものである。

何故恥じるのであろうか、何故隠そうとするのであろうか。

それは序論においても言うように、アブニスト自身が「誤まつた社会的通念」に依るアブの世界の批判を、正しいものとして受け入れ、自己をノーマルな性慾の人達の立場に置きかえて批判するからである。

單的に言えば

人が忌み嫌うから――

人が怖れるから――

人が蔑すむから――

この三つが最も大きな理由であらう。

然らば世の所謂「正常人」と称する部類の人間が、何故に変態性慾を忌み嫌い、怖れ蔑すむかに就いて、その根元を質し、その誤りを指摘して行こう。

第二章 感情的に嫌惡する人々に対し

人間には性慾に限らず、何事にも感情的に好惡があるものである。

職業(A)でも趣味(B)でも、服装(C)でも皆そうである。例を挙げれば――

A「あいつはあんな善人面をして居ながら、内緒で金貸しをして居るそうだ、イヤな奴だ」とか

B「あんなろくでもない植木鉢を集めて切つたりついだりしてどこが面白いんだらう」とか

C「男の癖にパーマなんかかけてキザな奴だ、あれの女房はあのイヤらしい支那服を得意になつて着て居る」

等々、個人の好み、或は適不適に対して、その外見的感情から推察して、外見的社會通念から推して、排斥する人を、良識ある人格の人として認め得られるだろうか。

個人の好き嫌いは自由である。嫌いなら嫌いだと言うのは構わぬが、排斥したり誹謗したり、懲罰したりする必要はない。もしも変態性慾を、自己の性向に合致しないからと言う狭量な感情のもとに排斥する人があるとすれば、その人こそ極めて偏狭な、アブノーマルな性格の所有者だと言えるであらう。

第三章 徳的に排斥する人々に対して

第四章 犯罪を連想して危険視する人々

に対して

この二者は相關連するものがあるから、一括して論ずることとする。

その前に

「道徳」とは何か

「道徳」の本質に就いて論ずれば、難かしくもなり、際限がないから、此処では簡単に、碎けて平易に解釈しよう。

「お互いに人間同志、斯うしようじやないか。斯うあるべきだ」と言う所から道徳が生れ、「斯う言うことは止めようではないか、慎しむべきだ」と言う所に不道徳がある。

結局のところ、道徳とは「他人も自己も共に精神的、物質的に利益を分け合う」ことであり、不道徳とは「人間社會の迷惑、不利益となること」を言つて居る。

性慾の遂行には、相手のある場合と、個人の場合とある。個人の場合は、本人がいかに兇惡な妄想を逞うし、或はマスターベーションを行つたところでそれは少しも他人の迷惑にはならぬ筈である。又相手があつた場合、その相手が、これに迎合し、合意の上で、これを行つた場合は、相手が迷惑を感じない限り、これを不道徳と批難されるところはない。

が中には

「変態性慾に耽溺して、家族その他の系類、或は当事者の關係する社會的機關に迷惑を及ぼす場合があつても、不道徳を否定するか」と反駁する人があるかも知れない。

然しこれは本論から逸脱したもので、それは何も変態性慾に限らず、ノーマルな性慾に溺れても、同じことで、要はその「程度」の如何にあるのである。

変態性慾にしろ、通常性慾にしろ、総べて両者が合意の下に行われることに対して、何で他人が容喙する必要があるか。又万一にも

「では人妻に対して行つた場合、合意の上でも不道徳にはならぬか」

と言うような愚問を呈する人があつたとしたら「では貴方は人妻に変態性慾を行うことが不道徳と考え、人妻に通常の性交を挑むことは不道徳と考えて居ないのか。その点を考えて

からもう一度質問してほしい」

と答えるのみである。

この「道德」の問題には、その他に「人倫」としての見地から、変態性慾の一部型に対する批判があるが、それは後部「変態性慾の各個型に対する道德的觀念」の部において詳説することとする。

次に変態性慾に対して犯罪を連想して危険視する人々に対しては次の如く説こう。

なる程新聞の社会面を見ると変態性慾者が相手を死に至らしめた」とか「太股を切つた」とか「着物を裂いた」或は「腰巻を盗んだ」とか、変態に基く犯罪はよく見られる所である。「小平」「お定」がその代表的であり、このような代表的人物はかなり昔から、続出して居る。

然しこのように変態性慾に依る犯罪が多いからと言つて、怖れるのは「正しい変態性慾」を理解しない人々である。

世の中には通常の性慾が昂進して、強姦し、殺傷し、盗むものは数限りなくある。これ等の犯罪者は変態性慾者と通常性慾者とを問はず、いずれも理性を失つた人々の行為である。

「サディズムとは人を斬つたり、殺したがる性慾だから危険と思うのは当然だろう」

と解説する人がある。当然である。

然しサディズムは変態性慾中の王座を占むるものではあるが、サディズムのみを以つて、変態性慾の全部と思われては堪らない。

又私はさきに「正しい変態性慾」なる言葉を用いたが、これと対照的に「邪惡なる変態性慾」なる言葉が当然生れる訳である。

変態性慾に依る犯罪者、及び不道德行為者はこれは總て「邪惡なる変態性慾者」群の行為である。

いかに変態性慾を讚美する筆者と雖も「邪惡なる変態性慾者」の味方までは出来ない。否味方どころか峻厳にこれを拒否する。「邪惡なる変態性慾者」があるために「正しい変態性慾者」迄同類と見なされて大きな迷惑を蒙つて居るからである。

（「正しい変態性慾」と「邪惡なる変態性慾」とはいかに區別するか、どこに限界を設けるかは、後章「社会通念上より排斥する人々に対して」の項に於いて詳述することとする）

『では仮に「正しい変態性慾」と「邪惡なる変態性慾」なるものがあるとして、たとえ「正しい変態性慾」であつてもその慾望及び行為の目的が「犯罪」と同型のものであれば、犯罪を誘致する危険があるではないか』

と論ずる人があるかも知れない。

確かに変態性慾の一部型には、犯罪を醸成し易い性慾がある、然しこれも変態性慾のみを指して言つて居る人の論であつて、世の中には、他にも犯罪を誘致し易い、或は犯罪そのものである行為が平然として行なわれて居るではないか、

競馬然り、競輪然り、赤線区域然り等々……

中には法網を潜つて「社会通念上の詐欺行為」を大つぴらにやつて居る連中もある。

然しこの答弁だけでは「人もやつてゐるから俺もした」と言う程度の弁解論にしかならないと思う。で、もう一つ別の面から考えて見よう。変態性慾は毒藥のようなものである。

毒藥と言うと人は恐れるが、毒藥がなかつたら治らぬ病氣はいくらもある。

非常に危険ではあるがその容量を誤まらなければ有益である。変態性慾も同様である。容量を誤まつた者が「邪悪なる変態性慾者」となり、犯罪者ともなるのである。

第五章 社会通念上より観て排斥する人々に対して

かく論じ来つても猶且つ

「いかに論じてても、一般社会道德的見地から観て、その論は通用しないであろう」

と言う人があるかも知れない。

これは「誤つた社会通念」である。

社会通念とは、その真理の是非を確かめず、世の中の人々が十人の内八人迄が「否!」と言え、自分は心のうちでは、「然り!」と思つても、或は「然り!」か「否!」か分らなくても多数の人の言に雷同することである。

これはいつの時代でも必らずあり、それは時代の変遷と共に左右されるものである。

幕末時代、徳川三百年の泰平の夢に馴れた庶民は士、農、工、商を問わず、政權は徳川幕府が支配すべきだと考えた人が多かつたのはその当時の社会的通念に依るものであろう。

それを勤王の志士が活動してその誤れることを指摘して天皇に政權を還した。それが実現して、世の中が一応治ると、天皇中心の帝

国主義が正しいと言う思想が社会的通念となり戦争中に、自由を唱え、個人主義を唱えた人が国賊扱いを受けても、敗戦後、個人主義が支配すれば、又社会的通念となる。

徳川時代にラヂオや、テレビを妄想しただけでさえ、狂人扱いされるのが当時の社会的通念であつたろう。

して見ると世の中の人々の大部分がそう考えて居るからと言つて無条件でこれに加わる人は、便乗主義、御都合主義であり、無知者か卑怯者のいずれかである。

このように社会的通念と言うものは時代に応じて変わるものである。不安定なものなのである。

又風俗風習にしても、社会的通念に従う人は、人が皆朝起きて顔を洗うから我も洗うのであり、顔を洗わぬ人は変質者と見なし、流行が起れば、それが自己に適したものであろうとなかろうと人がやれば我も流行を追うと言つた軽薄な徒輩である。

故に社会的通念の中にも「正しい社会的通念」と「誤つた社会的通念」があり、変態性慾を社会的通念のもとに排斥する人は、変態性慾の本質を理解しない人であると同時に極めて軽薄な「上へばかりの社会的通念、即ち誤てる社会的通念」を信奉して居る人々である。

明治時代に日本に渡来した外人を通称「異人」と称し、「毛唐」と呼んだ。この称号はその語感から言えば「人に似て獸に近き動物」と言つた感じを抱かしめるが現代では特別に侮辱して言う場合を除いては、こんな言葉を用いる人はないであらう。この「通称」と言うのが社会的通念である。

次の時代において変態性慾が流行し、大半が変態性慾者となればその時にはもはや「変態性慾」なる熟語は過去の遺物として葬り去られるであろう。

【註】「正しい変態性慾」と「邪悪なる変態性慾」の區別
前章においては変態性慾に「正しい」と「邪悪なる」とものを區別した。

この限界をどこにおくかは、これ迄論ぜられた諸点を綜合すれば、分ることゝ思われるが、念のために瞭らかにしておこう。

現代生活にいかにも自由を希望しても、個人が社会機構の歯車の一齣である以上、法律と道徳を無視することは出来ない。そこで「正しい変態性慾」には三つの戒律を設けなければならない。

一、法律に触れる行為を避けること

二、道を守ること

三、程を弁えること

この三項である。この中「道徳」の見解が社会通念上の「道徳」と異にして居ることは前述の通りである。

「程度」と言うのも誤つて解釈して貰つては困る。凡ゆる変態性慾のどの型にも、数字で出せる程の、或は万人共通の「程度」と言うものは見出し得ない。

然しながら各人各型の性慾に対し、各人の体質、環境に適した「程度」は必らず守らねばならない。

例えば「自虐」に一例をあげるなら、自分で自分の腹を割いたり指を切落したりしても、法律には触れないし、他人にも直接迷惑はかけぬことであるから、道徳的に宥せるで訳であるが、その為にか

人の介抱を要したり、職務に支障を来すようなことがあれば、矢張り迷惑をかけることゝなり、そこに「程度」が必要となつて来る。こゝにおいてこれ等の種類のアブニストは道徳と、法律を守り、事実上の「程度」を弁えた上で、極めて深刻な、濃厚な意慾を満す手段方法を工夫せねばならない。

第六章 輕蔑する人々に対して

変態性慾種型の内、「マゾヒズム」「フェチズム」等の性慾を輕蔑する人々には、何故に苦痛、或は屈辱を喜ぶか、その心理を解せぬからである。

苦痛を喜ぶ性慾を輕蔑する人に対して

人間は同じ行為をしても、その行ふ人と、時と所の相違に依つて一は賞讃し、一は輕蔑する矛盾した面を持つて居る。中江藤樹の母は、息子が何年振りかで、母恋しさに郷里に戻つて来たのを「まだお前は一人前になつて居ないから」と会わずに追い返したこれが美談となつて小学の読本に迄載つて居るが、これは藤樹が後に「近江聖人」と迄出世したから美談となるので、もしも平凡人の平凡な母親が、平凡な母として愛情を子供に与えて居ながら、これと同じ場合に「中江藤樹の母」を想い出して、同じ行為をしたら、世人は何と見るか、息子は母親をどう思うか。所謂「社会的通念」を信奉する人は、一方で中江藤樹の母の美談を認めて居ながら、この平凡人の母親に対しては「何と言う不人情な仕打ちをする人だろう」とか「冷酷な母親だ」と言うに違いない。又その息子は母親の愛情に対して、過去の信頼に疑問を抱くであろう。

心理学者が見れば中江藤樹の母をアブニストではなかつたかと想像するかも知れない。自分が可愛い、息子に会いたいと言う慾望を耐える苦痛に自虐を味わい、一方息子も苦しむことを思つてサド的快感も秘かに得て居たと想像出来ぬことはない。

「やくざな子程可愛い」と言う俗諺がある。親に迷惑をかけつ放して親に恥の上塗りばかりして居る子供が、他の健全な子供より可愛い、と言う愛情を示す言葉で言い現わして居るところにこの諺も変態心理が多分に含まれて居る。

人間が目的を達成するために忍ぶ筈の苦痛が、途中で強ち目的達成のためばかりでなく。苦痛そのものに快楽を感じるものに転化することは往々にして見受けられるであらう。

例えば灸をすえるのは、病を治すのが目的であるが、灸点讚美者の中には「灸は温灸などは効果が薄い。あの熱いのを我慢して耐えるところに効果があるのだ」と言い、又ヒロポン中毒者は、ヒロポンだつたら何でもよさそうなのであるのに、必らず注射液を用いる。内服薬を用いる人は少い。

これは腕にブスリと刺す僅かな痛みと、体内に液体の流れ込んで来る快感を楽しんで居るのであつて、その証拠には、中毒者の中には「ヒロポンが買えない時には蒸溜水を注射しただけでも一時的にげ凌る」と言つて居るのでも分る。斯うなるとヒロポン中毒なのか注射中毒なのか分らなくなる。これは一種の「自虐行為」に変化して居る。

このように苦痛を耐える心理は色々な考え方に依つて、変化するものであり、又その方が苦痛と言うマイナスを快楽と言うプラスに

変化出来るのであるから決して悪い考え方でもなければ不自然な心理でもない。

これがたま／＼性慾に結びついた時だけ、輕蔑すると言う考え方が不自然である。

苦痛を快楽とする変態性慾は苦痛を快楽とする変態心理が性慾と結びついて後天的に本能化したもので、少しも不自然なものではない。

第七章 屈辱を喜ぶ性慾を輕蔑する人に

対して

屈辱を受けることを以つて快楽とする性慾、この心理は、相手を尊敬し、崇拜する心理の変化したものであることは誰しも肯定するところであらう。がその他に、謙讓と、寛容の精神の転化したものも含まれて居る。

女性を尊敬し、或は敬愛するロマンチックな一つの形式として、女性の前に跪き、女性のスカートをとつて接吻する場面は、かつらをかぶつた西洋の時代劇によく見受けられるシーンであるが、これを男性として屈辱的だと見る人があるだろうか。もしもそう言う人があるとするれば、その人は女性を尊敬すると言う觀念自体が屈辱であり、女性を男性よりも一段下の動物と考へて居るサド的な性格の所有者である。

男性が女性を観察した場合に、二つのみかたがある。

男性の所有することの出来ない美の所有者

男性より知能の一段低化した動物

と言う二つのみかたがあり、その異つたみかたに依つて、屈辱と言う二つのみかたがあり、その異つたみかたに依つて、屈辱を感じるか感じないかの相違が出てくるのである。

この前者の場合だと、女性を美の象徴と尊敬し、自分より一段上のものものと崇拜する気持になれば、対等の恋愛、対等の性交等に謙讓の気持から自分を卑下して考えるようになる。

そこで屈辱に甘んじる心理が生じ、進んで屈辱を喜ぶ形に転化するのである。

又世の中には馬鹿になつて居た方が良い場合がある。何も識らない振りをするとか、相手の我儘や無理を、きいてやると言つた態度この寛容さが、女性と言うか弱い人間に対する労わりの心とミックスして、それが屈辱や嘲罵を受ける心理となるのである。

俗に「女子供」と言い、女性は子供と同一視される。愛児と角力をとつてわざと負けてやつたり、子供の馬になつて這いて廻る親馬鹿振り、その子供に対する愛情が、女性に向けられた迄のものである。

こう考えれば、マゾヒズムの方がサディズムの心裡よりも複雑であり、奥が深い。

韓信の股潜りを嗤うは、「燕雀何ぞ大鳳の志を知らんや」でマゾヒストはマゾの陶醉境地を嗤う人があれば嗤わしておけばよいのである。

以上の如く考えて来れば、法律の枠を出です、道德を守り程度を弁えた変態性慾であるなら、そのいずれの種型を問わず、社会に対

しても、両親に対しても、はた又自己の良心に訴えて見ても、何等恥すべき所はないのである。恥すべき点がなければ、隠す必要もなくなる訳であり、勿論通常性慾と比較して劣等感を抱いたり、煩悶したりすることが間違つて居ることも首肯されるであらう。

但し前にあげた三条の戒律は厳に守らねばならない、然しこのうち道德の解釈は、古い道德の觀念から脱却した広義な解釈であるから変態性慾の個型に於ける部分的の具体的な解釈は後章「各種型における道德的解釈」の部に詳述する。

筆者は以上の論旨を決して、アブニストの側に立つて論断して居ないつもりである。飽く迄も冷静なる第三者の立場にあつて、変態性慾の各種型を俯瞰し公平に判断したものである。

変態性慾はもとより性慾の一種である。故に通常性慾を語り、論ずることすら恥すべきことであると考えよう。人種には、理解出来ぬかも知れないがそのような人は性慾学の第一歩たる通常性慾の諸型から研究する必要がある。

—— 続 ——

次号は

第二部 変態性慾各種型の道德的解釈

第一章より第十三章まで

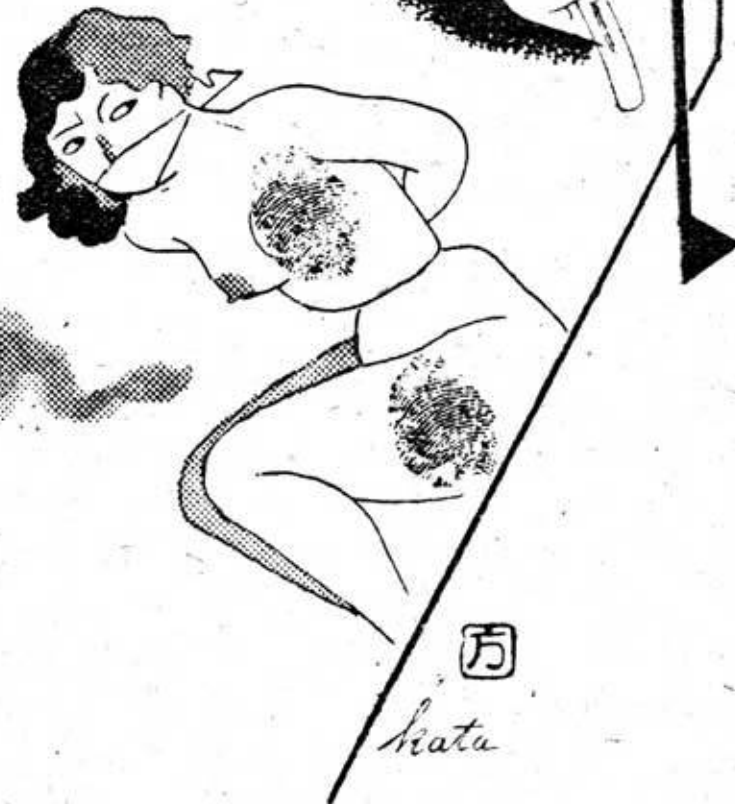
第三部 讚美論

第一章より第四章まで

謎の女と私

岡田 咲子

方 金 三 画



A
「おそいわね。もう来てから一時間になつてよ。もう来て下さらないのかと、思つちまつた」

喫茶スワロウの扉を開けたとたんに、かん高い、仲田和子の声が、私の耳に飛込んで来た。和子さんは私がその椅子に腰かけるのも待ち遠しそうに「なにしてたの？」

と言う。私は多少腹立しくなつて「そんなこと言つたつて仕様がないわ。私は毎日貴女のように出歩ける身分じゃないんだしそれにお仕事がいそがしくて、この一ヶ月ばかり映画へも行けないのよ」

「なぜ？ 原稿書いてるの？」

「それもあるし、女中が故郷に帰つてしまつたんで家事一切私がやつてゐるんだもの。そう和ちゃんがいよいよ言つたつて、なかなか出て来るチャンスがないんだもの」

「そう、そうなら良いのよ。さあ早く行きましようよ。元気だすのよ。ねえ咲子さん、今夜は良い所へ案内して上げるわ。私の親友、あなたも知つてゐるわ、藤村雪子さんよ。あなたの会社のドル箱スターじゃないの」

私はびつくりしてしまつて

「あの藤村さんが？」

と和子さんの顔を見直した。

「そうよ。彼女も是非あなたに来てほしいつて言うのよ。嫌？」

「だつて」

「良いのよ、心配しなかつて、貴女はまだ知らないだらうけれど、とつても素晴らしい人よ。会えば判るわ。あなたも一度で大のファンになれてよ。私もお話しして初めて判つたの」

和子さんは私を引張るように表へ連れ出した。この和子さんが仲田和子——と言つても判らないだらうが——サリー中田と言え、二、三度でもストリップやバーレスク劇場へ入つたことがある人なら、だれでも知つてい

る新宿A座の踊り子だつたから。今でもそうだけれど張ち切れんばかりに赤いセーターをふくらませてゐる美しい乳房と日本人ばなれのした豊満なまるい腰を五色のスボットにかがやかせ、舞台一杯に踊りまわる和子さんのために一時は経営困難で解散しかけていた新宿A座を立ちなおした程、人気があつた。

その頃私は噂だけで見たことも会つたこともなかつたが、丁度三年前私は関西へ移つて来て原稿など書き始めた頃、私の友人が紹介して呉れた。友人の話によると何故東京を去つて大阪の劇場、それも昔日の面影もない三流の舞台へ出演しはじめたのか、だれも知る人がないと言う、謎の様な女だつた。

私もおつき合ひと言つても、まだ一度会つた切りで話をした訳ではなく、サリー中田つてこの人かと知つただけで、そう美しい人だとも思わなかつたが、その豊満な胸には、なるほど立派な体をしていると言う印象は残つていた。

その中に私はもうサリー中田のことも忘れてしまつたし、男でもない私がそんな劇場へ行くこともなく、その後、仲田和子と名乗つて突如、出現するまでは想い出してもみなかつたのに。——

その仲田和子が、突然私の家を訪ねて来たのはそれから一年後の秋であつた。私は訪ねて来た人が昔のサリー仲田だと想い出すのにこまつてしまつたが、玄関に立つたニールツクの洋装の立派な胸元を見たたん、やつと私は想い出すことが出来た。それにしても人間なんて、こうも落ちぶれたり成上つたりするものなのだろうか。その変りように私はおどろいた。

応接間の椅子に私と向き合つた和子さんの素晴らしい豪華な洋装に包まれた姿や、すんなりと長くナイロンの靴下をはいた両足の美しさ、良い香水のにおい。それはあの三流劇場で踊つていた女だつたとは夢にも考える事のない様なスタイルだつた。

和子さんは微笑しながら、まるで幼い時からの親友でもあるかのように気軽に「読みましたのよ、奇譚クラブを——」

と私の言葉もまたず

「岡田さん、私つて女にびつくりなさつてゐるんですよ？ただ貴女の小説をよんだと言うだけで一度お会いしただけの方の家へおしかけて来る女を。でもそんなことどうだつて良いわ。ただ来たりお話ししたなくつただけの話なのよ。それもいたたまれない位だつ

たわ。一度想い立つたら相手の気持なんか考
えていられないのよ、私つて女は——」

私はすっかり気おされて「ハア」とか「
エエ」とか二言三言返事をかえしただけだつ
たのに和子さんは急に私の顔を、一寸はげし
い目つきをして見守つた瞬間

「あなた、好きなんでしょう？ 縛られる
の、いじめられるの。それも女の人に——」

私だつて普通に話合つてゐる時なら、私の原
稿の上に描く主題がそうなんだから、うなず
けもしたのだろうけれど、こうも単刀直入に
ズバリと言われると、私は只呆然として黙つ
ているばかりだつた。私のそんな表情に目で
笑つた和子さんは、すでに私をのんでかかつ
て居た。

「どう？ いじめて上げましょうか？ 嫌？

嫌ではなさそうね。嫌いならばあの小説は
書けないもの。私だつて女の人がいじめられ
ているのを見たり責めたりするのが大好きだ
からこそ、ここへやつて来たんだし、おつき
合ひしてもらえないのなら、最初から厚かま
しく来てやアしないわ。私の目に狂いはない
のよ。貴女は必ずなるわ、私のものに」

と立上ると机の上の紙にペンで書き

「今夜6時、ここに在る喫茶店へ来て下さい

な。スワロウつてのよ。じや待つてゐるわ。き
つと来るのよ、いいわね？」

命令的な口調で言うど帰つて行つた。

その晩、私はまるでみえない糸にでもあや
つられるように、自分でも不思議なほど、そ
わそわと、まるで恋人に会いにでも行くよう
な気持で、指定された喫茶スワロウのドアー
を夢遊病者のように開けていた。

B

「どう？ 痛い？」

和子さんはニヤニヤ笑つて、両腕をうしろ
に固く麻縄でいましめられて倒れている私を
見下ろして言う。

私があゝの喫茶店を出て和子さんの家へ連れ
て行かれ、こんな姿でころがされるまで、ま
だ三時間ほどしか時間はたつて居なかつた。

その三時間ほどの間に、私は和子さんに命
令されるままに手をうしろへ廻して縛られ、
部屋の畳の上にくろがされていた。

ころがされて私は顔を畳へおしつけ真新し
い畳のおいをかきながら限ぎりないこうふ
んに似た喜びを知らず知らずの中に味つて
いたに違いない。

一休あゝの踊り子がこんな立流な家に入れた

のは何故だなんて、その時には全く考えもし
なかつたし、両腕をしめる快よい痛みだけが
全身に満ちあふれていた。

和子さんは倒れた私を抱きおこして、うし
ろからかかえるように、耳に口をよせて
「良い気持らしいわね。私がして上げるわよ
面白い小説が書けるようにね」

少し息をはずませながら言う。そして——

「でも時々には私だつて良い気持になりたい
しね。時には良い気持を通りこしてしまふこ
ともあるわよ。痛い時も、苦しい時も、泣き
たい時だつてきつと有つてよ。気を失つてし
まふことだつてあるわよ。でも駄目よ、貴女
は、ぜつたいに私から逃げられないわ。きつ
と逃げようともしなくなるでしようけれど」

笑つて私の縄をほどこいて

「また来るわね、明日の晩も、良いこと？」

六時にスワロウで待つてゐるわ」

でも私は

「ええでも明日は——」

「駄目？」

「約束が——」

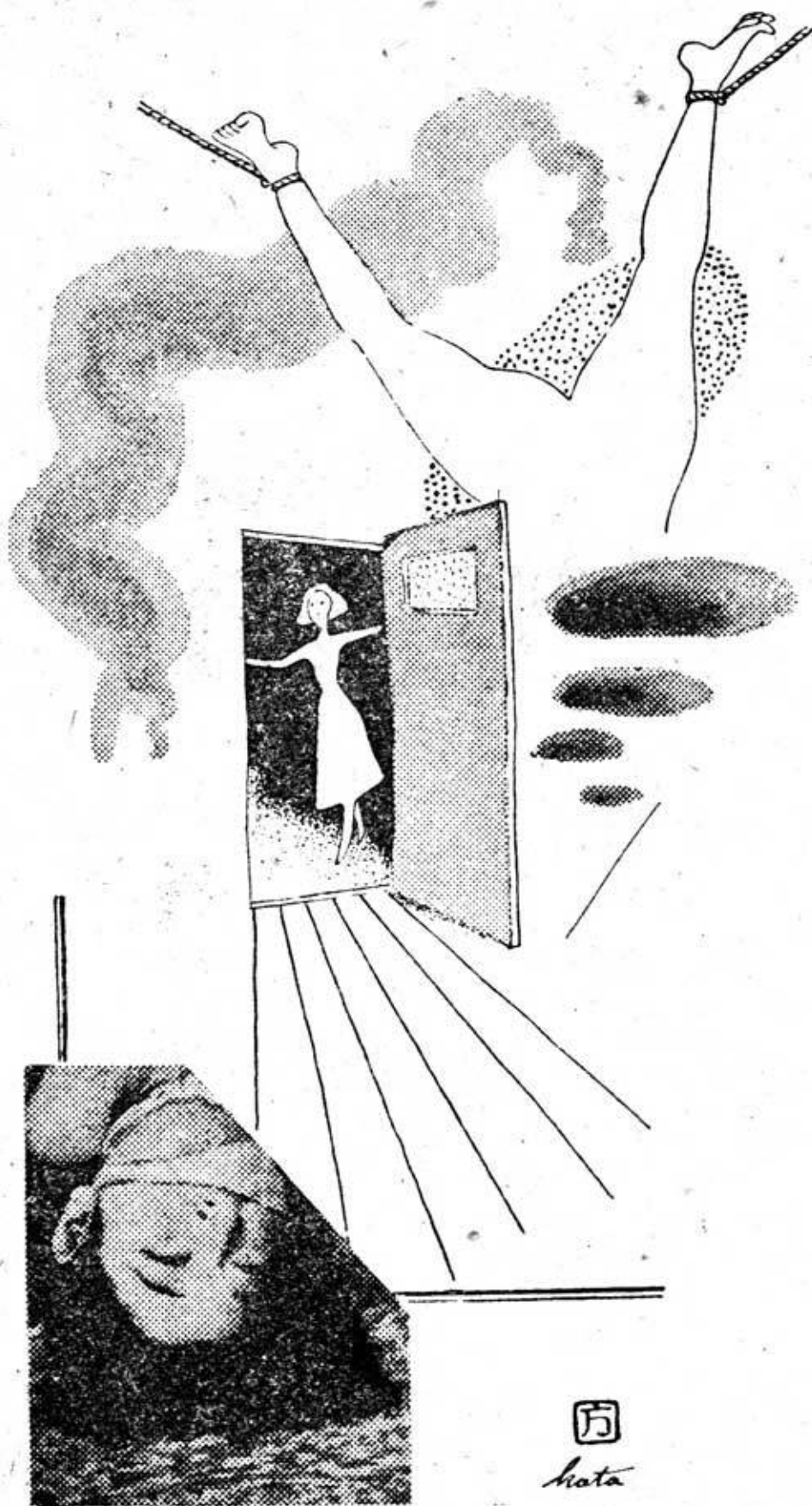
「どうしても駄目？」

「それに家の用事だつてあるし、そう毎晩と
言う訳には——」

言つた時だつた。私は頬ツペたを平手で嫌
 と言う程ひつぱたかれ、そのまま反動で片ひ
 ぎをついてしまった。余りのことに私は大声
 になり
 「なにするの、よッ！」
 となりながら
 「嫌よ、もうこんなこと」
 立上り帰ろうとした私のうしろから、和子
 さんはものも言わずにしがみついていたかと

思うと片掌で私の口をピツタリふたして、お
 さえつけるように私にのしかかつて来ると、
 私の片腕を逆にねじり上げ、馬乗りになつた
 ので、もう私は動けなくなつてしまった。着
 物の袖がほころび、すそはまくれたけれど、
 それどころの騒ぎではない。
 「痛ア、ア―腕を―」
 さけんだが私の口をおさえた掌で、ますま
 す強く口をふたされ、腕が痛くなる。和子さ

今さらながら自分の馬鹿さかげんに涙が出る
 程なさけなかつた。
 私は両手を結えられ、めくり出された両足
 首をぐるぐる縛られながら、もがくのも止め
 て自分が悪かつたのだ、とあきらめてしまつ
 た。原稿を書いて居る時に想像する責めの喜
 びは本当はこんなに苦しいものだろうか？
 と思ひながら。あの夜から今日まで、私は和
 子さんに



んは腕をねじ上げながら
 「痛い？ もう少し強くしては？」
 ブフブンそんなに呻くほど痛む
 の？ 明日の晩来ない気なら、それ
 でも良いんだけど……。それならそ
 れで考えはあるのよ。さア声を出し
 たらこの腕おつちまうから、こつち
 の腕も先刻のようにうしろへおまわ
 しなさいよ、腕がおれない間に、そ
 う、それで良いのよ」
 私は身動きも出来ず、両腕をうし
 ろで組まされふたたび固く手首を縛
 られながら、はじめて夢からさめた
 ように「これは大変なことになつた
 自分はどうしてもこんな女につれられ
 て来てしまったのだらう……。」と

「来なければ、私はどんなことするかも判らないわよ。岡田咲子っていうのはペンネーム知っているのよ、私は貴女の本名を——。だから来なければ、バラスだけよ、貴女と私の秘密を。良い？ 私は貴女がT撮影所の記録係が本職だつてこともね。嫌でしよ会社の人に噂さが拡がるの——」

と強迫され、おどかさながら私は毎晩のように家へ連れて行かれた。そして和子さんは勝ちほこつた女王のように、「裸におなりなさい。今夜はこうして上げましょう」

と全裸体にされ、猿ぐつわをかまされ、手足を縛られて和子さんの言うがままに、責めつけられ、呻き声を上げ、その苦しみに縛られた体をもだえさせ、ぐつたりとして終電車で帰つて来るのが日課のように続いた。

私の体は至る所に縄目や紐あとが赤くあざになつて残つた。乳房や腹部下腹、太腿などには恥しい責めの記録が青く脹れ上つて記された。人の前で洋服のそでを、まくり上げることも出来なくなつて居た。

C

私はだるい体を引ずられるように表へ連れ

出されると、嫌も応もなく自動車で藤村雪子さんの家へ来てしまつた。

玄関のベルをおすと、女中が出て来て

「皆さま、もうおまちかねで——」

和子さんと私を案内して廊下を通り部屋の外で、ドアをノックして

「いらつしやいましたが——」

声をかける。

すると中で、一寸あわてた声で

「あゝそう。しばらく待つて」そのまま三分すると、ドアが開いて雪子さんが花やかに微笑して

「おまちどうさま。咲子さんも良く来て下さつたわね。私、駄目かと思つて、もうこんなナイトガウン着てしまつたのよ」

私たちを部屋へ招いて客室に使っているのかソファアの置いてある洋室の部屋へ腰をおろさせて、雪子さんは和子さんに

「良いの？ 大丈夫？」

「ええ、御心配なく、充分に仕込んでございますから——」

「そう、素敵、きつと今夜は楽しいわよ」

雪子さんは美しい顔をほころばせて、私に「これから親友になりましょうね」

私の肩を軽く叩いて、和子さんとニヤリと

顔見合せて笑っている。

「ママちゃんね？」

和子さんが聞くと、雪子さんはドアの開いたままになつて居る隣室を指して

「朝から向うで遊んで居たのよ」

和子さんは一寸小声で

「大丈夫？ 大切な私たちのパトロンだから余り痛い目させちゃ駄目よ」

「ちがうのよ。いじめるのに、私の方が参つちまうほどのよ。でも大切なパトロンですもの、出来るだけサービスはしているんだけど」

雪子さんは首をふり片目をつぶる。和子さんは

「咲子さん、私たちのパトロンに御紹介するわ。でも、びつくりしちやあ駄目よ」

と言つて私の腕を持つて、その隣りの部屋へ連れて入つた。

私は部屋の中へ一歩ふみ込んだとたんに、「アツ！」と声をのんで棒立ちになつてしまつた。

そこには逆さになつて吊さがつている白い女の体。両足を大きく左右に拡げて天井から吊り下げられ、両手を後手に床スレスレまでに髪をたれ下げた顔は充血して真赤になつ

ている。その上、その女の鼻口には固く猿ぐつわが、尚一層苦しうに締めつけている。生きているのか死んでいるのかピクツとも体を動かさずに居る中年の白い肥った女の体中には赤いミミズばれが無惨に描かれている。和子さんは、青くなっている私に

「この人がパトロン。恐がらなくつても良いわよ。どう？ 貴女も早くいじめてもらいたいのでしょ」

雪子さんは細いムチで一振りビューと、女の体を引っぱたくと、その女は猿ぐつわの下でかすかな呻き声を上げて、ぶら下げられた体もががす度に、吊下げられた両足をピクピクこきざみにけいれんさす。

「さあ、ママさんは一寸休ませて上げましょうよ。一寸手伝つて」

二人は天井から吊つている縄をほどくと、そのまま両手の縄も猿ぐつわもそのままにしてベツトの上へ抱かえてねかす。そして女のそばで

「休けいさせて上げるわ、ママちゃん。この猿ぐつわもこのままじゃあ息苦しいでしょ。鼻の穴だけは出して置いて上げるわ。これからね。今夜来ていただいたお友だちと少し浮気するからかんにんしてね。」

雪子さんは言つて離れようとした時だ。ベツトの上にならないうちにママちゃんと言われた女は急にパツチリ目を開くと顔をこつちへ向け、猿ぐつわの下でなにか呻めくと、憎々しげな目で私の顔をにらめつけている。そして必死に体をうごかし、なにかを言おうとする。和子さんは雪子さんに

「うらまれるわよ」

雪子さんは、もう一本の縄で女のあばれる両足をぐるぐる縛つてしまふと

「おとなしくしていてねママ。すぐまた可愛がつて上げるから——」

雪子さんと和子さんは、私をその部屋から連れ出した。

「咲子さん、どう？ そろそろ遊ぶ仕度しない。ねえ嫌なの？ 恐いの？ まあ、ふるえてるわ、この人」

「私、私、帰らして下さい。嫌、嫌よこんなひどいことするの。私だつて責められたりいじめられたりする楽しさを知らないとは言わないわ。でもこれはちがうわ。本当のリンチよ。こんなに苦しめたり責めたりするのは御免だわ、私——」

私は立上つてさけぶ。

雪子さんは笑つて

「なかなかお上手なお芝居。でも駄目、逃げようつたつて鍵がはずれないわよ。」

和子さんが逃げ出そうとする私の腕をつかむと

「雪子さん早く今の間に——」

と私を羽交じめにしたままソファアーの上へおし倒そうとする。

私はされまいと

「嫌よ、嫌だつたら、痛いわ、は、はなしてつたら、嫌、嫌！」

「駄目！ 駄目よ、いくら荒れたつて痛いだけよ。大声出すところしてやるから。さア口を開けて、もつと大きく——ようし！ 開けないと無理におし込まわよ、このハンカチを」

おさえられた私の口には無茶苦茶に雪子さんの指でハンカチをおし込まれ、舌でおし出さぬように指でおさえながら

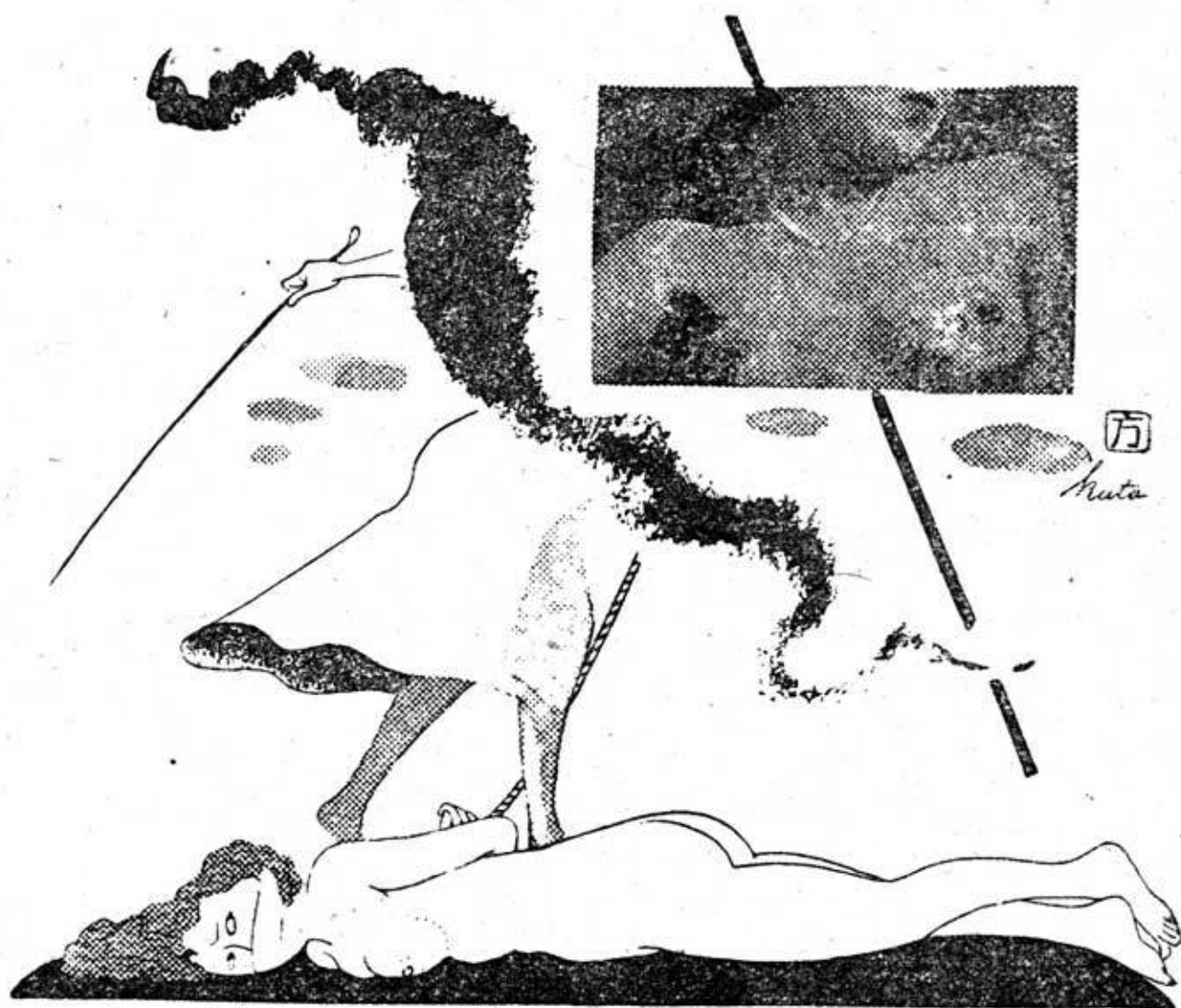
「ねえ和子さん、その抽出しに私の靴下入つててでしょ？ そうそうそれで口の上を縛つてしまいましょよ。苦しうね。でも一寸がまんするのよ」

布衣をおし込まれた私の口は雪子さんのナイロン靴下で二重にしばられ息さえ満足に出来ず、私はただ靴下特有のにおいと体臭で胸もつまり、私の胸の上に馬乗りになつた雪子

さんの乱れたガウンからのぞく白いスベスベした素はだの感触が、ネツトリと私をしめつける。

「如何？一応しやべれなくなつちまつて口惜しそうね。けどもうすぐ死ぬほど楽しませて上げる。私と和子さんと二人がかりでね。ふるえなくつたつて良いのよ痛いのはやめてよろこばして上げるわ。縛る前に言うけど、これから貴女は裸になるのよ。全部脱いで——。もちろん下のものも靴下だつて脱いで全裸体よ。そこまでは和子さんのお仕置きと同じよ。でもそれからが違うのよ。私の専売特許よ。咲子さん、さア、かんねんするのよ。嫌だつたら目を閉じていなさい。ねえ和子さんスカートを脱がして——」

私は両腕をおさえられ、両足を和子さんの両股でしめ上げられながらスカートのホックを脱され、そのまま下半身をむき出しにされ、もがく両足首を細いバンドで縛り上げられた。両手首も縛られてしまうと、着て居る私のジャケツをめくり上げる。そのまま私の顔はジャケ



ツで包まれ、丁度かん袋におし込まれた猫のようにされた私はのびた毛糸の間からかすかに見える外の光景をわずかに盗みみる以外に

は自分の体をどうされようと、ただその感覚で知るより術がない、あわれな姿にされてしまった。

目かくしなら、まだ良い。全然見えないのだから、でもこの毛糸の袋は見える。わずかに見える。なにをされているのか、二人がどんな顔をしているのか毛糸の厚いベールを越して見えるのだ。

笑つて雪子さんは私の下半身をさすりながら顔を近づけて

「良く見えるより、良く見えない楽しさも、また格別よ。ブラジャーを脱すわよ。まア和子さん、案外大きいのね、この人のオツパイフンと和子さんに毎晩いじられたんでしょ。にくらしいわ」

私は乳房を指ではさまれて呻いた。

「和子さん、あそこへロープをかけて、まるい縛り目を作つてやりましようよ。一遍両足のベルトは

ほどいた方がより効果的ね」

一たん私は両足をほどかれた瞬間、両股を拡げられると、私の縛られたうしろ手のベル

トロープがかけられ、そのロープは尻から両股の間を通る。冷いロープの走る尻の割目からさすような痛さが次第に前へ伝わりと

「そう、もつと大きい縛り目にしてその可愛いいマスコットの土へしつかり当るようにして上げて——」

私は恥かしい所に、大きなグリグリを当られて、その縄はジャケツをかぶせられた首へしつかりまきつけられてしまった。

二人の笑う声が聞える。雪子さんは

「さア、私たちも裸になつて、上げましょうよ。如何？ 見える？ 良いわね。ほら和子さんの素敵な体も見えるでしょう？。これ、私の素足よ。今して上げた丁字帯気に入つた。

こうすればもつと気に入るわ」

笑い声と同時に私の体はゴロリとうつ向きにされ私の尻は素足でおさえられゆすられる私は悲鳴を上げた。呻けばしめられたロープが股を引きさきそうに痛む。でもまるいロープの縛り目はピツタリ私の股の間へはさまり込んで床の上で私をゴリゴリまざる。その痛さ、苦しさ、恥しさ、に私はもがく、もがけばもがく程、その痛みは強くなる。口のハソカチは、つばとよだれでベトベトになり脂汗がにじみ出る。

「痛い、痛い、もう許して、許して——」

私は懸命にさけぶ。でもその声は

「ウム、ウム、ウム、ウム」

とかすかな呻き声になつて私の耳に聞えるばかり。なにも見えない私の脇には、はつきり自分の惨めな姿が浮び、見える時よりも一層はげしく私のうずく情慾をほしきままにかき立てて行く。うめき、もだえ、顔をふり再びギユツと縛られた両足の指をのぼしたりちぢめたり、縛られた両手の掌をにぎりしめ、その妖しい慾情から逃げようとする私の耳に雪子さんの声が

「気持ちいいでしょ？ もつと、もつと、もだえれば良い。呻けば良い。この乳房をふるわせて悲鳴を上げれば良い。そうそう、もつともがくのよ、腰をうごかして、お腹を上下させて——。どう？ これでは？ さアもう少しよ、もう少しできつと、きつと、きつと良くなるわ」

和子さんの声が側から

「じゃ次は私が上向きにして、もんで上げましょうね。どう？ この位？ もう少し強くして上げましょうか？」

かすかに見える毛糸の間からチカチカした光が強く私の脇を走る。その光は次第にまる

い円を画き始め、だんだん早くまわり始める。体中がその輪になつてまわり出す。

そのまる輪が、両足を拡げて縛られたあのママさんとよばれた肥った女になる。女がまわる。まわりながら私になる。まわる。まわる。ぐるぐる私はまわる。一瞬、全てが私の脇からとび散つて、私の体は弓なりにのけぞつたまま、深い谷底へおちて行つた。

D

(后8時喫茶スワロウで待つ)

今夜もまた、私は行かなければならない。行かなければ居られなくなつてしまった私。仲田和子の字のかわりに藤村雪子と呼出し状の名もかわつた。

あれから和子さんはパツタリ来なくなつてしまった。私を横取りされてしまった腹立たしさに、肥った女を連れて何処かへ姿をかくしてしまった和子さん。次に姿を現わす時はどんな姿で出て来るか？。本当に謎のような女の人。

私は玄関を出て身ぶるいする。

今夜の楽しみに胸をふるわせて、喫茶スワロウのドアに片手をかける。

(終)

◆告白と手記と体験◆

懸賞募集

★賞金★

優秀作 一篇につき 三千円 若干篇
佳作 一篇につき 二千円 若干篇

規定

- 一、枚数は一篇十枚から二十枚まで、若し超過しても三十枚を超えないこと。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入賞作品及びその経過は誌上に発表します。
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

◎告白記の募集◎

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便（百瓦まで八円）にて御願ひ致します。

(編集部)

私は、もう二十年も東京の某大学の病理学教室に解剖の助手として勤務している。私は医者ではないが、実際の解剖の経験は、若いお医者さんたちより、はるかに多いつもりである。

一般の人には解剖と云うものは珍らしいものであるろうし、本誌の読者にも興味を呼びおこすだろうと思うので、少しこれについてお話ししてみよう。

お断りしておくが、私は別に学問もなく、

こゝに書くことは、実際に私がこの目で見、この手で行った一つ一つの経験の集積といふべきもののみである。従つて実際に間違ひはないが、その学問的な意味づけは、私のなし得るところではない。

解剖室

皆さんは解剖室と云うと陰惨な暗い、じめじめした恐ろしい妖気漂う部屋を想像するかも知れない。しかし実際は三十畳許りの白いタイル張りの明るい清潔な部屋である。

解剖台は大理石製で室の中央にあり、足もとに水道の蛇口がついており、解剖中終始台上を水が流れるようになってゐる。これは血や汚物を洗い流すためである。

室の一方には水道栓の竝んだ流しがあり、人体からとり出した内臓を、こゝで洗うようになつてゐる。丁度手術室を思い出して戴ければ、当らずといえども遠からずであらう。

もつとも私の述べてゐるのは、病理解剖（病氣の原因や病的な変化を研究するための解

剖の場合のことであるから）
法医解剖（殺人や自殺や死因不明の場合、それは究めるために行う解剖）や解剖教室における正常の人体の構造をしらべるためにする解剖の場合とは多少異っているのである。しかしいづれにしても大同小異だと思ふが、法医や解剖の教室のことは、私は良くは知らない。以下私が話すことはすべて病理解剖の場合と御承知ありたい。

服 装

解剖の場合の服装は普通下着の上に白衣の上衣とズボンをつけ、その上に丁度割烹着のように前から羽織つて後で二ヶ所で紐でむすぶ白衣を着る。そして胸前から足もとまで、すつかり被うようなゴム前掛を着て、頭髮は白い帽子で保護する。それにマスクをつける。足もとは特に不潔になり易いので、ゴム長靴を穿く。

肝腎な手は大抵の場合素手で別にゴム手袋などを使用することはない。もつとも特別な

解剖物語

—女体解剖の経験—



吉田一太郎

伝染病や、解剖をする人の手指に傷がある場合には危険であるから、ゴム手袋をする場合がある。この時はすべり止めに、その上から木綿の手袋を更にはめることが多い。皆慣れ

ていて、服装に特に大騒ぎをすることはないが、先日癩の人の解剖の場合には、流石に先

生方も余り気持良くはないらしく、手もすつかりゴム手袋で包んで慎重にやつていた。手伝つた私もいつもとは、いくらかちがつた緊張をおぼえた。

剖 用 具

これは概ね手術の用具に似ている。しかし一般に手術用具よりもすべて大振りで頑丈に出来ている。屍体は痛いとは云わないし、多少メスがすべつても、今更生命にかかわることがないからかも知れない。又強い癒着などで殆ど力一杯引つぱつたりしなければならぬ場合もないわけではないから、その意味でも余り華奢なものでは困るのだろう。

私の手伝う解剖では、メスは殆ど刃渡り五寸もあつて先はするどくがつているものを用いている。あとは大小の計量器の類いが手術と異つているところだろうか。

屍 体

学問の研究のために解剖台上にのぼられる

尊い屍体については、不純な気持ちでいろいろ云いたくない。

でも木石でない私などは、全裸の真白な女体などの場合には、屍体であることを忘れてしばし見とれていることがあると正直に云つてはいけないうか。

屍体には死後の処置として口、鼻腔、膣、肛門などに多量の綿をつめてある。これは病院に於ける死後の処置であつて解剖とは直接関係はない。

解剖の方法

運ばれて来た屍体は、全裸にして、まず大きな板の上にのせて身長を計り、更にそのまま体重をかける。

次に解剖台上に移して一礼し、まず外表を詳細にしらべる。いよいよメスがとられる。

最初のメスは真白で柔かい頤の下から一直線に咽喉部、胸部、腹部と下つてゆき臍は右に避けて、つまり人間を縦に一直線に二つに割る恰好に入れられる。

道具類は屍体の足もとの小卓上にならべてある。

そして胸腹部の皮下組織を筋肉とともに左右に剥してゆく。胸の方は肋骨が白く見えてくるし、腹部は腹膜が銀色に光る強靱な紙の

ように露出される。女体殊に肥満した人の場合は、皮下脂肪が厚くメスも手もヌルヌルと脂切つてくるのが常である。

肋骨は腋の下から鋏でパシパシと切られ、腹膜は解剖剪刀で縦に切り開かれる。すると胸窩には両側の肺と中央の心臓が露われるし、腹腔の方では、黄色い脂肪の一杯ついた大網膜というエプロンのような網に被われた腸が出てくる。

大網膜を上を持ちあげて横行結腸と胃とに附着している部分から鋏で切りとり、腸がうずまきように詰つていゝ腹腔をのぞきこむ。

更に十二指腸の上端を糸で縛つて、腸を一本の蛇のように切り離して腹腔からとり出してくる。

腸は身長のお三倍半位の長さがあるそうで、この仕事はかなり時間がかかる。病氣によつては腸が変色して腐つていたり、恐しくふくれあがつて腹膜を切ると飛び出してくるものもある。腸は直腸の部分までとつて、全く一本の管として体外にとり出す。本誌の読者のうちには肛門や腸に特に愛着を持つてゐる人があるようだが、その人たちには、さぞ魅力がある光景であらうと思う。特に変つた人でなくとも、真白な女体の皮膚に最初のメスが入る

時は胸がとどろく思いがするだろう。

腸は術者の先生から私の手に渡つて、それを流しの水道のカランに一端をかけ、糞便を流しながら腸の内腔を長い鋏で切り開いてゆく。解剖では、この仕事が一番不愉快なものかも知れない。夏などは当然、かなり臭い。いくら嚴重にマスクをしていても、この臭いからは逃れられない。自分では気付かなくても、解剖がすんだあとの人とすれちがうとブンと臭つてくることがある。馴れてしまえば何でもない。

更に腸を後腹壁につけていた腸間膜（肥つた婦人ならば、こゝも脂肪でうずまつてゐる事が多い）を切りとつてしまふと両側の腰の部に輸尿管と腎臓、上の方に大きな暗赤色の肝臓、胃十二指腸、下腹部骨盤の中には、可愛らしい左右の卵巣と花のようにひらいた採管、そして輸卵管、子宮膀胱などが見える、これを一一つとり出してゆく。生殖器や膀胱などは大概ひとまとめにつけて取り出すことが多い。

腎臓はそら豆形でつやつやし如何にも利口者に見えるし、肝臓は大きいばかりで愚か者に見える。三日月型の小さい副腎や胸腺、甲状腺などは気のきいたアクセサリと云えるだ

ろう。

内臓は夫々大きさを計り目方をしらべて別のテーブルの上におかれる。その頃には腸もすつかり内腔を上にして台の上に拡げられている。昨日まで喜んだり悲しんだり苦しんだりした女の人の臓器が、今は明るい光のもとに晒されているのを見ることは、始めの頃は異様な感じがした。胸部の方は、左右の肺、心臓がとり出され、気管や扁桃腺は、頤の下からメスを入れて舌をつけてとられる。

脳をとる場合には、両耳の上から頭頂部を通るメスを頭髮の中にいれ、頭皮を剃いでゆくと白い頭蓋骨が露出してくる。そしたら大きい鋸で額の前から後頭部にかけて、水平に引くのである。これは相当力のいる仕事である。鈍い音をたてて頭蓋骨がひき切れると遂にボンと頭蓋が上にとれ、白いやわらかい、ひだの多い脳髓が現われてくる。これをメスや鋏を使って丁寧に脳底骨から離すと、脳髓が頭蓋骨から離れてくる。これに触つてみると不思議な軟かさをしている。人の一生がすべてこゝで統制され、様々の思いや感情や運動がこゝから発したと思えば、相手が女人であるだけに感慨無量である。形で見れば、ただ白々とした芋虫の集りのような感じがする

たけのものである。諸行無常の氣を人に起させる。

内臓はすべてメスで開かれ試べられて、ホルマリリンの中に保存される。病名や名をかけた札がはりつけられる。

解剖の方法としては、これだけのもので、

慣れてしまえば

別にこれと云つ

た事新しい感動

もないが、始め

の頃は、やはり

相当刺戟的であ

り、他方では相

当以上氣味が悪

かった。皮下組

織の黄色い厚い

脂肪層をみて、

リードが耐らな

くなつたり、腸

内の糞便を見て

昼食のライスカ

レーが、食えな

くなつたことな

どが、何度もあ

つた。



しかしよく考えて見れば、一人の昨日まで生きていた女の人が、屍体となつて、まばゆい照明燈に照らし出され、メスで切り開かれフォルマリリン入りのガラス瓶に永久に保存される。このこと自身は、たしかに被虐的な興味があるだろう。

解剖を手伝う

助手は、一般に

長期に亘つて勤

務する人が多い

この仕事に耐え

られない人は数

ヶ月のうちに皆

やめてしまつて

特定の人々だけ

残るからである

うか。我々は時

々集つて、「自

分たちは少し人

と変つていろの

だろうか」と話

合ふことがある

自分では常の人

のつもりでいる

のだが。

読者諸氏乃至は諸嬢の中には、解剖された
いと幻想する人があるのではないか。時々我
々●ところへ又は先生に是非解剖を見せてく
れと頼みにくる若い娘さんがある。これらの
大部分の人は、ただもの珍らしさや或いは、
純粹に人体の内部や内臓の觀察に興味があつ
て、他意ないのであるが、つい先日来た娘さ
んは、はつきりと「解剖をされる夢を見るの」
と云い「時々解剖されなくなる」と洩らし
ていた。本人は大変明るく無邪気にこの言葉
を口にしたので、不注意だと聴きのがしてし
まうようなものであつたが、自分は、なる程
こう云う娘さんもあるのだと思つた。

以前、本誌の誌上に、このような願望を詳
細に書いた人があつたと記憶しているし、又
最近たびたび掲載される女の人の切腹願望も
これに類するのではないだろうか。

普通日本人のマゾヒズムは、縛られるとか
鞭で打たれるとか、そういった型で表現され
るようであるが、切られるとか傷けられると
か、そのような型でこれが現れる場合もある
のであろう。そしてこれには露出されて衆人
に見られる、人々の前に自分を晒す、その意
識が入っているのである。最近時々その娘さ
んと話をする機会があるようになったが、よ

く話合つて見ると、彼女の心理の中には、こ
のような意識が潜在して見えている。このこ
とは、通常の婦人にも多かれ少なかれ存在し
てはいるのだろう。傷けられて血が流れる、
そのことが彼らには欲情的に仇のた。もつ
とも、これらの娘さんたちの解剖が見たいと
云う願ひは、私の勤めている教室では殆ど拒
否されている。看護婦学校の生徒は特別で、
いやでも、一回は見なくてはならないのだが
大部分の娘さんは解剖は珍らしいために、一
応は見たがつても、見ているうちに氣持が悪
くなつたり、そうでないものも一度見れば再
び見ようとはしないものだ。

平気で、たびたび見たがるような若い娘。
だけではなく中年の婦人にしても、それらの
人々は多少ともサデイがかつてゐるか、相当
のマゾヒストか、無意識のうちには確かに人
よりも、その方面の傾向の強い人たちのよう
である。

男でも、純粹の学問的な興味があるにしろ
一生、病理学者として立つて、屍体ととりく
んで過す人々は、やはり多少片よつた傾向の
人だろうと、この間、教室の先生方に話した
ら、叱られた。

しかし、それでも私は何かそうではないか

と思いたい氣がする。先生がたは皆温厚な紳
士ばかりであるけれども。

「傷つけて血を流す」と云うことから思い出
したのであるが、ちよつと考えると解剖は血
まれになつて鮮血淋漓、血の海を御想像にな
るかも知れないが、實際は余り血が出ないも
のである。季節や死んだ時の状態に關係があ
るらしく、突然死んだ人などは血がやはり
流動性で多いようである。死んでから解剖さ
れるまでの時間も影響があるのかも知れな
い。血が出てても要領よく順序正しくすめら
れる解剖では、手際よく処理されてしまうの
で、余り派手に血まみれになることはすくな
い、病氣にも依るし、いろいろな条件がある
にしても、一般の人々が想像する程、むごた
らしいものではない。

しかしこれは、解剖に馴れ切つた私の感覺
かもしれない。胸腔も腹腔も空っぽになり頭
蓋骨は、鋸でひききられて折り返した頭髮の
長い皮膚がべつたりと屍体の顔を被い、長い
髪の毛が肩などにくつついてゐる光景は、た
しかに、それ程、氣持の良いものではあるま
い。それと同時に解剖されることを恋う御婦
人には、チャーミングな風景とも云えよう。
腹腔の中では、長い腸が特殊の持味を持つ

ている。いつか精神科の若い先生が遊びに來られて、人間の精神發育の途上に、肛門に執着する「肛門愛」の時期があると話しておられたのを聞いた事とがある。特別に「腸」が好きな婦人が居る。これは、もうずつと以前私が始めてこの教室につとめて間もない頃、教室の実験室の方に勤務していた二十歳になる女の実験室助手がそうであつた。

当時は私も若かつたので、この娘さんとはよく話したが、一年ばかりののち、私に「腸を見ると、あのガラス瓶に入っている長い腸を見ていると、何だかたまらなくなるの」と告白したことがあつた。この娘は、だから閑があると、標本庫に入っていた。こゝは薄暗くて、何千何万のガラス瓶入の内臓や、人間の輪切りや、畸形の胎児があつて、決して気味の悪い所ではない。まして若い娘などはこゝに入るのを極端に怖がり嫌がつたのだ。しかしこの娘だけは不思議にこゝに入りたがつた。暗い雨の夕暮、ひよと標本庫をのぞくと、たゞでさえ薄暗いこの部屋の中に、ぽつとりと一人若い娘が一心にガラス瓶の腸をのぞきこんでいることがある。私には、ガラス瓶の腸よりも、そのような時の娘の姿の方が余程気味が悪かつた。普段は明るい大人

しい娘で誰からも可愛がられた子だつたのだが。

今はもう三十過ぎて、どこかで良いおかみさんになつてゐることだろう。今でも、暗い標本庫で仕事の時、ふとこの娘を思い出すことがある。すると何か妖気みたいなものが、この無数の内臓を入れたガラス瓶の間から立ちのぼるような気がしたものだ。

それ以来、私は、婦人の中には、腸に特別

【読者通信】

(投稿歓迎)

川端多奈子嬢の悦虐姿態集御送付ありがとうございました。小生の好きなエビ責を基調としたものが多く、ポーズ表情共満足ですが、唯肝腎な所が腰巻で隠されているのが残念でした。勿論公開物としてそのものズバリと出すわけにはゆきませんが、カメラの角度を工夫して全裸のエビ責が出来なかつたものでしょうか(今迄時々見ましたし、殊に「美しき縛しめ第一集」のそれは素敵でしたが、残念ながら顔が手拭で見えませんでしたネ)要するに写真では見えなくても、カメラマン、ライ

トマン、助手等に彼女の大事な所がまる見えという想像の余地がほしいのです。でもエビ責は川端さんの一手引受けですネ、他のモデル達は承知しないのですか、十一月号の「女が縛られる迄」のあのモデルさん(可憐な美少女)の全裸のエビ責、見たいですネ、数名のモデルによるエビ責特集頼みます。それに

の気持をもつ人が、あると信ずるようになった。たしか本誌上でも羽村さんと云う方が、これに似たことを書いていたのを読んだ時に私はふと、この人が昔のあの娘ではないのだろうか、と思つたことがあつた、本当の羽村さん、恐らないで下さい。これはただ私が勝手に、ひよつとそう思つただけの話で、別に根拠のあることではないのだから。(丁)

しても川端さんのポーズは強烈なのが多いですネ、よくあなたのエビ責を夢に見ます。でも中心になるべき所が実際に見た事のないせいか、夢の中でもポーズとしてゐるのです。

—下略— (神奈川生)

「アリスの人生学校」入手致し、帰宅してみればKK通信第十六号も配達されておりましたので二重の喜びを得る事が出来ました。昨夜は旅行でいさゝか疲れて居りましたが読み始めると中々止められず、遂に一晩で通読してしまいました。今晚はゆつくりと味わいながら読むつもりです。昨夜読んで感じた事は他の娘達が実の親から又ける折檻は其の場限りであるが、継子であるアリスは日夜休む間もない程折檻される。日本でも継母は矢張り継子いじめに依つて性的興奮にかられて次第に手段を選ばなくなるといふ事です。私はそれを真剣に考えました

(JA生)

感情教育

【五】

吾妻新

栗原伸・畫

カリカチュア

他人にとつてはなんでもないことが、ある人間にはショックを与えることがある。これから述べる章三郎の経験もそれであつた。

正月も間近い木枯の吹く晩、結城夫婦はかえりの電車にのつていた。新宿で映画をみて夕飯をすませたから八時すぎだつたろう。二人はオーバーの襟を立て、がらんとした車の片隅にすわつていた。

いまの西武線は新宿発で、ラッシュなどものすごい混雑ぶりだが当時（昭和九年）はいつ乗つてもガラ空きで、それも始発駅から三つか四つ目になると大抵の客はおりてしまう。まして夜だつた。由紀たちの乗っている車輛には四五人しかいなかった。

その中の二人づれが、章三郎の斜め向いに掛けていた。男は角刈り頭の肩巾のひろい一見職人風で、女はすこしも美しくないが、キモノをきたわかい娘だつた。（或は娘でなかつたかもしれない）

はじめはなんにも感じなかつたが、そのうちにどうも様子がおかしいので、章三郎は注意するようになった。気がつく、他の二三

人の客も、遠くからこの一組に視線を向けているのである。

その男はからだを女に向けてほとんどアグラのように足を組み、しきりに何かくどいている。女は身をかくして俯向いたきりだ。顔を触れんばかり近づけて、笑つたり口をとがらしたりする様子が実に野卑で、章三郎は嫌悪をかんじた。ところが、そのうちに男の右手が大きくおどつたかと思うと、女の頬をびしやツと叩いた。話声が聞き取れぬほど電車の震動音が高いのにハッキリ聞えたのだから、相当強かつたにそらない。

それだけでなかつた。女が手で頬をおさえたと同時に、男は力まかせに膝をつねつた。これもキモノがよじれるほどひどいものだつた。「あ」と言つて前屈みになり、膝を押えると、また手をふりあげる。それを防ごうとしてあわてて手を上げると、膝をねらおうとする。しかもうす気味わるい笑いをうかべて、猫が鼠を弄ぶようにやるのだ。

章三郎の顔いろが変つた。すると、それを見抜くように、由紀がすばやく手首をつかんでささやいた。

「いやよ、じつとしててよ」

「なぜだ？」

「なぜでもないや。いいから、ほつとくのよ。こんなところで、ケンカなんか厭だつたら！」

「ケンカはしないよ。しかし……」

じつと章三郎も戸まどつた。この男女は夫婦なのか、他人なのか、それもわからない。なんのために苛めているのかも見当がつかない。それに、いくら空いた電車とはいえ、他人の見ている前でこんなことをする神経が信じられない位である。彼は一瞬ためらつた。

その間も男の攻撃はつづいていた。女はうろたえて泣かんばかりだつた。公衆の視線が集中しているのを意識しているのは明らかに男のほうでなく、この女なのだ。彼女は両手をあげて防ぎながらも、その恰好のみじめさに耐えがたいように身をもだえた。

突然、章三郎の胸を塊りがつきあげてきた。もうこの破廉恥さを見ていられない。嫌悪と憎悪の入れまじつた激しい感情はどうにも抑えがたいものになつた。

「おい、こんど鷲宮か」

「ええ」

彼は由紀の手をふりきると、いきなり前へとびだして、男の頭の上の吊革につかまつた。そして、「よせ！」とどなつた。

男ははじめて彼の存在に気がついたと言わんばかりに見上げたが、たちまち剣悪な表情になつた。

「なんだと！」



「こんなところで、へんな真似はよせ。さつきから何をしてやがるんだ」

「なに、なに、なに」

肝高い早口で言つたかと思うと、男は立ち上つて彼のオーバーの襟をつかんだ。

「やる気か」

と、三郎も殺氣立つた。

「あたりめえだ、この野郎」

言うが早い、その男はいきなり拳を固めてなぐりかかつてきた。とにかく乱暴な話である。

章三郎はこの男より体格が劣っているけれども、半年まえから空手を練習しているから、この種の攻撃にはおどろかない。左腕で相手の手首をはねあげると同時に、右の正拳で相手の顔の中央を突いた。これは平安二段のごく初歩の型で、べつに彼が強いわけではないのだが、苦もなく男はあおむけにひっくりかえつた。そして、いつまで待つても起きてこなかった。

そのときの心境は殺してやりたいほどだったが、実際に後頭部を打つて死んだりされては大変だから、彼は近づいて髪の毛をつかみ激しく揺ぶつてみた。すると男は眼をあけて、痛そうに顔をしかめ両手で頭をかかえた。「わかつたか」と言つて、彼はやつと安心した。

かなり興奮していたから、章三郎は由紀が青い顔をしていたことも、他の乗客が不安な表情でじつとこちらをうかがっているのにもさして気をとめなかつた。だが、わかい女だけは気にかかつた。電車をおりるとき、彼は足をとめてふりかえつた。すると彼女は羞恥

で消え入らんばかりの風情で、ちよつと章三郎を見、あわてて倒れている男に眼をうつした。

駅から家までのくらい道を、二人は肩をならべて、だまつて歩いた。

なぜ彼女は下車しなかつたのだろうか？ 時間はまだ早いものだから上りの電車を待つて引返せば、あの乱暴者から逃げだせる筈である。それも、あのときに限る。そのうちに男が起き上れば逃げるチャンスはなくなつて、また何をされるか分つたものではないのだ。そのとき、いやな想像が頭をかすめた。それはたちまち黒雲のように拡がつて、章三郎を打ちのめしてしまつた。

——ひよつとして、彼女は逃げる気がなかつたのかもしれない。彼女が苦しんだのはただ、男のセンスが粗野で、公衆の面前で平気でやつたことだけであつて、苦痛そのものには満足していたのかも知れない。

そうだとすれば、彼の義侠心はすこしも彼女を救つたことにならず、むしろとんでもない迷惑だつたことになる。そこまで仮定を押し進めてきたとき、彼はなんともやり切れない氣持になつてきた。

だが、なぜそんな空想をするのか？ 一般に考えられないような特殊な場合を、なぜ選りに選つて想定し、まるで疑う余地がないかのように考えこむのか？ あのとき居合わせた他の乗客はそんなことを考えやしない。暴漢から女を助けた位にしか思つてやしないのだ。

この自己分析が章三郎にあたえたショックは説明しがたい、奇妙な、屈辱にちかいものだつた。おそらく彼は氣狂いじみた男の行為に、じぶんの戯画化された影をみたのだ。

もちろん彼は自分とあの男との類似をぜつたいに拒否する。第一言葉のほんとうの意味で由紀をいじめたり苦しめたりしたことはない。それは由紀も知っている。じぶんたち夫婦とくらべれば彼等のやつたことは残忍で、グロテスクで、醜悪だ。……しかし、と影の声はささやく。(もしも彼等がそれで満足しているなら、どうグロテスクにみえようと結局はおなじではないか。たとえ男の平手打が容謝なく、つねりかたが血の出るほど痛かろうと、女がそれを望んで歓喜を感じるならいいではないか。それがお前の持論だつたではないか。お前はそれを知っている。お前の眼の前で演じられた不愉快な姿はお前自身なのだ。だからお前はあんなにも怒りに燃え、相手を殺したいほどの気持になつたのだ。抹殺したいのはお前のサディスティックな性格だつた。心の底のふかくでは、お前はそれを恥じている！ けつして平気ではない。あの男は、いわばお前の恥部をさらけだし、お前を羞かしめたのだ……)

「どうしてだまつているの？」

茶の間に落ちついてから、由紀は声をかけた。「もう、今夜のこととは忘れなさいよ」

その言いかたが章三郎を傷けた。妻は俺の気持を悟つて、同情しているのではあるまいか。

「君はどう思う？」と、彼は顔をあげてたずねた。由紀は無邪気に見返した。

「どうつて？」

「あの男のことだよ」

「べつにどうも思わないわ。ただ、あなたが手を出しやしないかとハラハラしてただけよ。私、ケンカは大きい！」

「そんなことを訊いてるんじゃないんだ。あの男の行為をどう感じたかというんだ。連れの女をなくつたり、抓つたり……」

「あれは気狂いよ。だから私、相手にしないで欲しかったの。ああいう乱暴な男は、なにをするかわからなくつてよ」

おお、なんと明快に、単純に割り切つてくれることだろう！ 章三郎は長火鉢越しにいきなり彼女の腕をつかんだ。

「君、それ、本心で言うのか？」

「ええ、でも、どうしたのよ」

返事のかわりに、章三郎は嗚咽しはじめた。

この男の哭くのをみるのははじめてだつたから、由紀はすつかりおどろいてしまった。

「ねえ、どうしたの？……ねえ！」

彼は立ちあがつてその傍にすわり、由紀を抱きしめて、狂気のようにくちずけた。涙がおちて、妻の頬をぬらした。

「今夜はどうしたの？ なぜ哭いたりするの？ 訳をはなして……」

「できない。僕は、幸福なんだ」

じぶんの性質をアブノーマルだとはけつして認めず、すべてを広範な前戯のなかに溶けこませ、それを受け容れるように説き、教育し、馴らしてきた彼は、まだ心の片隅に後ろめたい気持を引きずっていたのである。ところが妻はなんの先入見も持つていなかった。本能と肉体とをもつてこの困難な問題を解決してしまつたのだ。章三郎は幾年もかかつて悩みぬきながら、理論や分析を通して罪悪感を克服したが、由紀はこの教師の結論からはいりこんで、ひろい性愛の世界を自由に泳ぎまわっていた。それに気づいたとき、彼の抑圧は一度に消えてしまった。

「じゃ、僕はやさしい夫だね。由紀、答えてごらん」

と彼は、子供のようにせがんだ。

「そうよ。なぜ改まつてきくの？」

「ききたいんだよ。もつと訊くよ。じゃあ僕が苛めたりしても大丈夫だね。今までみたいに、縛ったり猿ぐつわをはめたりしても、やつぱりやさしい夫だね」

「知らない」

「言わなくちやいけない。もちろん君を愛して、遊びとしての話だぜ。さあ！」

「わかつてるわよ。でも、臭いのだけは閉口だわ」

甘い口調のひびきから、彼は何もかもが保証されているような気持ちになった。安心と歓びでいつそう彼は夢中になった。

「よしよし、じゃあ、これからほもつと臭い匂いを嗅がせてやるかな」

「下品なこと、言わないでちょうだい」

「下品なことを言いたいんだよ」



ねえ由紀、こんど、僕の輝ね……」

「バカ！」

まったくバカであつた。それでも彼は幸福だつた。

電車の出来事などは、一夜明けるとケロリと忘れてしまつた。

風呂のなかで

年を越して由紀は妊娠した。結婚したときから相談して、最初の子供は自然にまかせ、あとはコントロールするつもりだつたから、おどろくことはないが、このためにサディステイクな遊びは多少変つてきた。ひとつはパジャマが着られなくなつたこと、もうひとつは風呂を買つたことである。

すでに述べたように、由紀のパジャマは三着とも身体に合わせてつくられ、特に下腹から股の附根にかけてはピッタリしているから、妊娠三、四カ月の、ほとんど目立たないころでも無

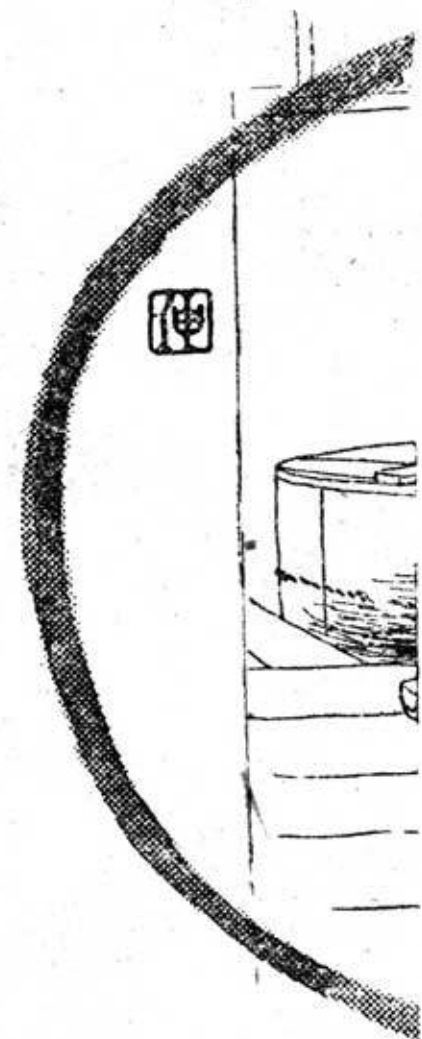
理だった。そこで彼は、裾に白と黒で鶴を描いた緋の長襦袢をきせ、伊達巻をしめさせた。まさに百八十度の転回である。

冬はもちろん夏でも由紀を裸にしたがらないのは、皮膚の触感をいつまでもフレッシュにさせておきたいためだが、もうひとつ、日記の告白でわかつたように、章三郎は乳房にあまり興味が

ないためでもあつた。これは彼が兄弟じゆうでいちばん早く親への執着から脱け出したことと関係があるように思われる。彼は小学生のころ当時はやつた南洋発展熱に浮かされて、家出しようとして置手紙までかいた人間である。母はやさしい天使のような人だったが、どんなに永く離れていようと章三郎は寂しさを感じたことがない。

わかいときから家を出て独立することばかり考えていた。母体への郷愁がまるつきりない彼は、乳、乳臭いもの（たとえば赤ん坊）、乳房などに惹かれない。大学生時代、すでに妻帯した先輩の下宿を訪ねたとき、十八才のわかい妻が彼を誘惑しようとして豊かな乳房をさらけだしてみせたことがあつた。彼はおかしかつた。そんなものを見せてくれないほうが、ずっと魅力を感じたからだ。

彼のリビドは、主として顔と下半身に集中される。乳房へのリビドがそれだけ余計に上下に分配された観がある。だから彼は、いやな言い方だが、相当の「お面食い」である。由紀との結婚にしてもどう尤もらしい理窟をくつつけようと、彼女が並はずれて美貌だったからである。下半身では下腹、腿、尻。ただし恥毛にはなんの執



着がない。

こういう細かな理由をつなぎ合せると、なぜ彼が特に裸体が必要としないかがわかる。またサディズムの遊戯の場合にも、なぜピッタリしたズボンを穿かせて股間を縛ることに工夫したり、「恥かしいところ」を露出させるより俯伏せを好んだり、美しい顔の凌辱——よごれた猿轡に熱中したりするかが、説明できるようである。

おなじ心理作用は長襦袢にも延長される。巾のひろい伊達巻を締めさせるのは、腰紐よりもキツチリして胸がはだけないからだつた。そのかわり、胸高にしまった伊達巻のギリギリのところまで裾をまくつたりする。要するに顔と腰との中間はどうでもいいようなもので、みごとに由紀の乳房は直接眺めるより衣服の下で瘤起しているほうがよかつた。

長襦袢で縛るときは大抵胸にかけた。さもないと袖がペラペラして感じがでないからだ。逆に、一度裸にして縛るときは後ろ手だけにして、その上から長襦袢をきせ、伊達巻をしめる。すると両腕を通さない袖がタラリとたれて、眼にみえぬ後ろ手姿が魅力だった。このようにして彼はどれだけ楽しんだかわからない。

猿轡だけは容謝なく進歩(?)した。これは章三郎にとつてどうにも抑えることのできない要求だつた上に、由紀はそれを諦めながら、いつまでたつても汚臭に馴れることができなかったからである。清潔好きで潔癖な彼女は、ただひとつ、この猿轡にだけは無理

矢理屈伏させられた形だつた。彼女はそれを「あなたの悪癖」とよんでいた。だがこの悪癖は時とともに募るばかりだつた。

今まで彼のやつたことは、口の中にハンケチを入れ、その上をよごれた襦で掩つたのだが、いまでは口に押し込むものにまで汚れた襦を用いるようになった。それは半分もはいらぬ。そこで汚れた部分を上口唇から上に折り曲げるようにして鼻のまわりに掻きよせその上からあらためて汚れた部分を押し当てて縛るのである。ねじり方、附紐の用い方は前に述べた。こうすると下の襦の不用の部分にはあちこちにはみだしてダラシなく見えるが、汚辱の目的は完全に達せられる。それは由紀の悶えかたでわかつた。しかも、燃え立つような緋色の長襦袢や美しい元祿の伊達巻姿にたいして、茶色にドス汚れた猿轡の色彩のアンバランスはまことに強烈で、ある意味では汚したパジャマの統一的效果よりも刺戟的であつた。

ところが、こういう世界の発明や発見はきりのないものであつてそのほとんどは経験が偶然に教えてくれる。章三郎がコロンブスのよろこびを分ち合つたのは、風呂桶を買つたときだつた。

章三郎の借家には風呂場がついていた。きれいなタタキで、擦硝子のりつばなドアまでついている。ただ、有るべきものがないだけだ。自宅風呂の夢は結婚以来久しいものだつたが、身にあまるゼイタクとして断念し、そこは洗濯場に使つてきた。その断念したはずの夢が、由紀の妊娠とともにガゼン息を吹きかえしてきてきた。

「なんとかならない？　ねえ、あなた！」

毎日のように、彼女は鼻をならしはじめた。

「うちが貧乏なのはわかつてるけど、そこをなんとかお願いするのよ。このごろはお風呂へゆくのが辛くて、しかたないわ。みんな

ジロジロ見るんですもの」

「どんな奴が見るんだ？」

「中年のおかみさんよ。無遠慮で、厭らしいつたらありやしないわ。どうしてもここは、中年のひとばかりいるんでしようね」

全くふしぎなように、娘やわかい人妻の少い土地だつた。新婚の家庭はほとんど眼につかず、大半が土着のふるい人たちである。

「あそべば誰だつて腹はふくれるんだ、なにが珍らしいかつて、言つてやれ」

「いやよそんなこと。それより、無理してもお風呂を買ひましょう。ねえ、智恵を絞つてよ。きつと、楽しいわよ」

「チエは絞つても、金は絞れんからなあ」

新聞の折込み広告で、家具の月賦販売を知つたのは、それから数日後だつた。

「あなた、十カ月ですつて。まるでタダみたいじゃないの」

「そうだな。一割で手に入るとはすごいね。さつそく行つてみるか」

こういう無邪気なお客さんがいるから月賦屋も繁昌するのであるが、二人はたちまち元気づいて、池袋の丸徳家具店をおとずれた。どうせ買うなら立派な奴といふので、選んだのが総檜の小判型で二十五円。ところが三十円以上でないと月賦にしてくれない。

「思いきつてテーブルと椅子のセット買ひまじょうか。椅子の生活は便利よ。それから、どうせ乳母車だつて要るんだけどなあ」

「よし、買つちやえ。なあに、イザとなれば、なんとかあるよ」

無責任な話だ。いい気持で、総額八十円も買ひこんだ。おかげで半年たたないうちに溜りだし、すつたもんだの末、十カ月が十六カ

月におよんだが、のんびりした時代なので、それでも商売は成り立つたようである。

流しのスノコだけは現金で買い、石炭は一俵九十銭で配達してくれるからわけはない。こうして約十円の金で、奇蹟は実現してしまった。

「ああうれしい。あなた、支払だけはチャンとしてね」

「ちえッ、勝手なことを言つてやがる」

と言つたが、檜の香りも新しい風呂がデんとすわつて、擦硝子のドアにあたかそうな灯がながれるのは、さすがにわるい氣持がしなかつた。

「あなた、さきへはいる？」

「いいや」

「だつて、私が先きでは、申しわけないわ」

「だから、僕も入るよ」

由紀はちよつと紅くなつた。

「俗に一人半風呂と称するせまい容積に二人がおさまるには、どんなポーズを取らなければならぬか、経験ある人には十分おわかりだろう。とにかく章三郎は、ナゼ借金してでも新婚勿々に風呂だけは買わなかつたかと、およばぬ後悔をする始末だつた。

さて、通常の話はやめよう。ここではあたらしい発見について語ろう。それは、猿轡をはめて風呂に入れるということである。

話は飛躍するが、よごれた襦を鉄瓶の湯氣にあててすばやく口を掩うということは、この風呂の経験を簡単に生がした思いつきにすぎない。どちらの目的も、臭氣をつよく嗅がせる点にある。だが、鉄瓶の利用は座敷という制約があればこそで、効果から言つたら風

呂の足もとにもよれない。湯氣はすぐにさめてしまうからだ。だから、相手が首をふつたり暴れたりして拒否していれば、なおさら目的を逸することになる。

汚臭を十分に味わせるには、よごれた布を湿らせるばかりでなくその湿氣が常に暖くなければいけない。それには風呂の中ほど理想的な場所はないのである。十分に暖まつた湿氣は襦に泌みついた分泌物を溶解し、蒸らせ、発散させる。それも持続的だから、外側の布だけでなく、鼻のまわりに当てがつた布にまで泌み通るようになる。一方ではからだが暖まるにつれて鼓動が早くなり、息苦しさも増してくる。章三郎のかける猿轡は息がとまるほど嚴重なものではないが、それでも「うばッ、うばッ」という奇妙な音を立てて、小刻みに息の出し入れをするようになる。そのために猿轡全体が熱い息でむれて、臭氣はますます強く鼻孔を刺戟する。

こういうことは、やつてみたから分つたので、はじめはただ変つた場所で、変つたことをしてみたかつたにすぎない。密閉した風呂場、風邪をひくおそれのない裸体、せまい桶のなかの緊縛ということが彼の想像力をかきたてた。それで、風呂を買つてから三日めに、もうそれを実行した。

銭湯にゆかなくてもすむというだけで、由紀は完全に幸福を感じていたから、章三郎が風呂の中にまで例の遊戯をもちこむのに呆れたけれども、それほどムキに反対しなかつた。それに、せまい風呂では寝室のような真似はできないとでも思つたのである。

「なんでも変つたことをしてみたいわね」と言いながら、彼女は後ろ手に縛らせた。

「ついでに、猿轡もね」



「あ、それはいやよ」

「なに言ってるんだ、五十歩百歩じゃないか。せつかく風呂を買ったんだぜ。君の要望もだしがたくさ。だとすれば、僕の言うこともすこしは聞いてくれなくつちや」

「恩に着せてるわ」と、小声でつぶやいたが、もう両手は縛られているし、相手がそういうたくらみだとわかればどうしようもない。

「じゃあ、ちよつとね。あまりひどいことしないでよ」

で流しに立っているのだから、いそぐ必要があつた。章三郎はいそいで、しかも丹念に猿轡をはめた。由紀は顔をしかめて、もう呻き声を立てた。これは毎度のことで、特に はめた直後はいちばん汚臭をつよく感ずるからである。

全裸でうしろ手猿轡という姿は、由紀にはめずらしいものであつたし、それが入浴の場合だけに、章三郎にとつてもフレッシュユだつた。湯を汲み出して二三杯かけてやると、熱いのか羞かしいのか、

「こんな
ところで
出来よう
がない
よ。なに
もしない
から、安
心したま
え」
「どうだ
か」
「さあさ
あ、早く
しないと
カゼをひ
くから」

実際ふ
たりは裸

中腰になつてからだをくねらせる。それを前から抱きかかえるようにして、湯槽のふちを跨がせ、いつものようにうまくポーズをとつた。

きれいな湯はあふれて流しに音を立てた。玄関にはカギをかけ、だれひとり窺うおそれのない別天地で、章三郎はこんな楽しみに耽れることをしみじみと幸福に思つた。しかも今日はただの温泉気分ではない。うしろ手の由紀は嵌木細工のように身動きもできないで悩ましがな顔を彼の真正面に向けているだけである。それは全くふしぎな光景だつた。いかなる温泉地で、鼻と口を掩われた女の顔が湯にうかんでいる姿をみることできょうか。

そのうちに、由紀は首をふつて、妙な声を立てた。中風患者の看護人ではないが、章三郎はいままでの経験で、猿轡の下から洩れる由紀の声はなんとか見当がつく。それは「はずして、はずして！」とさけんでいるのだ。

「まだ入つたばかりじゃないか。ゆつくり暖まつて、出たら外してあげるよ」

と章三郎は言つた。すると彼女は泣き顔になつて、つよく首を横にふつた。そのとき、一尺とはなれていない彼の鼻を、すえたような匂いがかすめた。

咄嗟に彼は了解したのだ。汚れきつた猿轡は熱した湯気にむされて、未だかつてない臭気を発散しはじめたことを。なんというすばらしい発見だろう！ 彼は念のため顔を近づけて確かめた。それから、さりげなく遠去けた。

「ダダをこねるんじゃない。はじめての経験じやあるまいし、風呂の中だつていいじゃないか。第一、君は承諾したんだよ。だから、

出るまではダメだ」

（ちがうのよ、ちがうのよ……）と言いたげに、由紀は首をふつた。彼は気がつかないふりをして、

「あばれると、濡れちやうよ」

と言いながら、右手を背中にまわして縛つた手首をおさえ、左手で猿轡の結び目をつかんで動かさないようにした。

由紀は眼を閉じ、眉をよせ、絶望的にうめいた。だが、再びがまんできぬように眼を開くと、耐えていた息を大きく吸い、前よりも激しく呻いた。呼吸を殺しては、かえつて強く臭気を吸っているのである。

「もがくから息が詰まるんだよ。さあ、カゼをひかないように、もつとよく浸かつて！」

あわれな由紀よ、その匂いは顔を遠去けている自分にもわかる。鼻と口に密着した布からそれを味わねばならないとしたら、どんな気持ちだろう！ お察しする。だがいまは夫は何も知らないことになつているのだから、存分に、気の遠くなるまで満喫するがよい！

やがて由紀の鼓動は早くなり、顔は上気してきた。押えている手に抵抗をかんずる。呻きは切れ切れに短く、早くなつて、眼に涙がうかんだ。もう十分だと思つたので、両手で抱きあげ、流しにつれだした。

手早く猿轡をはずしてやると、ゼイゼイ息を切らしながら、しばらく彼を睨んでいたが、「お水！」と命令口調で言つた。

「はいはい、奥様」

いささか恐れをなしながら、ヒシヤクに汲んで口元にもつていつた。飲むのかと思うと、ガラガラツとうがいして、さもけがらわし

そうにべつと吐いた。それを三度もくりかえしている。

「はやく解いたらいいでしょ」と、こんどは背中をむけて言った。

「解くのはいいが、怒ってるんじゃない。……そんなに苦しかった？」

「白々しいこと言わないでよ。私の顔を見ればわかつたはずよ。殺されるかと思つたわ」

「大グサ言うんじゃないよ。ただ、いつものように……」

「それが臭くていやらしくて、気が遠くなつたわよ」

「そいつあ気がつかなくなつたなあ」と言いながら、肩に両手をかけて正面をむかせた。「でも、怒つちやあいないだろうね」

「知らないわよ、さんざん人をあんな目に会わせといて。……いいから、はやく手をほどいてつたら！」

「じゃあ、絶対に怒らないつて、誓いたまえ」

「いや、そんな勝手なこと」

「よし、それなら解かない。ここへ君をころがして、身体じゆうゴシゴシ洗つてやるからね」

「ああ、誓う、誓う、誓うから……」

と、由紀はあわてて大声をあげた。

そこで章三郎はやさしく抱きよせ「その証拠に！」と言つて、キスした。そして先方から熱い口唇をよせてくるようになってから、はじめて両手をといた。

では、風呂の遊びは一回で終つたかというところではなかつた。

思えば風呂は、貧しい結城夫妻にとつてただひとつの豪華な「条件設定」だつたのである。入浴であたためられた血潮は、その後につづく夜の饗宴を保証した。だから由紀にとつては、これもやはり大

きな前戯のひとつとして印象づけられた。それにはいくとも述べたように、章三郎はけつして遊戯を遊戯だけに終らせなかつたからである。性的なひとつづきの行為というものは、それがどんなに永く変化に富んでいようと、最後の仕上りさえ完全なものであれば過程はプラスになる。なぜなら、記憶や回想はつねに終点の快楽から逆算されるからである。

もちろん章三郎も最初の経験からいろいろのことを学んだ。風呂で猿轡をするときは、口の中につめる量をうんと少なくして、呼吸を楽にするようにした。なぜなら、視覚と嗅覚の楽しみはそれで減るところか、かえつて永くつづいたからである。また、両手をしばつてからだを洗つてやつたり、早く湯槽から出すぎたという口実のもとに、手はほどくが猿轡だけはそのままにして、彼のからだを洗わせるようなこともした。そして、この風呂の遊びに関するかぎり打つたり抓つたりは一度もしたことがない。

秋もすぎ、二度めの冬がめぐつてきたとき、由紀は女の子を産んだ。非常な安産で、しかも一貫目ちかい子供だつた。数え年で章三郎は二十六、由紀は二十一で、人の世の親となつた。(未完)

◎従来のサディズム小説に一紀元を劃した吾妻新氏の傑作「感情教育」は氏が特に本誌の為に、とつておきの素材により今迄にない素晴らしい作品を書いて応援してやろうという意気込みで執筆されただけあつて、その反響は夥しい読者の讚美の声となつて殺到しつゝあります。流麗なる文章によつていき／＼と描き出される章三郎と由紀の生活は、回を追つて愈々妙、何卒、今後の進展に御期待下さい。

非小説

性

液

(二)

伊藤晴雨、

明治三十八年八月十四日午後四時三〇分開場、初日半値段、若松信乃脚色「白無垢鉄火」全七景という七軒町開盛座の絵番附が辻々に張られ、新加入中村友江は鳥越の質店、佐野屋の後援で開盛座へ出勤することになった。豚と仇名をとった武田清子という、人の好きそうな女優と相部屋である。新加入として破格の優遇であるが、蔭で贈った手ですれば丸く、目で見れば四角なものが物を云つて口五月蠅い楽屋雀に蔭口を聞かせず、昨日迄のウブ白が今日は天晴れ天下の名女優振りを示して、佐竹通りの古着屋軍人屋から買ったか、それとも佐野屋の質流れか何れをそれと白羽二重遠山霞の裾模様の錦紗づくめは一興行七円五十銭の女優と誰が見るであろう。事実小説よりも奇なりと誰やらが云つた

が、ナンと此の友江の初役が「令嬢綾子」という華族の落し胤で博奕打ちの親分に誘拐され、縛つて水責めにされるといふ、其の頃流行つた残酷芝居の主人公である。新加入の女優に主役を振つたのは、二幕ばかり出る文けの端役で、ワキ役が伉く狂言だからである。責められる性根を座長の中野信近から委しく教えて貰つて初日を開けた。

こういう場面では顔の白粉が落ちるので特殊な扮装をした。それは顔を洗った後でもう一度薄く髻付け油を顔一面に塗る事と、かつらには仕掛け物といつて特別な製作法に依つたものを用いるのである。かつらの生を植えた羽二重は水で剥げ易いので俗にいう簗編みという生え際を用いるのが例になつて居るが、これも丸い物が物をいつて鬘は斯界で第一人者といわれた浅草矢大臣門の岡米で作らせたので、美しい友江は一段の美しさを増して、楽屋で見えさえ惚れくする程であつた。これを毎日欠かさず見物に来るのが例の佐野屋の旦那で、責場の幕が終ると直ぐに帰つて行く。それが毎晩の様なので忽ち出方共の口から口へと噂が広まつて行つた。

此の友江の責めの姿にウツトリとなつたの

は此の頃宮古紫郎の弟子になつた梅堂豊吉という下廻りであり、豊吉は其の頃としては珍しい変態性慾者で、女の賣場に特殊な興味を覚えて、女の髪の毛を集めて喜んで居るといふ風変りの男であつたが、それが段々嵩じて女形のかつらに興味を覚えて来た。此の男が後に私に語る所に依ればかつらの髪の毛が自分には堪らなく快感を与えると同時に、其の女形の着た衣裳とか腰巻にも異常な興奮を感じて、其の女形と入浴する時などは交接以上の興奮を覚えるという事を洩らしたが、それは後日の事で、或る日此の男は開演中急に病氣だと云い出したので、下廻りの事でもあり雨が降り出したのに傘も無いといふので特別に楽屋へ泊める事にした。

凡そ劇場の閉場後の淋しさ程淋しく物凄く恐ろしいものはあ



同窓会館の演劇

るまいと思う。それが満員の芝居であればある程反対に淋しい。卅分前迄は人を以て埋められて居た処が急に全く無人の境になつて華やかな舞台の灯は全く消されて場内は黒闇、背景や大道具の腐つた膠の匂いがブンと異臭を放ち、奈落には馬の首や体がジメ／＼した簀の子の上に横たわりカビ臭い匂いが廻り舞台の下から吹き上げて来る風に混つて匂つてくる奈落（花道の下）を上つた処の頭取部屋の隣りは小道具部屋で壊れ散つた膳や脇息、金貝の剥けた何本かの刀、それに槍や薙刀、其の上には血だらけの生首が棚に乗つて居る。生首は散らし髪になつて、眼を剥いている。時によれば鈴が森で斬られる雲助の血だらけな腕や足が転がつて居る事もある。破れた行燈や幽霊の漏斗だの、仏壇の位牌だの、気味のよくない物斗り。簾の破れた籠は地蔵様の張り子と伍

し、良山孟林居士なんかとチーハーのフワを戒名にしたふざけた石塔なんか枯れかゝった藪畳の影に置かれてあるかと思えば、又、赤坂の杉並木に使う底の抜けた白張りの提灯と塔婆などが一緒に立て掛けて有ろうという寸法で手垢で光った手摺りを伝わって微かに光を放っている五燭の電燈を頼りに二階へ上れば大部屋で、半分は板の間になつて、半分は畳、正面には豊川稲荷などを祀つた祭壇、ドス黒い汚れた幕が風に煽られて居て、低い窓からは微かな街の灯りが見える。芝居では魔物とされて居る黒い猫が一匹通り魔の様に風を切つて走り去つた後の静寂……

それは実に襟元から水を掛けられ相な淋しさの中に只一人で襟垢で真ッ黒になつた煎餅ぶとんにくるまつて寝て居る男がある。それは豊吉である。頭取部屋の時計は梯子段の下にあるのだが、神経の鋭くなつて居る人間には秒を刻む音が聞えるのであろう。豊吉はやがて物を恐れる様にして抜き足差し足、床山部屋へ手さぐりに忍び寄つて静かに部屋の戸を開けた。大劇場などの場合は一々鍵をかけるし、番屋番が提灯をつけ、拍子木を持つて一時間に一度宛奈落から三階迄巡検するのが普通なのだが、小芝居の場合など経費の関係

から表方の仕切場へ寝て居る居残りの出方などがいゝ加減な見廻りをする丈けであるから、床山部屋へ鍵などはかけて居ないのである。

豊吉は静かに手さぐりで戸を開けて入ると、髪の毛のムツとする様な匂いに結い立ての女形の髻から匂つて来る髪油の香りにウツトリとして佇んで居たが、彼は静かにマツチを摺つた。パツと明るくなつた光を恐るゝ如く、又目的物の所在を確かめ得た欣びに胸を踊らせ乍ら、かつらの棚の幾段目かに水にグツシヨリ濡れた長いゝ髪の毛の女の髻を手に取り上げた。それは恰も志摩の海女が龍宮に忍び込んで面向不背の宝玉を取り得たにも似たろうと思われる喜びに似て、彼は再び極めて注意深く其の長髪の髻を抱いて自分の寝床へ這入ろうとして又再び元の場所、それは床山がカツラの髪の毛の癖直しに使う鑊を焼く火鉢を手探りに探り当てゝ其の前の戸棚の戸を開けて、又一本のマツチを摺つた。

一本のマツチは容易に髻に塗るビンツケ油の所在を知り得たので豊吉は、其の油の少量を自分の××に塗り、今度は極めて大胆に、急いで自分の寝床に戻つて其の長髪の女のカツラを抱いて快く眠つた。

賣場の女の髻を抱いて眠る嬉しさ、これこそ芝居へ入つた彼の最初の喜びであつたに違ひなかつた。彼は自分を一種の不具者と信じて居たからであつた。それは彼が友人と共に吉原へ行つてもいつも交接不能に了るのである。それが彼の包莖に原因するという事を知らない程彼は善良であり、純真な男で、彼は女の賣場を見て快感を覚えると同時に××を行ひ、それで満足して居るので、彼は自分の親しい友達に対しても女の賣場を自慰の対象物にして居る事を打明ける気持ちにはならなかつた。

……………

「オイ梅堂、起きねえか、オン大の部屋で始まつて居るだ。起きて弁当でも喰いねえ、な、もう追つゝけ二時頃だろうぜ」

友人の町田正太郎は親切ごかしに豊吉を起したが、豊吉は抱いている女形の髻を見附けられまいとして

「まだ昨夜から腹が痛んで居るんです。もう少し寝て居たいんです。」

「そりやいけねえ。何なら向山さん（医師）を呼んでやろう」

「イエ、それにや及ばないんで、もう少し寝て居れば治ると思いますから此の儘にしてお

いて下さいな」

「そうか、そんなら此の儘にしておくが皆んな御大の部屋でやつてるから起きたら弁当を喰いねえ」

「へエ、有難とう、もう少し経つてから行きます。兄さんはもう喰べたの？」

「今日の香弁は馬鹿にうめえぜ、一本二銭五厘の弁当にしちや今日は大奮発だつたぜ」

豊吉は抱いて居る豊を見附けられはしないかとハラ／＼して寝て居るうち、正太郎は宮古の部屋へ人つて行つたので、此の間に早くと計りにガバとはね起きると疾風迅雷的にカツラを持つて首尾よく床山部屋のカツラ棚に押入れ、其の上から埃除けの布をかぶせて何喰わぬ顔をして済まして寝て居た。

午後四時三十分開幕と辻番附には記してあつても、見物の工合と楽屋でやつて居る一六勝負のカタが附いてからで無いと序幕を開けないのだからいゝ気なものであつた。

「オイ梅堂、加藤が急用で楽屋入りが出来ねえそうだ。山田屋の娘を責める役を、お前代つてやつてくれ、予内を一円やるから引受けてくれ、いゝか」

頭取の遠井万三郎は浅草公園の箸屋の盃を貰つて居る半ゴロツキである。座長の中野の

為には身命を賭してもと此の道に有り勝ちな仁義を立てゝ居る男で、いゝカツブクの親分肌の男で、座元の中村弥市の信頼して居る男である。

女を責める役をさせて貰つてヨナイを一円呉れるというのは棚ボタ式の喜びであるとは思つたが、オイソレと引受けては気をひかれて居ると思われたので

「ヨナイなんかどうでも女を責めるのはどうもあつしアいやなんで、巧く出来りやあいゝんですが」

「馬鹿野郎、此の頃の新派に女の責場がなければあ見物は来やあしねえ、〃十万円〃にしる〃八重霞〃にしる娘をふん縛つて責める場面がなきや山が上にねえや、そんな事が出来ねえで役者でめしが喰えるものか、イヤならよせ、堀にでも遠藤にでも役を振るから」

梅堂は慌てゝ

「やりますよ、やりますよ。ま、まつて下さいよ頭取、やりますよ、やりますよ、やりあゝんでしよう、やりさえすりやいゝんでしよう。やりますよ、やりますよ。」

「やるならハナツからそういえよ、手の掛つた野郎だ。」

其の頃の新派の役者は喧嘩ツ早く皆んな威

勢のいゝ奴斗りだつたから自然に楽屋頭取迄言葉使い迄乱暴になつて居た。

「豊吉の受け取つた代役のセリフは

「親分は屋台店の蟹みたいになまずい男だ、イエナニいゝ男だ、だからよウンといつて云う事を聞きやあどんないゝ着物でも着られて甘い物を喰つて栄耀栄華は望み次第というもんだ。オイどうしてもいう事が聞けねえのか、聞かねえといやあ仕方がねえ、ソレ此の棒が此の柔かい腕や背中にお見舞申すんだぜ、痛い目をしねえ内にウンと云いねえ、ウンと云いねえよう」

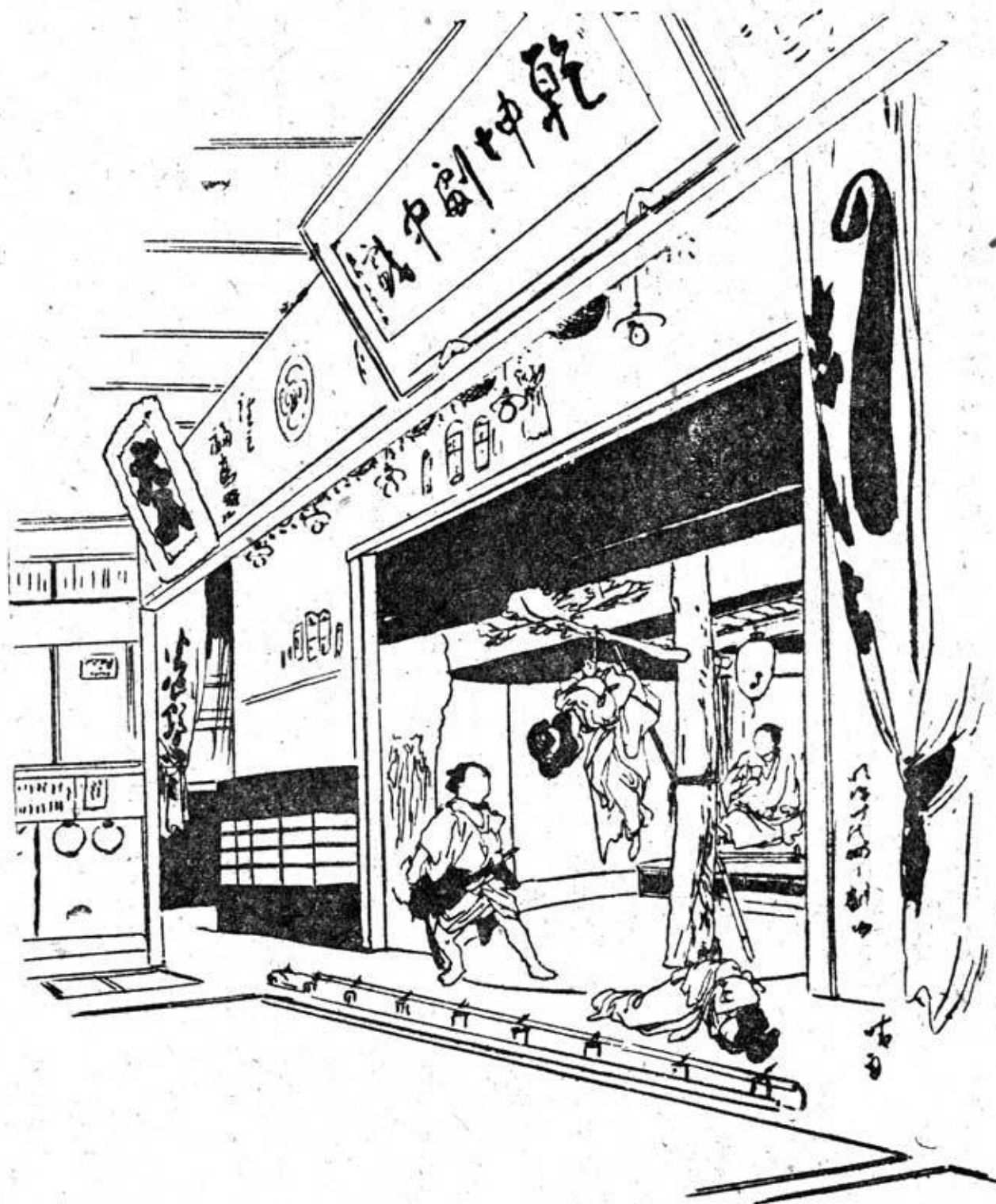
親分「何をぐず／＼云つて居るんだ。構わねえからウンと引ツぱだけ」

乾分「へえ、サアどうだ、己れはおめえを叩きたかあねえんだが親分の云いつけた。御見物に憎まれるかは知らねえが、振られた役で仕方がねえ、サア、ウンといゝねえよう」

これから散々責め叩いて車井戸から井戸水を汲んで娘の頭からザア／＼と浴せ掛ける。見物は盛んに拍手を送るのは水を浴せられた娘の色気と呻き声髪を掴んで舞台中を引摺り廻す残酷な迫真力が人を引きつけるのである。臨監席の警察官も黙つて見て居る斗りで

あつた。
尤もこうした場合、警察官には金一封と茶と見せて土瓶の中に酒が入れてあり、肴の上へ菓子載せてあるという寸法で此の前興行

の時、木下尚江の「良人の自白」という社会主義の芝居を九幕十三場を無条件で許可した警視庁の当局である。袖の下次第で当時の警察など興行師は何とも思つて居なかつたのだ



から誠に都合がよかつた。

豊吉が女を責める役を振られたのは生れて以来今度が始めてである。親の時よりこの時と思得たかどうか知らないが、カツラとは云え自毛の様な精巧な鬘の濡れ髪を手に巻きつけていとも残酷に女を責める快感に我れ知らず異常な緊張を示して此の賣場の後立廻りになつた時、娘を助けに飛び込んで来た牛若三次との立廻りに三次の振り廻す刀の刃先きが緊張して居る所に当つたのでアツと云うなりぶつ倒れてしまつた。

此の頃の新派はまだ野芝居の名残りで、或る時代の新国劇と同様、立廻りで怪我人を出す事などは何とも思つて居ないから「梅堂どうした」と云う者もなかつたので、豊吉は痛みを抑えて出勤して居た。負傷した場所へは麻薬を塗つて……

賣場になると患部が痛む、併し仮装とは云え美しい女形を責める楽しみに局所の痛みを忘れて無事に十二日間の中、代役の八日間を勤めてつくづくと役者冥利を感じた。

賣場の幕の次は吉原田圃の深夜で舞台は太郎稲荷の前で丸物の弁柄色の鳥居が四、五本並んで太郎稲荷御宮前何某と記した紅や白の幟が立つて居て、蛙の鳴声で道具が止ると、

高木隆之助という老役の親爺が坂東勝代という女役者の十二、三の可憐な娘おみつを連れて出来て、姉娘の行方が知れぬのを悲観して自殺しようとするのをおみつが止めるので、おみつを鳥居に縛つて自殺しようとする時、前場の悪い乾分が出て来て、此の娘も亦親分の所へ連れて行かれ、姉妹二人を責めるといふ筋だ。

茲で前記の加藤という、最近此の一座の座長中野信近の弟子になつた男がある。榮屋に居て無学な役者共に盛んに社会主義の説明をしたり、身分不相応な金を撒く妙な男で下廻りで居乍ら羽織袴をキチンと着て居る。或時連中をするというので東の棧敷を十一間買い切つた。当日になると社会主義者御連中と座附茶屋のやまとへ堂々と看板をかけさせて真ツ先に乗り込んだのが後に大逆事件で有名な秋水幸徳伝次郎で、続いて木下尚江、堺枯川なんという全く多士済々たる名士斗り、伊藤野枝も来て居たかと思われたが、只今私の記憶に浮んで来ない、此の加藤という男は名を蓬里といつて役は仕出しに毛の生えた様な役で、舞台で台本にも無い無政府主義や社会主義の演説をするので、無神経極まる警察官が中止を命じると役者が警察官を殴るといふ現

代の人々からは全く真実と思われない様な事が平気で行われて居て、或時の如きは座員三十余名が七軒町警察署へ全部拘引された事件さえあつた位で、女の責場などはどんな事をしても叱られる心配などは無かつた時代で、随分思い切つた事が出来たので豊吉は思ふ存分責めの気分を満喫する事が出来たのはそれから後の俳優生活であつた。

梅堂豊吉というのは親は江戸から東京へと時の流れに対抗し得ず、歌川国芳という名人の師匠を持ち、役者の似顔絵という特殊な芸術を持ち乍ら、写真という文明開化の利器と石版印刷というものが幅を利かして絵はがきの流行となつた当時に大昔の手の掛る役者の似顔絵など出版する者は一人も無く、脾肉の嘆と水ツ鼻と一緒に殴つて居る、名前丈けは素晴らしい五代目歌川豊国老人である。豊吉の直ぐ上の兄貴は以前は棟堂小国政といったが、其の頃は柳蛙といつて居た(本姓竹内氏、三代国貞の長男、始め父に学び、後飯島光峨の門に入り、柳蛙と号した。)日清戦争当時に作画極めて多し云々(樋口弘氏著「幕末明治開化期の錦絵版画」所載)となつて居る。此の柳蛙という人は似顔絵師として最後の人であらう。故久保田米州氏などは席面を

共にして「氣狂いかと思つた」と筆者に語られた事があつた位の人物であつたから其の弟の梅堂豊吉も亦一風変つた人物であつた。

浮世絵師の悲惨な末路を考えた豊国老人は豊吉を下谷稲荷町の仏師屋へ彫刻の徒弟に住み込ませたが、親の血統は争われず、彫刻の暇を盗んでは絵斗り書いている。それがナンと残らず女の縛られて居る画斗りである。

「豊どんは女の縛られて居る処が好きだ、氣味の悪い人だよ」

そういう評判が松山町一帯に立つと主人の斎藤長吉方では氣味を悪がつて豊吉を親元の豊国老人(老人といつてもまだ五十何歳であつた)の許へ歸した。歸された豊吉はブラ／＼して居る内附近の開盛座の榮屋へ入り込み、宮古の弟子にして貰つて仕出し位の役がつく様になつた。給料といつては十二日間にタツタ金五十銭、それでどうやら食つて行かれたのはいゝ世の中であつた。

「床山さん、また髪付け(油の名)を少し呉れないか?」

床山の源さんは豊吉の顔を見て吹き出したくなるのをグツと押えて島田のかつらを撫でつけて居る鬚櫛の手をとめて、

「梅堂さん、よく油を貰いに来るね、何にす

るんだい、女形のあたまなら私が付けて上げるから持つておいでな」

豊吉は真ッ赤になつて下を向いた。豊吉が床山に「鬢付け」を貰いたいのには誰も知らないであらう処の性慾を満す為の自慰的手段に過ぎないので、芝居道では日常茶飯の事であるが一般の人々には理解し得ない不思議な事に使用されるという事を源床は百も二百も承知して居乍ら、可笑しさを堪えてワザと豊吉に向つて、

「何にするのか知らないがね、此の頃チヨイ／＼鬢付けが減ると思つて居た。此の間百奴(駒形の油屋)で買つて来た斗りなのにと思つて居たんだ。梅堂さん、あんまり度が過ぎると毒だよ。セリフを忘れるよ」

豊吉は黙つて下を向いた儘痛い所を突かれてグウの音も出なくなつてモジ／＼して居た。腹の中では源床は自分の秘密を察して居たのだろう、自分が鬢付けを貰いたいと云い出したのはもしやあの事を感じたのではあるまいか、若し感づかれたとすれば口の五月繩い楽屋内で明日とも云わず今晚中にでも一座の人達に知れるに違いない、そうしたらどうなるだろう。

豊吉の眼には涙さえにじんで来て「そんな

ら要らないよ」と云つて立つ事も出来ないでジツと考え込んで居た。

人の悪い源床は片手に鬢付け油の容れ物を持ち乍ら、片手を豊吉の両股の間に差し入れる。豊吉は堪らなくなつて立上ると源床の手を払い除けてバタ／＼と大部屋の化粧前を通り抜けた。

「ヤア、梅堂の股倉が天狗の面になりやあがつた」

一同は声を揃えて手を叩いて笑つた。

宮古紫郎の部屋には其の頃国木田独歩の経営して居る京橋区鎗屋町の近事画報社が頻発する雑誌と乱発した小切手の為二進も三進も行かなくなり、日露の戦争中羽根の生えて飛ぶ様に売れた戦時画報も終戦と同時にバツタリ売れ行きが止り、再び戦前の近事画報に帰つた頃には戦後の不景氣が祟つて独歩に拾われた青年画家の小杉未暉(現放庵)氏も雑誌の廃刊と同時に失業して仕様事無しの間暇つぶしに楽屋へ遊びに来て宮古と文学上の咄しをして居た。宮古という男は其の頃の俳優には珍らしく文学の素養もあり、幾多晩年の傑作を残している。

「小杉さん、此の男はね、女の縛られて居る絵斗りかいて居ます。オイ梅堂、此の方は今

売り出しの小杉未暉さんだ、お前の絵をお目にかける」

梅堂の股間の天狗の面の鼻は「女の縛られた絵を見せる」と云われると同時に忽ちグツタリというよりグンニヤリと其の威力を失つてしまつた。

☆代理部月報☆

皆様から素晴らしい数々のアイディアを頂きました故、口絵写真と併行して製作中です。ので、追て御伝えします。

虚待 (男性マゾ写真)

新年号、二月号の口絵掲載の四枚に外一枚

キヤピネ版

五枚一組

五百円

(男性マゾ、男性被縛写真は当分分譲中止します)

台上の殉教者

新年の口絵掲載の分

キヤピネ版

二枚一組

二百円

磔 (第二組)

二月号口絵掲載の分

キヤピネ版

一枚 百円

(送八円)

の 姉 妹

眞木不二夫

八木静男画

(1)

美津江ちゃんの頬から顎にかけての色の白さは、びつくりする程綺麗だ。瀬戸物みたいのスベスベしている。ぼくは美津江ちゃんのつんと澄ました横顔をみると、いつも、その白くふくらんでいる頬つぺたを突つつきたくなる。そう思うだけではなく、いつもチヨイと指で突つついてしまうのだ。
「イヤン、正ちゃんのバカ！ 意地悪！」

美津江ちゃんは、すぐムキになつてぼくに拳固をふり上げる。男の子みたいだ。腕力だつて相当ある。何時だつたか、腕相撲した時三回戦でぼくは二回も敗けてしまった。そばで定夫や謙次が見ていて、
「正のヤツ、女に敗けてやがらア、意地ねえの」
と、わらつたが、奴等だつて美津江ちゃんには敵うもんか。第一恥しがつて、美津江ちゃんと手を組むことだつて出来やしないくせに。



美津江ちゃんは、ぼくより一つ年下のくせにとでも生意気で、おしやべりで、へんな理窟をこねてやりこめる。謙次なんか

魔性

「お前、美津江に少しなめられているぞ。あんなにやりこめられて、お前黙っているのかよ。たまには、かまわねえからパンチ一つ位入れてやれよ」

なんて云うけど、ぼくにはとてもそんな乱暴するだけの勇氣はない。せいぜい美津江ちゃんのカマボコみたいな頬つべたを突つつく

位が関の山だ。それだつて彼女の機嫌の悪い時にやろうものなら、あとの仕返しが大変だ。

この間、二人でゴム工場裏の野原に遊びに行つた時、今まではしやいでいた美津江ちゃん急におとなしくなつて冷めたい顔になつた。おまけに大人ぶつて顎の下に手をあて、草の上に腰をおろしてしまつた。

「どうしたの？……どうしたんだよウ」

ぼくはちよつと心配になつて、美津江ちゃんの顔を、のぞきこんだ。でも、彼女はぼくなんか眼中にないといったようなふうで、遠い所をみつめるような眼をして、じつとしている。ぼくは美津江ちゃんが好きなんだけれど、時々こんなふうに気が変つて勝手なことをするからイヤだ。

「ねえ、どうしたんだよウ……チエツ」

だけど、本当を云うと、こんな時の美津江ちゃんの顔は、ちよつ



といいな、と思う。眼がパツチリと大きい。黒眼が大きくておまけにまつ毛が長いから、よけいに深く澄んでみえるのかも知れない。鼻だつて、すつと高い。唇の形は（映画狂の定夫に云わせると）山田五十鈴の娘の嵯峨美智子という女優にそっくりだそうだ。

じよう談を云つたり、遊んだりしている時はなんでもないけど、黙つて向い合つた時なんか、美津江ちゃんの眼にじつと見つめられると、ぼくは胸がドキドキして顔が熱くなつてくるような気がする

「美津江ちゃん、どうしたんだよ、おなかでも痛いのか？」

「……………」

「ねえ、よう……」

「うるさいわね、今ちよつと考えごとしてるのよ」

チエツ。生意氣いつてらア。ぼくは美津江ちゃんの白い頬つべたをちよつと指で押した。彼女、いつもなら怒るのにまだ澄している又、押しやつた。お餅みたいな頬がペコリとへこんだ。

「うるさいつてば……」

美津江ちゃんはビシヤリとぼくの手を払った。ぼくもちよつと腹が立つていたので、しつこく彼女の頬ベタを突つついてやつた。といきなり美津江ちゃんはぼくの頭を掌でぐいと押した。力が入つていたのでぼくはよろよろとした。起き直つて彼女の顔をみたら、眉が釣り上つてすごい顔で怒っている。

(こいつはいけねえ) ぼくは、くると彼女に背をみせると逃げ出した、こういう時、ぼくは何時も逃げる。馳けると、必ず、彼女は追い馳けてくるのだ。追つて来なくちや、実はぼくだつて面白くない。

案の定、美津江ちゃんはスカートをひるがえして追い馳けてきた。ぼくは後を振り返りながら一目散に逃げ廻る。

もう夕暮近く、ゴム工場裏の原にも霧のような白いものが流れはじめていた。

ぼくは息をハアハアさせながら原のはずれの自動車の古タイヤが沢山積まれている中へ逃げ込んだ。古タイヤの山の蔭にかくれるようにして身体を投げ出す。ゴム臭い。美津江ちゃんが追つてくるのを、胸をドキドキさせながら待つのだ。(まるで映画の中の探偵みたいだな) 悪漢の巣窟から脱出した探偵が首領の女に追いつめられているのだ。探偵危し!

女ギヤングが下駄の音をさせながら近づいてきた。この辺にかくれていることを感じて、古タイヤの山の蔭を探し廻っている。下駄の音がだんだん近づく。ぼくの胸は高鳴る。探偵いよいよ危し!

「みつけた! こんな所にかくれていたのね」

女ギヤングは伏せているぼくの身体にとつとむしやぶりついてくる。

ぼくだつて抵抗する。組み打ちだ。上になり下になつての格闘だ。あたりはだんだん暗くなつてくるし、古タイヤの山の蔭で誰に見られる心配もない。そして、ぼくはどうも組み伏せられてしまう。この遊びをはじめた頃は、美津江ちゃんの身体がぼくのおなかの上に乗つて腕を押えたり、首をギョツとしめたりしてくれと、とても気持がよかつたのだが、この頃は、ぼくはわざと俯伏したまゝで組み伏せられてしまう。すると、美津江ちゃんはぼくの背中にまたがつて、ぼくを抑えつける。ぼくは苦しうに両腕をうしろにやつて、なおもバタバタ抵抗する。そうすれば美津江ちゃんは、どうしてもぼくの両手首を押さえつけるようになる。ぼくはそこで、

「ごめん、ごめん、もうしないから、縛らないでくれよ。おれ、縛られるの痛いからいやだよ」

と、うまく暗示にかける。

「よし……」

と、彼女は、またすぐその暗示にひつかゝるのだ。

「お前はここのまゝ動いてはいけないぞ。動いたら死刑だぞ、いいかわかったか?」

「はい」

彼女はぼくの背中から立つて縄を探しに行く。工場の裏だから荒縄の切れ端が沢山落ちてゐる。ぼくはその間、両手を背中に組んだまゝ、じつと彼女の戻ってくるのを待つてゐるのだ。女ギヤングは両手に荒縄をつかんでやつてくる。ぼくは彼女の手握られた縄をみただけで、身体がすぐむような気持になる。胸がわくわくする。

女ギヤングは、再びドスンとぼくの背中に馬乗りになる。ザラザラした感触のわら縄が、忽ちぼくの両手首に巻きつけられる。余つ

た端で、ぼくの二の腕から胸にかけてぐるぐる縛る。胸にまわす時なんか、美津江ちゃん顔がぼくの顔すれすれに寄ってきて、ハアハア息がかかる。ぼくがちよつと唇を突き出せば、美津江ちゃん白い頬にキスできそう。でも、それだけの勇氣はない。はずみでぼくの腕や肩あたりに、美津江ちゃん乳房が触れる時がある。彼女の乳房は大人のようによくはないがセーターを着た時なんか見ると、もう相当にふくらんでいるから、肩に触れ、ぼくすぐわかるそんな時、ぼくはなるべく乳房に触っている時間を長くしようとして努力するのだ。格闘している時に、触ろうと思えば、たやすくさわれるのだが、それは何だか出来ない。ひどく叱られそうな気がする。ぼくはとうとう完全に縛られてしまった。首をねじまげて彼女の顔をみると、額にうつすらと汗をかいている。流石に疲れたらしく肩で息をしているのが、とても美しく可愛くみえる。

女ギヤングは立ち上ると、脚でぼくの身体をゴロリと仰向にする「どうだ、もうあんな悪戯しないか」

そう云うと、下駄の足でぼくのおなかを踏まえる。ぼくはわざと黙っている。

「こら、返事をしないか、わかつたのか、わからないのか」

下駄のまゝ今度はぼくの咽喉を踏まえて力を入れて揺する。背中に縛られた両手首が下になつて、自分の身体の重さで痛い。腕の下に石ころが入っていて、身体を揺すられる度にグリグリする。

「痛いよウ……」と、ぼくは思わず悲鳴をあげた。でも彼女は一向に平気で、

「なに云つてんのよ。男の子がこれ位で痛いもんですか」

と、許してくれない。はずみをつけてぼくのおなかの上に腰をか

ける。重いのだ。美津江ちゃんのお尻はこの頃なんだか急に大きくなつてきたような気がする。でも男のお尻のようにゴツゴツと固くない。おなかの上に腰かけられても、その時は一寸苦しいけど、我慢しているうちに、ぼくの身内の奥のほうから、声をあげて喜びたいような気持が湧き上ってくる。美津江ちゃんはお尻を揺すりながらいい気持そうに小声で流行歌を歌い出した、ぼくは身をもがいて、

「美津江ちゃん、ゆるしておくれよ、よウ」

と嘆願する。でも本当に心から嘆願するのではなくて、なにか遊戯をしているような楽しい心がどこかにある。美津江ちゃんもそれを知っているものだから、中々離してくれないのだ。

「うるさいわね。黙らないとこれよ」

と、手をのぼすと、あたりに茂っている草をちぎりはじめた。何をするのかと思つてみると、ちぎった草をぼくの顔の前に持つてくる。

「口をおあき」

「え？」

「口をあくのよ、アアンで……」

ぼくは、やつと彼女がやろうとすることを察する。

「いやだよ、そんなこといやだよ」

と、首を振つて抵抗する。彼女は馬乍りになつてギョツとぼくの身体を押さえつける。そして、いきなり力いっぱいぼくの頬つべたをつねりあげるのだ。その痛いこと。

ぼくは思わず、「ああん」と口を開けてしまう。と、すかさず、むしり取った雑草を、ぼくの口の中に押しこむのだ。ザラザラした

青くさい湿っぽい草を、ぼくは否応なしに頬ばつてしまう。

美津江ちゃんの白く細い指が、ぼくの顔を押えて、あとからあとから無理矢理に草ツ葉を口に詰めこむ。何か云いたくても口を動かすことが出来ない。ぼくは「むむう、むむう」と、咽喉でうめいて無情な美津江ちゃんの顔を眺めているだけだ。口をひらこうとすると、草のトゲがちくちく口の中を刺すので、なるべくじつとして彼女が許してくれるのを待つばかりだった。美津江ちゃんは真剣な顔をして、かわいい鼻の頭にうつすらと汗までかきながら、ぼくの口に少しでもよけいに草を詰めこもうとしている。一生けんめいだ。

(あの鼻の頭の汗をなめたらどんな味がするだろう、ちよつとなめてみたいな)と、ぼくは思った、相手が美津江ちゃんだと、どんな苦しい目をみている時でも、こんなことが頭に浮ぶのだから不思議だ。

だけど、ぼくはだんだんと息苦しくなつていった。我慢しているのだけれど、苦しくて涙の方で勝手にポロポロと流れ落ちるのだ。

眼から耳へ伝わって流れると、涙はとても冷たく感じた。

「くくつ」と、ぼくは咽喉を鳴らした。

「降参する？」

と、美津江ちゃんが訊いた。ぼくは首を動かして返事した。

「だらしが無いのね。じゃ、あと百数えたらとつてあげるわ」

一つ、二つ、三つと美津江ちゃんは数えはじめた。ぼくの身体と心を責め苛むように、ゆつくりと、焦らしながら声を出して数えているのだ。

(美津江ちゃんの意地悪!) ぼくは心の中でつぶやいた。だが、じつと耐えながら美津江ちゃんの数える声をきいているのは、なん

とも云えないよい気持だった。このまゝ、千でも万でも数えていってもらいたい程だ。五十、五十一、と数える度に重いお尻が揺れてぼくのおなかがよじれる。

とうとう百になった。

美津江ちゃんの白い指が、またぼくの口の中へ入つて、詰め込んだ草を取り出した。口の中に土がザラザラと残った。ペツと吐き出した時、唇に痛みがあるのを感じた。草を取り出す時、切つたらしい。生ぐさい液体が口の中に滲みこんできた。血だった。

「唇が切れた！」

とぼくは叫んだ。

「あ、ほんとだ。でも、たいしたことないわ」

と、美津江ちゃんは平気だった。が、傷口は思ったより深く、舌で探つてみると血はちよつと止りそうもなかった。

「痛いよう……」

と、ぼくは悲しくなつて訴えた。

「あたしの睡でなおしてあげるわ」

美津江ちゃんはそう云うとモグモグさせて口の中に睡を溜めた。ぼくはドキリとした。首をずらして避けようとしたがいきなり彼女の顔が近づいて、ぼくの唇へ、小さな紅い唇が寄つてきた。と、生あたたかい液体が、ぼくの口の中へ流れこんだ。なにかグチャツとした感触だった。ぼくの心臓は何秒間か止まった。濡れた美津江ちゃんの唇は「女」の匂いがした。美津江ちゃんの睡は、あまかつたたゞあまいだけではなく、とてもいい匂いがした。夢のような匂いだった。

(これがキスというものなんだろうか) ぼくは幸福だった。うつ

とりと雲の上に居るようだった。

ふと気がつくと、美津江ちゃんは悪戯っぽい眼で、じつとぼくの顔をみている。

（ぼく、美津江ちゃんが好きだ！縛られても、ぶたれても、意地悪されても！いや、意地悪されるから、ひどいことされるから、余計に好きになつてしまうんだ！）声に出して云おうと思つても、咽喉にひつかゝつて出ない。身体がしびれているようだった。いや、



に美津江ちゃんと一緒に住んでいるのだが、時々夜になると男の人が泊りにくるそう。

美津江ちゃんとお姉さんとは、いつも同じ部屋で寝るのだけれど男の人が泊る晩は、美津江ちゃん一人が、その隣りの部屋で寝るのだそう。

「へええ。すると、二部屋も借りているの？」
と、ぼくは驚いて訊いた。

実際に縛られた両腕がじいんとしびれていた。おなかの上に乗っている彼女のお尻のぬくみが、ぼくの身体に伝わってきた。草の上に転がされた身体は冷えきっていた。けれどぼくの胸の中は、あたゝかく燃えていた。
あたりの夕闇は、すっかり濃くなっていた。

(2)

美津江ちゃんのお姉さんという人は、美しいけれど冷めたい感じのする人で、ぼくなんかは一寸近寄りがたい。アパートの二階の奥まった部屋

「そうよ。だって、うちのお姉さんのところへくる男の人は、みんなお金持ばかりよ」

と美津江ちゃんは、こともなげに云つたが、ぼくは感心してしまつた。

「お金なんか、無くなつたら男の人に頂戴つて云えば、すぐくれるのよ」

そんなものかなあ、とぼくは又、感心した。やつぱり美津江ちゃんや、美津江ちゃんのお姉さんは、普通の人間とは違ふんだ。

ぼくの家なんか、六畳と四畳半だけで、そこへ親子七人が寝るのだから、とても窮屈で、朝なんか脱ぎ捨てた着物が散らばつて、足の踏み場もない。美津江ちゃんのように、自分一人の部屋があつたら、どんなにいいだろう。考えただけでも胸がときめく。

「ぼく、一生のうち、一遍でもいいから、自分だけの部屋に住みたくなあ」

「でも寂しいわよ。お姉さんは男の人に抱かれて夜遅くまでキヤアキヤア騒いでいるんだけど、あたしなんか一人で冷めたい布団にもぐりこまなけりやならないんだもの」

美津江ちゃんはそう云うと、ぼくの顔を下から意味ありげに見上げた。女の子はよくこういう眼をする。そして、ぼくの肩に手をかけ、低い声で、

「ね、今度、あたしの部屋に泊りに来ない？」

とさゝやくように云う。ぼくは急に胸がドキドキ高鳴つた。

「だって……だって……」

「ねえ、いいじやないの。おいしい物御馳走してあげるわ」
「だって、お母さんに叱られるもの……」

「何云つてんのよ、もうあんた子供じやないんでしょ。一晚位外で泊つたつて何よ、いくじなし」

ぼくは大分前、お母さんに、美津江ちゃんのような派手な子とはあまり交際しないほうがいい、と云われていたのだ。

でも……でも……ぼくは決心した。

「じゃ、今度ね、泊めてくれよね」

「そう、嬉しい。指きりげんまん」

美津江ちゃんは可愛い子指を出して指きりを求めたが、ぼくはもうそんな子供みたいなことはしない。

「よせよ、みつともない。子供じやあるまいし」

「へッ、急に大人ぶつて……」

美津江ちゃんは、チヨロリと舌を出して笑つた。わらうと、八重歯がチラとのぞく。それが彼女の顔を、とても可愛くみせるのだ。ぼくは、工場裏の原の、あの生あたくさい唾の味を思いだした。

それから四五日たつて、今夜泊りに来い、と美津江ちゃんからの連絡があつた。ひる間のうちぼくは何をしても手につかない。今夜美津江ちゃんの所へ泊りに行くのだと思うと、怖いような、嬉しいような、複雑な気持ちで、そのことを考えると胸が熱くなつて仕方がなかつた。

お母さんには、従兄弟の良ちゃんの家へ行くと云つた。良ちゃんの家は電車に乗つてかなりあるし、行けばいつも泊つてくるので、お母さんだつて怪しまない。

煙草屋の角の暗い所で、美津江ちゃんの、ほの白い顔が待つていた。

「だけど、お姉さんに見つかつたら叱られるだろう？」

と、ぼくはまだ心配だつた。

「大丈夫よ。夜になつたらお姉さん、あたしのことなんか構う余裕なんかないのよ、もう夢中なんだから。それに、あんただつたら、とても綺麗だから、お姉さんだつて何も云わないわ」

ぼくは顔が赤くなつた。

女の子一人の部屋というのを、ぼくははじめて見た。壁には赤い着物がかかつてゐる。赤い塗りの鏡台が置いてある。桃色の電気スタンドの傘が、眼もさめるようだ。すべてが派手で美しい。女の子の匂いが部屋中に満ち満ちてゐる。

ボくは鼻をくんくん鳴らした。

「いやね、まるで犬みたい」

と、美津江ちゃんがわらつた。嗤われるとぼくは急におどけた顔で四ツん這いになつた。犬の真似をして、鼻をヒクヒクさせながら部屋中を歩き廻つた。美津江ちゃんが嬉しがつて、

「ワン公、こつちへこい、こつちへおいで……」

と、手まねきする。彼女の喜ぶ顔をみると、ぼくも嬉しくなつてもつとわらわせようとして、

「わん、わん」

と、本物そつくりの鳴き真似で彼女にじやれつゐた。彼女はキヤラメル粒をポイと投げた。ぼくはヒヨイと、それを口で受けとめた。美津江ちゃんの手を叩いて喜んだ。今度は自分でなめて噛みくだいてくちやくちやになつたキヤラメルを、

「ワン公、これをお食べ。犬というのはね、食べ物に唾をつけてたべさせると、その人には絶対に反抗しないんだつて……」

「ワン、ワン」

「おまえも、あたしの唾をたべたんだから、もうあたしには絶対に手むかいてきかないんだよ」

「ワンワン」

（それでもかまいません）と、ぼくは心の中で叫んだ。美津江ちゃんは急に氣どつた歩き方で部屋の中を廻りはじめた。ぼくはその後を、這つたまゝ従つて歩く。

「そうね、犬には首輪と縄がついてゐるわね」

と、云うと、彼女は洋服ダンスの中から、赤い皮のバンドを出して、ぼくの首に巻きつけた。

「あまり、きつくしないでくれよ、苦しいから」

と、ちよつと希望をいうと、

「ダメよ、あんたは犬なんだから。犬がそんなゼイタク云つちや」
ぼくは忽ち叱られて、頬べたをつねりあげられた。なんだか情なくなつて不安になつたが、これから楽しい遊戯がはじまるのかと思うと、心の底のほうでムズムズする期待があつた。

首輪に縄が結ばれた。それをいきなり引つ張られた時、思わず身体が前に突んのめつて、畳をいやという程なめてしまつた。彼女は遠慮なく縄を引つ張つて部屋の中を歩く。ぼくは首の痛さを耐えながら、その後をついて行く。時々後を振り向いて、彼女はなんの罪もないぼくの横腹を、力いっぱい蹴り上げるのだ。ぼくはキヤンキヤンと悲鳴をあげて倒れ哀願する。倒れたぼくの顔の上にグイと素足が乗つてくる。そしてギユウギユウと畳にこすりつける。

蹴とばされたり、踏んづけられたりしながら、七、八回も廻ると彼女は疲れたらしく畳に寝そべつてしまつた。

「あたし、寝巻に着替えるわ。その間、むこうを向いていてね」
彼女はそう云うと、セーターを脱ぎはじめた。ぼくはあわて、壁のほうを向いた。

「こつちをむいたら、ひどいお仕置よ」

「うん」

「ハイといいなさい」

「ハイ」

「絶対にこつちをむいちゃいやよ」

「ハイ」

ぼくは繰返す美津江ちゃん言葉の裏に、彼女の、何時もの性格を見ぬいた。

ぼくはソツと後を向いた。真白いシユミーズが、いきなりパアツと眼に入つた。そして、白い肩、白い胸、白い太股、スラリとした脚。ぼくの顔はカツカと火照りだした。シユミーズの上に寝巻を着るのかと思つたら、そのシユミーズも、スルスルと身体を滑り落ちた。

ぼくが女の人の裸をこんなに近くで見たのは、この時がはじめてだった。

美津江ちゃんのお乳は、大人の女の人のように、まだ大きくふくらみきつていない。けれど、形よくふつくらと盛り上つて、その頂点にちよつぱり紅い乳首がついていた。肩のあたりやおなかの辺の色の白さは、



まるで牛乳を固めて塗つたようだ。さわつたらツルリと滑りそうな光沢がある。真白なブロースがぼつてりしたまるいお尻を包んでいた。

美津江ちゃんは、腰に手をあてがつて裸のまゝ少しの間、自分の身体を鏡に写していた。ブロースの下からは二本の白い太股がぬつとむき出していた。陽のあたらない場所のせいか、不気味な程白く美しかった。あそこに唇を押しつけることができれば、どんなに幸福だろうとぼくは思つた。

盗み見ということ、ぼくは何時のまにか忘れていた。ぼんやりと、というより、緊張して息をのんで美しい少女の裸身に見惚れていた。と、突然、「見ているのね！」

美津江ちゃんのか責がカミソリのようにとんできた。ぼくはあわてて首をすくめた。脱ぎ捨てた衣服がぼくの顔めがけて投げつけられた。丸めたシユミーズが、ぼくの顔に命中した。

「ごめんよう……」

ぼくは泣き声をだして謝つた。頭を下げると、皮のバンドがヒュツと鳴つてぼくの背中を打つた。

「ああッ」

ぼくは畳の上に這いてくばつてしまった。

美津江ちゃんは、ぼくの頭をぐいとつかむと何か手拭のような布で、固くぼくの眼を縛つた。おまけに口を開かせると、へんに埃くさい汗く

さい布を押しこんで、その上から猿ぐつわをした。(きつと口の中へ押しこんだのは靴下に違いない)と、ぼくは思った。

ぼくの両腕はうしろへねじ上げられた。紐が握みついた。二重、三重と紐はぼくの腕に喰いこんだ。固くふさがれた眼の奥で、ぼくは、美しい裸身の少女が、その四肢を緊張させながら、一生懸命に少年を縛っている光景をみた。胸の底から突き上げてくるような興奮に、ぼくは肩をふるわせた。

縛り終わると、首筋のところを後ろから蹴られた。ぼくは転倒して、額を畳にぶつけた。腰骨のところも少女の踵でいやという程蹴りつけられた。(なんてひどいことをするんだろ、でも、でも、美津江ちゃんは美しいんだもの仕方がない)

畳に転つたまゝじつとしてしていると着物のすれる音がした。寝巻を着ているらしかった。帯をしめる気配も感じられる。眼かくしは、不安で、苦しかった。美津江ちゃんの姿のみえ



ないことが辛かった。

「むむう、むむう……」

と、ぼくは足をシタバタさせながらうめいた。

「今、布団を敷いてあげるわ」

布団を敷く気配がした。軽い埃がぼくの顔に甘くかゝった。そして、やつと眼かくしだけはとつてくれた「さ、もう寝ようよ」

赤と紺の模様の入った浴衣を着た美津江ちゃんは、別人のように大人びて見えた。いかにも娘のらしい可愛い綺麗な布団が敷いてある。枕が二つ。ぼくは胸が熱くなつた。

ぼくの首を抱くようにして猿ぐつわをはずしてくれた。

「あゝ苦しかった。死ぬかと思つた」

「大げさね。それ位で死ぬもんですか」

ぼくは縄尻を引かれて立ち上りたが、すぐ布団の上に突きとばされた絹の布団は、やわらかく弾んだ。

「あゝいい気持」

ぼくは布団に顔を埋めたまゝ、う

めくように云った。

「そんなにいい気持？」

「うん……」

「じゃ、もつといい気持にさせてあげるわ」

彼女はぼくを仰向けにして、おなかの上にまたがった。足をあげる時、裾が割れて、白い脚が太股まで見えた。腕をあげると、八ツ口から彼女の脇の毛が薄黒くみえた。気づかれないように、ぼくは盗みみる。

「はいし、どうどう……」

美津江ちゃんの身体が、ぼくのおなかの上で躍る。手にもつたものさしが、ぼくの腰や太股をピシリピシリ打つ。ぼくが苦しがつて悶えると、尚更、弾みをつけて躍動する。

そのうちに、おなかに乗った彼女のお尻が次第に前に進んできたきつと、馬を走らせている積りらしい。彼女の大きなお尻が、ぼくの胸に乗ってきた時は本当に苦しかった。そして、胸から咽喉へとじりじり移動する。お尻と股が、ついにぼくの咽喉にはまりこんだ浴衣の前がはだけて、白いスベスベした太股のつけ根のところがぼくの顎から頬にかけて、ぎつしりと密着した。ギユウギユウとしめつけた。ぼくはその時、美津江ちゃんが、その腰に何もつけていないことを知った。まつ白く、やわらかいお尻が、丁度ぼくの口のあたりまで犯した。

……
ぼくは舌なめずりしながら、夢をみているのではないかと思つた夢でもいいと思つた。だが、後ろ手に縛られた手首は確かに痛い。そして、美津江ちゃんの、はじめて触れたこの場所の、この身体も

溶けるような素晴らしい匂いは、絶対に夢ではない。夢であつてたまるものか。ぼくは気が遠くなるような快感におそわれた。もう耐えきれない。今まで積み重つてきた緊張がどつと解ける、ほとぼしる。

ぼくは、ぼくの縛られた身体が、ぐるぐるまわりながら空から落ちていくような錯覚に、思わず身体をのけぞらし、大きくうめいた……

(3)

それから、ぼくは度々美津江ちゃんのお部屋へ遊びに行つた。泊らないで帰ろうと思うのだけど、つい誘惑に負けてしまう。

行く時は、夜暗くなつてからなので、アパートの人達の眼に触れることも少なかったが、朝脱け出る時は苦労した。しかし、美津江ちゃんと美津江ちゃんのお姉さんの部屋は、アパートの建物の一室端にあつて、二階から直接外へ降りられる非常用の階段がついてるので、帰る時も他人の眼に触れることはあまり無かつた。このアパートの人達も、二階奥の女二人の部屋を特殊な眼で見えて、違う世界の住人のような交際をしているので、あまり立ち入つた干渉もなかつた。

美津江ちゃんのお姉さんも、何時の間にか、ぼくと美津江ちゃんの間係を知つたらしかつた。けれど、別に叱るでも注意するでも無かつた。顔を合わせた時なんか、ぼくは顔を赤くしておじぎするのだが、お姉さんはちよつと眉を動かしたただけで、首すら動かさうとしなかつた。ぼくはお姉さん怒っているんじゃないかと心配していたのだけど、そうでもないらしい。

顔は美津江ちゃんによく似ているのだけれど、そばへ寄つてみると、眉が描いてあつたり、眼のふちに青い色が塗つてあつたり、口紅もすごく濃いので、まるでアメリカの女の人の人みたいだ。冷たい感じがする。外国の女王なんていうのは、きつとあんな人なのだろう。あのお姉さんのような美しい人は映画女優の中にだつて一寸居ないだろう。映画狂の定夫に云わせたら、誰に似ているというかしら。

でも、ぼくに、まだ一度も口をきいてくれないのだ。いや、一度だけあつた。いつだつたか、美津江ちゃんの部屋に泊つて、その翌朝、ぼくが便所に行つた時、女の便所の扉が開いて、お姉さんが出て来た。よく身づくろいしなかつたらしく、ガウンの前がめくられて白い脚がみえていた。ぼくはハツとして、

「お早ようございます」

とみないフリをして頭を下げた。その時、ちよつとあわてたような表情で、

「お早よう」

と、答えてくれたのだ。はじめて返事をしてくれたのだ。嬉しくて、ぼくは飛び上る思いだつた。そして、あんな美しい人が入つた後の便所は、どんな匂いをするのかしら、とソツとドアを開けてのぞいてみた。水洗便所なので、清潔な陶器の中にチヨロチヨロ水が流れているだけであつた。ぼくは美しい人の体臭を探し出そうとして鼻を鳴らし、眼をみはつた。ドアをしめてしやがみこんで陶器の中をのぞいた。すると、前の方にポツカリあいた穴の中に、今にも吸いこまれそうになっている、水分を含んだ、やわらかい紙が眼にとまつた。ぼくは思わず手をのぼすと、破らないように注意しながら、それをつまみあげた。そつと匂いをかいだ。ポタポタと、まだ

しずくが垂れていた。(これだ、これがあの人の秘密の場所に触れた紙だ) ぼくはそれをハンカチに包み大切にポケットにしまった。そんなことがあつてから、ぼくはお姉さんに、深いあこがれを感じるようになった。呼び名も、お姉さん、お姉さんと呼ぶようになった。もつともそれは、美津江ちゃんと話す時だけであつたが。

しかし、ぼくと美津江ちゃんとの間が、お姉さんを想うことによつて薄れるというようなことは決して無かつた。それどころか、はじめて美津江ちゃんと寝た晩から、ぼくの頭の中は、美津江ちゃんのことについていっぱいになつてしまつた。朝起きてから夜眠るまで、いや夜ねてまでも、美津江ちゃんのことばかりが頭に浮ぶ。美しい美津江ちゃんの眼、しなやかな手、さわつた時は冷たいが、すぐあたゝかくなる足、熱い息吹。彼女に逢えない夜は、寂しさで気が狂う程だつた。そんな夜、ぼくは美津江ちゃんの面影を必死に追い求めながら、布団の中で自分の両腕を縛つた。疲れて眠ると、夢の中に美津江ちゃんが現われ、つねつたり、打つたり、咽喉をしめたり、蹴つたりしてくれた。

眼がさめると、美津江ちゃん恋しさに、ぼくは布団を噛んで泣いた。

ある夜、耐え切れなくなつて、ぼくはあのアパートへ上る非常階段を登つていつた。その夜は行つてはいけない約束になつていた。

美津江ちゃんの部屋のドアをノックしたがやはり居なかつた。今夜は、お姉さんのところへ男の人が来ない夜なので、一緒に居るのだ。ぼくは帰ろうかと思つた。暗い階段を一步二歩と降りはじめただけで、途中でどうしても足が動かなくなつてしまつた。ぼくは又駆け上つた。思い切つてお姉さんの部屋のドアをあけた。

「今晚は」

まばゆいような女の部屋だった。息の詰まりそうな香水の匂いがもうぼくの胸をあたゝかくしていた。やつぱり、美津江ちゃんは居た。いきなりドアを開けた人間がぼくだと判ると、キツと眉を吊りあげて、

「だめよ、今夜は来ちゃいけないって云つてあつたじゃないの」とカン高い声で云つた。ぼくはおどおどして、ドアをあけたまゝ、どうしてよいか判らずに立つていた。すると、お姉さんが、

「まあいいじゃないの、ドアをしめてお這入りなさいな」

と、口を開いた。ぼくはホッとした。けれど、やはりまごまご立つていた。美津江ちゃんが荒々しくぼくの手をとつて坐らせた。お姉さんが居なかつたら、腰の一つ位は蹴とばされていた所だ。

見廻すと、美津江ちゃんの部屋よりも、もつと華やかで、女人の匂いがむせかえるようだった。高価な香水が撒いてあるに違いない。大きな三面鏡が眼につく。部屋の奥に、ピンクのカーテンが下がっていて、その向うにあるのは寝台らしかった。畳の敷いてある部屋にベッドが置いてあるなんて面白い部屋だなと思つた。

ぼくが膝をそろえ、かしこまつて上眼使いに部屋の中を眺めていると、お姉さんが、

「あなた、丁度いい所へ来たわ、あたしに、煙草買つてきてくれる？」

と、訊いた。

「ハイ」

と、ぼくは思わず大きな声で答えた。

「まア、いい返事ね、じやついでに酒屋へ寄つて、サントリーの角

瓶を一本買つてきてね」

「サントリーつてなんですか？」

「ウキスキーよ」

と横から美津江ちゃんが教えてくれた。

お姉さんは三面鏡の引き出しから、無難作に千円札をつかむと、

ぼくの前に投げた。

ぼくは勢よく立つて外へ出た。なにか歌でも歌いたいような嬉しさだった。あの人がぼくに口をきいてくれたんだ、用を云いつけてくれたんだ。ぼくは、あの人のためならどんなことだつてするぞ、逆立ちしろつていえば逆立ちする。足の裏をなめろつて云えば、足の裏だつてなめる。馬になれつて云えば、喜んで馬にだつてなる。あの人を背中に乗せて、街の真ん中を走つてみせる

ぼくはとぶように歩いて用事を済ませた。煙草屋と酒屋の間は大分離れているので十五分かゝつた。

再び、お姉さんの部屋のドアを開けた。

「只今」

すると、そこに美津江ちゃんの姿のみえないのに気がついた。

「美津江ちゃんは？」

と、ぼくは訊いた。お姉さんはフムムとわらつた。ぼくはこの時、はじめてお姉さんのわらつた顔をみた。眼がちよつと細くなつて、口もとが美しく歪んだ。頬に小さなエクボがでる。

「どこかへ行つたんですか？」

しかし、お姉さんは答えずに含みわらいをしているだけである。ぼくは気配を感じて、室内をキョロキョロ見廻した。すると、部屋の隅に、派手な色の掛布団がまるめて置いてあるのに気がついた。

その布団が気のせい、か、動いているように感じたからだ。

ぼくはじつとその布団をみた。

「フフフ。美津江はね、その布団の中にかくれているのよ」

お姉さんが静かな声で云った。ぼくは思わず居ざり寄つて、その布団をどけた。そして、あつと声をあげた。

そこには、後ろ手に縛り上げられた美津江ちゃんが、転がされていたのだ。猿ぐつわまで噛ませてある。あのしなやかな腕が、むぎんにも高々とうしろに縛り上げられ、もがいた為か寝巻の襟もとがくずれて、可愛くふくらんだお乳がムツクリと顔を出している。足は太股まで裾がめくれて、真白い足が惜し気もなくさらけ出されている。

「どうしたんですか？」

と、おどろいたぼくは、振りかえつて聞いた。お姉さんは口もとにわらいを浮べたまゝ

「美津江は、いつもあんたを縛つて楽しんでたんでしよう。だから、たまには、縛られて楽しむことも教えてあげるのよ。あんたも縛られるのが好きなんだつてね？今夜は美津江の代りにあたしが縛つてあげるわ。手をうしろに廻しなさい」

ぼくはことの意外にびつくりして、ぼう然とお姉さんと縛られた美津江ちゃんを見較べていた。すると、お姉さんの右手がスツとのびて、いきなりぼくの右手を後に捻じ上げた。怖い力だった。

「痛い！」右手首に紐が巻きつくと、その紐がのびて次にぼくの首にかかった。一卷きすると、今度は左手が背中からねじ上げられた。両手首が、ギリギリ紐にくくられた。ぼくは完全に身の自由をうばわれた。勢よく畳の上に押し倒された。すかさず、お姉さんの膝が

ぼくの背中にぐいと乗った。

「あんた、あたしの云うこときく？」

「ハイ」

「どんなことでもきく？」

「ハイ」

「じゃ、あたしの眼の前で裸になる」

「ハイ」

両手首にかゝつた紐が解かれた。が、ぼくがシャツを脱ぎ、ズボンを脱ぎ、パンツ一枚の裸になつた時、すぐに又、紐はぼくの手首に、腕に、胸にからみついた。

「美津江ちゃん、男を責めるのはね、こうやつて責めるのよ、よくみておいで」

お姉さんは、妹に向つてこんなことを云うと、竹を細くけずつた箸を取り出した。それを振りあげた。ぼくはハツと眼をつぶつた。

ピシリ！と、まず箸はぼくの肩に鳴つた。

「ヒエツ！」と、ぼくは悲鳴をあげた。又、振りかぶつた。「むむう」と、今度は声を殺して耐えた。三度目は、身体がつい箸を避けた。箸はヒュツと鳴ると畳の上を打つた。

「まア、あたしの箸じゃ、気に入らないつていうの、よくも避けたわね」

怒りにふるえたお姉さんの声がしたかと思うと、ぼくは腰を蹴られ、続けて肩を蹴られて勢よく転じた。美津江ちゃんが縛られて倒れている上に、かぶさるようにはずんだ。美津江ちゃんは、猿ぐつわを噛まされたまゝ、ぼくが答うたれるのをみていたのだ。その眼が、呻くぼくの姿をみて嗤っているようにみえる。

「美津江ちゃん！」

何だかわけの判らない感動が、心の底からこみあげてきて、ぼくは美津江ちゃんのはだけた胸の上に顔を突伏した。縄目の間からのぞいている、やわらかい彼女の乳房が、ぼくの唇に触れた。ぼくは唇をひらいて、その紅い小さな乳首を吸った。その時、ぼくの背中に、又音をたてて管が振り下ろされた。ぼくは乳首を口にくわえたまま、「むむ」とうめいた。次の管は、美津江ちゃんの太股に、ピシリ！と鳴った。「うゝん」と、美津江ちゃんは大きくのけぞった。ヒュツと次はぼくの肩へ。同じところを二度三度と打たれるのは、焼火箸を押しつけられるような苦痛だ。

お姉さんの管は、ぼくと美津江ちゃんを交互に打ち据える。美津江ちゃんもムキ出しになった太股をみると、管のあとが赤く幾条にもついて、はれ上つている。色が白いだけに、みるもむざんな管のあとが。きつと、ぼくの背中も、あなつてに違いない。

猿ぐつわの下「むむ」という呻きと共に、美しい少女の裸身はぐぐつとのけぞる。

妹を管打つ姉。その妹は又、自分より年上の少年を縛り、管打つ

女性の鼻の美しさについては、谷崎潤一郎が「痴人の愛」の中で二、三カ所、その他小文で数回明らかに述べていますが、他には余り見ません。（本誌では升岡金吉氏の「鼻腔礼讃」や「女性の鼻の穴の美しさについて」の小論を見ました。）

（サド・マゾに関しては私も緊縛美や苦痛の表情等、並々ならぬ興味を持

ちますが、それと同じ程度に「鼻の穴の美、殊に無理に上向けられた女性の鼻の穴」に対して讚美を提したいと思います。以下私の気持を思いつくまゝ述べてみましょう。

一、女性の鼻の穴の美については、西欧諸国では非常に高い評価がされていることは、映画雑誌、スタイル・ブック等を繙いてみても

必ず二、三枚は、女性の顔を下から狙ったクローズアップが載っている事でも分ります。往年では、ロザリンド・ラッセル、アンドレア・リード、マーナ・ロイ、ロレッタ・ヤング、又監督になつてゐるアイダ・ルピノ等々

二、日本の映画界では僅かに京マチ子と岸恵

集 募 稿 原

集 募 眞 寫 實 繪 賣

のだ。なんという姉妹なのであろう。悪魔の姉妹、魔性の姉妹、そして、その姉妹に縛られ、管打たれ、責められながら、歡喜の涙を流す、ぼくは、ぼくは、ぼくは………

（終り）

一、本誌の内容に適したものであればどんな形式でも問いません。

一、必ず未発表の作品に限ります

一、責絵、責写真についても自信のある方は御応募下さい。既に優秀なものは誌上に紹介しています。

一、締切日は特に定めません。掲載篇は発表後相当謝礼差上げます

一、枚数は十枚から三十枚程度、但し内容によつては長くとも構いません。

一、誌上匿名は御自由ですし、筆者の個人的秘密は厳守いたします。

子に二、三見るべきものがあつたに過ぎません。あとは獅子鼻であつたり、上向けるには余りに低く過ぎたりで問題になりません。私のような年輩になりますと、単なる女性の裸体や、お乳や臀部を見ても全然興味が湧かない。これは私なんか極端な性癖でしょうが、どんな立派な体格の持主でも鼻が貧弱であれば魅力を感じないのです。然し一般に男性はこの傾向を持つてゐるのではないかと確信します。

だから縛られた女の顔にしても、上向かせその鼻の穴を思いきり露呈した角度から、或は進んで手指、手拭、其の他の器具によつて鼻を吊り上げ上向かせた有様の描写等を考へて貰つたら如何なものでしょう。

三、「鼻はインワイである」と谷潤一郎の言ですが、女でも男でも鼻の先は多くの神経線が結集してゐて極めて敏感な性感帯を形成していることは生理学の初歩でありましょう。

女性 の 鼻

眞鍋四十六



「互いに鼻を鉤型に合せて」と痴人の愛に描写していますが、只単にキツスする際にも鼻と鼻、鼻と頬との接触が大きな性的要素であることは勿論です。このように鼻そのものが性感に重大な関係があり、女性がその鼻に触られることを歓喜するという事実は相当の実例があります。

四、次に鼻の美しさを讃美する男性の側について述べましょう。これは一言にして言えばサディズムであります。試に美しい女性の鼻を上向けさせて御覧なさい。鼻の穴は上向き黒々と露呈され、唇はその上向ける度合に応

じて上に釣り上ります。そして眉の間の皮膚が少しく緊張をゆるめて、両眼に何とも言えぬコケティッシュな魅力起さしめます。鼻を無理に上向けられた女性がマゾヒズムの感覚に浸るのと同様に、これは男性のサディズムの満足であります。そして黒々と空いた二つの穴と同じように魅力を持つてくるのは二つの眼です。鼻を上向けられた女性の側に於て無抵抗の被虐的意識が生じてくるのに比例してその両眼は羞しさと、支配された者の被征服感とを否応なく表現しています。

五、最後に私が最近たま／＼得ることが出来たモデルによる写真の説明をしましょう。上向けられた鼻の穴の表情の美しさについて再三説明の上、やつとモデルにする事が出来た女性です。最初は嫌悪を示したに拘らず、漸次マゾヒスチックな興味を持ち出したのは私の大きな喜びでした。この写真は透明なテープを用い、五寸ばかりテープの一端を鼻の先からやや下の穴に少しかゝる程度にしつかりとはりつけ、他の一端を額中央ではりつけたわけです。

次には針金其の他で遅当な器具を作つて又発表しようと思ひます。

女看守と囚人

★ 續・模範囚 ★

— 櫻 井 英 —

やがて夏が過ぎ、秋風が吹く頃、佐藤は仮出獄になり、その後任に私が事務雑役となりましたが、一度の犯則もなく懲罰を受けた事のない私は模範囚として表彰され、一級に特別進級を許され、と同時に独歩の腕章をもらいました。そして作業課、用度課には一人で日に二三度は行きますが、その後は機会もなく野中良子とは時折顔を合わせるだけでした。然し彼女は私に決して悪い感情を持つていない事だけは解るのですが、私の方から積極的に機会を作る勇氣などはともなく、遂に昭和廿二年を迎えました。九月に入ると計算夫に一名の欠員を生じ私は長い工場生活に別れをつけ計算夫に転業となりました。その間に田舎廻りの一座にいたと云う女形をアンコに持ち種々変った生活を送りましたが、その事については又機会を見て書きたいと思っています。

計算夫の仕事は主として作業課と用度課の仕事が多く場所も両課と近接しており、両課との出入りも全く自由で自然野中良子とも言葉を交わす事も多く、とうとう二人が関係を結ぶ事が出来る様になつたのです。女看守と囚人の結びつき、一寸有り得えない事ですが私の場合は最後迄全く他に知れる事なく行な

われたのです。二人が逢いたい時に何時でも人目を忍んで逢える場所がたつた一つあつたのです。倉庫の中はたまには可能であつても度び重なれば人目につきます。そこで目をつけたのが職員便所だつたのです。こゝなれば計算夫等でも公然と入れます。打合せ時間をメモに書き、仕事に事よせて彼女の机上に、又彼女から私の机上に一寸置けば連絡がつき、どちらかゝ先に一番奥の便所に入つて待つていると、やがて後から行つた方が、三ツ二ツと三度ノックすれば中から静かに戸が開かれて目的が達せられるのです。この様な逢い引きは全くスリルに富み二人の立場が立場だつただけ今思い出しても身内がゾクゾクとして来ます。

こんな事をくり返している内に或る日の事彼女は、逃走未遂者が高手小手に縛られ、数人の看守によつてたかつてなぐられたり、蹴られたりしているのを見たのです。それに少なからず興味を覚えたのか、彼女は私を縛つてみたいと口にする様になりました。私もしばらく眠つていたマゾヒスティックな血をそれによつて呼びさまされました。だが狭い便所の中では二人とも十分満足出来ず、例の倉庫は彼女が嫌がりますし、私も又あまり気が

進みません。でもそうして
いる中に、待てば海路の日
和とか、廿三年の三月遂に
その機会が訪れました。

それは毎年行われる年度
末の会計検査の二三日前の
事です。大体この検査は抜
き打ち的に行われるのです
が、凡その情報が三四日前
に入ってくるので、各課の
係は張尻をあわせるのに大
童になります。その中で一
番面倒なのは作業課と用度
課です。帳尻と資材の現在
庫を合わせるのに六人の計
算夫は総動員され三人づゝ
作業課と用度課の二手に別

れそれ／＼の係員に協力して残余の資材をか
くすのです。これは一見収容者を使うより同
僚を使つた方が安全に見えますが、秘密保持
の点を考えると収容者を使つた方が遙かに安
全なのです。

用度課に廻わされた私達三人は、又二手に
別れました。即ち例の倉庫には野中良子の部
下と二人の計算夫が行きました。私と彼女は



特別倉庫（これは事務所の二階にあり重要な
器具、つまり鋸とかやすり等逃走に使用され
るおそれのある物などを入れて置く倉庫で通
常は収容者は絶対に入れません）の調査に当
りました勿論これは彼女の一存でその様な配
置をつけたので又彼女にはそれだけの権限が
あつたのです。

倉庫に入ると彼女はいきなり中から鍵を掛

けてしまいました。

「大丈夫？」

私は聞かずにいられませ
んでした。

「平気よ、課長さんは帳簿
調べで夢中だし他に誰が来
るの？ さあそんな事を云
つてる暇に服を脱いで――
――。」

一寸私はためらいました
が、素早く襦一本の姿にな
ると彼女の前に立ちました
「どうしたの、それも取る
のよ」

「でも……」

「何よ今更、じやいゝから
そこに坐つて」

もう昨日の中にすっかりブランは立ててあ
つたのでしよう。縛るのに適当な縄がちやん
と一隅に用意されてあるのです。私が坐るな
り後手に縛り上げると仰向けに転ろがし、
「やつぱり、これも取らなきや駄目よ」
と云いつゝ白い指で襦の紐を解きにかゝる
のです。

「そんな……」

私は反射的に腰をひねつたものゝ、内心では彼女の手でそうされるのをのぞんでいたのは事実です。

「黙つて、大人しくして居なきや駄目。口がきけなくなる様にするわよ。」

と云つたかと思うと、やにわに彼女は自分のズロースを脱ぐとその一端を私の口に押し込み、その上から手拭で猿轡をしてしまいました。鞭を引き抜くと、腹の上に馬乗りになり体中をくすぐり始めるのです。初めは身をよじらせてこらえていましたが、次第に苦しくなり、呻き乍ら彼女の体を振り落そうとしましたが、手の自由がきかずたゞもがくばかりです。

「いやなの、あんたは妾をこんな女にしておいて、今更いやになつたの？ 覚えていらつしやい、もつとくゝいじめてやるから」

立ち上つて踏みつけたり蹴つたりしていましたが、私のバンドを取つて足で私の体を横にころがしたかと思うと、いきなりビシリ背を打ちました。思わずウツと呻めいて体をそらすと

「痛い？ 生意気に人間並の血が通っているのね。倉庫で佐藤と二人で妾を玩具にしたのは誰？ まるで動物じやないの、そうね、お

前なんか動物だわ。それもよくくゝ下等の動物よ、鉄のオリの中に入っているんじゃないの、その動物が人間の妾を二匹で玩具にするなんてあんまりよ、その時のお礼にうんといじめてやるから……」

彼女の鞭は私の背と尻に何回となく音を立てゝ落下し、足は肩を蹴り頬を踏みます。しばらくそんな事が繰り返されると私はぐつたりしました。彼女も疲れたらしくバンドを放すと傍に坐り込み、私の胸に顔をうずめて肩で息をしています。しばらくそうしていましたが、やがて私から放れて立ち上りました。再び鞭打ちが始まるのかと思ひ私は仰向けにされたまゝ軽く目を閉じていますと、猿轡がはずれ、

「あんた痛かつた？ かにんしてね」

と云いつゝ私の体に寄りそつてくるのです。その肌ざわりの変つてゐるのに気がつき目を開くと何時の間に脱いだのか、彼女も一糸も身につけていないのです。嵐の一時が通り過ぎると彼女は豊かな尻を私の胸にのせて見下し、

「さあ、お掃除してね」

と云いつゝ………出すのです。赤い花びらにあふれた蜜――。

「水が欲しい。」

「やがて私はふうと溜息をつき乍ら一言もらしました。」

「まあ、何云つてゐるの、こゝに水なんか有りやしないわ………、そうだ、もつといゝものがあるわ、その代り皆飲まなきや駄目よ、途中で吐き出したりしなけりやあげるわ。」

「大丈夫、全部飲みます。」

私はそれが何か判りませんでした、そう答えました。

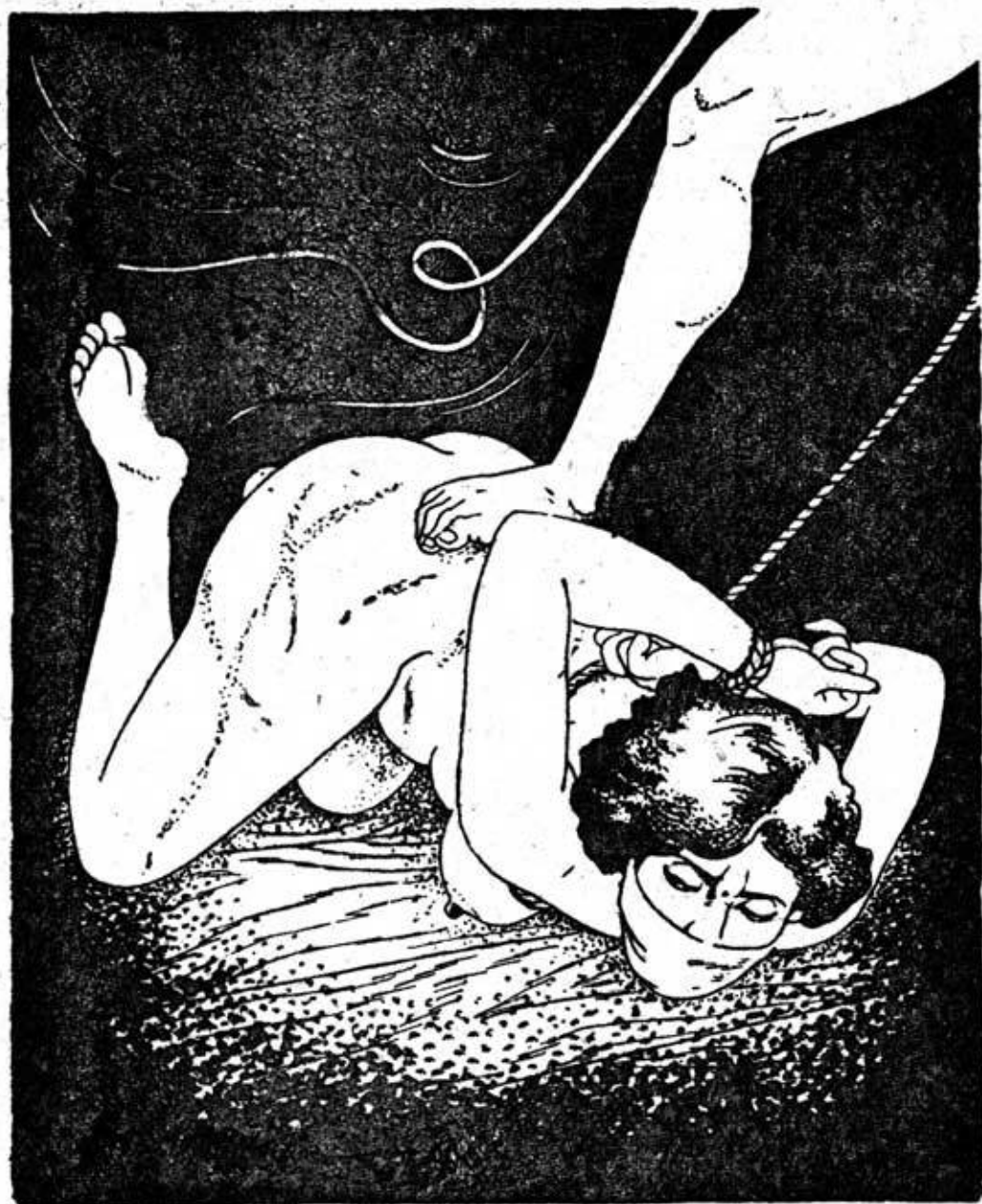
「きつとね。」

「えゝきつと」

「じやあ、お口を開けて」

彼女の飲ませてくれるものが何であるかを咄嗟に察しましたが、まゝよと思ひびつたりと………ますとやがて勢よく生暖かい液体が注がれました。夢中で目を閉じ、ゴクン／＼と咽喉を鳴らし一滴もあまさず飲み干すと上半身を抱き起された私は、しつかりと彼女に抱きしめられ頬と頬がふれ合いうつりしてゐました。そつと私語る彼女の声はうるんでゐます。

「好きな、妾はあんたが好きでたまらないの、でもあんたは妾が本当に好きなのかどうか判らないわ。受刑生活中に女と関係すれば



それだけ得だつて気持ち位しかないんでしょ」
 「そんな事あるもんですか。私は貴女が好きだからこそ、こうして何でも貴女の云う通りになつてゐるんじゃないか。この上私に何をしろと云うんです。私に出来る事なら何でもしますよ。」
 「本当にするわね。」
 「えゝしますとも」

「じゃ、今度は妾を縛つて」
 「えつ、縛る？」
 「そう、あんたが妾を縛るのよ。そして思い切りぶつのよ。あんたをいじめた罰に妾がぶたれるの」
 彼女はもう私の縄を解きにかゝつています
 「さあ早く縛つて、あんたの好きな様にして。」

促がされて私は体中の痛みも忘れ夢中で彼女を後手に縛りかゝります。
 「もつとぎゅつと、……もつと乱暴にしてよ。あんたそれしか力がないの。意気地なし、それでも男なの」
 やつと縛り終つた私が彼女の前にしやがみ込むといきなり彼女はあぐらに組

んでいた右足で私の腰を蹴つたのです。不意をつかれてドツと尻もちをつく
 「何よそのざまは、醜態だわハハハ……」
 と男の様に笑いました。
 「チクシヨウ」

私は立ち上るなり、二つのふくらみを持つた胸の上に馬乗りになり両頬をビシヤツ／＼となぐりつけました。彼女は唇をかんでこらえています。私は今度は頬をつねり、腰に力を入れてひねるとグリツ／＼と二つのふくらみもまれその触感が快く私の全身に伝わつて来ます。

「クク、苦しい」

遂に彼女は小さく悲鳴を上げてしまいました。もうこうなると彼女の誘導を待つまでもなく、私の体は自分の意志で動きます。鞭を彼女の口に押し込んで、猿轡をかませると、立ち上つて足の裏で下腹部を押えグリ／＼と或いは強く、或いは弱く踏みにじりました。彼女は身をかがき仰向けの体を横にしようとしませんが、その都度足に力を入れて押さえつけますとバツタリと仰向けになつてしまいます。

それに飽きると私は彼女の右の内股に口を当て音をたて乍ら吸いつきました。一分二分

と吸つていますと、その部分から血がにじみ出し口の中がねばつてきます。口を離すと血がしたより太腿を色彩つています。その血をなめつくすと跡は赤く痣になつています。この方法は全く痛みを与えずマズヒストに恍惚感を与えます。左の腿の付根に、腹に、乳房に、腕に、私は数ヶ所から彼女の血を吸い取りました。じつと彼女が目を閉じ気持よさそうにしているのを見るとムラ／＼と何かが込み上げて来ます。

白い肉体に赤い血が色彩するのは又見事な美しさです。彼女の肉体を疵つける事なく、彼女の血を体外に流出する事の出来た喜びに我知らず叫ぶのです。

「見ろ、俺はお前の血を吸つたぞ、お前の体にきずをつけずに、痣の様なものが跡に残つたが、そんなものは四五日もすれば又白い肌になるんだ。もうお前は俺のものなんだ。

よくもいまで用度課長なんか、その美しい肌を自由にさせていたな。その罰がどんなものか今見せてやるから覚悟してろ。」

私は自身の言葉にあやつられ、バンドを握るとピシリと肩口を叩きました。

「ウツ」

「ふん痛いか。まだ／＼そんな事じゃ許せる

もんか。こうだ。／＼」

叫び乍ら所きらわず打ち続けると、彼女は転ろげ廻ります。益々猛り狂つた私は背中を足で押さえ盛り上つた尻を力一杯なぐりつけました。

「ウツウツウン——」

と呻めいていた声が次第に小さくなり、遂には全く声も出なくなりましたので驚いて足を離すと背中が大きく波を打っているばかりです。私があわてゝ猿轡をはずすと

「ハーハー」

と口を開けて息をします。急いで縄を解き腕をもんでやりますと

「いゝのよ。いゝの、それよりも抱いて、しつかり抱いて」

とあえぎつゝ私の腕を押さえ、唇を求めるのです。

「良子！」

私はその時初めて彼女の名を呼び捨てにし、彼女の体を両腕に抱きしめ唇を合わせましたが、そのまゝ床にくずれる様に倒れました。二人共心身共に疲れ切つてしまつたのです。

最後に一言附記しておきましょう。

勿論倉庫内の在庫調べはせず。課長にはいゝ加減に報告しておきましたので、検査官の目が光り、嚴重な二重検査となり、用度課長の職務怠慢は白日に晒され、遂に左遷される結果になりました。一方良子は表面何の變動もありませんでしたが、彼女はこの時妊娠三ヶ月だつたのです。それが課長の子か、私の子か彼女自身にも判らず遂にダイヤを決意し、課長には日陰の子は生みたくなないと云い費用の一切を課長が持ち、ダイヤをしました。が、その後余病を併発したとかで死亡しました。又私は彼女の死を聞き再び彼女と逢う事の出来ぬ悲しさに計算夫に止まる事がいやになり、再び印刷工場へと転業を願つたのです。そこにはあの女の様に立ち振るまうドサ廻りの女形若林由夫が私を迎えてくれましたが、一度女体の責めを味つた私にはただあふれる慾情のはけ口としての価値しかありませんでした。出所して二年有余、未だにあの日の事が忘れられず、今ペンを持つていても再び逢うことの出来ない良子の事を思い出して胸が一杯なのです。

(完)

この日の悦楽の結が、どの様になつたか

慘 虐 秘 録

高 遠 落 城

川 野 京 輔

(一)

信濃、高遠の城。

天正十年春の事である。

城主、仁科五郎信盛は、織田家の使者と称する僧侶の某を謁見した。

信盛、当年とつて十九才。

剛勇の誇高い武田勝頼の弟であつた。

使者は、織田の世子信忠の命を受けて、高遠までやつて来たものである。

一見してそれと分る、尋常ならぬ風貌をした僧は、綺羅星の如く居並ぶ諸将の前で、堂々と要件を申述べるのだつた。

「武田氏の亡びんこと旦夕に在り。宜しく城を致して去るべし」。(武田氏亡在旦夕矣。

宣致城而去。)

早々降伏しろと云うのである。

血氣の信盛は、真赤になつて激怒し、右手をぶる／＼震わせて、使者を指さした。

「えい、言うな。その様なたわけた雑言を聞く耳を持たぬ。誰か、此奴の耳を切り取つてしまえ」。

かくて僧は、無残に両耳を根本から抉り取られた。

「何んと、なされ様と、此の城の運命は、既に風前の灯同然」。

気丈な僧は、したゝる血潮にかまわず毅然として豪語する。

「強情な奴。鼻を削げ」。

信盛は次に、僧の高い鼻梁を剥ぎ取らせ、

城外に放免した。

織田家の挑戦に対する公然の回答だつた。

(二)

かくて織田の大軍は、世子信忠、自らの指揮で、高遠の城を、十重二十重に包囲した。

信盛は、部下の諸将と共に、城に立籠り、

防戦これつとめたが、如何せん、到底怒濤のように押し寄せる織田の精銳を喰い止めるだけの戦力がなかつた。激戦数刻、遂に、織田の軍兵は城内に雪崩をうつて攻込んで来た。

小山田備中、諏訪莊、原隼人等、城の勇士が大庁(大書院)に頑張つて獅子奮陣の活躍をすれば、城主信盛も、保侶衣をまとい、堀外の桐木を背に立つて、こゝを先途と士卒を

指揮していた。

此時突如、紅糸おどしの鎧を着した一人の女将が織田の軍勢の真只中に飛び込んで来た。抜ける様に白い顔を、きりつと引締め、大刀を片手に名乗りを上げた。

「身は是れ諏訪莊の妻也。来りて与に戦うべし」。(身は諏訪莊之妻。可来与戦矣)。

齡、三十に未だ手のとどかぬ美女が、单身健気にも大軍を支えようというのである。

「猪口才な女め」。

どつと迫り来る敵兵数人を、女将手練の長刀が忽ち薙倒した。

その間に、織田の将、森武蔵守は、屋根に跳り上り、屋根板を発ぐと、銃を構えて、狙い撃ちに撃ちまくった。

その一弾は、城主信盛の肩を深々とえぐり取った。これを見て、ひらりと飛び降りた武蔵守は、信盛の許に駆け寄るなり「仁科殿、見参」。と叫びざま、野大刀を大きく振りかぶった。

「下郎、待て」。

今はこれ迄と覚悟した信盛は、武蔵守を制すると、いきなり、小刀をぶすりと我れと我が腹部に突刺した。

そのまゝ、ぐいと横にひねり、うんと力を

込めると、割腹した傷口から、腸がはみ出し、真黒な血が床几をつたつて土の上までしたゝつた。

「勇士の最後を見よ。仁科士郎信盛の最後を後世に伝えよ」。

苦痛に歪んだ蒼白な顔をきつと上げると、両手で、ぐいと腸を抜き、ふすまの蔭に投げつけ、そのまゝ、どうと倒れた。

「仁科殿の首級を挙げた」。

森武蔵守の、野太い声が響き渡った。

(三)

諏訪の妻は乱戦の中でちらりと、此の惨絶な主君の最後を見た。

男も及ばぬ奮闘をしていた女将の五体から、急にすうと力が抜けて行つた。「落城」。



彼女、負戦の後に来る占領軍の残虐非道を知り過ぎる程知っていた。

「奥方様始め、女子供衆をなんとかしなければ」。

気はあせつたが既に重囲に陥つた身体は思ふ様に動いてくれない。

「諏訪殿を討取つたり」。

遠く乱軍の中で誇らし気な敵の勝名乗りが聞こえた。

「おー」。

野獣な様な叫び声を上げて、一人の敵兵が彼女におどろかゝつて来た。

彼女がはつと身を沈めて長刀が一閃した次の瞬間、その男は、恐ろしい悲鳴を上げて倒れていた。

すつくと立つた彼女は、今亦一人の命を奪つた長刀を握りしめよろ／＼と走り出した。

「奥方様、すぐ参ります」。

口の中で懸命になえている彼女の前に、

大きな身体をした敵兵が立ちふさがつた。

「おい女、城は落ちた。どうだ、いゝ加減で降参せんか」。

見ると、豪勇で鳴らし、今しがた信盛の首級を挙げた森武蔵守であつた。

無言のまゝ彼女は力一杯、刀を突出したが

忽ち、武蔵守の豪剣に、彼女の刀は宙高く、

抛出されてしまった。

強い艶面がニヤリとすると、男は、しつかと彼女の体を抱きしめていた。

彼女はそのまま、ぐい／＼と、雑木林の中に引づられていった。

武蔵守の怪腕は、彼女の鎧の紐をすたく／＼に引裂き、暴れ廻つて抵抗するのを、まるで猫でも扱かう様に、不敵な笑いを頬に浮かべたまゝ無雑作にあしらい、女体を裸にしようとするのであつた。

古の巴御前もかくやと思われる働きをした女傑も武蔵守にかゝつたのでは、所詮唯の女でしかなかった。

「ハッ………。思いの外、美しい女だ」。

男の目が淫らな光を帯びて、甜める様に、ふくよかな女体を眺めた。

素裸にされた上、両腕は後で、堅く縛り上げられてしまつたのである。

女の美しい切長の眼から、くやし涙が、ぽろ／＼と落ちた。

「諏訪の妻だとか言う事だつたな。ハッ……」。

今日は乃公が、思い切り可愛がつてやる」。

近寄る男の顔に、女はベツと唾を引つかけた。

「気の強い奴め。てこずらせよつて。女を縛り上げてから楽しむなどと云う事は、今迄の

乃公にはなかつた。だが、お前見たいに、強情な奴には、やむを得んて」。

耳を澄ませると、もう、あちこちで女の悲鳴や、男達の歓声が起つていた。

占領した兵士達が、城の女を、漁り始めていたのであつた。

「奥方様」。

お美しく若い奥方様も、同じ様な目にお会になつていゝのではないか——こんな辱しめを受けていながら、彼女はひたすら奥方の身を案じていた。

自由のきかぬ縛め。

女の体は嵐の中の小舟の様に翻弄された。

がさ／＼と林を分けていきなり二、三人の雑兵がぬつと顔を出した。

武蔵守がぐいと立上ると、彼等は、急に逃出そうとした。

「待て、小者共。この女をお前等に呉れてやろう」。

云い捨てると、彼は、ゆつくりと立去つていった。

(四)

思いもかけず美しい獲物を与えられた雑兵達は、しばらく顔を見合せて、きよとんとし

ていたが、やがて武蔵守の後姿が見えなくなると、ごそくと相談し始めた。

「年の順だ」。

「いや籤だ」。

輪姦する順番を醜く言争っているものらしかった。

血の気の失せた凄艶な顔をきとつもたげた女は、

「縄を解け。言いなりにしろ」。

「高が女だ。森様と

もあろう豪傑が、女を縛るとは解せぬ」

とか何んとかめい

く言合つていたが

一人の男が、小刀を

抜いて、女の縄を切

りとつた。

突如、飛燕の如く

身を躍らした女は、

雑兵の手から刀を奪

った。

「やや、手向う気だ

な」。



男達も、ぎらりと大刀を抜いた。

女はニツコリ笑うと、自分の喉笛めがけて

刀を突刺した。

純白の胸を血に染めて女は崩れる様に地に

横たわつた。

「畜生」。

氣負いこんだ欲望の出鼻を挫かれた男達は

未だ温い豊艶な白い肉体から、寸時の快樂を

貪り取ろうとするかの様に、争つて女のふく

よかな脚に抱きついたり、腕をさすつたりし

ていた。

忌々しいひとときが済むと、一人の男が、

屍体の横にもぎ取られている紅糸おどしの鎧

を見付けた。

「うん。こいつは、乃公達の組頭を殺した女

だぞ」。

あくなき復讐の念

が、こみ上げると、

それが残酷な猟奇の

興味に結びついた。

「頭は胸を刺された

のだ」。

一人の男が、大刀

を逆手に持つて女の

胸を刺した。痺れる

様な快感が大刀を伝

つて感じられた。

「作兵は脚を切られ

た」。

もう一人が、女の

脚を太腿から切断し

それを両手で握ると

女の顔を、がんと

ぐりつけた。

脚は膝で折れ曲り、奇妙な形になった。男達はたつた今、自分達の欲望を満足させた女の体を、ずた／＼に切りさいなむと後はけりとした顔で引上げていった。

ばら／＼になつて転つてゐる女の四肢に、夕陽が木々の長い蔭をつけていた。

(五)

その夜は戦勝の宴が華々しく催された。戦火に見るかげもなく破壊された大庁が、応急に修理され信忠は満足気に盃を傾けていた。「仁科信盛の妻はどうした。乃公に酌が出来ぬと言うのか」

無理を承知の上で、信忠は、敗將の妻に対して宴に出る様に強要したのであつた。

十九才と云う若い信盛に嫁いでいた奥方は花も恥らう十六才の初々しい若妻であつた。

清楚な透き通る様に美しい奥方は、荒々しく武者に両腕を握られて、無理矢理、宴席に連れてこられた。

「うむ、噂に優る艶色じや。さあ、これへ」

戦塵にまみれた信忠の頬が好色そうに綻るびると、ぐいと奥方の細い手首を握つた。

覚悟を決めたものか、奥方は、一寸眉を陰

しくつり上げたゞけでされるまゝになつた。

自決しそこなつた我が身が怨めしかつた。

信盛憤死の報を受けた時、直ちに後を追わんとしたのであつたが、既に敵兵が雪崩れ込んでいて、果し得なかつたものであつた。

忽ち小刀は、もぎ取られ、嚴重な監視を受ける虜となつたのである。

奥方は、冷やかに微笑むと、ずつと信忠の膝にもたれかゝつた。

信忠の力強い腕が、奥方の体をすつぽりと抱きかゝえた。

と、奥方の一方の手がする／＼と蛇の様に延びて、信忠の腰から脇差をさつと抜き取つた。

「ホホホツ……」。

狂氣の笑声を高々と響かせると、奥方は、

脇差を我と我が胸に刺し貫いた。

身をもつて貞節を守ろうとした女の、はかない最期であつた。

信忠の顔が世にも複雑な色を示した。

「愚かな女、外の女共への見せしめだ。素裸にして晒物にせよ」。

不機嫌に命ずるとぐいと大盃をあおつた。

か細い奥方の屍体から無残に衣類がはぎ取られると、魂のない肉塊が、側の桐の木の枝に

かけられた。

ぶらりぶらりと不恰好に揺れる屍体の下には血に染つた床几が一つ転つていた。それは最愛の夫、信盛がかけて指揮していた床几であつた。

既にドス黒く凝固した夫の血の上に、奥方の胸からしたゝる血が、ぼたり／＼と二、三滴落ちていった。

信盛が倚りかゝつて最期を遂げた此の桐の木には、無数の刀痕があり、合戦の凄じさを如実に示していた。

そして今、信盛の妻が、世にも辱しい姿でこの桐の木につるされてゐるのであつた。

夜は次第に更けていった。

戦勝に酔い痴れた將兵たちの笑い罵る声や歌い騒ぐドラが声、炎々と燃えさかる簑火の輪のあたりから、虚空に響き渡つて、いつ果てるとも知れなかつた。その中に生きのびて囚われの身となつた女たちの悲鳴が、断続的に哀れな調子で洩れきこえた。

昼の血腥さい死闘も知らぬげに、さんざめく城中では、如何なる饗宴が行われていたのであらうか。桐の木につられた屍体はあるかなしかの風に静かに揺れていた。

(完)



◆アブニストの記◆

痴 迷

(ちめい)

鬼 山 絢 策
方 金 三・画

私の友人三木が妻の唇を盗んだ。

それは考えように依れば些細な事かも知れない。

然し私はそれに対して復讐の名を借りて、妻にその報復手段を計畫させた。私の心の中に眠つて居た変型的なアブノーマルセクシャルデザイナーが、妻をサジストに仕立て、その対象に三木を選んだ。

私の目的は妻のサジズムのスコプトフィリア（監視的願望）にあるのだ。

十四 發明炭

其の後三木は二三度来たが、子供が居たり、他の客が来たりして、妻のきよ美と二人きりになる機会がなかったようである。

三木は此の頃来る度に牛肉を買つて来たり、きよ美にクリームや白粉を買つて来てやつたりして、御機嫌をとつて居らしい。

彼は今、新發明の代用木炭の製造事業に夢中になつて居たが相変らず資金を出してくれる人がなくて困つて居た。

当時は非常に不足して居た時代で、東京などは食糧難よりも燃料難の方がより一層深刻な頃であつた

三木の知合いの男が、亜炭に或る薬物処理して加熱するとコークスと木炭のあいこのようなものが出来上つた。

そのしろものは非常に軽くて、カロリーは石炭よりも高くコークスに近い熱量を放出した。然も原料は亜炭で福島県の某地に亜炭の豊富な山があつて、その山の持主がその新發明をしたのだが、亜炭は安いものだから炭俵あたり、百円位で



出来ると言う。炭の公定が一俵百二十円で、闇が東京で四五百円もした頃だから、これが出来れば統制外だし、闇取引きをせずとも堂々と売買ができる。当時のバス会社は全部木炭自動車を走らせて居たから、バス会社へ売込めば、大口な商売が成立すると言つて、私の家にも見本を持つて来た。七輪に入れて使つて見るとなる程火力が強い、たゞ木炭より火持の点が劣つて居たが、保温の目的よりも、火力を必要とする向きには適當かと思えた。

彼の持つてくる仕事の話と言へば、一寸考えるとまことに有望の如く思えるものがあるので、もう彼の話につて無駄骨は折るまいと考へて居た私も、その時は又フラフラと片棒担いでやろうかと言う氣になつた。

その發明した男と言うのは資金が全然なくて、自分の家のかまどで少し宛焼いて試作して居るのだが、これを大量に生産するにはコレ／＼の窯を据えれば月産コレ／＼の産数になり、それを一俵百五十円で売るとコレ／＼の額になつて、これだけ儲かると細かな数字をリストにして見せた。

さし当りその窯の代金と薬品と工場（發明者の家を改造する）との資金に百万でも五十万でもあれば出来ると言う。

で誰か共同でやる出資者を探してくれと言う。そこで私は「如何に有望な事業でも工場を福島に設ける点がこの土地の人には首をかしげる原因なんですよ。あなたに絶対自信があるなら、あなたとその發明者と二人でやるのが一番ですよ」と言つた。三木は自分もそう考へて居ると言つたが彼には勿論そんな金はないし、彼の細君の実家の兄もこの頃は彼を

全然信用しないので話につてくれないが、彼の友人の一人には金はないが、家作を持つて居る男が乗氣で、自分の持家を担保に金を貸してくれる人があるならその金を廻してもいいと言つて居る。と話した。

私がA銀行の支店長と懇意にして居るのを知つて、私に支店長を紹介してくれと頼んで来た。で私は先ず担保物件を下見して、よければ支店長に話してもよいと思ひ、彼と同道してその家を見に行つた。

ところがその家たるや彼の要求額の半分にも達しないしろもので、然もその持主という彼の相棒になるべき男が枕も上らぬ病人なので、どだい担保にも何にもなる代物ではなかつた。

彼の話や計画は所々に非常識な欠陥があつて、もしそれに氣がつかないで居るなら彼はどこか一本足らない男でありもし認識してやつて居るなら大インチキ師だと言える。

だが私のみたところでは、三木はその前者に當る男だと思つた。

私はこの「代用木炭」には相当心を動かされたが、三木がどの程度迄調査しての話か、三木の今迄のやり口から考へると、信用できなくなつた。彼は福島へ何度も出かけて、その發明者の家に泊り込んで、特許局へ特許を請願して新案特許の許可書も見だし、亜炭の山の現場も見えて来たと言うが、何しろ福島では私が調べに行くのも臆怖なので、考へて居た時にそんなインチキな担保物件見せられたので、三木の頭を疑ひ、一度に氣のり薄くなつてしまつた。

十五 盗視 決行

その家を見ての帰途、三木はとある家に依つて、私を外に待たせて、一寸話込んで出て来たが、

「この家が、いつか話したやきもちやきの亭主の家なんですよ。今も細君に会つて来ましたが、昨日も大喧嘩して、火箸で細君の手を突通したそうです。全くあれじゃあの細君が可哀想ですよ。なか／＼綺麗な人でしてね。元映画女優を志望して松竹の蒲田撮影所に居たこともあるそうですからね。それ程の美人を虐待するなんて、長見君もひどいですよ。細君はおとなしくて親切でいゝ人なんですよ。」

としきりに、その細君が美人であり、気の毒だと肩を持つた。私はこれに依るとその細君と三木とは既に関係があるのではないかと睨んだ。帰つて来て、きよ美にその話をすると

「とんでもない人

ね、三木さんはやはりインチキ師よ。色魔なのね。今度来たらウンと虐めてやるわ」

と憤慨した。

私は「隙見」の機会を秘かに狙つて居た。

三木は私が午前中は大体家に居て午後から出かけて行くのを承知して居て、私に用事のある時は午前中に来たり、私は会いたくなく、きよ美にだけ会いたい時は午後によつて来るのだつた。

一度私が午後出かけてから途中で引返して来た時、表を見ると三木の自転車置いてあつたので（来てるな）と思つて





家に入る前に隣家のかみさんと声高かに話をして、私の帰つて来たことを知らせ、玄関から家へ上るにも悠りと靴を脱いで家の中に声をかけて入った。

きよ美は直ぐ立つて迎えに出たが三木は座敷の真ん中にかしこまつて、バツの悪そうな顔をして挨拶をした。

私はいつもと変らぬ調子で仕事の話などしたが、三木は日頃の長尻に似ず早々に帰つて行つた。

私はその時(存外正直な男だ)など思つた位だった。私はきよ美に早速聞いて見た。

「今日はどうしたんだい？」

「フフン、一寸でいゝから抱かしてくれつて言うのよ。仕方がないから抱かせてやつたわ。そしたら接吻しようとしてくるんでしよう。妾が首を振つてふりほどこいてやつたのよ。そこへあなたの声がしたもんだから奴さん慌てゝたのよ。抱かせる位、仕方がないでしょ。」

「その位はまあ止むを得ないな」

「妾、コールドクリームがほしいつて言つてやつたのよ。そしたら明日持つて来てやるつて」

「品物なんかねだるのはよせよ。だが明日又来るんだね」

「来るでしょ。あなたが何も気がつかない風をして居たからあいつ、いゝ気になつてゐるのよ。平気でやつてくるわ。厚かましいんだから」

「よし、それじゃあ、明日決行しよう」

「何を？」

「何つてこの前話したろう。明日は午前中に用を足してお昼

までに帰つてくるよ」

「あゝあのこと？ イヤな人ね、フフフフ」

「羞しい？」

「羞かしくなんかいいわ。平気よ」

きよ美は私をみつめて艶然と微笑んだ。きよ美は「あなたのためにやるのよ」と言つて居るが、今微笑した口からチラリとこぼれた白い歯なみの中に、一きわ鋭く覗かせた絲切歯と、細めた眦の奥にひかる瞳の中には、彼女自身も多大の興味と快感を期待して居るのではないかと思えた。また「そうであつてほしい」と私は希つた。

その夜、私は明日の妻のさまゝな姿態が網膜に映し出されてなかゝ眠られなかつた。

きよ美はきよ美、私のそうした異常な昂奮を喜んで居るのだ。きよ美は私の昂奮をいや増すため刺戟剤として私の「計画」に依じて居るのかも知れなかつた。

私はこの前始めてきよ美が三木に「復讐」の第一歩を印した時の双方の体位を、委しく根掘り葉掘りして聞いた。

その姿勢が多分にきよ美の受動的な体位である点が私には不満だった。

「明日来たらね、斯う言う風にやつてやれよ」

私は妻が惨酷なる女王として君臨する姿態を教えてやつた「出来るだろう？」

「出来るわ。そうやつて見るわ」

きよ美は明日よりも現在の昂奮に上気して、私の言うことには極めて柔順だった。



十六準 備

昨夜おそかつたにもかゝらず、私は朝早く眼が覚めた。眠がる妻を無理に起して飯の支度をさせると、朝から家をとび出して、自転車得意廻りをした。

在郷へ私の石鹼を行商して歩く売子は、いつも午前中に私の家へ来て石鹼を持つて行くので、午前中は私は家に居る習慣だつたが、今日は、私が居なくても分るようにきよ美に話しておいて、昨日聞いた注文の分を自転車につけて、A市内の薬屋や、雑貨屋を猛烈なスピードで飛び廻つた。

私の良心の中に、もしも、私を責めるものがあるとしたらそれは

「お前はそんなことに夢中になつて、商売を疎かにしてはだめぞ！」

と絶えず叱咤する声であり、私はその声に追いかけられるように駆けずり廻つた。そして今日はいつともよりも余計に得意先も廻つたし、注文も充分とつた

(今日は十分働いた。もう昼から遊んでも、決してやましい所はない)

私は何度も良心にそう答えて、自転車を近所の知人の許へ預けると、足音を忍ばせて、我が家へ近寄ると、窓の方へソーツと廻つて家の中を覗いて見た。誰も居なかつた。

玄関から上ると靴を両手に持つて、押入れの隅の方に隠した。時計を見ると一時一寸過ぎだつた。

鏡台の上を見ると湯道具や化粧品がないので、きよ美は子

供達を連れて風呂へ行つたことが分つた。

台所からお鉢を抱えて来て、私はありあわせのもので急いで、昼食を済ませた。

お鉢やお膳を元通りに片づけると、奥の六畳間へ入つて私は押入れを開けた。

蒲団が上迄詰つて居る。その上の蒲団一枚を下押入れに移した。

押入れの襖をピツシリと締めて見ると少しの隙間もなく、ピツタリと締つた。

きよ美の針箱の中かしんちゆうの「指ぬき」を持つて来て、押入れの敷居の溝においた。そしてピタリと締めて見ると、その「指ぬき」の間隙だけを底辺として非常に長い三角形の隙間が出来た。

私は押入れの上に上つて寝転んで見た。

ワイシャツがおろしたてだったので動く度に驚く程大きな音を立て、ガサ／＼した。外にはそれ程聞えないのではないかと思つたが、気になるので又外へ出てワイシャツとズボンを脱ぎ、それを下の打入れの後側の方へ投げ込んでシャツと股引きだけになつて、又押入れに上つた。

隙間へ眼をつけて覗いて見ると、六畳間の中央が約四尺位の横幅だけ見えた。顔を動かせば、その左右に二三尺位視野を移動させることが出来るので、これで充分だと思つた。

さして尿意は催してなかつたが、便所へ行つて用を済ませておいた。

便所の窓から表が見える。まだ三木の姿もきよ美も見えない



い。

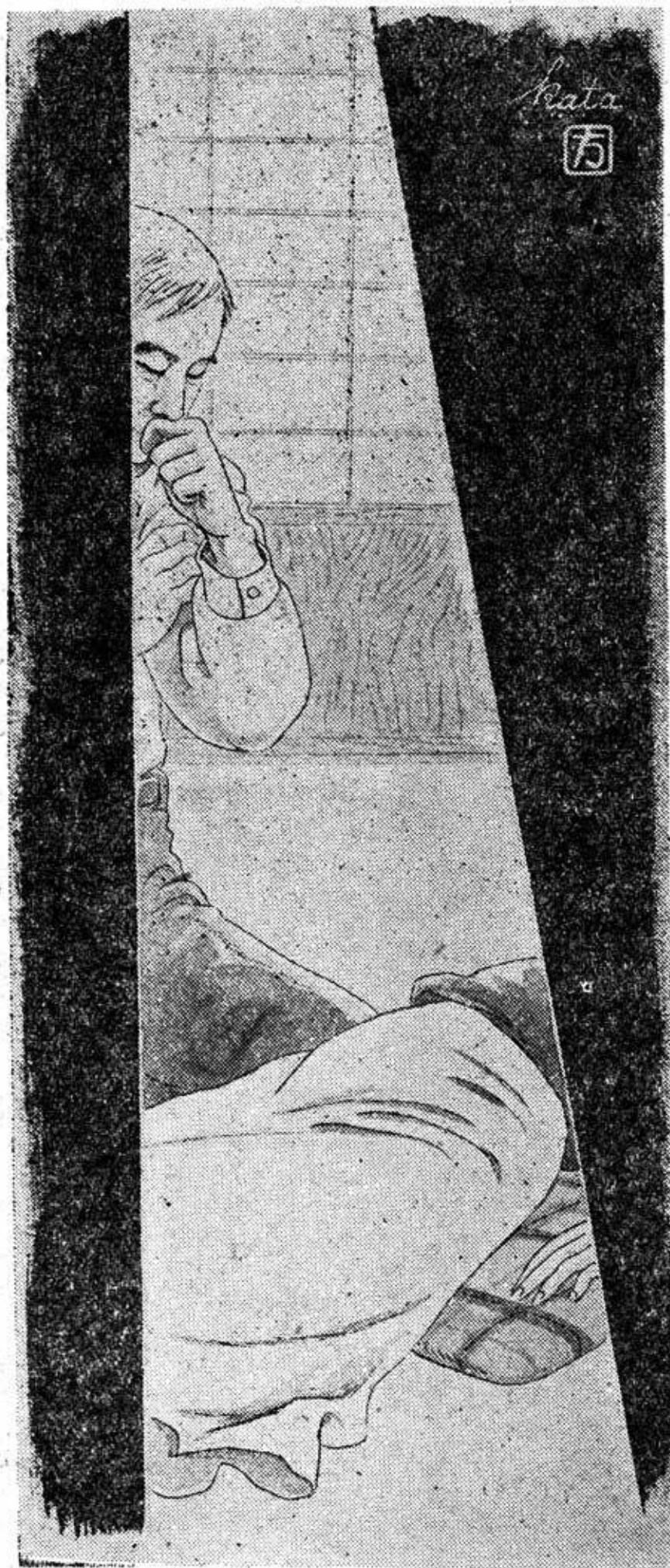
便所は玄関の脇にあつた。便所から出て、ふと柱を見ると便箋がピンで止めてあつた。

「直ぐ帰りますから上つてお待ち下さいませ。三木様」

としてあつた。玄関から上る時には気がつかなかつたのだ。時計が二時を打つた。

家の庭の向うはリンゴ畑だつた。その間の道を百姓が馬車の上に寝転つて「ジョンガラ節」をのどかに唄つて行く声が聞える

北国は春はおそく来るが夏は比較的早くやつてくる。



五月の末ともなれば東京辺の気候と大して変りはない。リンゴの花もそろ／＼白い顔をチラホラ見せて居る。

私の家の近所は勤め人が多いから昼間は至つて静かだ。

時計が二時を打つた。

「もうそろ／＼来るころだ」と思つて私は押入れに上つた。万一押入れを開けられた時の用心にと、蒲団を前の方へ寄せて、蒲団を被り、全身を蒲団の後へ横たえた。

薄暗く、狭く、稍暑ささえ覚える中で、私は根気よく待つた。

時計が三時を報らせた



カタ／＼と下駄の音がして玄関の戸が聞いた。

「オバチャン！」

その声で私はきよ美の姉の娘だと分った。一昨日も遊びに来た二年生の少女だった。

ヅカ／＼と座敷へ上つて来て、誰も居ないのを知ると、出て行こうとした。

そこへ三木がやつて来た。

十七 襖のうちそと

「誰も居ないわよ。」

「オバちゃん留守かい？」

「ウン、オジチャンも居ない。」

「鍵がかゝつてない所を見ると、そう遠くへは行つて居ないな」

と三木は独り言を言つて居る。どうやら貼紙に気がつかないらしい。

ミシ／＼と畳を踏む音が異常に大きく響いて、三木が部屋に入つて来た。

私は急に胸がドキ／＼して来た。

隙間から覗いて見るのさえ危険な気がして、蒲団の裏側へ身をすくめて息を殺して居た。

三木は入つてくるなり、直ぐヅカ／＼と私の押入れの前に立つたらしい。

(どうして押入に不審を抱いたのか?)

私は犯罪者のような恐怖心さえ覚えて、身動き一つせずに

暗闇の中で考えた。

(押入れを開けた位では見つかるまい)

と考えた。もしも見つかった場合には

(昨夜徹夜したので眠くて仕様がなにもんだから。外では明るくて眠られないから……)

と弁解しようかと思つたり、また

(何で断りなしに座敷へ上つてくるんだ!)

と高飛車に出て、きよ美のことを素破抜いてやろうかとも考えた。

然し三木は襖を開けるでもなく、押入れの前を立去るでもなく、突立つて居る気配だ。

と言つてどうも押入れの中の様子を覗つて居るらしい感じもない。

(何故いつ迄立つて居るのだろうか?)

そのうち三木が何かボリ／＼囁りながら立つて居るらしいことが分った。

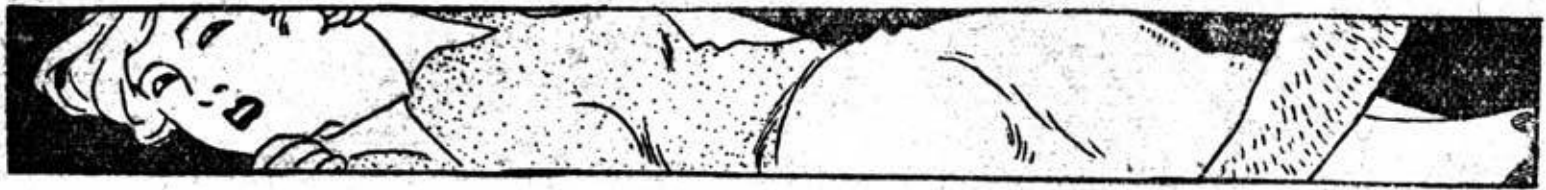
私はやつと分った。

押入れの上の壁に、一寸した写真が貼つてあるのだ。この室は私達夫婦の寝室だったから、私の趣味の写真を貼つておいた。

三木はそれに見入つて居るのだと気がついた。

暫らくして三木は押入れの前から退き、向うの座敷から新聞を持つて来て読んで居るらしく、ガサ／＼と新聞紙をめくる音がした。

「これ、食べなさい。……いつ来たの」



「今よ、オジチャンの来る直ぐ前」

それきり会話は途絶え、二人でビスケットか何かをボリ／＼食べる音が続いた。

女の子は食べ終ると外へ出て行つた。諦めて帰つたらしかつた。

咳払いの音など思つたより大きく聞える。

（これは此方もウカツな音は出せないぞ）

と思つた。

その時私の胃がググググウと鳴り出した。

小さな音だからまず聞えはしないとは思ふものゝ、部屋には三木の注意力をそらす何物もないのだから、私は不安だつた。

突然三木が放屁した。

驚く程大きな奴だつた。続いて又一発、誰に遠慮気兼ねもないと言つた恰好で、私はおかしくて堪らなかつたが、笑う訳には行かない。笑う所ではない、こみあげる笑いを歯を喰いしばつて堪えるので、ククククツと咳込むように苦しい。

（早くきよ美が帰つて来てくれ／＼ばい／＼）

と私は祈つた。

その時私は尿意を催してきた。

（失敗つた、準備をしておくのだつた）

と後悔した。

暑さも加わつて来た。暑さも考慮の中に入つては居たが、斯う長いこと潜ることになるとは思つて居なかつた。

三木は突然立上つて台所の方に行つた。

私は膳部はすっかり片づけた筈だが……と記憶を辿つて見た。

又部屋へ戻つて来て新聞紙の音がする。ビスケットらしいものを盛んに噛つて居る。きよ美に持つて来てやるつもりのが手持ち無沙汰に食べて居るらしい。

十八竿 談義

やつと次女の道子の声がした。続いてきよ美の声も聞えて来た。

「オバちゃんね、まだ御用があるの、だから今日はお帰んなさいね、お前まさちゃんのお家へ遊びに行つたらどう？」

姉の子と一緒に戻つて来たらしい。長女に姉の家へ遊びに行くように言いつけて、どうやら長女と姉の子とは外へ出て行つたようだ。

「ハツハ、イヤア綺麗ですねぇ。」

「お風呂へ行つて来たの。」

「道理で……今日は特に綺麗だ。」

「あゝ、お腹ペコ／＼。」

きよ美は三木の存在など無視して昼飯の支度をして食べ出した。その間三木は又新聞を見て居るらしかつた。

その間が約三十分。私の尿意は益々激しくなつてきた。

（もう大丈夫だろう、三木はきよ美の方に神経が行つて居るから……）

と思つてこの時、始めて恐る／＼鎌首をもたげて、隙間へ眼をあてがつた。



きよ美は三木に背を向けて、鏡台に向い、化粧を直して居た。

「妾、この頃、肥ったようね。」

「そう、とてもいゝ肉づきになりましたよ。」

その時三木が後から両手をのぼしてきよ美の肩にかけた。

鏡の中で紺のブラウスから豊かな胸の膨らみを覗かせたきよ美が「フーン」と笑った。

「この頃胃の具合どう?。」

三木は急に馴れくしい口調で話しかけた。

「まだあまり快くないわ」

「少し治療するか」

「ヘンなことしちやイヤよ。」

清美は立上つて、私の隣の押入れをガラスと開けて、座布団を二枚出してきて、部屋の真中に並べて敷くと、その上に仰向けに寝た。

三木は上衣を脱いで白いワイシャツ一枚になり、きよ美の脇へ坐つて、右手できよ美の白いスカートの上から、紺のブラウスの乳房の下辺り迄を、右手で擦り出した。

これは私が見てる前でも何回も行つた、彼独特の靈効療法だつた。

「今度とても忙しくなりそうだ。暫らく会えないかも知れない。」

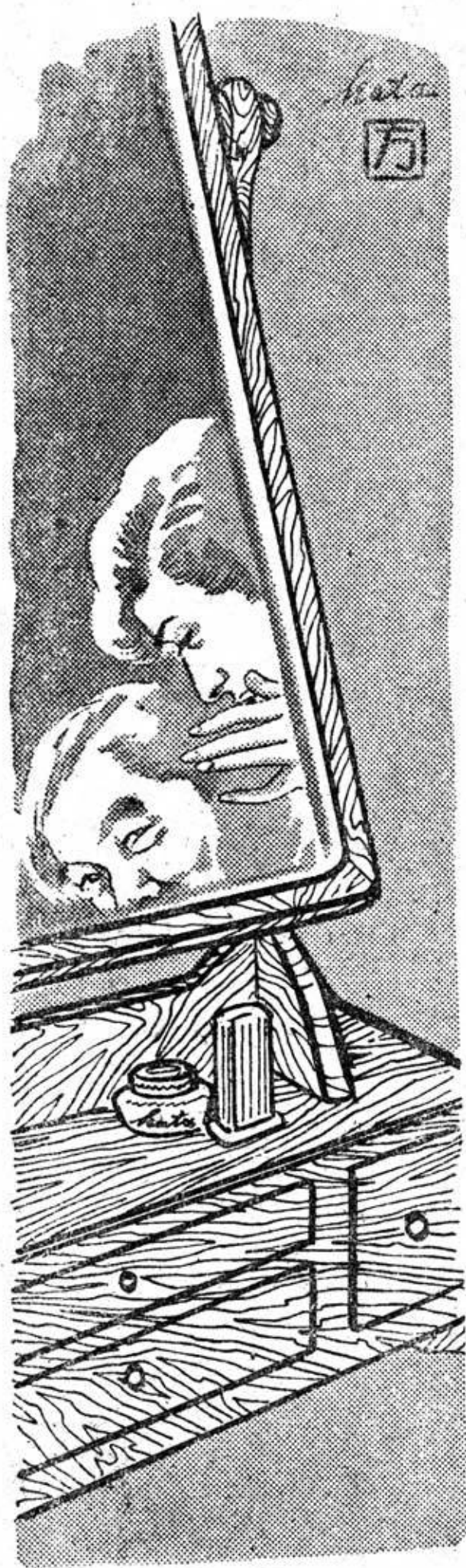
「炭の方、うまく行つてるの?。」

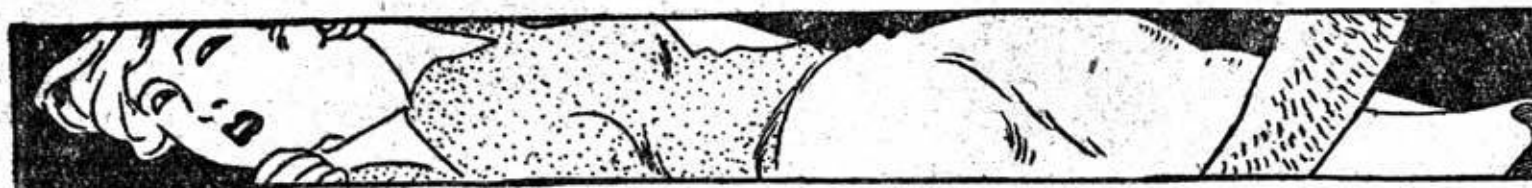
「うん、あなたが僕のことをしんから心配して居てくれ、ばきつとうまく行くと思うんだ。僕の成功をあなたが祈つてくれたらね……うまく行かなかつたら、あなたが僕を想つて居てくれない証拠だ。恨むよ。」

「恨んだつて平気よ。」

「化けて出るぞ。」

「いゝわよ。父さんにしがみつから」





「ウワー、敵わんなあ。」

三木の手がきよ美の白いスカートをちよいと捲つた。

「ダメよツ、ちゃんとまじめに治療しなさいよ。この頃まじめだからちつとも効かないわ。」

「フー。どうもこうしてあなたの身体に触つて居ると、無念無想であるべき精神力が乱れてしまうんだ。思念力が集中しないんだよ。」

「ダメねえ。ちゃんとやつてよ。」

「だつてこれだもの……。」

「イヤらしい、そんなもの……ちやだめよツ！」

それは私の所からもよく見えた。

「じゃどんなのがいいの」

「黒いのが一番よ、味は大和のつるし柿〃つて言うじやないの」

「へエ、エライこと知つてゐるんだね。」

きよ美は寝たまゝで、私から聞いた受け売りをやつて居る

「だつてね、黒いのは、つまり……それだけ長いことを証明することになるのよ。」

「イヤ長いのは個人の性癖ですよ。」

「性癖ばかりじゃないね。女の心理迄考えて、或る程度自分をこらえてくれるのよ。それ丈け思いやりがあると言うものなのよ。」

「イヤそんなことはない。男は女のことなんか考えちや居ませんよ。僕なんかそんな余裕はない。そりや冷淡な人なんですよ。」

「でも家のお父さんは、妾のことを、とてもよく考えて居てくれるのよ。」

「あなたは二言目には〃家の父さん〃〃つて言うから嫌になつちやう。」

「だつて一番好きなんですもの、仕方がないじゃないの。」

三木は治療の手を休めて、腕組みをし、うらめしそうにきよ美を見下した。

「イヤ兎に角、男は事が始つたら、相手の事まで考えては居られませんよ。」

「そりやそう言う人もあるかも知れないけど、そうでない人もあるのよ。三木さんは考えないのね」

「えゝ、絶対考えませんよ。考える方が却つて女の人に不誠実だと思う、情熱が燃えきつて居ないんだ。」

「イエ、考えてくれる方が親切だと思うわ」

「僕はそうは思わない」

「妾はお父さんの言うことがほんとだと思う。お父さんの方を信じるわ。」

「奥さん、あなたはそんなに、笹岡さんを信じて居るんですか？」

「信じて悪いの？、妻が夫を信じて居る位幸福なことではないでしょう。」

「敵わんなあ。……そんなら奥さんに一言注意しておきませうがね。」

三木はきよ美の顔の上にじつと顔を近寄せて覗き込んだ。私は尿意が激しくなつて弱つた。



十九 暗 鬼

「笹岡さんは、奥さんが絶対信頼して居る程まじめな人じゃありませんよ。いつかホラ、北横町へ笹岡さんが用があつて行つたあの晩帰らなかつたでしょう。奥さんに僕が聞いた時奥さんは昨夜は高野さんへ泊つたと言つてたと確に話したでしょう。ところがあの日僕は高野さんへ行つたら笹岡さんは今日も昨日も来ないと言つてましたよ。嘘だと思つたら高野さんへ行つて聞いて御覧なさい。」

「フフ、あれはね、麻雀で徹夜して妾にバツが悪いもんだからあの時はああ言つたのよ。後で妾も高野さんで聞いて分つたから白状させたわ。」

「兎に角嘘を吐いてるじやありませんか。嘘を吐いたことは間違いないでしょう。」

「そんなに乗つかからないでよ。治療の方どうしたの？」

三木は気がついたように又治療を始めた。

「僕だつたら絶対あなたに嘘は吐きません。悪いことをしたら男らしく詫まるな。第一、夜、家をあげるなんてことは一晚だつてしませんよ。」

「三木さんを旦那さんにしたらさぞ女房孝行でしょうね。」

「そりやもう献身しますよ。」

言いながら、三木はきよ美に寄り添つてゴロリと横になつた。極めて危険な状態だつた。

その時道子が突然私の視野の中に入つて来た。

「ア、道子ッ、ダメッ！」

ドスッ

襖へ何か打つかった。

私はヒヤッとした。その後で尿意が堪えきれぬ程苦しくなつた。

だがそれだけだつた。然し隙間は今の衝撃で、ピタリと閉めてあつた上方の部分が開いて、「指ぬき」の間隔だけ、上も下も同じ巾になつた。私の視界は前より一層広くなつた。道子は今迄寝て居たのが眼をさましたのが、チヨコチヨコと時々私の視界に入つてきた。

「お父さん、今日は何時頃、帰るかしら？」

「夕方でしょう。」

「昨日はビツクリしちやつた。何か言つてましたか。」

「何も言つてなかつたね」

三木は一寸舌を出して無言で笑つた。イヤらしい奴だ。

「天真ランマンよ。人を疑うなんてこと知らないのよ、家の人は。」

「呑気なもんだな。」

「あなた、そう思うの。ほんとにそう思う？」

「イヤ、僕は笹岡さんに済まないと思つてます。」

三木は急にまじめくさつた顔で言つた。

「だけどね、一日奥さんの顔見ないと、此の頃どうにも淋しくて堪らないですよ。」

「顔を見る位なら、いくら見たつていいわよ。そりやそうと昨日頼んだもの持つて来てくれた？」



「僕が忘れたと思いますか。」

「思わない。」

「エライ、ハイ。」

三木はポケットからコールドクリームの函を出した。きよ美は受け取ると直ぐ蓋をあけて、半身起き上ると、クリームの匂いを嗅いだ。

「奥さん、ね。」

三木が起き上ったきよ美を抱いた。

「イヤよ。あなたクリームの代償を取ろうと言うつもり？」

「そう言う訳じゃありませんよ。」

三木は顔をグツと近づけて接吻しようとした。

きよ美はそれをよけて、三木の耳へ唇を持つて行つて何か囁いた。

それは私には聞えなかつた、私にはふとイヤな連想が浮んだ。

きよ美が実は私を偽つて居て、三木に

(押入れの中に家の人がかくれて居るから、うまくやつて頂戴ね)

とでも囁いたのではないかと。

(つづく)

〔読者通信〕

(投稿歓迎)

二月号拝見いたしました。相変わらず豊富な内容、私の「蛙腹」がのつているのもうれしいことでした。沼田さんの「人間燭台」肛門にローソクを立てるの、すわね、私もやつてみたことがあります。ですが、その前の「テグス責め」というのはよく分りませんでした。テグスと香水のピンをどういう風に使うのですか、教えて下さいませ。沼田さんも私と同じクロエイシストでいらつしやるのね。来月号にはいよいよ「待望の「肛門いじめ」」が発表されるようですので本当にたのしみしています。峯子さんの「密室の祈禱」は中でも「清よめの室」が一番気に入りました。私だつたら「洗礼の室」「地下室の怪」の姿勢でも浣腸は面白いでしょう。

こんな風に考えながら絵を見ていると本当にたのしいのです。絵物語の「悦虐の家」も文章に対して絵が正確に書いてあるので大変参考になります。それに絵物語だけあつてさし絵の豊富なこと。

私もとうとう八ヶ月の妊婦になろうとしています。毎日大きなお腹をかかえてきたくしています。「読者通信」のところで大阪の久方様の妊婦讃美論を読んだ思わずドキッとしました。このごろ「股間縛り」がよく出ているので孕んだ腹を試してみたら大きなお腹が縦に溝が入つて二つになりました。荷物のように亀の甲に縄をかけてみたら妙な恰好になりました。どなたか、子を持つた腹に縄をかける面白い方法を考えていたください。京子の生活と意見(九月号)に書いたように空気や液体を肛門から多量に注

入することは出来ませんが、便秘勝ちなので浣腸はしよつちゆうして貰つています。そうそう、長谷川さんのコンピネーション(一月号)は愛用しているのです。「浣腸」の写真も是非のせて下さいませ。臨時増刊の「アリス」の浣腸のところがありましたわね。峯子さんの「密室の祈禱」を見て、「人間料理」の空想をしてみました。鶏を割くようにバラバラに料理されて見たいなアという気がしました。臓腑もどれ一つとして無駄にならないで、腸だつて腸詰をつくるのが出来ます。皮だつて本の表紙になるし、骨だつてペーパー・ナイフその他の細工物になります。考えていたらムズムズしてくる空想です。三月号の「女体解剖の経験」に期待しています。もうすぐ夫が帰つて来るでしょう。では、かしこ

一月十一日

羽村京子

女 腹 切 八 景

星は濡れている

亀 岡 絃 七 郎

ハンドバッグ一つ提げて友子が入つて来たとき、靖は、静かな笑顔を向けた。友子も明るい顔で云つた。

「さあ、行きましょう。」

肯いた靖は、

「一寸、待つてゝね、外出許可取つて来る。」

言いすてゝ出て行つた。ドアが閉つた瞬間

友子は流石に胸が迫り思わず唇を噛んだ。

ふつくらした頬が震え、涙が溢れそうだった。然し泣かなかつた。もう今までに何度も泣いて来たのである。豊かな頬に薄く刷いた白粉を透して、血の色が美しく照つている。

瞳の涼しい、唇の緊つた顔をバッグの鏡に映し、耳もとの後れ毛を一寸直した。今、輝き切っているおんなのいのちを、我と我が手で断たねばならぬ女心のかなしさが、我ながら身に泌みて来るのであつた。

「何て云つたの理由は？」

帰つて来た靖に、友子は問いかけた。

「うん、おぶくろが急病だ。」

「まあ、ひどい」

「いや俺が死んだら、急病にもなるうよ。そうね、でも、貴方のような意気地なしは死んだ方がいゝわ。はたが助かるわ。」

わざと鋭く云い放つ友子を、靖は瞞めた。

「まあ今の内さ。口喧嘩も出来なくなる。」

「何んな気持で死に行くつて。」

「せいゝするよ、もう友公の顔も見ずに済む。」

「どうせそうよ、じゃ一人で行く。」

「意地の悪い奴だ、一人で行けたら頼むもんか。」

最後の口喧嘩が、二人には楽しかつた。

バッグから出した真新しいネクタイを、友子は靖に手渡した。

「饌別よ」

久しぶりで病衣を紺の背広に更えると、青白い靖の頬に、少し血の色が射した。

「ね、何うしても……」

思い詰めた友子の声に、ちらと振り返つた靖は、無言で肯き、苦しい眼を閉じた。

ゆつくり中庭を歩き、裏門から二人は療養所を出た。裏の松林を歩いている試歩組が、

怪訝な瞳を向けた。

三日前の日曜、見舞に来た友子に、

「友ちゃん、未だお嫁に行かないの？」

「いつに無く和やかな微笑を浮かべて、靖は静かに口を切つた。友公が友ちゃんに改まつたことに、彼女は敏感な疑問を抱いた。

「いゝ人が有ればね。でも妾より沢山貰つて

るサラリーマンで少いわ。といつて四十近い人は御免よ、信用出来やしない。」

わざと口を子供ツぽく尖らせて突放しながら、心の中では、靖のばか、と、母にも内緒で訪ねて来る気持を何う思うのか、詰りたかつた。その時である。靖は、自殺の決心を打ち明けた。

その瞬間、人間が人間を愛するということは、何故こうも虚しいものか、と、頬が削げ落ちて白く冴えた靖の顔を瞞めながら、友子は断ち切れるような胸の痛みによるめき、奥深い淋しきの湛えられた心の中を、顧りみる思いであつた。

「此の頃少し快い方じやないの。外見でも判るわ。」

「だから死にたくなつた。病氣では死にたくない。自殺だけが唯一つの抵抗だ。」

「貴方は口だけよ、死ねるもんなら死んで見せて貰いたいわ。」

声を立てゝ泣きたいほどの淋しさに耐えて友子は強く云い切つた。宥めも、却つて彼の逆説的な考え方を深めるに過ぎない。愛情を以て訴えることすら、彼には煩らいにしかないようであつた。

「えゝ、止めやしません、送つてあげます。」

明石でも何処でも、早く死ぬがいゝわ、三日したら又来ます。」

叩き付けて、彼女は靖を見返りもせず出て行つた。

療養所を出て郊外電車に乗り、大阪へ着くなり彼女は映画館へ入つた。真ッ暗な中で彼女は、真ッ直ぐ画面を瞞めて涙を流した。

スクリーンが白

くぼやけ、会話

も遠い雑音でし

か無かつた。永

い間の危惧が、

現実になつた時

泣く事は無い筈

であつた。靖が

病氣でも死ね

ば後を追う心算

だつたから、生

命は惜しくな

つた。

友子は、かな

しいほど靖を愛

していた。

二十四にもな

つて一再ならず

持込まれる縁談にも一向耳を藉さず、靖を待たつた。そんな友子には彼は、



「何故来るんだ、憐憫か、軽蔑か」

と理由の無い憤慨を打つつける。

某国の在日使節団でタイピストを勤める友子は、なまなかの会社員とは比較にならぬ高給である。華美な服装が、落着きのある美貌に却つてよくうつり、大阪のオフィス街を花のように彩るビジネスガールたちの中でも、一ときわ目に立っていた。

出入りする官公庁や商社の青年たちの間でも、某国ミツシヨンの島田友子と、名を知られる存在だったのである。

大学の経済を了えながら絵描になると、靖が家出した時から、友子の悲しみは始つた。

「待てるだけ待つてくれるね。」

という靖に、十九の友子は、火を噴くような強い瞳で肯いた。

然し、脆い性格が体質にも沁みていたのか、靖は看板描きのアルバイト生活が祟つて、薄汚いアパートの屋根部屋で倒れた。

快くなりかけては、又ぶり返す波のまにまに、靖は、自己嫌悪と劣等感に我と我が心を苛み、それが、病に蝕まれた肉体を不必要に疲らせるのだつた。

友子と靖は従兄妹だったが、友子の母は靖との交際を嫌っていた。友子は、母に隠れて

靖に会わねばならなかつた。

療養所へ見舞に行つても、優しい言葉は使わない友子であつた。却つて尖つた神経の病人に、いたわりは逆効果だからである。

世間話の末、

「もう帰れよ、伝染るぞ」

と厭味を云う靖に、

「追い立てなくなつて帰るわよ。」

憎まれ口を返しながら、友子は月に一度の訪問で満足していた。

靖は、病臥後初めて会つた時、言つた。

「あれ、忘れてくれよな。」

あれ——それは結婚の約束だつた。告げる靖も淋しいに違いない。そう思つた友子はきつぱり肯いて見せた。男まさりの彼女は、私生活でも決して自分を甘やかさない。女の身だしなみも、所詮は、男に見せるためのものと悟る一方で、自分の誇りを傷付けない清楚さを希う彼女である。たゞ一つ、いつ酬われるとも知れぬ靖への愛情だけが、彼女自身に許す甘えだつた。……

黄昏の街へ映画館を出て行つた時、彼女は涙の痕も残していなかつた。

暗い中で考え抜いた末、彼女は、靖を死なせ、自分も死ぬ氣であつた。

靖のためにネクタイを自分のために、タオルの寝衣や細々したものを買い整えた友子は、その夜、遺言を書いた。

当日泊るホテル、勤め先、両親の他、仲の好かつた女子高校時代の下級生に手紙を書いた。

やはり妾は弱い女、芳つちやんが、お姉さまのばかと泣いてくれるのかしら。でも妾がいても生きて行けないほど弱い靖を、それでも愛しているの。男の人はあの人、一人で無いのにね。愛情の魔術に、妾は溺わされたのね。腕時計を残します。

少しも手が震えず、自分でも美しく書けたと思つた。エヴァクリムを腋に塗り、暫く経つて拭き取ると、湯に入つた。

床の中で、声を殺して、もう一度泣いた。泣きながら、知らず知らず指は彼女自身のからだを触つていた。わざと、ゆつくりと、彼女自身を切ないまでに苛立たせるほど、ゆつくりと彼女は指を動かした。……

大阪駅で一時預けから小型のトランクを取ると、二人は下りに乗つた。電車で一時間ほどだつたが、靖は思つたより疲れてはいなか

つた。

明石は二人に取つて思い出があつた。ある夏休み、二家族で遊びに来ていて、溺れかけた友子は、靖は救つた。勝気な友子が独りで泳いだ罰だつたのだが、友子は十三、靖は十六の時だつた。

海岸のホテルは十月という季節がら、閑散であつた。

「部屋二つ取ろう」

靖は言い張つたが、友子は拒んだ。

「妾に任せるのよ。」

「然し君に迷惑はかけたくない、送つて来て貰うだけで充分だ。」

「妾は、夜になつたら帰りますわ。」

靖は黙つた。横を向いて、

「夜までは生きていなければならんか。」

汐騒の中で友子は、その呟きを痛いほどはつきりと、聴いていた。

夕方、二人は海辺へ出た。夕風の海が湖面のように静かで、だん／＼紅から薄紫に交つて行つた。やがて向い岸の岩屋の町に、次々と灯が点つて行く。郷愁に似た想いが、二人の胸を締め付けた。昼から解熱剤を服んだせいか、少し落付いた気分、靖は、

「さあ、帰ろう、海も見たいし」

先に立つて砂を踏んだ。きし／＼と砂が濡れた音を立てる。友子は、空を見上げて星を数えた。未だ星は数えられるほどだつた。何か、うるんだような光で、如何にも海辺の夕暮らしいと友子は思つた。

夕食を抜いたが、空腹は感じなかつた。

昼も余り喰へなかつた友子は、ジュースで胃をうるおし、トイレへ立つた。

三階の南側の部屋へ入ると、靖はバスルームへ行つた。脱ぎ棄てた服をたゞみ、友子は一寸思案したが、思い切つたようにグリーンワンピースを脱いだ。タオルの寝衣に着替え、ベッドに横たわつた。

バスから出て来た靖は、はつと立止つた。

「何故、邪魔するんだ。もう帰つたらいいじゃないか。」

思わず彼は叫んだ。

「靖さん、軽蔑しないで」

ピンクのシェードの蔭で、彼女の瞳がきらきらと輝く、靖は棒立ちになつたまゝ無言だつた。

「風邪引くわ。」

起き上り、はだける胸を抑えて、友子は靖の手を把つた。

「君は、僕を憐れんで……」

靖の語尾が力無く消える。

「いゝえ、哀れなのは妾よ、貴方のお体を案じて今まで……苦しかつたわ。」

靖の骨張つた手は、左の乳房を当てた。

「揉んで、揉んで」

激しく彼女は抱擁を求めるのだつた。靖の中でも、激しく揺れ動くものがあつた。

「友子」

靖は耐え兼ねるように叫んだ。友子の手が伸び、灯は消えた。

「友子、灯りを」

彼女の胸を腹を、全身を愛撫しながら靖は呟いた、仄かな灯りの中で、手を伸ばした友子はスタンドの紐を握つていた。

昂奮に輝く瞳で、靖は見た。艶やかに皓い腋から胸、腹へと流れる曲線が、豊かな繁みで一旦合わさり、又別れて行くのを。

腋の白さが、彼女のおんなの部分での翳を一層引立てゝいる。

「いや、羞づかしいわ。」

友子は乳房と前をそれ／＼の手で蔽つた。

靖は荒々しく其の手を振り払い、彼女の下腹に顔を押し当てた。火のように熱い額を感じ、彼女は切なく腹を揺つた。快い戦慄に似た震

えが下腹に渦巻き、彼女は無意識に靖の髪を撫でた。

「友子、僕が生きていたら君は結婚しないのでは無いか、僕は生きていくべきで無い、そう思った。自惚れだつたら嗤つてくれ。君が愛してくれるほど、僕は苦しみ闘つた。然しもう死ねば万事旨く行くだろう。早く結婚してくれ、幸福になつてくれ、去る者は日々に忘れられる。」

涙が友子の下腹に滴つた。

「貴方は弱すぎるわ、生きて行けないわ。妾が仿いて貴方位養えるけれど、それでは生き甲斐が無いでしょう。だから妾、止めはしないの。その代り、」

彼女は天井を見つめていた。シヤンデリヤのシェードが、鈍い白さだつた。

「妾も死にます。」

愕然として、靖は顔を上げた。

「ばかな、止めてくれ、ばかは僕一人で充分だ」

生臭い匂いが、瞬間、靖の咽喉から込み上げて来た。脱ぎ棄てたシャツを取るなり、彼は喀き出した。真赤な鮮やかな血が、笛のようには鳴る彼の肺の奥から、生命の証しのように迸つた。

水をコップに注いで、友子は彼に、服ませた。血が止まつた時、友子は彼を抱き締め、自分の体を強いるように当てがった。……

友子は、起き上つて濡れた体を拭いた。限なく拭いた。真白な肌がバラ色に火熱り、体の中は、未だうるおいわたつてゐる。

トランクから取り出した、真新しい丁字帯を、下腹に喰い込むほど、きつちりと締め付けた。豊饒な体毛が、悪戯つ子のようにはみ出そうとするのを、彼女は根気よく締め直して隠した。パンテイスを穿いた。真新しく純白だつた。

側卓の上に、ふくさ包みをおき、ゆつくり開くと、封書が五通、札束、睡眠薬の小箱、それに一口の短刀が出た。

「友子」

あわてゝ靖が起き直つた。一時間足らずの間に、げつそりと頬が削げ、眼縁が黝んでゐる。じつと靖を賸め

睡眠薬を渡した。

「妾、薬服んだり、首くゝつたり、小細工はいや。溺れるのも轢かれるのも、い



や。」

静かにつぶやきながら彼女はパンテイスだけで寝衣を羽織つてベッドに腰を下した。乳房が緊張し切つたまゝで、險の赧さが、余燼を物語つてゐた。

「貴方が苦しみ出したら是で刺して――。妾も死ぬ心算だつたの。でも、妾今直ぐ切腹します。今が一番幸福だから」

二十余年の間、次第に高まつて来たおんなのいのちの充実し切つた瞬間、何んな苦痛も陶醉となりそうだつたのである。

「待つてくれ、死なゝいでくれ」

「貴方を愛し切つてゐる今、妾死にたいの。貴方が病気で死んでも、妾は死ぬ心算だつた妾は自分の為死ぬのよ。」

靖の弱き肉体だけでなく、精神まで弱い彼を、愛し切れなくなる一瞬が、友子には恐しかった。今なら悦んで死ねるのだつた。

「切腹なんて、苦しいよ」

友子を説き伏せられぬと知つて、靖は、せめて彼女を苦痛少く死なしたかつた。

「苦しいほどいゝの」

靖は小箱を投げ出し、短刀の鞘を払つた。

昭和新刀ながらよく切れそう
だ。焼刃が紫色に匂っている。
油をシャツで拭い、靖は眼を閉
じた。切先を胸に当てたが手が
震えている。彼は首を垂れた。

「恥づかしいが、駄目だ。」

「意気地の無い人ね。女の妾で
も切腹しようと云うのに。でも
妾は貴方を愛しているわ。……

……お別れよ。」

友子は靖の唇に、唇を合わせた
そして刀を取上げ、彼の心臓部
へ突刺した。ぐつと息を詰めた
切り、がくんと握攣し、引抜か
れる刀につれて血が噴出した。
その時には友子は体を離してい
た。

倒れ伏した靖に、息を弾ませ
た友子が、
「靖さん」

思わず呼びかけたとき、彼女
の乳房から返り血が滴った。友
子は濡れたタオルで乳房を荒々
しく拭いた。揉むように擦り、
刃の血と脂も拭いた。



立上つてカーテンを開き、窓
を開いた。冷たい夜気の中で、
星が暗い海の上に、やはりうる
んで見える。

「星が濡れている、妾の体のよ
うに。」

眩いてベットに帰ったとき、
彼女は未だ体の燃えているのを
感じた。

靖の横に膝を揃えて坐ると、
また寝衣を肩に引っかけパンテ
イースをずらせた。腰を浮かし
太腿の中ほどまで下げる。真新
しい日本手拭で短刀の柄を巻い
た。是も真新しい瓶の香水を、
頭から肩、腋、乳房と擦り込み
胸から腹へかけて振り撒いた。
股や腰も忘れない。一瓶が空に
なるまで、彼女は惜し気なく振
り撒いた。

ヘリオトロップの香が立ちこ
める中で、丁字帯がゆるんでい
ないか確かめ、柔かく弾む下腹
をゆつくり撫でる。右手に短刀
を握り締め、シェード越しの光

線で桃色に照る下腹を、うつとり見つめたが流石に弾んで来る息を押し静め、見開いた瞳を、窓から見える暗い空間に据えながら、唇をかみしめた。

「うムツ」

両手で握った短刀の、切先を張り切った左の下腹に突刺す。ひやりと冷たい感触、次いで火のように熱くなる。力を込めた心算ながら深くは入らなかった。息を詰めてじり／＼右へ引く。血が腿へフツフツと溢れるのが判るようであった。額に汗が噴いた。

一瞬眼を落し、切先が少ししか入っていないのに気付いたとき、もう臍の下まで切つて

いた。切口に微かに血が滲み、浅いのが気になる。はーツと苦しい息を吐き、もう一度両手に力を入れ直すと、厚い脂肪層を突き抜いて腸まで届けと、突込んだ。

「うゝむ」

かみしめた唇から呻きもれる。瞳は暗い海の上の夜空に据えたまゝ、右へ力任せに引き切った。苦しいほど力が加わる気がした。

濃い血汐が下腹を流れ股の間に落ちるのを微かに感じたが、その時には臍まで血がしぶいていた。刀を抜き、低く呻きながら左手を臍の下へ突込んだ。

「うつ」

と唸り、腸を探つて攪むと、血を弾いて白い脂肪層の奥から、青黒い腸が垂れた。血がまた激しく股へ流れ落ちる。

血まみれの左手を震わせながら、苦痛を超えた法悦を感じ、乳房を爪の立つほど攪んだ体を倒しながら切先を探り当てるように乳の下に当てがい、体の重味を切先にかけた。

翌朝早く、仰向いて胸を刺された靖の横で血の海に端座して死んでいる友子を、ボーイが発見した。体からヘリオトロップの香が漂い靖の腹に押し当てている彼女の顔には、汚れは無かった。

(おわり)

私の世にも稀な性癖はどこより来たものか何時より起つたものかはつきりした記憶はないが学令期の頃から一種の男性に対する傾倒的なものの萌芽があつた。しかもそれは和やかな男色的なものでなく、かなり痛烈な嗜虐性を帯びたものであつた。当時よんだ少年読物の中の鳥居強右エ門の豪勇の物

語が絵入りで出ており、密使として水中を潜り捕えられ援軍の来る事を籠城の味方に告げる勇壮な物語りに胸をときめかせた。しかもその挿絵に渾一本の裸の儘逆磔にかけられている絵に異状な昂奮を感じた。振乱した髪、鼻木に緊縛された逞しい四肢、殊にその磔木が普通の十字でなく大の字である

事が非常な満足を私に与えた。中学生の頃その頃流行した鉄拳制裁の話も好んで読んだ。眉目秀麗な少年が多勢の不良学生にかこまれて殴打され血を流して打倒される姿はやはり昂奮せずにはいらなかつた。その頃悪友の間で春画を廻覧するのが流行したがそんなものを見せられても一向に感興は

なく、それが男女一対のものであると男性の方の姿に興味をもつた。しかしその種のものは大抵女性を中心に描いたもので満足するものはなかつた。一度吉田御殿を描いた春画の画帖で一人の僧侶が庭に引出され全裸の儘縛られて五六人の奥女中や腰元達に薙刀で断斬りにされる絵を見て昂奮を感じたこ

とがある。高欄の上でそれをながめている美しい千姫と、齒を食いしぼり肩先や太股から血を流して身悶えをしている僧侶の三枚続きの錦絵は私を恍惚境に導いた。そしてそれが前髪的美少年でない事が嬉しかった。爾来私の無慙絵に対する憧憬は男性であつても美少年風のもの好まず、むしろ青年より壮年の逞しい肉体のものにこそ興味を感じた。そして日清日露の勇しい軍人の奮戦している錦絵など沢山集めた。その中に、密偵として中国で捕えられ炮烙の刑に処せられた鐘崎三郎の処刑の図は忘れがたいものであつた。煮えたぎる油釜の中に禪一本の裸のまゝ後手に緊縛された鐘崎三郎が従容として死につく姿は私の理想の無慙絵であつた。その後月岡芳年の血の錦絵なるものを見、彼のリアルな筆力に驚倒したが、凄惨ではあつても凄惨美ではないことが不満であつた。

江戸時代の種々拷問図も興味を

無慙繪マニア

河内茂紀

もつて見たが石抱などは大して興味がなく、吊責、海老責が最も面白かつた。殊に我が国のみにあると言う海老責、あぐらをかせ緊縛して顔と股とが密接する程緊上げる拷問の苦しさに想像する度に私の不思議な性癖をいたく満足させてくれた。しかし拷問図譜の画は月代の伸びた汚らしい囚人が殆どであるが私の幻想の囚人はいつも三十前後の凛々しい顔立の武士である。吊責も木馬責も皆逞しい武士の姿が理想であつた。

戦時中種々の軍国美談の中で最も興味をもつて読んだのは中国で捕虜になつた軍人の話で、敵陣深く侵入して捕えられて軍の機密の

告白を迫られても頑として口を割らないために水火の責苦に逢う話は異状な興奮で書いた。

その中に私はそうした筋書を自分で組立てる様になつた。

空爆に向つた吾が航空大尉Hが被弾してある山間に不時着し共匪の手によつて捕えられ種々訊問をうける。頑として口を割らないH大尉を逆吊、海老責、木馬責、水責にする。それでも白状しない彼は全裸の儘部落の辻に晒し物にされる。大の字の磔柱に縛られて道行く老幼男女に弄り物にされる。勿論禪を外され男の物に対するあらゆる侮辱が加えられる。そして更に車にのせられて各所に引廻さ

れて町外れの妓楼の入口で止められる。警備の兵隊が酒を飲んで騒いでいる間、彼は更に妓楼の女たちになまざまな手で責めにあう。

然し彼はすきを見て脱出し山間の一民家にかくれる。が後再び共匪のためにさがし出され又種々な淫虐な拷問の果て局所を共匪の青龍刀によつて斬落され絶命する。

と言う拷問と淫虐との終始しているものでこの主人公のH大尉と言う人物は三十四五才の逞しい肉体と引緊つた容貌の主で鼻下に短い口髯が蓄えられているというの

も一つの条件である。私は女の責に対して何らの食指もそゝらずたゞ不快の念を抱くばかりである。

既載の「わが軍隊生活の回顧」や「肥満体への郷愁」の如きものには大いに共感するものがある。殊に後者は最近御誌中の読物としては異色あるもので美男や美少年男色を取扱つたものでない事は最も私の好み合つたものだつた。



我が少年時代

の犯罪

岸 本 幸 雄

私が静岡女子師範附属小学校の四年を了え五年に進級しようという年、当時父が教授をしていた静岡男子師範附属小学校の五年B組へ転入させられた。その時私の眼に一番焼きついたのは金髪の美しい一人の外国人の少女だった。

転入生の私がたつた一つ空いていた彼女の横の席を与えられたとき

「岸本さん、私の横、空いているのよ、おすわりなさいな」

と驚くほど歯ぎれのよいアクセントで彼女

が私を呼んだ時は、思わず全身の血が頭の方へ上つてしまったのも無理はなかった。名はメリーと言ったが両親共アメリカ人だそうで美しい事は恐らく同国人の中でもずば抜けていたと思う。私達はちやんをつけて、メリーちやんと呼んだ。私が転入生でありながら、彼女と並んで席を占めた事から、私とメリーはすっかり仲好しになつてしまつた。

彼女は二つの時から日本へ来たんだそうで日本語は全く日本の子供と変りない位に巧みだつた。私が彼女と同席してクラスの者達の

手前一番困つた事は、彼女は授業中、私の片手を握つて離さないという事だつた。そしてその片手をさまざまに弄ぶのである。時に何か嬉しいことでもあると、私の肩にむしやぶりつくように抱きつき、チュツと頬にキツスするのである。これには私も大いに閉口した。授業中にいきなりこれをやられたので、恥しさの余り真赤になつて、そつと先生の顔をうかがうと、先生は苦笑を浮かべているだけだつたのでホツとした事もあつた。勿論先生はメリーのこのあけつばなしのアメリカ人

氣質には手を焼いているらしいが、事が事だけに、うかつに注意も出来ず、又教育者の立場から民族的個性の重要性を認識して、かくは苦笑ですんだのかもしれない。

ところで暫くは私とメリーの間は本質的には無邪気なものであつたが、或る日、私は今迄のメリーに対する認識を百八十度転換させなくてはならぬ事件にぶつかった。それは少年期の私の心を突然、包んだ妖しい桃色の霧でもあつた。その日は理科室で午前中の授業を中止して映画会が行われることになつた。

暗闇の中で私は二人掛の椅子にメリーと並んで坐つた。例の如くメリーは私の片手を求めてきた。私は彼女のなすがまゝに任した。彼女は暫く私の指をのぼしたり、折つたり、様々に扱つていたが、そのうちその手首を握るとぐいと自分の膝の間に挟んだ、彼女はソックスをはいていたので、その部分は素肌だつた。十一才の少女とは思えぬぬめやかな肌だつた。幼心にも私の心臓は妖しくときめいた。彼女は私の手首をしっかりと握かむと、身体を前へのり出すようなフリをして、股を開いた。私の掌にその瞬間、彼女の腿の筋肉の動きが擦つたいように伝つてきた。こうして私はすっかり此の雰囲気の中になつた。この

時、私は初めて自分の意志に勝る妖しい感覚が自分の体内に存在する事を自覚させられた。豊かな肉づきの肌、私は少年の特有心理とでもいうべき残酷な心が動いて、その内股の肉をゴリ／＼抓り廻した。そしてそつと彼女の横顔を伺うと、彼女は異様な緊張をぎら／＼した眼の輝きに表していたが、それでもじつと画面の方を向いたまゝだつた。

こんな事があつてから、私とメリーとの間は急激に親密さを加えて行つた。その感情の交流には不純なものがあるだけに、新たな刺激は新たな誘惑を伴つて次第にその緊密度を増して行つた。そして一週間ばかり後には二人の関係のイニシヤティブは完全に私が握つていた。これは幼いながらも男というものを意識させられた私が取るべき当然の態度であつた。教室ではもう私は、彼女に掌を弄ばれても恥しい思いをすることはなくなつた。彼女はも早や、私の掌を欲しなかつたし、たとえ欲したとしても与える私ではなかつた。

メリーは私に対してはすこぶる従順になつた。その従順さは単なる友情の範囲のものでなかつた。しかし、クラス・メイト達は無邪気に、私達相互の態度の変化を不思議に思つていたに違いない。

実は、私は、メリーとこういう関係になる前、これと似た関係を持つていた同じく当時五年生の宏子という少女があつた。彼女の父親は大学教授で東大時代私の父と親友であつた。彼女の父は大学院に残り、私の父は家庭の事情で卒業するとすぐ就職したが、大

学教授と師範学校教授という差になつていた。しかし二人は仲がよく宏子の父はよく宏子連れて私の父を尋ねてきた。これが宏子と私が接触を持った動機である。彼女は真黒な髪とパツチリした眼を持った愛しい美少女であつた。或る日、彼女が一人で遊びに来た時私は近所の悪童数人と泥棒ごつこをやつた。私は泥棒の首領となり、彼女は我々に襲われるお姫様という配役がきまつた。護衛の兵士との勇壮なチャンバラの後、私はお姫様即ち宏子を捕虜として、手下共を下で戦わせておいて彼女を二階の押入れへ押し込むと、後手に縛り、見よう見真以て猿ぐつわもはめた。勿論宏子は一生懸命抵抗したが、かなわぬとわかると、眼をパツチリと見開いて私のする事を見ていた。この時、母は市場へ行つて留守だつた。下では悪童達の威勢のいゝ掛け声が聞えてくる。私は縛られたまゝ蒲団の上に転ざれている宏子を見た。彼女は短いスカ―

トを捲り上げながら白いズロースに包まれた
チンマリしたお尻をこちらへ向けて、縄を抜
こうとしてもがいていた。私はその二つの膨
らみにたまらない魅力を感じた。

私は思わず指を差し出していた。宏子は縛
られた不自由な姿勢で腰をひねって直撃をさ
けようとしたが、私の指は執拗にぎゅうぎゅ
う襲つていった。

「イヤーン、痛い」宏子は甘えたような声を
出した。私は宏子が泣き出すのを恐れてそれ
以上無茶をするのを止めた。そして彼女をご
ろりと上向きにした。縛られた手首が下にな
って、痛くないかと心配したが、布団のせい
か彼女は何も痛みを訴えなかった。スカート
は、お尻と違つて前を掩つていた。私はそれ
をまくり上げた。

「お医者ごつこするなら縛つたの解いて」

宏子は又甘つたるい声を出した。「お医者
ごつこじやないよ、捕虜は黙っている」

私の叱りつける声を聞くと、彼女は黙つて
眼をつぶつた。ブルマーと違つて薄い布地の
ズロースはぴつたりと宏子の下腹部の曲線を
描き出していた。私はズロースのゴムに手を
掛けると一気に膝の所迄引き下した。宏子は
「足を揃えて伸ばすんだ」という私の言いつ

けに素直に聞いた。――

然しメリーは宏子と違つて金髪で美しい白
い肌の外国人の少女である。私は彼女を練兵
場の叢へ誘い出した事がある。スカートを脱
がせ下半身をズロース一枚にして草の上へ横
たわらせた。彼女はレースのついたピンク色
のズロースを肌にはびつちりつけていた。「こ
の間もこれはいていたの」そう尋ねると「え
ゝ、でも、あれから一度洗濯したわ」と何の
恥らしいもなくはきはき答える態度には私は感
心するより奇異の感じを抱いた。宏子はそれ
こそ、お臍のゴマの数まで私に知られる様にな
つても、尚ズロースを脱がさせる時は、眼
をつぶつてその上顔を掩つたりした。私はメ
リーの傍に腰を下すと、足を上げさせたり、
開かせたりして布地を透してのデリケートな
筋肉の動きを楽しんだ。

私はメリーをいじめて悲鳴を上げさせたい
と思つた。しかし、その為には私の家を使うこ
とは不可能だつた。何故なら普段、私の家には
私の下二人の弟をはじめ、祖母、伯母、
母と多くの眼が光つていたからである。私は
メリーに話し、メリーの家をその為に使ふこ
とにした。彼女の話によると、メリーの父は
某商社の ジャパニーズ・エージェンツ 日本出先機関の顧問で、母は土

曜日の午後だけ教会へ奉仕のため出て行くの
で家をあけるし、父は土曜日は殆ど外泊する
という。それで土曜日の午後こそ二人だけで
遊べるチャンスだというのだ。

私はメリーや宏子と遊んでいる時、私の心
には早くもサディストとしての自分が芽を持
ち上げていることを、当時の事を今考えて思
い合せられる。奇譚クラブの誌上で読者の告
白文の中、サディストと自認して述べておら
れる方と本質的に同一なのに驚く、私はこの
告白文を信じてくれない人がいるなら、むしろ
嬉しいと思う。しかし告白だけは真実を曲
げては何にもならない。

さて、その土曜日の放課後、私は一旦帰宅
した後、メリーの家へ出向いた。何故一旦帰
宅したかという、私は今日の遊戯のために
少々必要な道具を取りに行く必要があつた
からだ。道具というのは三丈ばかりの麻縄と
浣腸器であつた。私は縛り上げたメリーのお
尻を丸出しにし、浣腸器を差し込む場面を想
像して胸をときめかせた。私はきつとメリー
は、「痛い、痛い」と云つて泣くだろうと思
つた。

ベルを押すとメリーはこの後に起る事を想
像して一寸顔を赤らめて出てきた。彼女は夕

オルのズボン型パジャマを着ていた。私のそのパジャマ姿に身ぶるいする様な魅力を感じた。金髪は左右に分けて後で束ねてあった。

「寝てたのヨ」

チンマリした鼻、大きな青い瞳はうるんでメリーは甘い声で言った。「一寸、お熱があるの、風邪をひいたらしいのよ」「だつて、さつき迄、学校の時元気だつたじゃないの」「ウウン、お家へ帰つたら急に寒けが出てきて、それでベッドに入っていたのよ」「そうか、じゃあ今日は駄目か」私は残念な気持をそのまま言つた。「ううん、大丈夫よ、あたし。いじめてよ、あなたのいいように、どんな事だつていいわ」彼女は私の頬にチュツとキツスすると「フフン」と笑つた。

「本当か、じゃあ、奥へ行こう、ホラ、こんな物持つて来たんだぞ」私は浣腸器と麻縄をメリーの鼻先へつきつけた。彼女は大ゲサにキヤツと言つて奥へ駆け込んだ。私は後を追つた。部屋はメリーの寝室だつた。ピンクの壁紙を貼つたいかにも女の住居らしい部屋だつた。部屋の面積の半分近くを占めて大きなベッドがすわつていた。天井からは小型のジャンデリヤが下つて、壁には五号位の聖母マリアを描いた額がかかつていた。

「カーテンがとつちやつてあるから、ブラインドをおろすわ」メリーが窓の側の紐を引つぱると黒い波型の鉄板が下りてきて、この部屋を太陽光線から遮つてしまつた。メリーはドアの把手を廻してガチャリと鍵をかけた。

私達は並んでベッドに腰かけた。私はメリーに両腕を頭の上で揃えさせると、用意の麻縄で括り合して、その端をベッドの腕に縛りつけたこの時、私の心をスーッと横切つて不思議な恐怖心ともいえるものを感じた。その心理解剖は今にして出来る、然し当時十才の私には眼前に露出されているそのものの本質を理解する事は出来な



かつた。しかし、それが男女の性を決定する一つの重大なる要素を意味すること位は判つていた。私の心は理解の出来ぬそれでいて最も重要な存在物の不可思議な影におびえていたのだ。少年の心理は動物の心理と大きな共通点を持つていと云われる。少年特有の残酷心もその一つであるが、未知の物象に対する旺盛なる探究心と恐怖心もその一つであろう。私は投げ出されているメリーの足首を固く麻縄で縛ると、そのままぎゅツと膝が胸につく位迄折り曲げ、手早くその足首と手首とを結んだ。私はその緊縛の姿態を美しいと思つた。メリーは暫く完全に丸出しにな

ったお尻を揺すつていたが、やがて静かになった。私はあらゆる角度から彼女の姿態を観賞した。私は本箱の上に、メリーがうがい用いている食塩水を入れた瓶を見つけたのでその食塩水を浣腸器に吸引した。

その瞬間、メリーは「ウウウ」と呻めいた私が強引に注射筒の把手を押すと、「ヒューヒューヒュー」と泣くようなメリーの叫び声はだんだん大きくなる一方であつたが、遂に二五CCの全量は、直腸に注入してしまつた。

私はメリーの唇が紫色になつていゝのを見た。額には脂汗がじつとりと浮いている。私は急いで足首の縄をそのままの位置で解い

た。ドサリと両足がベッドに落ちた。心持ちメリーのお腹はブツクリとふくらんでいるようだった。私は急に可哀そうになると、手首の縄も解いた。彼女はホツとした表情で、私を見て「死にそうだったわ、もう止めてね、お願いよ」と苦しそうに甘えた声を出した。その中、彼女は便意を訴え出した。「便所どこなの？」私は聞いた。「何時もここですのよ」彼女はボンとベッドを飛び下りるとその下から陶器製の便器をとり出して、ベッドの横に置いて、その上にしやがみ込んだ。私の体に、今迄おさまりかけていたアブノーマルな血が再び騒ぎはじめた。私もメリーと同じようにしやがみ込んだ。

羽村京子さんが「アヌスの讃歌に答えて」と題しての文中に高庄浣腸をされた上、お腹をたち割られて見たいという記事がありました。私が偶然実際この目で見た高庄浣腸についての体験談を書いてみます。

私が師範を卒業してすぐでしたから、たしか初夏の頃でした。突然電話があつて叔母が腸捻転で急に入院するから来てくれとの事でした。その病院は私の中学時代の友人の父が経営してよく知っていましたので取る物

然し、このメリーとの関係もこれが最後となつてしまつた。何故なら、それから直ぐ、私の父が高知県の学務課長として栄転したからである。静岡駅を立つ日、プラットホームに見送りにきたメリーは私にアメリカ製のシヤープペンシルをプレゼントしてくれた。私は今もそれを持つてゐる。

さて、高知市に移つた私の生活は大して変わった事もなかつた。この地で小学校を終え更に私達一家が九州の田舎に転任した時、私は中学生となつていたが、この時経験した豊富な思い出はペンを改めて記したい。

(小学校篇終)

もとりあえず駆けつけました。

叔母、といつても私の母が一番上で、その叔母は五人姉妹の中の末娘なので私とは年も三つより違わずその時は二十三だったと記憶しています。私がとび込んだ病室のベッドの上では普段気丈夫な叔母が唯ウンウンともう力尽きたとばかり胸で呼吸しながらぐったりとしてあえいでいます。間もなく院長が診察に来て、看護婦の手で毛布が取り除かれた時は、私は思わず、あつと声をのんで身震いす

腸

野

茂

高 庄 浣

森

るような衝動を受けました。

「お腹は妊娠でもしているかの様にポンポンに張つていて腕の太さ位もある二本の大腸がからみあつて、まるで芋虫が匍つていてるかのようにお腹の皮膚の下で動いているではありませんか。私は腸が蠕動しているという事は知っていました、まさかお腹の上からこのように、はつきりとわかるとは夢にも思つていませんでした。」

「まあ、これで治るつて事は先ず望めませんが、高庄浣腸と云つてお尻から無理に水をドンドン送り込むんです。思わず知らず、そう眩やきますと、院長は私と親しくしていましたので「この辺が捻転しているんですね」と動いている所を指さして「なんとか元へ戻ろうとして盛んに動いているんですよ、自然の力つて怖ろしいでしょう」と極めて冷静な態度で説明してくれますが、私は早くなんとか処置をしてやつてほしいと気が気でありません。」

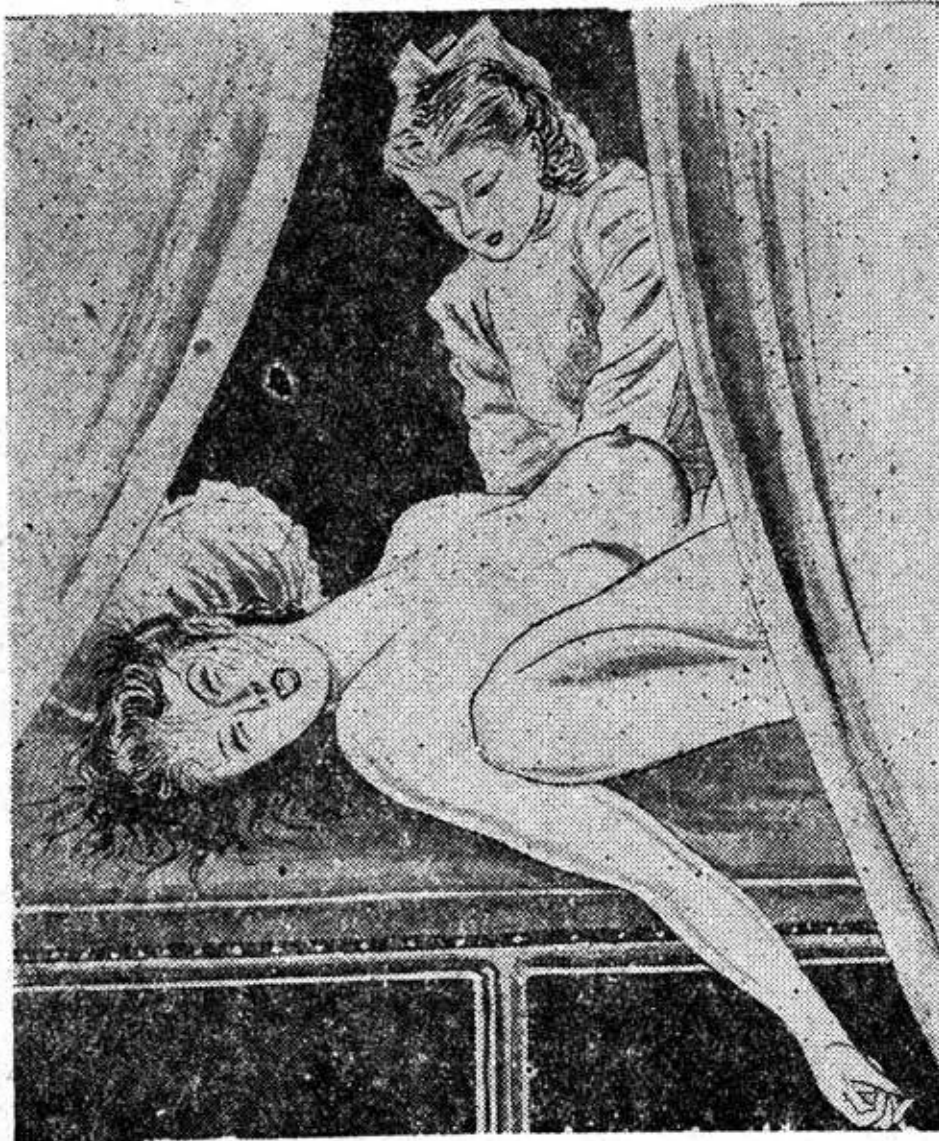
と事務的な口調で看護婦に命じましたので

私は、手術の前に排便させるのだナと位にしか考えていませんでした、

「じゃ、浣腸の仕度をして——」

そうすると僥倖な人は元に戻つてしまつて、そのまま治つてしまう事もあるんです。手術する前に一度やつてみましょう」

と余り自信のない口ぶりなのですが、私はこれによつて治つてくれればと一縷の望みを神に祈つていました。程なく準備が終ると叔母は大きく股を開かされて肛門にカテーテルを挿入されました。ポンポンに膨満したお腹でうねうねと動いている腸をのぞき込む様に



してカテーテルを挿入している医師、叔母の両膝を懸命に押えている看護婦、額に脂汗をうかべながら、ウンウンうなっている叔母。たつた一人の傍観者である私は息づまるような空気の中で、呼吸をこらして見守っていました。

挿入中に腸につかえる事がありますと、少し液を注入して腸をその部分で膨らまして、更に奥深く挿入してゆくのです。たしか三十糎位挿入したでしょうが、叔母は一きわ苦しげにきゅつと美しい顔をしかめ、喰いしばった口をゆがめて、ウウウウウ、と呻めきました。叔母は苦しさが先で恥しい恰好で肛門にカテーテルを挿入されているなどとは知らなかつたようです。私は若気の至りで女はすでに知っていました、大人の、しかも若い女の肛門をはつきり見たのは始めてでした。液は高圧を以つてどんどん注入されています。液が逆流しない様に看護婦がカテーテルに綿を巻きつけて肛門の入口で押えつけています。注入が初まると間もなく、ヒューヒューと地獄へでも引き入れられるような悲鳴が哀願するように洩れてきますが、そんな事に頼着することなく液はどんどん注入されてゆきます。とうとう腸の許容力も限度に達したの

でしよう。しつかり肛門を押えている看護婦の指の間から水が洩れ初めました。イリガトールもその時分は殆んど減少していません。叔母の苦しみは今や絶頂に達して「苦しいからやめて、やめて——」ともだえるのです。が、看護婦に膝頭をしつかり押えつけられているので見るも哀れな有様でした。

「ダメだ！ 手術だ」

院長はそう云い捨てると、手術の仕度にとんで行つてしまいました。随分液を入れたのだから、肛門から逆流する液は噴水の様だろう、と思つて非常に興味を持つて見ていましたが、看護婦は慣れた手さばきで素早く処置しましたので、多少蒲団を汚しただけで済みました。

麻酔をかけられた叔母は運搬車に乗せられて運び出されました。全裸のまま手術台にのせ、前のところだけガーゼをかけられて寝かされています。無気味な冷たい金属性の光りを放つ手術台、陰気なコンクリートの壁、ガチャガチャと鋭い音を立てるメス、叔母はこれからお腹を真二つに割かれて内臓を引き出される人とは思えない程、安らかな顔をして眠っています。

出入する医員の真剣な顔、時々注射してゆ

く看護婦、ぼんやり眺めていると院長が傍へ来て「どうです。立合つてみますか、ただ目を廻す人がいるから……、あなたもその口じやないかなア」と冗談ともつかない顔で云うのです。

開腹手術といえは一気にスーツと立ち切るのかと思つていましたが、少しづつ切つては鉄のようなものでパチンパチンと音を立てて止めて行くのです。そして熊手の様なもので開いたりしていました。叔母は肥っている方なので脂肪の層だけは、はつきりと解りましたが素人にはあとの内臓の方は何が何んだか解りませんでした。

「腹膜を切るから、よく押えて」

腹膜を切つたとき、いやなんと表現したらいいでしょう。入道雲のように、もくもくと湧き上つて腸がはみ出してくるのです。生きた章魚が無茶苦茶に暴れているのを取り押えているといった恰好なのです。

その瞬間です。私はくらくらと眩暈がきて、恥しい話ですが、そのまま慌てて逃げ出してしまったのです。



Das Grausame Weib

残虐なる女性達

— 1901年刊行の独文絵入単行本より —

森 本 愛 造・訳

「英国軍艦「レーヴエン」と「バラクータ」の二隻は、一八二三年、モザンビーク海岸の辺りを守つて居た。或る日、両艦の士官達はポルトガル人の商人マニユエル・ペドロタルメドラに招待されたマニユエルの妻ドーニヤ・ゾフィーアは稀に見る美人だつたので士官達は口々にその高貴さと美しさを讃め立てた。宴の中ばで、艦長オウエンは偶々、奴隷制度に対する激しい嫌悪と反対とを述べた。すると、商人マニユエルは笑い乍ら次の様な話を始めたのである。

「きつと貴方方の御意見はもう一寸の間此の地に滞在なさつて見ると變つて参りますよ。例えば貴方方の部下の方々が、先程から讃めて下さつて居る私の妻ゾフィーアを御覧下さい。私は結婚する前まで彼女に「奴隷売買をやめる」と何回か誓わねばならなかつたものです。そうして結婚した後、このモザンビークに定住したところでも、ゾフィーアは事毎に奴隷の肩をもつたものです。奴隷達が罰せられると、彼女は心から涙を流して彼等の為に泣きました。それが、どうでしょう！今日、ゾフィーアは朝から晩まで奴隷達に囲れて生活しています。ゾフィーアは私の全奴隷を監視し、どんな些細な不注意でも見逃した事はあ

りません。彼女は適確に罰を課します。そして、鞭が手心を加えられない様に常に鞭打たれる奴隷の傍に立つて嚴重な懲戒を、より完全に遂行して居るのです。」

上述の完全に信頼さるべき文献からの引用の示す処は明白である。つまり、女性には男性よりも、専制的な、「自分の気分を中心にした生活環境」に、簡単に同化してしまうという事である。殊に、前述の諸例が特に指摘している所を注意して頂きたい。引例された女性達は、善良且つ優しい婦人達である事が屢々繰返して述べられている。之を簡単に云うと、彼女達の持つていた、優しい、女性的な氣持と云うものは、常に、対白人種即同人種に対する場合であつたという事である。

（訳者註、之から著者は女性が奴隷を如何に「物」として扱つたかを述べるのであるが、沼正三氏の卓越せる意見の一つとしての「マゾヒストの手帖より」）白人崇拜症の件りをよくよんで頂きたい。訳者は、沼氏の意見集である「手帖」をクラフト・エビングの名著よりも、或る意味で、現代のマゾヒズムの權威的な解説であると思つて居る。氏の白人に対する一つの仮説は正しく、白人の有色人に対する驚くべき根強さで持続している或種



或るヨットクラブにて

右側女性は典型的な貴婦人型、鞭打愛好女性達の楽しい実験であろう。

のサディスティックな想念とびつたりと合致して居る。具体的に云うならば、白人女性是有色人男性、女性を人間、少くとも対等の人間とは思わないのである。其の上、政治的優勢が白人側に有る時は、有色人はよくて、家畜〃悪ければ〃物〃であるという考えに支配される。逆の場合有色人から白人が虐待されたとき、彼等は馬に蹴られたり、獣にかみつかれた様に思うのであろう。私は体験上からも、又資料に徴して見ても、この考えは当

つていると思う。

奴隷といえば、通常は黒人である場合が多い。黒人達がどれだけ〃物〃として扱われたかについては、数え切れない程の資料があるが、合致した事実、白人女性達が、何時でも、つまり、懲戒の為、検査の為、売買値段の検討の為、及び、気まぐれ等の理由で、彼等を簡単に全裸にしたという事である。其の時、男の奴隷の生殖器に如何なる変化が起ろうとも、白人女性達は、決して赤面しなかつたのである。(むしろ、彼

女達は一鞭で、それが萎縮してしまふ事を知つて居た。)

奴隷達が単なる家畜以上の何物でも無かつたという事について論拠を得る為に、奴隷売買の為の競売場、及び奴隷船上の出来事についての幾つかの報告と記録とを辿つて見よう。ピンカール(PINCKARD) (Notes on the West-Indies, London:1816,) はアムステルダム市の競売場について述べて居るが、この競売場には農園主が妻と子供をよくつれ

て来る所であつた事を付記している。

準備が出来ると、奴隷達は一度に一人づゝ入札者の前の段上に立たされる。入札者は丁度スミスフィールド(SMITHFIELD)の市場で家畜を検分すると同じ様な無頓着さで、奴隷達の身体を廻し、手で触れ、身体の恰好を吟味し、手をしらべ、口を開けさせ、時によつては、跳び上らせたり、腕を上げ下しさせたりする。私達旅行者は、明白に奴隷購入の意図を以つて、この市場に集る婦人達に嫌悪を感じた。

又、屢々引用するツイムメルマン(ZIMMERMANN)

は西印度に輸送される奴隷船の商売の現況について次の様な報告をしている(Taschenbuch der Reisen 1803年版)

〃奴隷を買い入りたい農園主は、仲買人に買入を委任するか、或は自分で船に乗つて市場へやつてくる。此処では奴隷達は順に一行に並べられるのであるが、時に依つては、或る近くの島にある一種の囲いを繞らした内庭の様な所に追い込まれる。そこで一人々々の検査が始まるのであるが、奴隷は殆んどの場合全裸で、全ゆる姿体を要求され、同時に医師によつて健康状態、持病や身体上の不具の有無等が厳密に検査される。買う為に集つた人

々は一切の遠慮を見せなかつた。彼等は息を吐いて見させたし、奴隷の身体の全ゆる部分勿論陰部をも含めて、いじり廻し、つねつたり、叩いてみたりするのであつた。特筆すべきは之等の慎みのない人々の中に多くの婦人達が多つていた事である。彼女達はむしろ男達よりも興味深く、且、念入りに奴隷の身体を弄び、特種の姿体（之が何を意味するかは想像に難くない——訳者）に於て、奴隷の値段を決めるのであつた。

白人の女性達が、かくの如く奴隷達を家畜として扱つたという事実はその他の習慣からも云い得るのである。

私は次にジャマイカのマローネ黒人種達の歴史の中から引用してみよう。（Geschichte der maronen-neger auf Jamaika. K. C. Dallas; Aus dem Englischen, Weimar 1805版）「キューバのサン・フィリッポ（CUBA）（SAN-FILIPPO）在住の某侯爵夫人は逃亡した奴隷を狩り出すのに大きな犬を飼つていた。又オランダの婦人達は郊外にピクニックに行くのにいつも馬の代りに六人の奴隷をつないだ車で行つたものである。」（訳者註 沼正三氏の手帖の中で「ハーネスト・マン」）として説明されたものゝ実例、同氏の説

に依るとゴータ——不学にして私はこのゴータなる作者の実物に当つた事がないので詳しい事を是非沼氏におきかしたいと思つてゐるのだが——作の米南部の奴隷小説の中に屢々現れるものらしく、又同様の挿絵も有るらしい。詳しい事は判らないが、マゾヒストとして、大変興味深い事実であるので、特に註記しておく。）（原著者註 PINCKARD の著者参考の事）又、婦人達の奴隷に対する精神上の評価は、ダヴィッド・ネルソン博士の著者に明かにされている。Dr David Nelson

「私は一人の心優しい若い女性を知つていた彼女はよくピアノを愛し、何時も基督教の受難史に涙を流す様な女性であつた。併し、彼女の女奴隷の一人が高熱を發して病床に在つた時、彼女は何を思つたのか奴隷の処へ足を運んだ。医師の話で奴隷が絶望である事を知つた彼女は、床の上へ重病の女奴隷を蹴落して彼女の穿いていた高い踵の編上靴で、奴隷が死ぬまで、残酷にも踏みにじつたのであつた。此の状況を見ていた彼女の母親は、只、次の一言を呟いたそうだ。『私は娘が、哀れなマリイ（奴隷の名）を余り嫌ひすぎて居たのではないかと思ひますね』」

之等の事実は仮令意外なものであつても、私達は之から述べてゆく数限りなく婦人達が平静の中に命じ、又自ら手を下して行つた残酷な懲戒や、それを見たり、自ら鞭を振るう時に表れる彼女等の満足気な昂奮から考えれば、こんな事は、全く有り得る事といえようではないか。一方、一部の入々の常に私達に反対する理由、即ち、「かゝる引例はほんの一部にあつた特例である」という事に対して充分な反証を提供する為に、女性達の残忍な懲戒についての出来るだけ多くの信頼すべき資料をこゝに引用する事は必要であると思われる。かゝる引例中、読者を成可く公平な立場におく為に、前述の如き、婦人達の奴隷懲戒に対する平静と歓喜との基本たる「非情」な心を、奇異の觀を以つて眺めた何人かの旅行者の手記を先ず引用してみよう。

ホイットレイという旅行者は日記の中で、次の様に述べて居る。（Schölicher, Victor, Antillen aus Französischen: Stuttgart版 1847年）「私は翌日馬でニューグランドの農園に行く事になつた。途中、道の両側で演ぜられていた事件は私を驚かすのに充分なものであつた。其の中、私はとある一群の黒人達の偽いて居る所へ行き合つたが、黒人達の真

中には、一人の白人が鞭を手にして監視して居るのだった。丁度私がその側を通つたとき彼は大声で黒人達に叫んだ「仕事だ！ 仿け！ 仿け！」と。やがて私が目的地に到達すると、農場の支配人は此の上無い好意を示して、此辺一流の鄭重な客扱いぶりを發揮して呉れたのであつた。併し、次の瞬間に支配人の表情は厳しい命令者のそれに変つて奴隷の一人に「鐘を鳴らせ」と命ずるのであつた。家の内の接待を任務とする奴隷の一人が鐘を鳴らした。まもなく、先程の監督が六人の黒人を引つぱつてきた。監督は一本の棒を手に持ち、肩に長い革鞭をかけて居た。私達は、黒人達の前に坐つて次に起る懲戒を待つていた。最初の黒人は家畜番であり乍ら一頭の驢馬を逃した罪で革鞭を当てられるのであるが監督の命令で黒人は自ら上衣を脱ぎ、鞭の苦痛を最も烈しくする様に裸にならなければならなかつた。鞭は、十フイート位の革と小さな握りとで出来ていた。之は恐ろしい威力を持つて居た。執行者は長い鞭を頭上で充分に振り廻しておいてから、加一杯、犠牲者の裸の背中に打ち下ろすので、一鞭宛に血が跳ねるのであつた。私は、目前で行われたむごたらしい処刑の為に胸が悪くなり始めたが、終

始全部を見て置

かねばと思つて我慢していた。

奴隷は一鞭宛に

身体をくねらせ

「御主人様！」

と叫び乍ら体を

ちぢめようとす

る。二〇回目に

奴隷の身体の上

に一枚のシヤツ

が落ちたので、

処刑者は此のシヤツを拾う為に一時手を止め

た。その一寸したすきに奴隷は「私が人間で

ないと思ひますか？」(Glaubt Ihr, ich sei

kein Mensch?)と叫んだ、私は此の言葉を、

「私達が人間的な感覚を持つていないと思

ひですか？」(Glaubt Ihr, ich habe nicht

das Gefühl eines Mensch?)と云う意味に

解した。併し、その言葉の終るか終らない中

に再び革鞭が打ち下され、遂に三十九回に至

つて終了したのである。「記者註諸例をひく

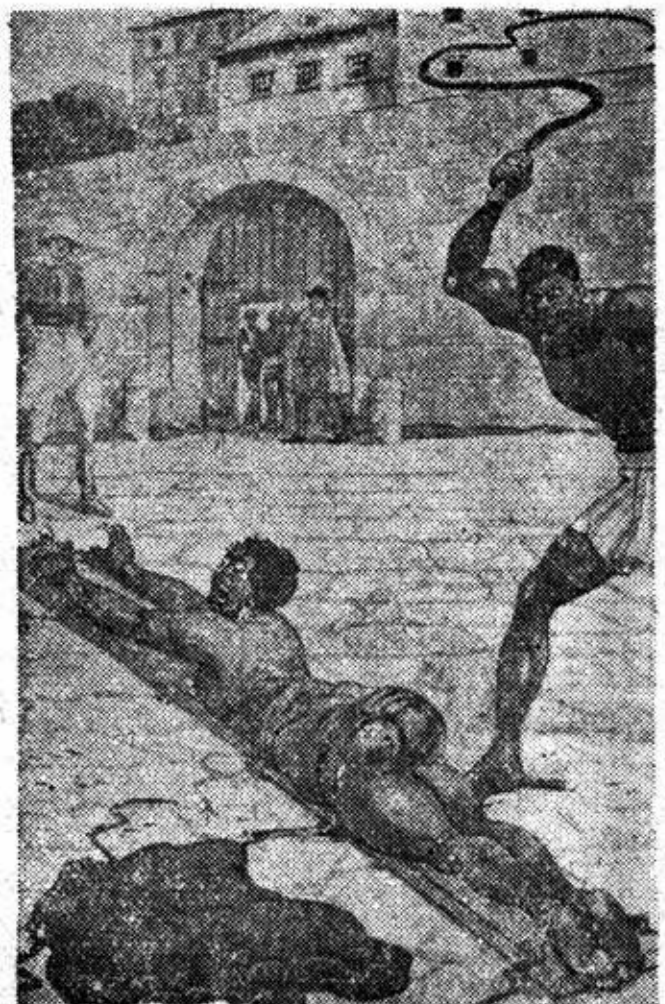
までもなく鞭刑の惨忍さについては沼氏の手

帖にも記されてあつたと思うが、この鞭刑は

前述の如く、奴隷に対しては日常生活的なも

奴隷懲戒場にて (miguel diaz作)

左側乗馬服の人物は女性、犠牲者の表情血が流れ飛散する様等鞭打の酷烈さと執行監視の女性のサディツシユな心が如実に表われている。



のであつたと思われる。答刑の場合、死に至る事は余り予想されないが、鞭刑の場合は勿論、死に至る寸前迄の処刑は珍しくなかつた様である。)

更に他の一人の旅行者は記録して曰く

(Eduard Otto, Reiseerinnerungen an

Kuba Nord und Südamerika (1938-41) ;

1843年版 Berlin:)

「私は刑罰の実施を見る事だけでなく、その音をきく事は、実際にその鞭打の音を体験したものに取つて生理的な嫌悪を催させる。色黒く、遅しい監督達によつて縦横に駆使される鞭打の音は、宛らピストルの様な音を発す

るのである。〃

奴隷制度が行われて居た国々での女性達の無情、残忍、等の事例を説明するに足る幾つかの基礎的な例証が挙げられたので、之から本論たる女性達によつて実施された数多くの実例の中から主要且、典型的なものを抜き出して説明しようと思う。

クーパー（前出）は或る目撃者の手記より次の部分を報告して居る。

リファナビイ氏の中庭から突然起つた恐ろしい叫声から非常に好奇心を誘われた彼は声のした方へ行つてみた。其処には、一人の奴隷女が体を地面の上に真直ぐに伸ばして居た。娘の手足は地面に打ち込んだ四本の杭に、しつかりと結びつけられ、女主人は男装して娘の頭に近い処に仁王立ちになり、馬具用の革帯で打ち懲らしているのだつた。鞭打つ女性には、この軟かい革鞭が一打で娘に傷を与えない時は更に同じ処を、二度でも三度でも打ち据えて傷をつけるので娘の身体は殆んど切り開かれてしまつた。而も、娘が苦痛の為に余り大きな声を出すと、彼女は長靴を穿いた脚で娘の顔を蹴飛すのであつた。而も、其の上彼女の腕が草臥れたときに、彼女は、ラムプと封緘用のロウを持つて来て、ドロドロに灼

いたその液体を、娘の傷口に情容赦もなくながしこみ始めた。女主人はその後で充分休んだ。再び元氣を取戻すと、愛用の乗馬鞭を振つて口辺に会心の笑を洩し乍ら、その封ロウ

【口絵の解説】

敗戦の悲劇

資料提供 森島潜・絵 滝麗子

これは終戦直後満洲に於て或る婦人が体験した暴民の私刑の模様である（以下仲田スミさん談）

輪姦された挙句、全裸のまま野外の立木を背にして、荒縄で腹部を一と縛りされ、両手を背後の立木に廻して縛られると、脚を左右に拡げて立樹の後で足首を縛り合され、丁度背面のまゝ両手足を使つて立木に抱きついた恰好で昼間一日中曝された。

翌朝は若い男の思いつきで、後手のまゝ立木に半ば吊らす様にして縛りつけられると、片足を前方に掲げたまゝ、ふくら脛の上で縛つた縄尻を横腹の辺りで樹に縛られる。自然片足で爪立つと、体重が爪先に掛つて膝下の筋が突張つて来るので苦痛に思わず踝を立樹に押付ける。すると今度は太腿を水平にして垂直に折曲げている膝下がしびれて感覚がなくなつて来る。そうした姿で半日曝されてい

を傷口から叩きだすのであつた。付記しなければならぬ事は、この雄々しい行為を彼女の二人の娘達が二階の窓から終始眺めて居た事である。

た。

屋過ぎ二人掛りで、地上四、五尺のところから二又になつてゐる立木のまたの間へ、前方の細い立木を弓なりに曲げてその上に馬乗りに跨がられ、両腕は万才の恰好で二又の枝に別々に縛りつけられた。豊臀の重みで曲げた立木は弓なりのまゝになつてゐるが、下半身を身悶えさせると抵抗を受ける樹幹が上下に揺れる。しかも股間に当る部分の枝の先端が折られ、太い部分が嵌入して刺激を受けると云う恰好で睜視された。

翌日は西風が強いのを利用して左右の細い立木に手足を大の字型に縛られ地上五尺位の高さに曝された。強風に揺れる不安と恐怖は云い表らわぬ程のものである。（以下略）
これらは丘陵に建てられた四人の土民部落の家の前で行われ、彼女が縛られている足許には土民の飼う鶏が餌を漁つてゐるし、女子供が嘲笑し毒づいて見物してゐたそうです。夜は冷いアンペラの上で若い男にもてあそばれ、八路軍に救出される迄日夜こうした種々の奇抜なリンチを受けたそうです。

腎部露出症の告白

(続・自虐鬼の獨白)

河 眞 田 子 路

まだ冬の寒さが充分残っている三月末頃のことでした。小学校も丁度休暇にはいつて、広い校庭にも人影はなく、校舎には、当直の職員ぐらい居る筈ですが、がらんとして、物音を静めていました。その校舎の裏側に、細長い一劃を占めて児童便所が建っていたのですが、私は誰にも気づかれないうちに、例の如くその中にひそんでいました。もちろん、小学校の児童が使用する場所ですから、そこでは何も期待することはできないわけですが私はただ、自分ひとりの場合を楽しむ目的だったのです。

私が一つの便所内で、普通の恰好で便器を

跨ぎ、ズボンを下げていた時、ふと話声を耳にして顔を上げると、扉板の隙間から、学校の生徒でしよう、五六年生位の二人の女の子が、やはりこの便所に入ってくる所が見えました。気がつきませんでした。校庭のど

こかで遊んでいたのでしょうか。私の居る反対側の列の戸を開けて、二人共それ／＼かけ込みましたが、赤いスエーターの可愛い女の子で、用を足す間その扉を閉めることもなく、私のところから、少年のように丸味を帯びた滑つこい尻がよく見えていました。そ

れは成熟した女性のものに異つた、又別の新鮮な魅力を充分に持つていましたが、私はその時に、ふと或ることを思いつきました。これは咄嗟の計画でしたから、条件は最上のもではありませんでしたが、それでも猶、いくらかの発見がありました。



少女達はすぐ用をすませて、中廊下のタタキの上に飛び降り、そこでゆつくりと、ズボンや、スカートを直しているのです。

私は、そつと自分のはいっているその扉を廊下の方へ押しあげました。少女は顔を上げて、すぐ眼の前の私の姿を見つめました。驚かしてはいけないと思い、私はつとめて他意のない、明るい声でその少女を呼んだのです。

もちろん、然し少女達は、見知らぬ大人の男が、そんな恰好のまま突然眼に見えたのですから驚いたには違いありません。けれども、この便所は、町裏の道路に面して建っているため、よく通りがかりの人達が利用することを知っていたので、そこに私が居ることについては別に不思議とも思わないようでした。呼びとめられた少女はチラチラと遠慮勝ちな視線を私の方へ投げかけ、又互に顔を見合せていました。

私は、しやがんだまま、両手を下腹の方に隠しておき、まじめな顔をして、手を怪我しているの使えないということを説明しました。少女達は真意をのみこむと少し、とまどつたような表情をしました。先生を呼んで来るから、というのを私は押し問答の上で断念

させ、本当に困っているのだということを、遂に納得させてしまいました。

二人の少女は、急に、おかしさがこみ上げてくるのを隠すことができず、下を向いたり横を向いたりして、ごまかそうとするのですが、とうとう、はじけるような声で笑つてしまいました。

それでも、一人の少女は、私の要求を素直に受けて、足許にあつたチリ紙を手にとると私のお尻を拭こうとして、近寄つて来るのです。私は幼児のようにお尻をあげ、都合よく始末できるように少女の方に、その向きを変えました。そこは何も汚れてはいませんので少女はほんの一、二回撫でくれただけでしたが、もう一人の子は、私のお尻を真正面から見た時、本当におかしくて堪らないという風に、無遠慮に笑いころげてしまいました。おそらく、一人前の大人が、子供達のために幼児のような取扱いを受けているということの、度外れた不自然さが、単純な童心に明るい喜劇を感じさせたに違いありません。二人は瞳の中に隠そうとしない子供らしい好奇の色の消えていくまで、じつと姿態を崩さずその視野の中に露呈していたのです。

この経験は私に一つの自信と暗示を与えて

くれました。

たとえば、その時の私の態度が、どれ程危害を感じさせないものであつたとしても、相手の少女が、ただ一人しか居ない場合であつたら、少女の気持も決して私の希望通りには、動いてくれなかつたでしょう。尋常ならざる私の要求を理解する能力もありませんし、たうす気味悪く、逃げ腰に私をさけて行つたに違いありません。二人いるということは、互に相手を頼り合う大きな力となつて、自然と大胆な気持にもなり、又いわゆる群衆心理的な好奇心が伴い起つてくることも否定できません。

私は、そんなことをはつきりと感じ取りながら、機会は更に又、期待できるということを感じたのでした。

畠に麦のよく伸びている季節でした。私は白い軍手をはめ、その上から軽くホータイを巻き、ほどけぬように白糸で縫いつけておきました。その手袋を両手にはめてみるとひどい怪我をしているように見えました。そして手袋ですから、必要な時以外は脱ぎ去ることもできません。そんな手袋を用意して、私はすつかり暗くなつた夜道に飛び出したのです。場所は人家の極くまばらな裏通りでした。

と云つても繁華街から二、三百米とは離れて
いません、地方都市の特徴でしょう一步裏通
りに入ると、家並つづきに農家のわら屋根が
ひっそりと並んでいて、広い空地が前後に点
在し、畠の中にポツンと家があつたり、畠を
越えて数十軒の住宅街があつたりする場所で
した。

近くの家からは殆んど灯の漏れてくるとこ
ろもなく、道端の畠寄りに立つた電柱の上か
ら、裸電球のうす暗い光が、僅かに附近を照
しているだけでした。私のいる場所は、その
電燈の光の届く位置で、片側の麦畑が、そこ
から住宅街へつづく細い路を隠すように、は
さんでいました。

人通りは、忘れた頃に一人、二人とある程
度で、私は用のないそれらの人々を、麦畑の
中に身をひそめたままやり過し、かなり長
い時間、或いは無駄に終るかも知れぬ時間
をじつと堪えつづけているのでした。

突然私の胸はドキリと鳴りました。血が一
時に逆流して全身がぶるぶる震えはじめまし
た。暗い電燈の光りが及ぶ限りの地点に、三
人連れの若い女性の姿が、ポツカリと浮び上
つたのです。勿論顔は見えるわけはありません
が、遠い輪郭の中に、いずれも波のような

電髪をふり立てるばかりの活潑な足どりで、
近づいてくるのです。遅い勤めの帰りといつ
た軽装で、革の靴音をひびかせながら、にぎ
やかに笑聲を立てて来る彼女達の姿を、胸を
しめつけられる亢奮の中にじつと見つめてい
ましたが、私はその時、もうすつかり準備を
ととのえて、麦畑の中から匍匐出してしま
す。私は奇妙な自信をもつて行動していま
した。

一步一步接近してくる三つの影、はげしい
期待に全身の血がわななくようです。

遂に来ました。彼女達は私の居る三、四間
先で、ふと沈黙しました。

しかし、人通りの稀な、くらがりの道端で
畑により添つて蹲んでいる男の、ズボンを下
げた姿が、何をしているものであるかは、す
ぐにわかつたでしょう。彼女達は明らかに、
私を見とめながら、なお、おそれもなく歩
み寄つて来ました。お互の話しこそやみまし
たが、いささかも歩みをゆるめようとせず、
丁度私のいる数歩手前の所で、畠の中へ折れ
て行く小路の方へ、縦列にならんで曲つて行
きました。その曲り角に差しかかった際、す
ぐ眼の下に位置にいる私の姿へ、三人の顔が
順々に振り向けられ、淡い電燈の光りの中で

完全に私の全身が、彼女達の視線に包まれた
ことを意識しました。尤も彼女達の顔は当然
逆光のかげとなつていたので、私には、まる
で美醜や表情など判別することはできません
でしたが、そんなことはどうでもよいことな
のです。

私は、五、六歩彼女達をやり過しました。
それから、つとめて平静な声で呼びとめたの
です。平静のつもりでした。だが実際私の声
は、昂奮にうわずつていて、しかもひどく震
えを帯びていたようです。一番うしろを歩い
ていた女性が立止つて、私をふりかえりまし
た。(……紙を……) 私は、又云いました。

私のふるえ声は、確かに哀れつぽく聞えた
に違いありません。彼女達は、三人とも足を
とめて私を注視しました。そして、そこに、
困っている一人の男の、助けを求める哀れな
姿があるのです。

(紙つてよ、チリ紙持つてない?) とうしろ
の女性が、まん中の女性に問いました。

(さあ、ある筈だけど) その女性は、すぐ自
分のハンドバックを開けて見ました。私を疑
わない同情をこめたやさしい言葉と態度がは
つきり表われているのでした。まん中の女性
は、一番年かさらに、二十五、六才位の脊

の高い、ガツチ
リとした体格を
しているようで
動作もテキパキ
していました。

チリ紙を取り
出すと、うしろ
の女性に渡しな
がら、二人一緒
に後戻りして、
私に近づいて来
ました。紙を受
取った女性だけ
が、やがて小路
を出て来て、私
に最も近より、

私のすぐ背後に手を伸して、（ハイ、チリ紙
でしょう）と、声をかけました。彼女は、そ
の紙を、私の手に直接渡したのか、又は手
の届く位置に、そつと置いて行くべきか、ち
よつと思案した風に見えました。私は云いま
した。彼女を驚かしたり、恐れさせたりする
ことのないよう、細心の注意を払ったつもり
です。私の声は弱々しく、哀訴をこめたもの
であつたと思います。けれども、彼女にして



見れば全く予想
もしなかつた、
突飛な要求であ
つたに違いあり
ません。彼女は
二の句がつけず
瞬間私の真意が
どこにあるのか
を探るようにじ
つと視線を据え
て私を見つめて
いました。

彼女の視線が
例の手袋によつ
偽装された私の
両手にそそがれ
た時、すつかり男の見得を捨て、見すばらし
くも女の前に哀訴しなければならかつた——
少くともそう見えている——男の立場を理解
するとともに、明らかに若い彼女は、当惑し
てしまつたようです。

私達の言葉のやりとり不審を抱いたので
しよう。他の二人の女性も、カツカツと靴音
をひびかせて近寄つてくると、私のそんな姿
に、数歩とへだてぬ地点から注意深い凝視を

送つて来ました。

（拭いてくれつていうのよ）はじめの女性は
手にもた紙束を持て余すようにしながら年か
さの友達の智恵に頼ろうとするのでした。

（どうしたつて云うの？）年かさの女性は少
し、とがつた声で、相手の女性と、私の姿を
半々に見つめながら、無意識のうちに、紙束
を自分が受取つていました。（両方とも、手
を怪我しているなんて、変だわ）彼女は流石
に私を頭から信じようとはしませんでした。

私は、畳みかけるような調子で、ひたすらに
救いを求める者の、哀れつぽい嘆願をつづけ
ました。三人の眼は、一寸の間さういうみじ
めな男の姿に喰い入つていましたが、とも角
私の態度からは、一応切実なものを認めざる
を得なかつたのでしようか、紙を持った彼女
は、最初の女性を軽く押しのけるようにして
私の背後に近づきました。私は夢中でした。
血がぐらぐらとわき立つような激しい昂奮を
おぼえながら、しかも、この瞬間を最大限に
味わなければならぬという必死の気持が、
私を全くの恥知らずにしていたのです。私は
幼児のように、お尻を高々とかけ、必要以
上に展開するのです。他の二人の女性が、一
間とはなれぬ位置から、並んで、私のお尻を

見えています。その女性達の頭上を越えて私に届く電灯の光りは、淡いながらもなお充分に私の身体の微細な部分をも照し出すことができた筈です。私は四つ匍いになった自分の高脚の間から、三人の女性の、はつきりと私に向いている足先を見ました、今は何の顧慮するところなく彼女達の瞳は、ただ一点私の臀部に、まじまじとそそがれていることを知りました。私の官能は露出の快感に酔いしれています。しかも遂に一人の女性のその軟らかく優しい指が私にふれたのです。

彼女は意を決したもののように私の傍に立ち、私を見下し、そして紙を用いました。

彼女達は。電灯の光りに照し出される私のその箇所が、思いの外に汚れているのを知つたでしょう。私はもちろんそのように計画して、準備していたわけなのです。簡単に、一二回で拭い去れるものと考えていたに違ひなかつた彼女の態度が途中で変つたことは云うまでもありません。私は、彼女が、サツと両脚をふみ変えたのを見ました。次の瞬間、それは、おそらく無意識になされたものと思ひますが、彼女の一方の手が、その柔らかな掌を推したのです。それは全く予期しない素晴らしい接触でした。神経は、ことごとく臀部

に集中して、他にはも早や何も見、考える力さえ失つたやうでした。紙のふれている箇所は一層力が加えられ、何回も何回も、たんに拭われていました。もう一つの手が直接臀部に伝えて来る彼女のほのかな体温……。

すべての動作が終つて、彼女の手が私から離れていつた時、私はまるで、縋りつくものを失つたかのように、ヘタヘタと脚元のくずれて行くやうな、虚脱の感覚におそわれていくのでした。

(サア、これでいゝでしょう) 私の目の前に白く散つていく紙、彼女は、一歩しりぞいて私を見ました。

私は然し、その姿勢のまゝ、身体を起すことができないのです。

いつまでも、この機会を捕えつつけるわけにはいかない。もつともつと、さらしつづきたい私の露出慾は一体、終局に何を求めているのでしようか。

私のそんな恰好は、もちろん異様であるに違ひないのです。三人の女性は、私から去つて何こうとして曲り角の所で、もう一度私を見すえました。それから五、六歩遠去かり、又立止つたやうです。お互に何かを囁やき合つては私の方にチラチラと視線を走らせて来

ます。何を云つて居るのでしようか、たぶん彼女達は私を疑いはじめているのに相違ないのです。私の奇妙な、そして卑猥なポーズが故意の露出であることは、もはや誰の眼にも明らかです。

ふと、彼女達が、私の方へ戻つて来るやうな気配を感じました。何のために——、私を詰問するためでしょうか。彼女達は、まんまとはかられたことに対して、何か腹いせを考えたのかも知れません。それとも、このみすぼらしい、非力やうな変態性慾者を、今度は意識的にもからかつて見ようとでも思つたのでしようか。

私は彼女達のために打擲され、引きすえられる自分の、あさましくも淫らな姿を想像しそれに期待し、又念願するのでした。

私は告白しよう。私の求めているものの、すべてを、明らかに彼女達の前で白状しよう。私はあなたの刑罰に服したい。あなたの足許にひれ伏して、——あなたの鞭を——。

私は昂奮のため、自らを支える力さえ失つて、遂に膝を落し土の上に崩れていゝでした。まるで呼吸をすることさえ忘れていて、フウツと吐き出すため息が、泣くやうな、呻くやうな不思議な声となつて、私の口をもれて来るのでした。

奇譚クラブ最近号 主要目次

昭和二十七年

○十月号特集切支丹迫害史

口絵 責め場面描繪集 喜多玲子・構成

切支丹迫害史 五井野弘・画

縛られた女写真集 辻村隆・構成

切支丹迫害史 辻村隆・構成

或る医師の告白 漆島 追平

大衆文学に現れた女の責め 高月 大三

愛と苦痛の交錯 鳥上 源一

恋の烙印 松井 正憲

男色の海 井口 正憲

アブニストの記へばきうり 鬼山 絢策

夫婦愛と緊縛の考察 辻村 隆

宿命に哭く 浅田 正人

悪女 岡田 咲子

縛られた妻 早川新一郎

猿轡五態 喜多 玲子

○十一月号宗教刑罰戦慄畫譜

口絵 宗教刑罰画集

風俗便所考 淫書開好記

緊縛の受難(縛られた女の写真)

悲恋の管刑 松井 籟子

続・へばきうり 鬼山 絢策

ストリップ変態記 朝見 速夫

続・変態記 岡田 咲子

少年矯正院体験記 藤安 節子

桃色の地獄 三村 幾夫

都会の異性交響集 中河津 規男

悪魔と口紅 桂 牧次郎

男性文学者の研究 杉山 清詩

性愛描写の文学 井口 正憲

切支丹迫害史 紀市 郁栄

○十二月号惑溺の愉快特集号

口絵 フランス貴婦人の変態性生活

耽美派小説名場面集 潤一郎の巻

折込口絵写真 縛つた女を写す 辻村 隆

溺れる愛欲 松井 籟子

奴隷妻 片矢 薫

男装麗姫伝 亀岡絳七郎

孤獨なフアンタジー 芳野 眉美

糊と泥と砂 長岡愛一郎

非公開映画 世界の闇房 藤安 節子

囚衣(或る人妻の生活記録) 古川 裕子

ロマンチックなサディズム 森山 美歌

女囚私刑体験記 小坂多美枝

セックスの記憶 綾 久江

錯乱の倫理 近東規矩也

狂い咲くカンナ其の後の告白 羽村 京子

昭和二十八年

○新年号 縛つた女を描く

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰画集

色刷口絵 絞鳥

口絵写真 縛つた女を描く

アブニストの記・らぶすれいぶ 鬼山 絢策

淫火(みだらび) 松井 籟子

桃色のベールに包まれて 川端多奈子

読者座談会 交悦に伴う責めの衝動心理

マゾヒストの果て 福田 英一

糊の執着 長岡愛一郎

鼻の執着 升岡 金吉

告白記 僕の記録 黒井 珍平

女の責めを描く時の心境 伊藤 晴雨

あなたのムチの下に 角田 平八

赤につかれた男 上村秀久男

男色の花道 堤 行房

○二月号責めの小説特集号

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

スペインの宗教裁判

口絵写真 恋に狂つたワン・カット

妖花(心の悪魔) 羽村 京子

夜開く孤島 岡 真史郎

若衆散華(同性愛欲史譚) 戸崎 平馬

変の字問答(第一話) 浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回) 鬼山 絢策

燐光 久留木 栄

女嫌いの種々相 仁比山 等

悩ましのサディズム 森山 美歌

切支丹迫害史 漆島 追平

しいたげられるよろこび 林田 澄子

硝子便所 芳野 眉美

映画とサディズム 雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口絵写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髄

切腹史談 吾妻 新

同性的男性愛の謎 中康 弘通

受難記(ある女の告白) 染田 玄

女囚私刑体験記(其二) 岡田 咲子

艶書通信(喜多玲子さまへ) 小坂多美枝

文学・歴史のサディズム 高野すみ子

猿轡考 仁比山 等

白い便器の幻想 千葉 三郎

緊縛女優列縛られた女優たち 芳野 眉美

アドニス灯 升岡 金吉

第七天国の夢想 鷲巢 千芳

梅井 清

○四月号 錯倒の告白特集

口絵 くすくすされる女 喜多 玲子

口絵写真 緊縛美の考察 後手と高手小手

搾衣(続少年矯正院体験記) 獄 取一

神の酒を手に入れる方法 沼 正三

肥満体への郷愁 麻生津和夫

乗馬服と長靴と鞭 森本 愛造

不思議な拷問 有馬 稲高

私の新婚生活 島村 康雄

開花の契機 信太 蓉子

キヤメラ愛好会 岡田 咲子

責めの美的表現 小此木 蘭一

新裸体狂論 七条美樹子

続・囚衣 古川 裕子

地獄繪行脚 長岡愛一郎

美少年の死 岡 真史郎

縛られた女優たち(二) 升岡 金吉

風流猿轡 吾妻 新

○五月号特集男性MASO

口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場

口絵写真 荒縄による緊縛感のスポット

怪奇画集(ドイツのクロテスク画集)

マゾヒストの会 沼正三・沢

風流責各態 吾妻 新

捕縛考 獄 取一

僕の記録(完結篇) 黒井 珍平

雌獣の手記 近見 啓

女王様ごっこ 飛田 良二

続・硝子便所 芳野 眉美

私の飲ひ 高野すみ子

少年及び女性の切腹 川端 康子

吊られた白鳥 中野 四郎

魔都上海の思い出から 高取 辰治

奴隷の安の記 早川 新二

縛られた妻以前 高取 辰治

暴帝イワン罪惡史 高取 辰治

〇六月号

口絵 お小夜嵐……………喜多玲子・画

口絵 地獄物語(往生要集)

口絵 緊縛による一表情

クリスチーヌの受難……………吾妻新・訳

ヴァンブ女優列伝……………朝見 速夫

アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子

責 苦……………竹谷 十三

廓の灯影……………片矢 薫

出獄(少年矯正院体験記)……………獄 収一

由紀子のお仕置……………大川由紀子

若衆武士道……………戸崎 平馬

あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三

其頃を語る(一)新派劇の責場……………伊藤 晴雨

文芸に於ける切腹描写……………中康 弘通

我が告白の断章……………須藤 律夫

第二回読者座談会……………松井籟子女史を囲んで

〇七月号

口絵 百鬼夜行の図

口絵 猿ぐつわ五態

クリスチーヌの受難(二)……………吾妻新・訳

妻は縛らず……………岡田 圭介

切腹本願……………亀岡絃七郎

祭壇に君臨する脚……………馬族 保

片耳伝奇……………窪村 弘

女体緊縛美について……………千葉 三郎

囚獄の思い出……………宮内 義雄

歌舞伎とサジズム……………伊藤 晴雨

辻番附の話……………水内 武郎

切腹願望……………浮家 鷹三

変の字問答(第二話)……………毛利 綾子

裸になつたお嬢様……………山本 百合子

くすくすられるよろこび……………小坂 多美枝

女囚私刑体験記(二)……………岡田 咲子

私の主題……………新 子

新しいサディズム……………新 子

〇八月号

口絵 戦前戦後の挿繪に現れたる責め

及び縛り繪……………村田 誠一

苦笑オンパレード……………林 凡流

鞭うたれる外国の少女たち……………渡辺彌三郎

口絵 被縛女体の研究……………辻村 隆

色 狼……………児島 光

明治期の被縛画家……………伊藤 晴雨

アリスへの讃歌……………住田 弘志

苦悶する裸像……………福田 英一

女人群像……………藤安 節子

悦虐秘帖……………信太 蓉子

クリスチーヌの受難(三)……………妻吾新・訳

公妃の復讐……………沼正三・訳

被虐の愛情……………若林 啓子

甘美なるアリスの降伏……………寒川緑・訳

女腹切の考察と女性の切腹例……………由谷 敬生

夫婦愛の表現法として裸女緊縛に……………西沢 芳造

ついて……………窪村 弘

片耳伝奇(二)……………獄 収一

アブノーマル・プレイ……………岡田 圭介

手記 妻は縛らず(二)……………鬼山 絢策

らぶすれいぶ(第八回)……………沼 正三

あるマゾヒストの手帖から(三)……………吾妻 新

女のズボンについて……………古川 裕子

古川裕子さんへ与える……………佐治 須十

ある被虐性愛者の手記より……………天泥 盛英

淫 火(第八回)……………松井 籟子

〇九月号

口絵 本紙の旧号に現れた責繪 辻村 隆

灸をすえられる女……………南川和子

口絵 縛られた女の美しさ……………吾妻 新

折込写真 緊縛美のオンパレード……………中康 弘通

鞭うたれる外国の少女達……………伊藤 晴雨

切腹願望と女性心理……………松井 籟子

繪看板の咄……………羽村 京子

淫 火(第九回)……………岡 真史郎

京子の生活と意見から……………沼 正三

両棲動物(男色夜話)……………中康 弘通

あるマゾヒストの手帖から(四)……………神風連と大東塾

縛られた女ばかりの座談会……………幸福なる隷属の告白

幸福なる隷属の告白……………黒のハイヒール

我が告白の断章(四)……………私は何故責め繪を描くか

らぶ・すれいぶ(第九回)……………燃ゆる緋罌粟

たれ記……………孤児院での経験

め手……………白粉地獄

秘……………愛と憎しみ

長期刑……………邦人女性受難事件

責めの自画像……………責め・悩ましのサディズム

甘美なるアリスの降伏(2)……………寒川緑・訳

〇十月号

口絵 安達ヶ原一つ家の図

針に刺された女……………南川和子・画

戦前に現れた責繪艶情女体地獄繪……………東西風俗画報襲う男と襲われる女

体操倉庫……………瀧 麗子・画

瀕死の白鳥……………都築峰子・繪

写真 野外の責め場……………塚本鉄三・撮映

現代のサジズム……………久留木 栄

奇異研究 発花杖……………村田 誠一

私の想い出……………岡田 咲子

聖画の誘惑……………近見 啓

私の服・縛られ服……………三谷 三子

らぶ・すれいぶ(第十回)……………鬼山 絢策

"アリスへの讃歌"へ答えて……………再びストラックスについて

……………羽村 京子

……………沼 正三

……………我が生い立ちの記

……………孤獨な放浪記

……………奇妙な告白

……………サジズムの芽生え

……………大阪陸軍幼年学校

……………呪縛

……………両棲動物(男色夜話)

……………蜘蛛と蝶々

……………哀艶責め場繪断

……………マダム紅鶴

……………虐待の記録

……………悦虐に哭く

……………川端多奈子

○十一月号

口絵 棒と柱を用いた縛り方、

滝 麗子・画

繪物語 拷問部屋 都築峰子・画

風俗画報私刑五態 杉原虹児・画

滝麗子画集 蛇男の幻想

写真 天然色写真 砂にまみれて

組写真 溪流に縛られて

女が縛られるまで

フォトセクション 男性被縛写真

女の切腹、男のヌード

緊縛美のオンパレード

白へのノスタルジヤ 河村 哲夫

自虐鬼の獨白 河真田子路

倒錯艶書 三富 浩生

に記 倒錯艶書 時山加代子

蜘蛛と蝶々 飛田 良二

責めの作家と誤られて 松井香代子

女の足の魅力 金丸 壮吉

或る被虐性愛者の手記より 天泥 盛英

木鼠吉五郎の半生 緑 猛比古

感情教育 吾妻 新

現代文芸に現れた責め 村田 誠一

悦虐の旅役者 青山三枝吉

まそひすと・さじすと 富田 陽夫

美姫情史 亀岡紋七郎

女を縛った経験語る読者座談会

女のズボン(最後の回答) 吾妻 新

両棲動物(完結) 岡 真史郎

呪縛(完結) 辻村 隆

○十二月号

口絵 柱とテコを用いた縛り方 滝 麗子

女囚処刑の図 都築峰子・画

美女折檻図 南川和子・画

新しい縛り繪 強制・馴致

滝麗子画集 兄妹・悦虐遊戯

写真 羞らい、女の立腹、野外の縛り

アルバム ビニールの紐と鎖の応

用、棒責め二態・吊り人形 (三人

の女の縛られしヨ)

細とマゾヒズム 那須不二天

淫火(完結篇) 松井 籟子

映画に現れた猿轡 鳴山 能平

春風座秋の旅路 青山三枝吉

鶯の谷渡り 沼田扶二世

錯園 剝玉子 住田 弘志

る花 三つの色の交錯 芳野 眉美

甘味の 野 薊 川合伊都子

お膳の魅力 多山 皓

不見転芸妓 若杉 早苗

残虐なる女性達 森本愛造

悦虐に咽ぶ 川端多奈子

らぶ・すれいぶ(完結篇) 鬼山 絢策

現代文芸に現れた責め 村田 誠一

甘美なるアリスの降伏(完結)

後者の幻想と期待 寒川緑・沢

虐待の記録(完結) 古川 裕子

女奴隷の手記 前島 芳雄

北山カオル

昭和二十九年

○新年号

口絵 江戸時代大名の人飾り 伊藤 晴雨

残虐なる女性達群像 森本 愛造

股間縛りの縄の掛け方 滝 麗子画

楽屋裏の答責め 南川和子画

滝麗子画集 苛責、蜘蛛責

繪物語 置屋の主人と芸妓 都築峰子画

写真 屈辱への過程、台上の殉教者

最新欧米女性責めより

切腹・縛体・虐待・愉悅

悪の部屋 一俣志津子

活驗 股間縛りについて 桜井京一郎

の生 コンビネーション 長谷川 洋

私体 女装への憧れ 重田 正和

悩ましき切腹悲願 児島 輝彦

私の求めた男 松井 籟子

痴迷 鬼山 絢策

犯された女 近藤規矩也

美しき悪魔の哄笑 真木不二天

新・倒錯耽美論 成瀬 亮

男色の闇房描写 村田 誠一

流浪八年 沖野恵美子

性告白 私刑に泣く未亡人 小坂多美枝

選ばれた女 監禁十日間 北山カオル

狼くつわと私 古川 裕子

ダイアナ夫人 栗杉貴代子

檻の中に 若杉 早苗

現代マゾヒズム芸術時評 原 忠正

○二月号

色刷口絵 地下室の怪 滝麗子・画

口絵 面芝居の図 伊藤晴雨・画

美しき馬の調教 アメリカンスタ

イルの責め 鞭を持つ女

煙草責めのポーズ 南川和子・繪

都築峰子画集 邪淫教祖責繪地獄

図解 ゴム紐利用の縛り方

写真 舶来の縛り写真、磔、足舐め、意

氣地なし、後手に縛って頂戴

組写真 猿轡をされるまで

繪物語 悦虐の家 嵯峨 紀世

悦楽の銀座裏 高賀魔千子

人間燭台 沼田扶二世

蜘蛛と蝶々(五) 飛田 良二

散紅葉(女腹切八景) 亀岡紋七郎

裕子とお仕置 古川 裕子

現代文芸に現れた責め 村田 誠一

囚獄記 模範囚 桜井 英一

人耶馬郎 沼 正三

切腹研究夜話 中康 弘通

人身御供 沖野恵美子

非小説 性液 伊藤 晴雨

復讐 岡田 咲子

女体自虐図 三富 浩生

蜘蛛とパンティ 芳野 眉美

罪ある女 桜井京一郎

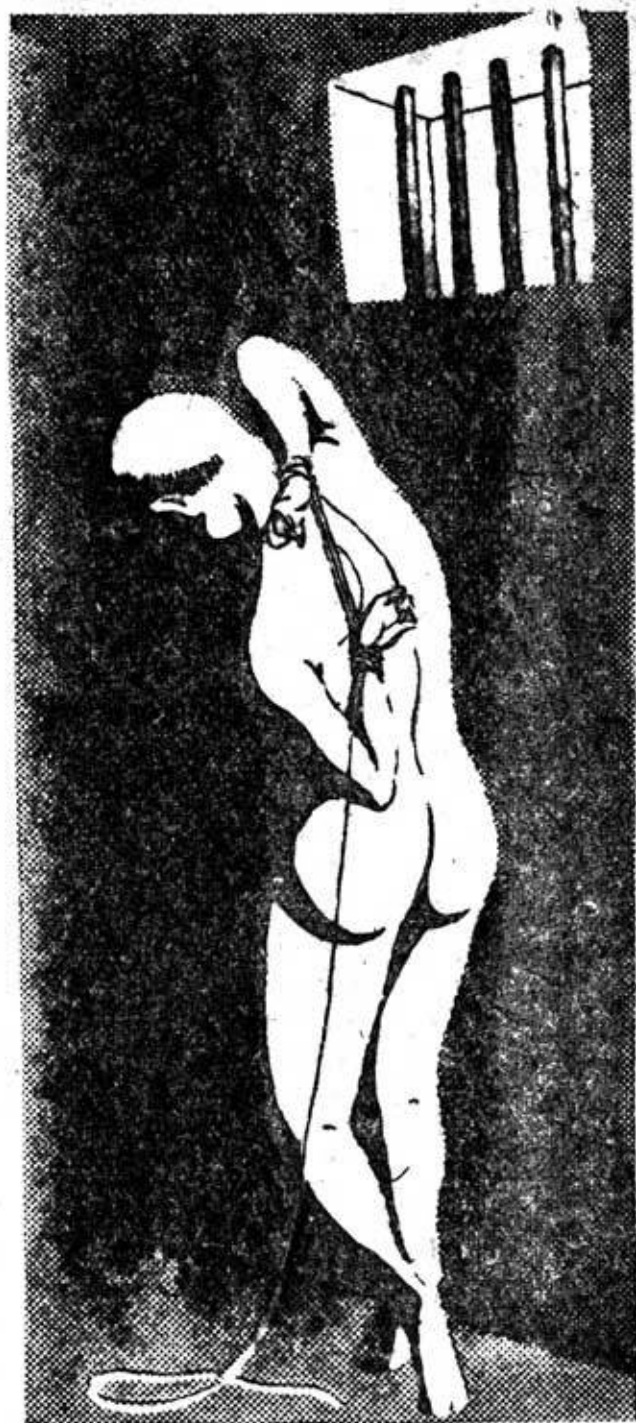
京子の蛙腹 羽村 京子

昭和二十七年十月号より昭和二十九年

二月号まで若干在庫、二十七年度の分は

一部送共九十四二千八年以降の分は一部

送共百円にて急送申し上げます。



少年未決囚

これは或る純情な少年がその運命の悪戯が故に辿った倒錯の体験記である。

三根耕二

倒錯の世界をさ迷い、何ものかを求めて苦悩し悶えている私の過ぎ去りし思い出の中から今日もその一つを茲に記してみたいと思います。その想出は時には甘く時には苦い思い出として私の胸に甦ります。私の少年時代の一番大きな運命のいたずらの記憶です。

六才で父を失った私は母の慈愛によつてす

くすくと伸びて、十六才までは何ら格別の事もなく育つたのですが、商業学校二年になろうと云う時、思いがけない運命の転機が訪れたのです。母の死です。突然の此の出来事に依つて私の運命は急激な転回を余儀なくされ私は学校への愛着を断ち切つて店員として働かねばならない事になり、知人の世話で或る

商店の小僧さんとなりました。勉強が好きであつた私に取つては大きいショックでした。十六才と云つても満十四才、学友達と別れて前垂れ姿の小僧さんになるのは余りにも辛いことでした。此の時以来、私は人が変つたように無口になり、世を勘ねたような気分毎日の辛い奉公人の生活を続けている内に、同僚より侮辱された事から私の気持は爆発して遂に放火と云う大それた事を仕出かしてしまつたのです。

それは昭和十五年、皇紀二千六百年を祝う数々の行事が国を挙げて行われているころでした。一月末の事で寒い最中でした。警察では放火犯という罪の恐ろしさと寒さで泣いてばかりいた事を覚えています。でも警察では比較的好遇され、やがて起訴されて未決囚となる迄、只の一度も手錠をはめられたり捕縄も用いられた事ありませんでした。起訴されて未決少年囚として拘留所の門を潜つた時から、私は愈々数奇な運命に弄れることになつたのです。K拘留所は裁判所に接続して建てられた赤煉瓦のいかにも冷たい感じの建物でした。

小さな鉄門を潜つて連れてゆかれた薄暗い小さな室、もう此の鉄扉を潜つた時から私は

人間社会から隔離した地獄世界へと投げ込まれた訳です。恐ろしい顔をした看守の事務的な云い渡しがあり、私は小さな裸身をそこに晒しました。身に糸も纏わぬと云うことがどんなに羞しいものであるかと云うことを私は身にしみて知らされました。そうして私は大人の囚人の着る大きい長衣を着せられました。浅黄色の囚衣、襟には二〇七番と書かれて、私の姓名は抹殺されてしまったのです。私は予審になるので独房へ入れられました。二畳程の矩形の室で窓は割に大きく一尺四方位で太い鉄棒で厳しい感じで外界と遮つて、その外を又、太い針金の網で掩われて無言の威圧を加えていました。収容されたのは夕刻でしたが、間もなく扉の下方にある差入口の蓋が開けられて食事が入れられました。アルミ製の食器に丸い型に固められた麦混りの飯そして大きいアルマイトの食器になみ／＼と汁が入れられ、別に五切ほどの沢庵が配られました。それを配つて居るのは刑が確定して服役中の囚人達でした。此の拘置所には約六百人の未決囚が収容されて居り、内、少年囚が五十名程居たようです。でも少年囚と云つても純然たる少年囚は十八才未満とのことで十二、三名、他は準少年と云つて二十才未満

でした。普通の窃盗、詐欺などの犯罪者は雑居房へ収容され、放火、殺人、強盗などの重罪犯は独居房へ拘禁される訳で、その時は少年囚では私ともう一人十八才の強姦を犯した少年が独居房拘禁の少年囚でした。中でも私は十四才で最年少であつたので看守や雑役囚達の好奇心の対象となつたようで、入替り立替り扉の視察窓から覗き、いろ／＼とからかうのです。でも年少であり、自分で云うのも変ですが、美しい可愛い顔立ちであつた故か、看守達も雑役囚達も私には規則の許す限りで優遇してくれました。所が一人エノケンに似ているので、それが仇名になつている看守丈は私を目の敵のように、いろ／＼と何かにつけて叱言を云うのです。

独房に収容されて一月程立つた頃でした。収容以来予審法廷に二度許り呼出された丈で退屈しきつていた私は、生来の読書好きでしたので安い料金で貸本や拘置所備えつけの貸与本を読みふけつて居ました。余談ですが私はその時、キング、富士、日の出等の雑誌は申すに及ばず、満十四才にしてはと思われる国際共産主義解説とか吉川英治の親鸞とかを読んでいた。まだ三月と云えば寒いので長衣も綿入れのポツテリしたどてらのような

物でした。朝の日課の点検や房内検査やらが終つて、私は好きな本に読ふけつて二時間許り過ぎました。ふと私は尿意を催し、房内の壁に取付けられた桶の便器に用を達し、手を洗うつもりで窓の下に取付けられている洗面水道の所で水を出したのです。すると突然ガチ／＼と鍵の音がして扉が開かれました。驚ろいて振り返る私の前にはエノケン看守がニヤ／＼と冷たい笑いを浮べて立ちふさがっているのです。

「おい、坊主、今何をしていたんだッ？」
「ハイ、小便して手を洗つたんです」

私の声はふるえていたようです。拘置所内でも一、二と言われる冷酷な此の看守は私がかねて狙つていたのでしよう。私はそう覚ると此の恐ろしい看守に激しい怒りと又、その正反対の屈辱を感じました。

「オイ、お前は今その洗面器の中に小便をしたろう、俺は見えていたんだぞ！」

あゝ、何と云う無体な云いばかりでしょう。か、私は顔を真赤にして抗議しました。

「先生、そんな事、僕は手を洗つたんです」
少年囚は看守を先生と呼ぶように命ぜられていました。私は必死の面持でした。

「馬鹿！俺はちゃんと此の目で見たんだぞ外

に出る！」

こうなつては私は不利でした。囚人と看守権力者と被支配者なのです。私は冷たい廊下に引ずり出されました。そうして書信室（収容者が手紙を書く室）の鉄格子に両手を捕縄で縛りつけられました。そうしておいて、彼は私の帯を解き長衣のすそをまくり上げてしまふのです。冷たい獄内の廊下に十四才の少年は、白い丸い二つの丘を丸出しに晒されたのです。哀願をつゞけ乍らふと後を振向いた私の心は凍りついてしまいました。エノケン看守は何処から持つてきたのか櫓の木剣を振上げています。

「いゝか」

冷たい声でした。ピシーと第一撃が私のまだ幼いお尻に加えられました。私は「ウーム」と唸ると次の打撃から逃れようともがきました。でもきつちりと手首に巻きついていく縄は唯私の腕に痛みを与える丈です。身をくねらしても、しつかりと鉄格子に結びつけられている為にお尻を看守の方に向けたまま、儚ない踊りを踊るに過ぎないのです。

私は一撃毎に尻がかつ／＼と火のように熱してくるのを感じました。十数撃殴りつけられては十四才の身にはもう堪えきれません。

私は悲鳴をあげ泣き出してしまつたのです。

その時、雑役囚達が来て取なして呉れましたので、やつと尻打ちは免れましたが、エノケン看守は此んな事位で折角捕えた獲物を放すような男ではありません。鉄格子に縛られた縄を解くと、私の右腕を肩を越して背に廻し左腕は下から後手にして両手首をつなぎ、ぎゆうつと引締めるのです。後で知つたのですが、之は「鉄砲」と云う責めなんだそうで、大の男も半日も「鉄砲」にかけられると縄を解かれても腕がすぐ元には戻らずひどい時には失心してしまうのだそうです。私が捕えられて始めて受ける此の苛責に幼い私の心は唯、もう駄目だという絶望感で一ぱいで涙もかれてしまつたのです。しかし此の時は十分程すると勤務交替の時間となり、交替にきた別の看守はすぐ許してくれたのです。

こうして生れて始めてとも云える苛責、それも絶対に抵抗出来ない立場での責めを受けたのですが、しかしこれは此の後送られた少年刑務所での数々の体

験にくらべれば生やさしいものであつたことを後で知つたのです。

そんな事があつて一月も経たぬ三月の末に私の公判が行われました。私は看守部長の手に依つて本式の腰縄、前手錠、深編笠と云う姿で地裁の一号法廷へと引かれました。もう窓の外に一本見える桜の枝に早咲きの花が二つ三つ、ほころんでいるのでした。地下道を通つて被告入口から一步入つた私は思わずアツと云つて後に戻ろうとしました。それは法



延一ぱいに人が溢れているからでした。しかし後から看守は冷酷に私の肩を押し、私はその囚衣姿を幾百の視線の前に、晒されねばならなかったのです。十四才の少年放火犯と云うのが人気を呼んだのでしょうか、詰めかけた傍聴人で裁判所では傍聴券を追加発行したそうです。女学校の見学もあつて五、六十人のセーラ服の乙女達の同情的な視線もありました。私は手錠を外され深編笠も取られ、その面を多くの人々の前に晒さねばなりませんでした。法廷の前列中央には伯父や親族の姿もありました。多くの人の好奇と侮べつと又、同情の視線が私の拘禁生活による青白い姿に集中されているのを感じて私は真赤になつていました。此の羞しさは経験のない方には恐らく分つてはいただけないでしょう。

右側の扉を排して係の上山検事が所定の位置につき私の目礼と看守の敬礼に軽くなづきます。定刻の十時に七、八分前なのです。左側からは官選弁護人の柳川弁護士が入場し書記も入ってきました。此の時です。先程から大きいカメラを持つてウロ／＼していた四人の人が正面の裁判長席の方に廻つて私の方にカメラを向けました。あつ新聞社だと気づいた私は顔を膝の上につゝ伏してカメラをさけました。此の時ベルがなつて正面扉から入つてきた裁判長と陪席の二名の判事、廷丁が「起立」と号札をかけ全員が起立しました。中央の五十才位の裁判長はカメラマンの方に大きく手を振つて「少年だから駄目」と制止してくれました。こんな小波瀾があつて、やがて公判開廷が宣告され、裁判長の前の台に立つた私にいろ／＼の訊問が行われました。やがて検事の論告で約四十分、結局三年以上六年の求刑でした。私は覚悟していたので、それ程失望もしませんでした。今度は弁論で三十五六の小壮弁護士は約一時間、私の不幸な運命と社会の責任と云うような点から弁護し、自らも激して涙声で熱弁を振られたのです。私も声をあげて泣き、傍聴席、特に見学女学生の鳴咽もきこえる程の名弁論でした。それより再び裁判長の訊問がありまして閉廷となり、又大勢の人の前で手錠、腰縄の浅間しい姿になり引かれて行つたのです。その日は多くの見ず知らずの人より差入があり人の情けに泣きました。一週間後同じ法廷で判決云い渡しがありました。裁判長は厳そかに二年六月以上四年未決通算七十日の判決を云い渡し、私に向つて「少年刑務所には学校もある、スポーツもやれる、一生懸命に勉強し

えすれば四年もいなくとも二年半経過すれば釈放も出来る。少年法による不定期刑だから前科もつかないのだから真面目に務めて一日も早く出して貰うように身体には充分注意するように」と温かくさとされました。

それから十日程して私は愈々瀬戸内海に面した国宝の城のあるので有名な姫路市の少年刑務所に護送されることになりました。裁判長の云つた学校もある少年刑務所、成程、学校もありました。スポーツもやれました。しかし此処はやはり刑務所でした。人の住む世界とは思えぬ恐ろしい、そして又異様な性欲の地獄でもあつたのです。工場へ出てから私が年少の可愛く少年であつた為か多くの先輩少年の男色の対象となり、その為珍しい体験も、又姫路少年刑務所での二年間の生活で（蛤）（敵前上陸）その他の体罰も受け、それから移送された岡崎で半年、信州松本での半年、横浜で造船隊へ出た時の体験と、いろいろあります。すべて真実の体験であるが故に忘れがたい思い出です。次には少年刑務所に於ける異様な体験にペンを進めたいと思います。

（此の項終り）

捕 虜 の 洗 礼

出 久 信 男



昭和二十年の春

北支の中共八路軍はまだ表面日本軍の制圧下にあつた。然し彼等は独特の執拗さと巧妙なるゲリラを以つて、日本軍が線と点との支配に狂奔するのを尻目に、着々と農村地帯を掌握しつつあつた。これはその頃、美貌の女遊撃隊長に捕えられた私が約五カ月に亘つて体験した悩ましくも異常な記録である。

その朝、中隊討伐に参加してK部落を急襲した私は、部落内を搜索する分隊員の為に高粱倉の屋根で監視哨に服していた。ポカポカ

と暖かい小春日和だつたので、少し緊張を解いてボンヤリ立っている、不意に足下の納屋から青い中国服の若い女が走り出た。背のすらりと高いその断髪の女は、両手を胸に抱え込む様な姿勢で、サーツと走り去ろうとする。

「誰啊（スィア）（ダレカ）（チアンツウ）站住（トマレ）」

私は咄嗟に銃を持ちかえ空へ向つて威嚇射撃を一発放つた。女が振り向いたと思つた途端、太腿部に強いシヨックを受け、思わず私はくたくたと膝をついていた。女に隠し持つた拳銃で振り向きざまに射たれたのだ。私はその女が澄んだ中国語で誰かにキビキビと命じているのを聞きつつ、スーツと意識を失つてしまった。

気がつくと、私は見知らぬ家の中庭に敷かれたアンペラに横たえられて、傷の手当を受けていた。手当をしている男の帽子の形、服装、色、敵だ！ 捕まつた！——ハツと反射的にハネ起きようとしたが、太腿部に激痛が走り、誰かが頭を蹴つた。

「別起（ビエチ）（起きるんじゃないよ）」

聞き覚えのある声音だ、見上げると私の頭の所に、色の抜ける程白い、少しケンのある切長の目をした美しいあの女がスラリと立つ

て片ほほに冷たい笑いを漂して、じつと私を見下している。隊長らしいその美貌の女を見上げてゐる中に、その美しい女性の手に捕えられ、生殺与奪の権を握られてゐるといふ屈辱感が、次第にたとえようもない恍惚とした陶酔に変わり、長い間機会を得ぬままにくすぶつてゐた私のマゾの血が、フツフツと胸に湧き上つてくるのを感じた。

手当をしてくれる兵士と、追々馴れるに従い、彼等の口から、彼女の名は朱麗蘭、上海で高等教育を受けたインテリで、八路軍分区司令の妻だつたが、夫が日本軍との戦いで戦死して以来、気丈な彼女は勇敢にも男装して白馬に跨がり、夫の部下だつた男達を従えて自ら日本軍と戦い、附近の農民たちから救いの女神として崇敬されている等と知つた。

私の心は次第に彼女への憧憬と讚美に充たれ、遂には彼女の忠実なる奴隷として奉仕したいと熱望するようになった。私の傷がすっかりいえた或る日、彼女が突然、私のいる室に來た。細くくびれた腰に手馴れたモーゼル拳銃がカツチリ装着され、白い乗馬ズボン、黒革の乗馬靴、一分のスキもない颯爽たる服装で私を見据えて言つた。勝利者が捕虜に対する勝ち誇つた口調である。

「お前の傷は治癒したと報告があつた。これからお前は償いをせねばいけない。お前達日本兵が罪もない中国人をどれ程虐たげ、辱しめたか、お前も知つてゐるだろ、お前はこれから日本兵を代表して、中国人のアタシの手で罪の償いをするのです。勿論皆の面前です。お前はその機会を与えられたのを光榮とすべきです。わかつたわネ」

私は後手に縛られて、抜剣の兵士たちによつて部落の広場に曳き出された。

黒山のように群れてゐた農民達は私の浅ましい姿に狂喜の歓声を挙げ、ありたけの罵声を浴せかけた。傍へ寄つて私の顔にベツと唾を吐きかける女もあつた。どんな辱しめを与えられても、捕われの身はそれを防ぐ事すら許されなかつた。騒ぎ立てる農民に向つて女隊長はよく透る声で告げた。

「皆さん、さつきも言つた通り勝手の復讐は許しません。皆様の代りにこの男をトリコにしたアタシが、皆さんの注文によつて制裁を加えてやります。いかがですか？」

私は首を垂れて女君主の声を聞き乍ら、その凌辱を想像して或る期待に胸をトキめかしてゐた。一人の農夫が叫んだ。「鬼子クイズ（日本人のベツ称）の奴ア、おしの弟を縛り首にし

て殺しやがつただ」彼女はニツコリ笑うと、「では皆さん、私はこうしてやります」と言うや否や、私の首に綱を巻きつけて一端を握り、烈しく私を蹴り倒した。ドタリと倒れた背中を乗馬靴の片足で踏まえ、手にした馬鞭で尻を打つた。

「裸にしろ、裸にしろ」声によつて、私の服もパンツもはぎ取られ、素裸になつた背を尻を彼女は又ピシリピシリと打つた。私の尻は紫色にはれ上り、苦痛の呻きは喰いしぼる唇から洩れたが、彼女は少しも容赦しなかつた私は苦痛にのた打ち乍ら溷濁した頭で思つたたとえ私が此所を逃れ帰つたとしても、待つてゐるのは、聞くも忌まわしい軍法會議、そして刑死だ、むくつけき男共に殺されるより此の美しい支配者の脚に踏まれたまま死ぬば本望だ——。

一人の老婆がひからびた指で、私を指さし乍らののしつた。「日本兵の奴ア、フントに慾張り野郎だ、此の婆のいくらもねえ喰物を皆持つて行きやがつた。フントに馬のような野郎だ、馬にでもなつちまえ」彼女はその声に応じた。「馬におなり！」私は素裸のまま四ツ這いになつた。易々として彼女の命に値い、彼女の鞭を受けるのが楽しかつた。



「さッ、アタシのお馬さん、乗るわよ、途中でつぶれたりしたら承知しないから」
彼女は私の背中に馬乗りにつき、手綱をとった。私は心得えて、膝を泥にこすり乍らヨタヨタと這い初めた。彼女はグイグイと手綱をあやつつて馬になった私を群衆のすぐ近く迄這わせて、腰をゆすり乍ら、馬上で勝誇つ

私の背にユツタリと腰を下し、片手にシガレットをはさんで足を組みかえ乍ら、群衆に抗日教育を説くのだった。激しい労役から解放された私は、その背に彼女の体重を根気よく支え乍ら、その体温を受けて、ほのぼのとした感情を味わっていた。
その様な事が数回行われた後、彼女は私の

たように嬌声を上げるのだった。
彼女の豊かな腿に腹をはさまれ、しなやかなお尻の圧力に恍惚として這い廻る中に、私のひざはすりむけて血が滲み、手足がしびれて動けなくなつてきた。彼女は私の脇腹に拍車を当てピシリピシリとむき出しの尻を打った。
「走巴走巴（ハシレハシレ）」

彼女の情容赦ない叱声に、私は無我夢中で「ヒヒーン」と悲鳴をあげ口から泡を吹き乍ら這いずり廻つた群衆は美貌の騎手と、浅間しい捕虜の珍奇な調教振りに歓声を挙げて、私の四ツ這いの姿にののしりとあざけりの雨を降らすのだった。

それが終ると彼女は私に腰掛けになる事を命じ、地面にうずくまつた

乞いを容れて、私を奴隷として身近く召し使う事になった。激しい軍務から帰つた彼女の身体をうやうやしくマツサージする事、彼女の休息の時の寝台、或は椅子となり、室内でする乗馬練習の馬代りとして仕える事が、私の有難い日課となつた。遂には彼女は私室に於て一切床を歩く事をしなくなり、凡て私の背に掛け、乗り、跨がつてするようになってしまつた。

こうして約五カ月。私はその夢の様な奴隷生活に幸福感を味いつつ暮したのだが、やがて日本の敗戦を知つてから中共の動きは俄然活潑となり、彼女も東奔西走、席のあたたまるひまもなく、私を辱しめる事もまれになつた。或る日、遂に彼女から刑の免除と釈放を宣告されたのである。私は彼女の脚下にひれ伏し、足先に接吻して刑の続行を哀訴したが許されなかつた。

その後、変転の生活を経て、私は無事日本に帰つた。そして平凡な結婚生活に甘んじているが、眠れぬ夜半、独り当時の愉悅を反芻し、君主たりし朱慧蘭の面影と叱声を偲んで悶えている。
(終)

或る同性愛者の告白

小 田 雅 春

此の手記は同性愛に貫き通した私の真実の告白であり同好の皆様へ訴える心の叫びでもあります。

私は幾多の煩悶や懊悩の体験を経た末、今や先天的同性愛者であつたのだと確信するに至りました。幾度かそれが環境に支配された後天的なものであり、いつかは正常なるものへ移行する時もあるだろうと無理にでも考えた事もありましたが、それは同性愛が異常であるという自己卑下の觀念から逃れんとする自己欺瞞でしかあり得なかつたのです。

自分の経歴を述べる前に先ず私の現在を紹介致します。私は終戦の年朝鮮より引揚げ、郷里宮崎県庁に奉職、後昭和二十二年九月一日労働省開設、地方に労働基準局が開局せられた折、県庁より同局に転属、最近まで神奈川県某労働基準監督署の第三課次席として

勤務していましたが、私の男色癖を署長に知られ、その為公務員不適格者として退官させられた者です。

生れは大正五年三月三十日、身長五尺三寸、体重十四貫、中肉中脊という所でしょう。

私の男色癖による解雇の経緯については此の性歴の終りに於て申述べたいと思います。

私は郷里宮崎県の町では二番目に大きな旅館業を営む両親の下に、姉二人妹三人という女の姉妹ばかりの中の一の男の子として生れました。そして跡取りとして全く我儘に育てられました。幼時の記憶はありませんが、其の頃町では珍らしかつた三輪車を買つて貰い、資産家の子供しか通わない幼稚園に通わされた事を記憶しています。使用人も女中、板前併せて十人位いたようです。

小学校に通うようになって、私は常に級で

一、二を争う成績で、両親の愛は更に私に集まつたようでした。其の為か私は小学校を卒業するまで母と一緒に寝ていました。それはたしか尋常四、五年の頃でしたでしょうか、私はふと深夜に目覚めて気付くと母がいないのです。そして私はその時隣の布団に同衾している両親を発見しました。その翌夜から何が私をそうさせたか今でも分りませんが、寝る時は母と寝ても夜半にこつそり父の布団にもぐりこむようになっていました。

中学に上つても、私は成績は常に一、二番で所謂秀才と呼ばれる組でした。中学二年の春でした。風呂にはいろいろとして裸になつた時私は自分の身体の異変に気がつきました。好奇心と未知の世界に対する憧憬は何んなに胸がはずんだ事でしょう。それから一番風呂を止して男の客が皆すんだ後からはいつて

風呂の中に浮いている大人の陰毛を集めては自分の前につけて楽しんだものです。それまで私は猿叉を使っていたが、大人の使う越中褌が使いたくてたまらず、誰にも分らぬようゴツソリ父の褌を着用したものです。勿論それにより自分も大人なみになった満足と先程述べました風呂の中で集めた陰毛が褌をすると落ちないからでもありました。

褌をこしらえてくれという事は親にも恥かしくて言えなかつたのです。

矢張り其の頃だつたか、今少し以前の事だ

つたか記憶がはつきりしませんが、私は父の簞笥の中から木製のそれは巨大な張形を発見しました。それを何に父が使つたのか知りませんが、私はそれを自分の前に下げ褌の上から其の木製の品を持つて恰もそれがほんものゝ自分のものゝように楽しんだ事があります。其の他発見した枕草紙なぞに画かれている巨大な陽物を羨ましい気持ちで飽きず眺めたりしました。

私が真の同性愛を感じたの



は中学四年になつてからです。私は上級生から可愛がられる程の面相でもなかつたのですが、中学一、二年の頃、二、三の上級生から抱かれたり、追ひ廻わされたりした事はありません。しかし別に上級生に対して思慕の情を感じた記憶はありません。

話が前に戻りますが中学四年の時、三年に一木正義という少年が父の転勤によつて私の中学校に転校して参りました。その一木と寒い冬の夜、映画館の暗闇でヒヨツコリ会つたのです。

一木は私を見るとニツコリ笑つてヒヨツコリと頭を下げるのです。其の頃映画は学生の入場は厳禁されており、生徒監にでも分けばきつい処分を受けたもので、好きな者は教師に見つからぬよういろ／＼と変装し、館内でも成る可く隅の方に坐つて、冬なら、あの頃流行したつりがねマントを頭からゴツソリかぶつて観たものです。勿論上級生に見られても大変です。映画を観た事については下級生を見つけた上級生も学校に対しては同罪ですが、事が公にならないだけで、見付かつた翌

日は早速上級生の一団に呼び出しを受けて、ヒドイビンタ即ち制裁を加えられたものです。だから下級生は教師だけでなく上級生の眼も逃げねばならなかつたのです。

私がそれまで館内で会つた下級生は私と眼があうと、しまつたと許りゴソ／＼と暗闇の中に逃げかくれたものです。私は性格上そうした下級生が誰であつたか分つていても、別に制裁を加えるでもなく、翌日学校で会つても別になじ

るような事はしませんでしたから、一木も此の人は話せる人だ位な好感を私に抱いていたのでしよう。先程も申上げたようにニツコリ笑つて私に頭を下げたのです。私は人懐こい此の少年が下級生である事も知らなかったのて、途まどつて彼に近よると改めて私は「君は誰だつて」と聞きました。

私の問いに対して正直に自己紹介する一木の少年らしさに、私は今迄味つた事のない不思議な気持を感じたのです。中学三年にして剣道初段という彼は如何にも精悍な感じでした。

三年と言つても彼は以前の学校で成績不良の為一度落第しているのて年令は私と同じでしたが級が違つてみると矢張り彼は私に取つては年下の少年と云つた感じでした。

幸い彼の家は私の家から四、五丁も離れない近くであり、それから登校も帰宅も映画もそして日曜の休みの遊びも常に一緒でした。そして次第に私は熱烈に彼を愛するようになりました。唯彼と一緒にあれば良かったのです。唯それだけで幸福でした。

登校は一緒でしたが、帰りは彼が剣道部の選手で毎日放課後二時間位は稽古の為残るので私も其の間教室で本を見たりグラウンドで

遊んだり、時には道場を覗いたりして彼を待つては帰りも彼と一緒にしていました。県下の中等学校武道大会があつて、彼が出場の為他の町に泊掛で行つた時などは、何か空虚でたまらない淋しさにたえ切れず、私も後を追つてその町へ行き、選手と同じ旅館に泊る事は許されないので、他の旅館に泊つて試合場に出掛けては一寸の間の逢瀬を心から楽しみました。

彼の家庭は父が官吏で家庭が厳格な為、小使銭も思うように渡らず、夜の外出もそう度々は困難でしたが、映画の変る度にそれは週に二回位でしたが、先生の家に勉強に行くと両親をだましては、教科書を二冊位手にして来ては、先ず私の家によります。私は小使銭にも不自由しませんでしたし、それに可愛い彼の為映画だけでなく帰りは何かと飲食店で御馳走したものでした。そうした生活が三月も続いてやがて私は中学五年になりますと家では、客商売故落着いて勉強出来ないからという理由で、予め自分で見つけておいた六畳に四畳半、台所という小さな平家を父に頼んで私の勉強室として買つて貰いました。食事は朝晩だけ家から女中が通つて来て食べるように仕度してくれるのです。その他は

全く私一人で秘密の生活が楽しみました。之れからの一木との生活を想うと胸も躍るようです。それからは映画の帰りは私の家に必ず寄つて二人きりの楽しい一時を過して彼は私に名残りを惜しまれながら帰るのです。それまでは全く精神的な愛情生活でしたが、引越を機会に私と彼の肉体関係が結ばれたのでした。それは私が今まで想像もしなかつたような興奮と歓喜の世界でした。肉体関係と言ひましても非常に単純なもので、抱擁、相互手淫という程度のものでしたが、私にとつてそれはなんと素晴らしい耽溺の世界だつたでしょう。同性愛者のみが味わい得る悦楽の世界でした。

然し此の生活も余りにも早く破綻の時が参りました。それは十二月も中ば近くやがて冬期休暇も間近い頃でした。其の一月程前から少し私に対してよそ／＼しくなり、呼び出しにも快く応じないようになつた彼から絶交を宣告されたのです。其の理由が何であつたか分りません。結論から云えば私の真剣な愛情に対して彼が私に期待していたのは上級生としての権力を持つ私であり、経済的援助者としての私であり、性慾のはけ口としての私でしかなかったのでしょうか。其の頃、私の家は

【読者通信】

投稿歓迎

奇譚クラブ並にKK通信に素晴しい編集ぶりを見せていられるのを毎号拝見、感謝致します。最近のお誌の内容に思いつくまゝ申し上げます。女囚処刑の図、写真ではビニールの紐と環の応用は傑作でありました。杉原虹児さん構成の最新欧米女体責め、滝麗子さん、都築峯子さん描く所の股間縛りの構図、小説では「罪ある女」桜井京一郎さんの作品、又「股間縛りについて」等、太股に喰い込む縄目に思わず興奮を覚えます。杉原虹児さんの欧米女体責め、実によく出来た構図であると感心しました。今にも彼女達のヒップに革の鞭が飛ぶような――。鞭の苦痛が切迫感を以て表現されています。こ

の次に起る情景を想像する楽しさにおいて逸品であります。何度見ても実によく出来ていて倦きることはありません。女性の最も恥しい姿！羞恥のポーズ、その柔かい谷間にしつかり喰い込ませてその部分を見入る時、女性の激しい羞恥と苦痛を与える表情に思わず頭のしんがゾキンとさせられるのを覚えます。成瀬亮さんが「新倒錯耽美論」で申される如く、私の様な性的倒錯者は絵や写真を見つめているだけでなく、先夜（一月二日の夜）可愛い妻にもこの様な（桜井京一郎さんが体験せられたる）迫力ある股間縛りを行いました。その日は野心がありましたので、正月の事とてアルコールを多分に胃袋に入れて帰宅した私は先年御社に御願ひして入手した種

々の写真を妻に見せている中「磔二態の一女正面のハリツケ」に妻がすつかり魅せられて、じつとりつかれた様に見つめていました。「私、こんな風に縛られてみようかしら」とつぶやくように申します。私はもう矢も楯もたまず、喰いかけのフイリツプ・モリスを慌てゝ消すと細紐を持ち出しました。妻は昨年の暮に買つてやつた橙色のタオルのパジャマを着ていたので、それを引き上げるようにして腹部に二巻き、ぐつと引締め

ておいて、前からお尻へ廻してすつかり後へ結びつけました。妻は別に抵抗もせずじつとしていました。桜井さんがされた様に手鏡を出して写してみせてやりますと「いやよ、いやよ」と自由な手で解こうとするので、私は縄尻で手首を後手にねじ曲げながら縛つてしましました。妻は身体をくねらせ、大きな声を立てようとし、たのでポケットから取り出したハシカチを口の中へ押し込むと、その上から手拭で結びました。妻はもう観念した様に床の上に俯伏せになつて身を固くしていました。妻は余り豊満という身つきではありませんが、餅肌のほつてりとした肌合で細紐が喰い込むように十文字に走っている様は桜井さんの云われる様にゾクゾクする程私の眼を楽しませてくれました。嫌が

る妻を再び抱き起し、私はその魅力的なポーズに時の経つのも忘れしました。同封の絵は二十度に暖房した部屋の中で私がスケッチした妻の絵です。拙いものですが御笑覧下さい。（愛知県 K・Y生）

父の道楽から破産一步前にあり、上級生としては後一月もすれば卒業する私であつてみれば既に彼には必要のなくなつた存在だつたのです。

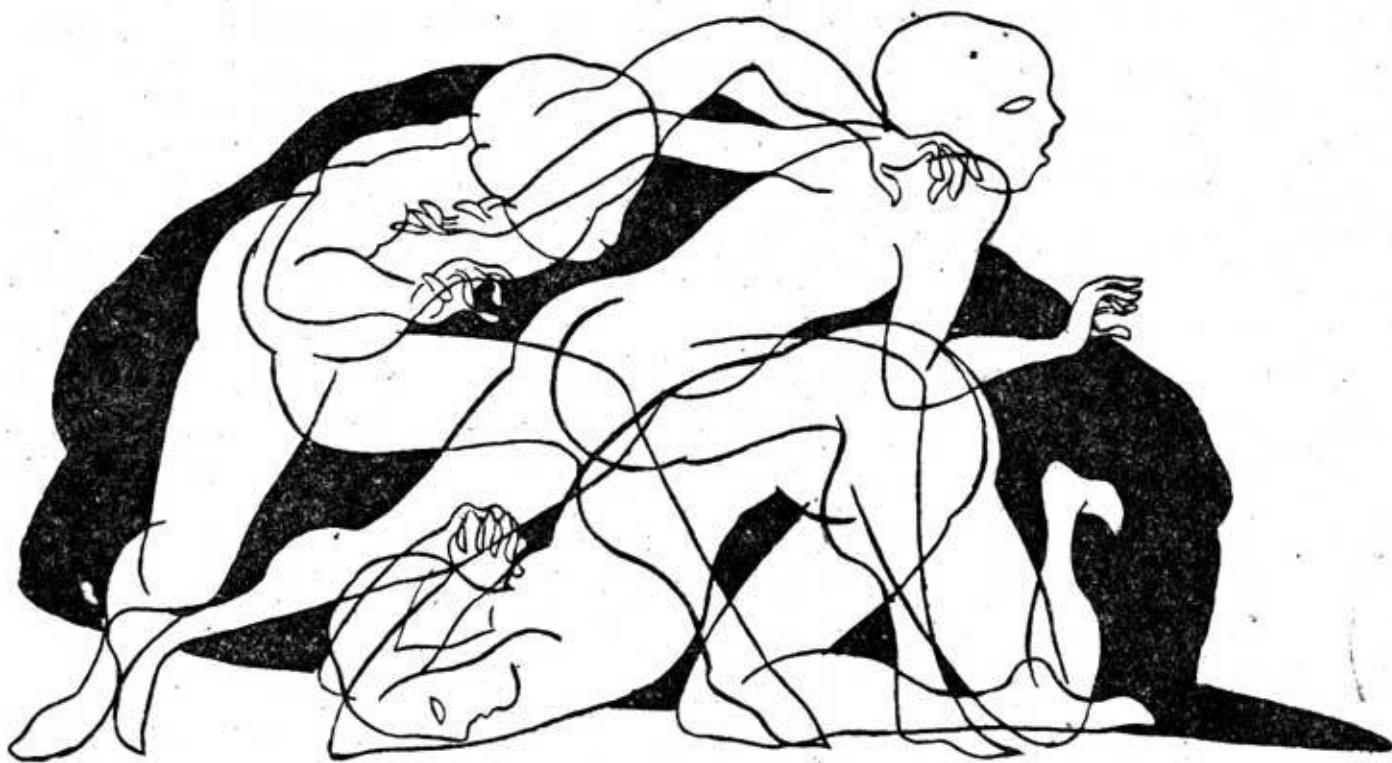
私は私の愛情が真剣であつただけに悩み苦しみました。教室でも一日ぼんやりして担任教師は殊の他心配して種々と事情を私から聞き出そうとしましたが、勿論私は本当の

事は何一つ喋れるわけはありません。一人で日夜泣き苦しんで幾度か彼に手紙もやりましたが、彼は益々私から遠ざかつて行くばかりでした。私は遂に決意して自殺の手段を選びました。両親と私の事を心から心配し薄々事情も感づいていたらしい親友の武田に遺書を書いたためて私は家を出たのです。深夜凍てついた鉄道線路を夢遊病者のようにして彷徨し

ている自殺一步前の私は、それとなく私の行動を監視していた武田によつて現実の世界に呼び戻されました。それから暫く私は武田の家で武田の勉強室兼寝室で彼の友情の監視の中で過しました。此の間の武田の献身的な友情が一度死を決した私の心に新しい希望を抱かせたのです。

武田の家庭は父は町の医師として名望家で

あり、武田は又人好きのする坊ちゃん然とした男でしたが、私が彼に友情以上のものを感じ



ずるようになり、新しい人生を意識したのは其の時からでした。武田は積極的に私の要求に応じてくれました。私はここに楽しい第二の人生を打ち立てることが出来たのです。

愈々中学を卒業して、其の頃熊本にあった第五高等学校を受験しましたが一木との耽溺生活で全く勉強しなかつた一ケ年は当然の事乍ら私を不合格という運命におとし入れました。然しせめてもの喜びは他の学校を受験した武田も不合格で二人仲良く浪人生活にはいられた事でした。然し私はどこまで不幸なのか此の親友武田は卒業した年の十月、胸の病で呆気なく死んで了つたのです。

私の最初の同性愛はこうして失われたのです。私の同性愛の対象を求める巡歴は此の時から初まつたとも言えるでしょう。

私が中学を卒業した昭和八年、漸次傾きつゝあつた家運は愈々終局に来て、数多の家屋敷も父の借金の抵当として他人の手に渡つてしまひ、私達一家は小さな貸家に引越しました。この為に私は高等学校への進学もあきらめねばならぬ身となりましたが、別に就職を急ぐ事もなく両親が其の後生活の手段として初めた下宿業により生活は支えられましたので、私はいろんな自習書や講義録等によつて独学を続けていました。下宿人には成る可く

学生が来てくれればよいと思い、又願つてもいましたが、私の田舎では殆んど通学しますし下宿するような学生は極めて少かつたのでしよう。

そこに私の同性愛の対象を求める事は遂に出来ませんでした。

それでも、此の頃に関係の出来た者も二、三はありましたが、それは最初程深刻なものではなく、今ではお互いに音信も絶えています。

こうした異常な性癖の裡に、私の少年時代は過ぎて行きました。勿論私とて、其の異常な性愛心理が気になり、之が正常なる性愛に至る過渡期の一現象であれかしと、心に祈つて、中学を卒業した年、友人に誘われるまゝ遊里に足を踏み入れ、遊女を買つて、自己の性慾を確かめんとした事もありましたが、結局、みじめな気持で引き上げなければならなかつた思い出があります。

結局正常な性行為には何の興味も興奮をも感じない私だつたのです。

少年期については未だ申し述べたい事もありますが、之れから更に大別して、其の軍隊時代、朝鮮在住時代、引揚後の郷里時代、そして上京後と其の概略を述べさして戴き度いと思ひますので、一応少年期はここでペンを置きたいと思ひます。



現代マゾヒズム芸術時評

【二】

映畫及出版物等にみるマゾヒズム

原 正 忠

○ワグネル作歌劇

「トリスタンとイゾルデ」

Richard Wagner; "Tristan und Isolde"

前回にもサローメの項で少々ワグネルについて述べた心算であるが、今度はワグネルの作品中性音楽とまで呼ばれる「トリスタン」について御紹介しようと思う。此の作が発表された経緯については、勿論、読者の中でも御存知の方が多いと思うが、彼ワグナーが糟糠の妻ミンナを捨てて、美しい有夫の貴婦人の許へ走つた時、湧然と起つた妻ミンナへの世の同情に対して答え

た恋愛至上主義の作品である。ワグネルの巨人的な作品と、彼自身の女性観、乃至は作中の女性達の心理に於て、私は彼が少くともサド・マゾヒスティックな精神にひたつた事のある人間だと考える。ブリュンヒルデの如き、又、タンホイゼル中のヴェニユスの如き、正にサディスティックな悩ましい存在であろう。そして、マゾヒストの特有の愛好が、さまよえる和蘭陀人 *Eliegender Holländer* の中にも見出される。と考えられている。扱、「トリスタンとイゾルデ」であるが、第一に挙げねばならぬのは、第二幕の最後の部分である。尤も

この第二幕第二場は如何なるワグネル好きでも、うんざりさせる長時間に渉る単調な二重唱の持続と貶される部分であるが此の部分は同時に、感性敏感な独乙人青年は此の二重唱の終結に至るまでに性的に昂奮し、遂には射精するとまで云われる部分でもある事に注目して頂き度いと思う。私は、ここに楽譜の一部分を載せて御紹介したいのであるが、此の部分は、何分にも「うんざりする程」と評される位長いし、要点というものが、次第次第に長時間に渉つて形成されてゆくので、第二幕第二場全部を見なければ判らない、という結果を招く

ので、割愛する。従つて後述の終曲は部分的に御紹介するが、この第二幕第二場は勘弁して頂く。(必要な方、乞御照会)

Liebesduett II AKT. (愛の二重唱)

言葉はワグネル好みの古い詩語を十分に用い、肩いからせた様な台詞である。中でも有名なものは、恋愛の最後の段階——即ち「灰と静寂」に近づく瞬間を次の様に表現している部分であろう。トリスタンはイゾルデに侍する武士で彼女の叔父マルケ王に嫁ぐイゾルデを護送する時の事である。

ト「貴女がトリスタンで

私がイゾルデ」

イ「君はイゾルデで

私はトリスタン

最早イゾルデではありません！」

此の箇所に至るまで音楽はロジイニが好んで用いたと異質同構のクレツシエンドによつて、同じモテイーフを数限りなく繰返し乍ら狂奔する。高貴な生活と王妃の位を持つイゾルデの台詞は常に愛のモテイーフの上位の部分を唄っている。(声部的にでなく)我々がマゾヒスティックな性愛に於て常に味あう不安と性感の期待との不思議

な結合が、明かに烈しい肉体のもつれ合う様な実感と共に歌われる。トリスタンの胸には、故知れぬ、不安がきざす。併し其は齊唱である部分、即ち、

「最早言葉もない！」

離別もない！

新たなものを感じ。

新たななる情炎に

永遠に無限の

同化を思い、

火の様に灼ける

此上なき、愛の喜びを！

という最終の部分に至つて、イゾルデの声部は、トリスタンの其を掩つてしまい、大きな安立感の下に、此の部分を終るのである。シュトラウス博士のサローメに於て云われたと同じ言葉が、此処でも用いられよう。

「言語の限界を超えたものを音楽は雄弁に物語っている。台詞は精神の愛を語っているが、音楽は、まさぐる手や、すりよせる身体や、女の香りやもつれてゆく、二つの身体をそうして男の女への結合という倒錯した性感を漂わせ、何物かの手

が、聴く者の肉体を、弄び昂奮させてゆく」と。

Liebestod (愛の死——第三幕終曲)

「トリスタンとイゾルデ」の「愛の死」という名で有名な部分である。トリスタンの死体の傍にイゾルデ、そうして、周囲には今はイゾルデとトリスタンの愛を理解して彼等を許す為にやつてきたマルケ王及其の家来達。(このマルケ王の態度こそワグネルが世の中に希んだものである。)

愛人の死によつて、法悦の中に浸るイゾルデの眼は、トリスタンの死体にじつとそそがれている。男達の戦いの後の血醒め臭気と、血の流れている大地に位置し乍ら彼女は歌うのである。

「私に聞えるものは、彼から発して、

私の心へと迫り、高く震るえ乍ら、

私の周囲にひびきわたる、

調べだけであろうか？。

それよりも、或いは、

そよそよと吹く香り高い、

風と波とであろうか？

私はそれを吸うべきか？

それにきき入るべきか？

又それをすすめるべきだろうか？

それとも香りの中で、

快く息を絶つべきであらうか。

此の部分は伴奏は主役となつて、只吹き叫ぶだけの声部を全く掩いつくして、ゆるやかなテムボは丁度正常性交の場合の理想的なテムボを以つて徐々に高潮してゆく。ハーブの烈しいグリツサンドと共に、声部は俄かに、愛のモチーフを歌い出す、此の辺りは性的にも精神的にも頂点である。そうしてその緊迫感は、直ちに虚脱にも似た、ゆるやかな安立感によつて終る。

筆者は之を屍姦愛好の一つの典型と解釈する。その実況に当つて、恐怖感を起させる程の倒錯である。屍姦というサディズム最高の歓喜が美化されて描かれている点、女性のサディズムに於ける、最も完成された、古典的表現と考えられよう。

「ナナ夫人」香山滋作

探偵倶楽部廿八年九月又は十月号

暫らく固苦しいのが続いたので、少々軟かいのを書いてお詫びの代りにしよう。特

に大衆的な作品を選んだ心算である。是は未だ古本屋で極めて安い値段で買える筈である。題して「ナナ夫人」探偵小説である。

内容は主人公が田舎の湖畔の山荘に住む一人の美しい謎の未亡人と隠された宝石の謎を解くという筋であ

Die grausame Colombine Radierung Von Max Brüning



るが、私が特にこの小説を選んだ訳は、夫人が常に乗馬服をつけて、山へ狩りにゆく習慣があるという事と、彼女につきまとう人獣の様な存在「サルユ」が居る事である。主人公、水島博士は其の地方の禽獣移動分布についての調査にやつて来る。そして一銃砲店の親父から不思議な夫人ナナ（天城昌作）の未亡人）の話をきく。其処へナナ夫人は乗馬服に身をかため、鞭を手にして、馬車でやつてくる。此の時の有様を、香山氏は、いきなりパツと蘭の花が咲いた

ようと形容している。この形容は全くうまいものである。勿論例外はあるとしてもマゾヒスティックな男性が求める、女主人は城に蘭の咲いた様な女性である事が必要である場合が多いのであるから。

主人公の他に名探偵らしい男、鍋木久作が現われる。この男が時々犯人探知上の説明を与えているのだが、私達にとつて、興味をそぐ事おびたしい存在である。ナナ夫人は、水島博士を遠乗りに誘う。勿論底意よつての事であるが、私は乗馬服をつけ

た夫人が水島博士に接吻して挑む場面は強い印象をうける。更に、サルユであるが、これが又その名から想像される様に汚い醜悪な男とも犬とも猿ともつかない生物である。(沼氏あたりの食指うごく処であろうが。)因にサルユとは肉塊の意であるとか作者は文中で説明している。彼は夫人の護衛役であると同時に、口笛で呼ばれる家畜でもある。彼は夫人から言葉を喋る事を禁じられている。夫人はサルユを、或る婦人から「贈物」として「とても便利だ」という口上つきで貰ったのである。

妖しいまでに美しいナナ夫人はサルユを犬代りに狩につれて歩く。初物を射殺して歓喜にひたる心理は同様に、此の小説の最後でサルユの両眼を刃で剝る事によつて裏付けられている。私達、多分に想像的なマゾヒストにとつて、ナナ夫人に両眼を剝られたくはないとしても私達の女主人として無慈悲な鞭を鳴らして貰いたいタイプの婦人である。前にも沼正三氏が香山滋について述べられて居たが作品上からは確かに氏はサディステイクな女性を描く。併し乍ら私の知つて居る限りでは氏は余りマゾヒス

トとは云えない様である事を残念乍ら断つておかねばならない。むしろ私達マゾヒストは、自己暴露的な作品を余り、「公刊」したくないのだからそれから推してむしろ氏は逆の方向に偏しているのではなからうか。等と余計な事も考えてみなくなる程、香山氏の作には、女主人が屢々現われるのである。

映画「アトシ」印度映画

(本邦初公開)

「封切」元旦より東京都内では新宿劇場にて独占公開

「梗概」印度の或る公国での出来事、時代不明、少くとも現代に近いらしい。農夫と皇妹との異常な恋物語。皇妹は男勝りの気象で、此の国での一番の悍馬を乗り廻す様な女、彼女の次兄は、長兄の王位(マハラジャ)を狙っている。長兄は穩健な民主的な国王で、王位をすてて共和国家にしたいと常々思っている。こうした前提の下にこの映画は始まる。闘技場に臨む皇妹は、純白の悍馬を乗りつける。そうして、国王に一体この馬に乗れる様な男が居るだろうか

と自慢げに話す。其処に名乗り出たのが、男役主人公の農夫である。彼は悍馬を乗りこなすので、賞金を貰う事が出来るが、「この白い馬が欲しい」と言い出す。絶対に馬をやる訳には行かないと断乎と拒否する皇妹、皇弟は其を見て、憤慨して男に真剣勝負を挑む。国王の命令で、真剣ではないが、剣の試合が行われる。まさに農夫が勝つかと思われる瞬間、農夫の母親が、声をあげる。其の為に男は負けてしまふ。男を恋しく思っている農家の娘が、勝負の不法を国王に訴えて、白馬は国王の決断で、農夫に与えられる。この筋立ては非常に無理で、態とらしいが、とにかく、ここまでで登場人物の性格や事件の伏線はすべて整う訳である。農夫の方は、皇妹に一目惚れするし、皇妹は、白馬を取られた事と、自分しか乗りこなせないと思つていた馬を乗りこなしたという事で、憎悪を感じる。(勿論この憎悪が如何にハッピーエンドに持つてゆかれるかが、興味の中心であるが)皇弟は階級意識によつて、又勝負の結果について、烈しい反感を持ち、国王は、二人の弟妹の示す階級意識に苦しい感じを

持ち、一方農夫に対して好感を持つ。ここなどは全く判らない部分であるが、王宮に忍び込んで皇妹の愛を得ようとする農夫、郊外で農夫を恋している前述の女を口説く弟皇、女に拒まれて、米を積んだ車を自動車でひき逃げすると、女は怒つて、途を大木でふさぐ、そこへ皇妹が自動車でやつてくる。丁度、前に現われた農夫が来会せたのを、馬鞭で、引つ張たいて、白馬を奪つて、王宮へ逃げる様に駆け去る。之等の事件と共に、皇弟は、国民に主権を譲ろうとする国王を暗殺する。併し殺されたのが替玉であることは後で知れる。恋のいざこざと交つて、皇弟が農夫の女を惨殺するので農夫は怒つて、皇弟と渡り合つて重傷を与える。この前に農夫が王宮へ忍んで行つて皇妹の命で捕えられ、鞭刑にされる場面があるのだが、其の為、皇妹と男との相会は屢々で、皇妹は其だけに、兄を傷けた事を怒つて、農村へ兵を繰出し自ら先頭に立つて男を殺そうとするが、奇計にかゝつて、自ら反つて男に捕われ、農家の女として馴らされる。男は自分を慕っていた女が皇弟に殺された事を憎んでいるので、皇妹を否

応なしに酷使する。この生活が暫らくつゞいて、そこへ傷の治つた皇弟が兵隊を率いて乗込み、妹を鞭打つて叛者と罵る。捕つた農夫達は、途中で逃れて、皇弟が即位の式を挙げようとするときに、先程の農夫と真剣勝負となる。逃れていたのに、王位の無効を叫ぶため皇妹は広場で、火刑にされる。勝負は筋書通りに運ばれて皇弟の悪は亡び、身をかくしていた国王が現われて、民主政治の創始を宣言する、お定まりの勧善懲悪劇である。

【解説】 右の梗概は、筆者が特に判らなくしたのではない。劇自体、こういつた、やゝこしく、其の割に効果のない組立てで、劇的にはつまらない構成なのである。では何故私がこの映画を特に

読者諸君に紹介したかという、サディズム及マゾヒズムの具体的な表現が、深淺、全ゆる状況で表現されてゐるからである。誠に、この様にこれでもか、これでもかと鞭打や、虐待、誇り高き婦人女を酷使する男性等を取りかえひきかえ並べた映画は珍しい。勿論この中に現れる状況は完全ではないかもしれないが、変態性慾者の歎心を買うにこれ程公開という制約内で羅列を



した事は、昔のグロ映画ならいざ知らず、天然色（テクニカラア）方式の現在映画としては他にその類を見ない。中でも特にマゾヒストに見てほしい場面は次の通りである。

○最初の部分、即ち、皇妹が、白馬を乗りつける部分、女が馬を如何に酷く扱うかの一例である、猶、馬を立たせる事は、女性外陰部に与える刺激が烈しい事だけでなく脚で馬を抱く為に特に性感を刺激する事を考え合せられたい。

○忍び込んだ男を鞭打刑に処する場面、長い革鞭で、立木につながれた男を打つ場面、勿論、後半、鞭音をきながら皇妹は刑を中止させるが、初めの小気味よきような表情は、この中止を不自然にさえ思わせる。

○道を塞いだ大木の前で、怒った皇妹が馬鞭で、男の横面を思い切り打つ場面、この気合は相当凄まじいものである。附言するが自動車から降りた皇妹が乗馬服を纏っている事も、他の場面で彼女が好んで乗馬服をきてゐる事等も、靴フェイシスト等の向には鋭い感覚を与える。只

惜しい事に、彼女は胴長で、足が短いのが、私等は一寸頂きかねるが、其の点さえ気にしなければ、結構楽しめるものだろうと思う。又、黒い乗馬靴と、内股の茶色い皮革との対照も、仲々面白いと思う。

○男を「殺してやる」といつて兵を率いて軍服に身を包んで馬を飛ばす彼女も亦、サディツシユというよりも、雄々しいものである。雄々しいこういう女の膝下に隷属する件はマゾヒストにとつての理想ではなからうか。

女性マゾヒストの為に

○農夫に捕まつてから焚刑になるまでの皇妹の身辺に起る事件、一つとして貴女方の希望を裏切るものはないようです。縛られもします、鞭も飛んできます。主人の傍でオド／＼願使に甘んずる女性を快く、明瞭に描いています。焚刑の場もフアビオラ伊太利映画やクオ・ヴァ・デイス米国映画の比ではありません。誇り高い女性が、下卑な男に酷使されるという事自体、きつと、貴方達に充分な満足感を与えるでしょう。又、農家の女が王宮

で殺されるまでの経過も違つた意味で面白いでしょう。

以上、甚だ、乱雑な文章になつてしまつたが速報的な本欄の使命の一つの為に御許し願ひたいと思う。

灼熱の国、印度の隷属の民と君臨する上流階級の間に起り得る事件であろう。主演の女優は演技的には随分達者であるし、殊に、サディステイン、及び後半のマゾヒステインの演技の変化は、見るべきものがある。只、映画作品として見た場合、台本の粗雑さと、私達が必要とする前提的な知識が余りにも僅かであること、語学上の不便さは掩うべくもない。しかし、一方、其等の缺点是、背景のよさと珍らしい味をもつた歌と踊りとでカヴァーされよう。之等は恐らく印度独得のものだけでなく、欧米等へ輸出した場合の爲か、西洋風なダンス曲として演奏され、表現されている。その爲めに、反つて私達の耳に、快く響くものも少ない。

（この欄は締切間際に特に追加しました。）

編集部



【読者通信】

(投稿歓迎)

前略御免下さい。KKはお兄さんが会社へ行かれた留守にお部屋で見つけたのが初めてですの、本当にびつくり致しました。お兄さんは度々出張で留守なのですつかり読んでしまいました。それから毎月こつそり楽しんで居りますの中には良くわからないものも有りますが美しいお姉様のことや縛られたひとの事や写真を見ると不思議なきゆつとした気もちでたまらなくなりまます。家の事をしている色々なことを想像していますの、ちよつといえない様な事ものです。私変たいというのでしょうか、それで私お友達がほしいのです。そしたらいろいろお話出来ると思いますの、ちよつとこわいけれどもお手紙だけなら男の方でも結構です。——下略——(滋賀 雪子)

私は女性の切腹に就いて異常な

位の憧れを持つて居り、幸い職業が写真関係でありますので、ぜひ自分の構想通りのものを作成したいと考えて居ります。中康弘通氏より貴重な一資料とおほめを頂きました十二月号の道劇に於ける女立腹は実は小生の撮映によるもので当時の原画も数枚所持して居りますが、あれはその内で一番実感が出て居る中の一枚です。女優は清水タズ子さんです。まだ／＼自分の想っている構想は程遠いもので切腹願望の口といった所でしよう。小生の希望としては、髪は時代マゲである事、肉体美であること(特に乳房は見事である事)双肌ぬぎの姿態である事(口には白紙の様なものにくわえる)或は腰巻一つでその端で刀身を巻きずぶりと突き立てた一瞬、右の足の爪先を立てるといった感じ、用いる刀はツバのある小刀か脇差であること、正坐して切腹の時は介錯人が襷掛けで大刀をふりかぶつて居るといった構想です。——中略——男性の切腹に就いては現在何の関心も持ちません。又切腹にしても凄艶であることが第一条件で腸がとび出したりした所は却つてグロで少しも良いとは思いません女性には女性の腹の切り方があり

腸を掴み出す等は艶消しも甚しいと思います。(大阪 某生)

○アリスの人生学校及び二月号愛読させていただきました。アリスの人生学校は前に出たクリスチーナの受難に勝るとも劣らぬ傑作だったと思います。二月号ではやはり沼田扶二世様の告白が一番よかったです。公刊誌の性質上リンチの模様を詳細に描写されてないのが実に残念です。此の種の描写を詳しくして貰える方法はないものでしようかお尋ね致します。此の外、ズベ公やパンパン等やぐさの縄張り争いから起るリンチ等は非知らせて貰いたいです。願くばアリスの人生学校のような形式でリンチ全集として発行して下さい。昨年の二月号の林田澄子様の「しいたげられるよろこび」は大層気に入りました。この二月号を出して時折読みかえしています。沼田さんに文通出来るよう取り計つて下さい。又昨年十月号に体操倉庫の口絵が載っていました。あの映畫シナリオの全文を早く御紹介下さい。(三重 ZO 生)

一読者として希望を申し上げます。写真は毎号最も興味深く見て

「読者案内欄開設」について

読者諸氏の強い要望によつてKK通第十六号に読者案内欄を開設いたしました所、多数の皆様がこの種の企を要望されているようです。本誌にも誌面の一部をかりて掲載することに致しました。左記の規定により御申込み下さい。

◎規定◎

一、一件につき十七字詰十行迄
一、一行につき切手三十円の割で同封して下さい。先着順に次号に掲載いたします。

一、本欄に記載の案内に通信御希望の方は一件につき切手三十円同封の上、御申込下されば転送いたします。その際、郵税不足にならぬよう御注意下さい。

一、不真面目なもの並に商売的なものはお断りすることがあります。

一、案内欄に關しての通信は係の家原文子氏宛に願います。

読者案内欄

○女性サジストによる被虐の世界に憧れている男です。柔順なる家畜のように貴女に奉仕したいのです。御交際を願える方はいないでしょうか。お便りを待ちます。

(子路生、在社1)

○色んな事教えてくれるフレンドがほしいのです。お便り下さい。又KK令

いますが、縄がゴテゴテと多過ぎるかと考えます。「三人の女の縛られシヨ」(右側)の様にスツキリした写真でも尚縄が多すぎます。左側程度の縄でよろしいと考えます「棒責二態」(十二月号)は結構な作品ですが、両膝を更に拡げさせ足首を重ねて縛り、上半身を横丸太の上で後にそらせて縛った両手を下にヒツパリ、重ねた足首に縄をひっかけて、首にはめた首輪の銀に強くかけたならば、もつと責の実感が出たでしょう。「ビニールの紐」で縛られた女も(殊に中腰のポーズ)良いアイデアでしたが、銀にコダワツタ感がいまありませんか、犬の首輪が二月号で使用されましたが女子にも使用されたか、首輪を使つて「美しい馬の調教」(左側の絵)を貴誌の豊富なモデル陣により写真にて拝見致度、読物にしても責絵にしても荒唐無稽なのは反つて面白くないし、現実プラス若干の空想程度でこそ興味も感じられるのかと存じます。

暴言多謝(四十六才の会社員の読者)

前文御免下さいませ、私は北山カオル様の奴隷の手記、若杉早苗

様の檻の中に、大川由紀子様の由紀子のお仕置、古川裕子様の数篇、何れも美ましく感じながら何度読みかえして楽しんでおります。又淫火の小百合夫人が責められる後半の場面や蜘蛛と蝶々の里枝さんがいる／＼の凌辱を受けますのは読んでいまして身体が絞られるような感じを与えられました。私は心の中を流れているアブノーマルな血潮の高鳴りをどうしようもなく苦しんで居りましたがふとした事から男性同好の方と知り合い、縛りの遊戯をやりました。二人共マジの為か、それ共私が強度の為か何んとも感じがでません。それにいつも同じ方ばかりの実演は元より遊戯ながら折角のスリルが思う程でなく物足りない淋しさが残ります。私達がいつも話し上つておりますのは、責めの社交クラブとでも言うものがありますれば同好の方々のお相手が変る度合が多くなりますので最も都合がよいと思います。奇譚クラブの読者の方々如何なものでしょうか、このような社交クラブを結成なさる御方はございませんでしうか、若しそんな機関が出来ますれば私達の念願がかなつて、まことに明るい人生が得られるように

に思います

(伊藤きよ)

小生は貴誌の熱心な愛読者で一年の六月号からずっと欠かさず毎月購読しておりますが、サド、マゾ、ソドミー、フェチズム等種々変つた傾向の読者の欲望を満たす編集は考えただけでも大変だろうと想像します。小生の特に好むものは吾妻新「感情教育」古川裕子の一連の被虐の物、被虐の家アリスの人生学校等です。理由は相互の理解の上にたつた肉体的よりむしろ精神的な女性への凌辱を好むからです。趣味の限界を越えた病的なものはとりません。この意味で貴誌に要望したいことは病的で不健康なものを排撃してほしい事です。眼についた所ではこういった邪道に陥つた雑誌も見受けますが、貴誌だけは美しさと明るさだけは失われないように願います。吾妻新式の良識ある趣味としてのサドには多くの人が強い魅力を感じるでしょう。小生もあんな可愛い、奥さんなり恋人なりに自身考案の縛られ服を着せて深い愛情の上に立つたお仕置を楽しみたいと切望しています(松下一夫)

初めてお便り致します。島津雅

和二十七年八月号以前の見せて頂くだけで結構です。お貸し下さい。

(二十一才、Y子)

○僕は二十八才のサディストの男性ですが、もし逞しい男性で縛られる事の好きな方は、文書・画像写真の交換を致したいと思ひます。

(富士平九郎)

○マゾヒストの女性に告ぐ、小生卅才の男子、普通のサジストですが経験はありませんが、是非女性を責めて見たいと日頃より念願して居ります協力して下さい方は非御連絡下さい。

(横浜、YK生)

○KK通信第十六号で私と同じ様に責めに興味を持つて居られる貴兄(サディストの愛読者)を知り文通致したく思ひますので、何卒私の願いをお聞き届け下さい。

私は三十一才のサラリーマンです

(福岡、J・K生、在社2)

○美しい女性の縛り責、雪白の肌に残る紅の鞭あと、夢にまで見る女神は何処に?、若き女性の方の交通を待つ、小生三十九才、会社員。

(名古屋、NS生)

○被虐を好む男性モデルを求む、なるべく東京の方、当方にサド女性モデルあり、発表の可否は特に明示して下さい。一切貴方の名譽を保証します。

(東京、天虎盛英、在社3)

○私は二十二才の学生で女性的な容貌のマゾヒストです。二十五才迄迄の美しい女性サドの方のお便りをお待ちしています。

(神戸、T・M生、在社4)

奇譚クラブ

号を追って示す奇譚クラブの圧倒的な売行きは又々本誌をして口絵本文共に増頁させました。隅から隅まで読みごたえある三月号の充実ぶりは如何ですか、どうか、次号四月号の群誌を圧した飛躍ぶりを御期待下さい。

(◎尚、本号では口絵、本文共大幅に増頁しましたにも拘らず、掲載予定のものが多数掲載洩れとなりました事をお詫びいたします。口絵では塚本鉄三氏撮映にかゝる新しい縛り写真、在京某氏提供の舞台写真四葉、天泥盛英氏提供の乗馬靴のサデイスチックな女性が裸の男性を鞭打つ実写真数葉、欧米の縛り写真、責絵多数、等、本文では座談会をはじめ、肛門いじめ、ドレイボーイ、長煙管責め、私は切腹した等及び責めのモデルになつてみての三人のモデルの手記、流浪八年等が翌月廻しとなりました。)

躍進四月号の呼物

海外サデイズム雑記

吾妻新

高橋鉄批判 沼正三

スカタロジという語について

↑高橋鉄氏に問う

【告白】慟哭の記 古川裕子

露出症、マソヒズム、切腹願望、サデイズム

爛れた花 川合伊都子

子と申します女子大生でございます。女子大に昨春入学し毎日勉学にいそしんでいましたが、奇譚クラブを級友に一度見せられてからは不思議な魅力にひきつけられて完全にトリコになつてしまいました。貴誌を拝読している事、親にも言えず書店でもコッソリと購入しなければならぬコノ世は何と不便なものでしょう。変にゆがめられた道徳学者的なニセ道徳の悪弊に外ならないと論じあつていますが、女の私達のような進歩的な意見で貴誌を拝見している者も多くあるという一面を御知らせすると同時に羽村京子様や女の同性愛女同志のリンチ等を盛つて下さるようお願い致します。

(大阪 島津雅子)

前略、愛読者の一人として希望やら御願いやらを思いつくまゝ書きます。口絵写真は号を追うて躍進されてきて嬉しいですが、一般に静的で、もつと動きを出してほしいと思います。十一月号の急襲の構想はよかったです。責め道具も研究して下さい。笞杖も面白く拝見しました。鞭打たれる外国の少女達に出てくる自動鞭うち機等興味を覚えます。洋の東西を問

○十二月号、女装への憧れの重田正二様。小生は拝読して胸がつかまる迄嬉しかったです。住所をお知らせ下さい。一度御便りさせて頂きます。

(岡山、T・M生)

○僕は二十三才のソドミア、二十前後の方と交際を希望します。最近益々同性への思慕はつのるばかりです。どうか僕の愛撫、或は縛りに身を任せて下さる方お便り下さい。なるべく近県の方、尚僕自身は経験ありません。

(兵庫 Y生)

○小生二十八才の事業家、縛られる事に興味を持つ美しい女性からの交通を待つ、緊縛遊戯によるリクリエーションを楽もうではありませんか、秘密は厳守す。

(大阪、森小路生)

○東京在住のサデイズムの御婦人と御交際致したいと思ひます。私は文学部在学中の大学生、御手紙をお待ちします。

(芳野眉美)

○僕は男性を縛り責めることに非常に興味を持つているが、経験はない。そのような繪を描いたりすることによって僅かに慰めてゐる。同好の方の交通を切望します。返信は必ずします。

(大阪、在社5)

○小生三十才になるサラリーマン、マソヒストの女性との交通を切望します。御便り下されば、いろいろの責めのアイデア、小生の空想する責めの光景等についてお話しします。

(横浜K8生、一五七九)

○女の人を縛つてみたい、真裸にして心ゆくまで縛つてみたい、そして苛めてみたいと願うサジストです。縛られ

わす昔から使用された責め道具はその構造や使用方法等どしどし／＼発表してほしい。それから責められる女の服装についても、ストラップ、縛られ服等同様の事が云えると思います。責方について感心したのは、「風流猿轡」「風流責各態」で此種記事を増加して頂きたい。それにマゾヒズム講座に対抗して是非サディズム講座の企画を樹て下さい。

吾妻新氏等は最も適当した担当者ではないでしょうか、それからサディズムに関する年表の作成はどうでしょう。従来の歴史年表と

違つてサド的人物、事件、文献、作者、畫家等々、大変面白いものが出来ると思います。毎号口絵は敬服してありますが、美女地獄の図とでも題した、あの地獄極楽の絵の抹香臭さをやめて、サド好みに書き換えたら如何でしょう。時代や様式に捉らわれず現実と夢と混合する空想の翼を与えた奇想天外な絵は面白いでしょう。次に主として先輩、諸氏にうかがいますが、アブノーマル遊戯と日常生活の区別につきジキルとハイドの斗争をどの様に調整されているが、又多数家族の御宅ではどうでしょう。それから女性マゾの場合、貞操と

悦虐を両立されるか、そうでないか、勿論夫婦の場合は問題外ですが、貴手になる男性の側からも回答が頂きたく、又編集部の方にも実状の調査でもあればお知らせ下さい。最後に責めから生ずる肉体の危険について、緊縛、鞭打ち、吊り傷痕を残すようなやり方には賛成出来ません。甘美なる悦虐遊戯として一定の注意の下に行う必要があると思いますが、経験者の回答を得たいと思います。

(京都 中村佐一)

久しぶりにお便りいたします。皆様御目出とうございます。編集部の方々、どうぞ今年も張切つて頑張つて下さい。そして読者の皆様もお元気で、二月号は近頃になり傑作で新春を飾るのに全くふさわしいものです。特に「美しき馬の調教」は全く素晴らしい。吾々の夢を卒直に表現したものと云つていいでしょう。それから東京の市川公子さんのお便りはいつも、ほまえましく拝見しています。コンビネーションは本当に子の心親知らず、とでもいうのでしょうか。身体検査の時は閉口しますね、僕もあれには随分と苦勞しましたので、

貴嬢の心情察するに余りあるものがあります。しかし、美しい少女が白い肌に喰い込むほどびつたりとピンクのコンビネーション一つで身体検査を受ける図なんか、一寸した責めのアイディアになりそうですね、東京の一隅より貴嬢の御多幸をお祈りいたします。

(VAYA CON DIOS)

私は過去一年以上に亘り奇譚クラブを愛読しています。毎月新刊発売日を何により楽しみにして、待ち遠しくてたまりません。私は切腹願望者の一人で、切腹の記事は魂を奪われたように読み耽るのです。そして、この日がくると毎月新たに掻傷やみみず腫れが腹部に出来るのです、川合伊都子様の寄せられたものは、全部暗記する位何度も積み返します。川合様のような女性こそ悩める切腹マニアにとつては、理想万点の女性であります。同じ理由で「女体自虐図」の三富浩生氏に対して、倒錯の快感を解せる女性を有していられる事実に対して限りない美望を覚えるのです。千歳に一度でも、こんな待望の女性と邂逅し、共に語り切腹遊戯が出来たらどんなでしょう。

(小倉、沖本)

ることに関心を持つ女性、或は異性に縛られてもいいと思われる女性は先ずお便り下さい。いろいろお話ししたいと思います。

(佐賀、T・M)

○東京、横浜方面で三十歳以上四十歳位迄の婦人と交際いたしたし、小生は女主人、女神様に衷心より奉仕したいと願うマゾヒストです。こういう方のためには、小生は如何なる犠牲を払つてもいいと思います。文通を乞う。

(横浜、芳沢生一八〇二)

○アブノーマルに関する文献資料写真等の交換致したし。御希望の方は概略の目録並に希望品目等御一報下されたく、折返し小生蒐集或は作成の資料写真等提供出来るものに付き御返事申し上げます。(編集部気付 辻村隆)

○細引が蛇の如く肌に絡み豊かな乳房や腕に喰い込み、やがて白砂の様な腕も手首が肩の辺迄吊り上げられた時には、青紫色に変つていた。別な細引がこれから始まる海老責を期待するかの如く足首にまつわりついてゆく。

これは私が何時も空想する光景のコマですが、神戸附近の女性でマゾの方に文通致し度くお便りを待つています。当方三十歳のサドの男。

(神戸山田道夫より)

●原稿欄の節は誌面の拡張を求めますから、此の機会に御遠慮なく御利用下さいませ。転送書状は何月号掲載の誰とはつきりお書き願います。

(家原文子)

集募稿原懸賞四十萬記念七周年刊創

本誌創刊七周年を記念して懸賞原稿募集の発表以来夥しい御投稿を頂き御支持厚く感謝しております。又目下執筆中、或はもう少し締切日を延してほしいとの御熱心な希望を申し出ておられる方もありますので、特に締切日を二月十五日迄延期いたしました。奮つて傑作を御寄せ下さるようお願いいたします。

賞金

一席	参萬円	一名
二席	壹萬円	二名
三席	五千円	三名
四席	三千円	五名
佳作		
本誌一カ年贈呈	十名	
本誌半カ年贈呈	十名	
本誌三カ月贈呈	十名	

規定

- 一、内容はアブノーマルな題材を扱い本誌にふさわしいものであれば如何なるものにも可、形式も問わず。
- 一、枚数は四百字詰五十枚迄
- 一、必ず未発表のものたること
- 一、締切、昭和二十九年二月十五日消印のもの迄
- 一、入選作品の版權は本社が保有する
- 一、録衡は編集部選
- 一、賞金は入選発表一週間以内に送付入選作は本誌に掲載す
- 一、予選通過作品発表は本誌四月号誌上の予定、
- 一、送り先、曙書房編集部懸賞原稿係宛、封筒に懸賞原稿と朱書のこと
- 一、原稿の返戻御希望の方は返券同封の上原稿第一頁に要返却と朱書して下さい

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買洩れのないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ

第八卷 第三号
毎月一回一日発行

三月号 定価 百円

昭和二十九年二月二十五日印刷
昭和二十九年三月一日発行

編集人 箕田京二
印刷人 上田庄之助
発行人 吉田稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。